

ISSN 2759-1832

編集文献学研究

The Journal of International Textual Scholarship

vol. **1**



成城大学
国際編集文献学研究センター
Research Center for Textual Scholarship
Seijo University

編集文献学研究

The Journal of International Textual Scholarship

vol. **1**



成城大学
国際編集文献学研究センター
Research Center for Textual Scholarship
Seijo University

目次

巻頭言『編集文献学研究』の創刊に際して 明星聖子…………… 4

論文

特集：ヘルダーリン 学術版編集の歴史——翻訳のための編集を考える

特集に寄せて 矢羽々崇…………… 6

陰に隠れた史的批判版ヘルダーリン全集

——ツィンカーナーゲルとその編集 林英哉…………… 10

成長する有機体としての詩

——バイスナーとシュトットガルト版 大田浩司…………… 30

D・E・ザトラー編フランクフルト版ヘルダーリン全集について

——その歴史的総括の試み 益敏郎…………… 52

ヘルダーリン 学術版編集の可能性

——シュミット版、クナウプ版、レイタニ版 矢羽々崇…………… 68

* * *

理念としての史的批判版

——ジークフリート・シャイベを中心に 森林駿介…………… 82

研究版とは何か

——ボード・プラハタの理論と実践から 冨塚祐…………… 98

* * *

翻訳

セバスティアーン・ティンパナーロ

『ラハマン・メソッドの創成』(1) 伊藤博明…………… 112

* * *

書評

納富信留・明星聖子編

『フェイク・スペクトラム—文学における〈嘘〉の諸相』 田尻芳樹…………… 150

Contents

Foreword On the Occasion of the First Issue of <i>The Journal of International Textual Scholarship</i> Kiyoko MYOJO	4
---	---

Articles

Special Issue Friedrich Hölderlin, the History of Scholarly Editing of His Works: Considering How to Edit a Translatable Text

Introduction Takashi YAHABA	6
-----------------------------------	---

The Historical-Critical Edition of Hölderlin out of the Limelight: Zinkernagel and His Edition Hideya HAYASHI	10
---	----

The Poem as a Growing Organism: Beißner and the Stuttgart Edition Koji OTA	30
--	----

Critical Analysis of the Frankfurt Historical-Critical Edition of Hölderlin's Complete Works: Unveiling Methodological Challenges and Historical Significance Toshiro EKI	52
---	----

Possibilities of Editing: The Case of Hölderlin's "Studienausgaben" by Schmidt, Knaupp and Reitani Takashi YAHABA	68
---	----

* * *

The Concept of the Historical-Critical Edition: Siegfried Scheibe's Editorial Theory Shunsuke MORIBAYASHI	82
---	----

The "Studienausgabe" in Bodo Plachta's Theory and Practice Yu TOMIZUKA	98
--	----

* * *

Translation

Timpanaro, Sebastiano: <i>La genesi del metodo del Lachman</i> (1) Hiroaki ITO	112
--	-----

* * *

Book Review

<i>Fake Spectrum: Various Aspects of "Lies" in Literature</i> edited by Noburu NOTOMI and Kiyoko MYOJO Yoshiki TAJIRI	150
---	-----

巻頭言

『編集文献学研究』の創刊に際して

明星聖子

このたび、国際編集文献学研究センターの機関誌として、『編集文献学研究』を創刊することになった。2023年度の今号を第1号として、来年度より年1回の刊行をおこなっていく。

当センターは、2022年4月の設立以来、順調に活発な研究活動を展開している。以下、記録のために、設立年度から今年度にかけて、当センターが企画して主催した学術イベントを挙げておく。

2022年6月18日（土）成城大学9号館グローバルラウンジ
ワークショップ「ドイツ編集文献学を学ぶ その1」
シンポジウム「『世界初のビジネス書』の発見と刊行—ルネサンスの商人・人文主義者ベネデット・コトルリをめぐる—」

2022年10月22日（土）成城大学9号館グローバルラウンジ
セミナー「ムージル『特性のない男』の編集をめぐる—」
シンポジウム「ダンテ『神曲』「地獄篇 第五歌」フランチェスカの愛の歌をめぐる—新たな校訂版テキストをもとに—」

2023年3月17日（金）成城大学9号館グローバルラウンジ
出版記念イベント「『フェイク・スペクトラム—文学における〈嘘〉の諸相』座談会・合評会」

2023年7月15日（土）成城大学9号館グローバルラウンジ
シンポジウム「ヘルダーリン 学術版編集の歴史—翻訳のための編集を考える—」

2023年7月18日～8月1日 紀伊國屋書店新宿本店3階アカデミック・ラウンジ
成城大学紀伊國屋書店アカデミア vol.2「編集文献学入門—プラトン・シェイクスピア・カフカ—」

7月18日（火）：「西洋古典テキストの伝承と校訂—プラトン『ポリテイア（国家）』」

7月25日（火）：「演劇テキストの作者は誰？—シェイクスピア『ハムレット』」

8月1日（火）：「編集文献学の可能性—カフカの遺稿—」

2023年10月15日（日）成城大学3号館321教室
ハンス・ヴァルター・ガブラー氏講演会「愛の復活、そのゆくえ—今、ガブラー版『ユ

リシーズ』の意義を語る」

第一部：ガブラー版『ユリシーズ』入門ワークショップ

第二部：ハンス・ヴァルター・ガブラー氏講演 “Do you know what you are talking about?”

2023年12月3日（日）成城大学7号館007教室

イベント「生前の遺稿」

第一部：シンポジウム「生前の遺稿—エリアス・カネッティ×カズオ・イシグロ×大江健三郎」

第二部：ドゥルス・グリュンバイン氏講演「アーカイブの掌中で (In der Gewalt der Archive)」

今号のヘルダーリン特集は、上記の2023年7月15日に開催されたシンポジウムの成果である。また、寄稿論文2本は、2022年6月18日のワークショップにおける発表と議論を発展させたものである。今年度はさらに2024年3月12日に、ドイツ、ポーランド、台湾から研究者を招いて、国際シンポジウム「テキストとは何か—編集文献学の国際比較」も予定している。来年度も、シンポジウムや国際会議の開催のほか翻訳書の刊行やさまざまな媒体での成果発表等、活発な研究活動の展開を視野に入れている。

編集文献学という学問分野の導入については、2011年より共同研究として本格的に取り組み始めた。ここ数年その活動が実を結び、当分野に関する社会的認知が高まってきたと感じている。当センターの設立、そして本誌『編集文献学研究』の創刊によって、日本における受容は、ようやく次の段階に進むことができたといえるだろう。今後も、編集文献学だからこそ可能な、学際的、国際的な検討を積み重ねて、日本の人文学研究の一層の発展に寄与していければと願っている。

特集に寄せて

矢羽々崇

2023年7月15日(土)、成城大学9号館グローバルラウンジにて、成城大学国際編集文献学研究センター主催シンポジウム「ヘルダーリン 学術版編集の歴史—翻訳のための編集を考える」が開催された。

フリードリヒ・ヘルダーリン(1770-1843)は、多くの作家や哲学者に影響を与え、日本でも詩人の伊東静雄や作家の三島由紀夫らによって受容された。語られることの多いこの詩人は、しかし、読まれることの少ない詩人でもある。

このヘルダーリンの詩を今の日本の読者層に届けるべく、新たな翻訳を企画するなかで、テキスト編集の問題に向き合う必要が出てきた。どの版を底本にするか、という単純な問題ではない。手稿がファクシミリ版として参照可能になった今、往々にして複雑を極める手稿をどう参照し、どう翻訳に活かすかなど、検討すべき課題は多い。

そのために、このシンポジウムでは、4つの「史的批判版(historisch-kritische Ausgabe)」を中心に、これまでのヘルダーリンの学術版編集の歴史をたどった。「史的批判版」とは、ある作家のすべての手稿・出版物・メモ類から生涯にかかわる資料、受容に関する資料などをすべて網羅しようとする一大プロジェクトである。なお、ツィンカーナーゲル版は「史的批判版」にあるべき「資料部(Apparat)」が欠如している。バイスナー版には「史的批判版」との名称は付されていない。しかし、ツィンカーナーゲルは「史的批判版」(正確には「批判的歴史版」と名づけられている)を意図して詳細な「資料部」(未完)を用意していた。また、バイスナー版は「史的批判版」と呼ぶに相応しい内実を伴っており、編集文献学の世界でも、その前提で議論が進められることがほとんどである。そのため、今回のシンポジウムでは、4つの版を一括して「史的批判版」として扱う。今回のシンポジウムで取り上げているヘルダーリンのほか、ゲーテやシラー、あるいはホーフマンスタールやリルケ、ツェランなど、ドイツ語圏の主要な作家でこの史的批判版が作られている。近年では、手稿の写真を活用した版、デジタル技術を活用した版も見られる。ヘルダーリンにおける4つの学術編集版とは、次のものである。

ヘリングラート(Norbert von Hellingrath)版(1913-1923年)

ツィンカーナーゲル(Franz Zinkernagel)版(1914-1926年)

バイスナー(Friedrich Beißner)版(1943-1985年)—通称シュトウットガルト版(StA)

ザトラー(D.E. Sattler)版(1975-2008年)—通称フランクフルト版(FHA)

その編集の歴史においては、ヘルダーリンの狂気と詩作のかかわりをどう理解するか

という問題が大きな位置を占めている。後期の作品を狂気の産物とするかつての立場から、次第に詩論にもとづいた厳密な構成を持つものだとする理解へと変化していった。そして、詩人の作った手稿空間と向き合い、そこから作品の重層性を読むことが求められている。

これら史的批判版、特にバイスナー版とザトラー版の成果を土台として、専門家による学術的な編集がほどこされた著作集が出版されている。特に注目に値するのは、次の3つである。

シュミット (Jochen Schmidt) 版 (1992-94年)

クナウプ (Michael Knaupp) 版 (1992-93年)

レイタニ (Luigi Reitani) 版 (2001、2019年：ドイツ語イタリア語対訳)

今回のシンポジウムは、こうした編集や研究の変化を踏まえ、新たな翻訳の基盤となるテキストを編集するための土台作りの試みとして企画された。

最後に、タイトルにある「学術版編集」という言葉について説明したい。「学術版編集」という日本語は、一般には耳慣れない言葉である。これは、ドイツ語のEditionを翻訳したものである。英語のeditionであれば、いわゆる「編集」や「出版」という意味で日本語話者にとっても違和感はない。しかし、ドイツ語圏で広くスタンダードとして用いられる辞書Dudenを引くと、

„[besonders wissenschaftliche] Herausgabe“ 「(とりわけ学術的な) 編集出版」

„in bestimmter Form [wissenschaftlich] herausgegebenes Werk“ 「特定の形式で (学術的に) 編集出版された著作」

という解説がなされており、特に「学術的 (wissenschaftlich)」という言葉が、カッコ入りながらも眼を引く。つまり、ドイツ語圏でEditionという言葉を用いるとき、そのすべてではないにしても、研究者が、学問的な知見をもとにして詩人なり作家なりの手稿や出版物と向き合い、それを一定の基準のもとにテキストを編集する作業 (および註釈をつける作業) とその結果が想定されている。日本においても、特にドイツ語圏の作家などを翻訳する場合には、どの版を用いて翻訳の土台テキストを確定するのか、どのように註釈すべきかなどの点において意識されるべき思想であると考えている。

国際編集文献学研究センター主催

編文研シンポジウム「ヘルダーリン 学術版編集の歴史 — 翻訳のための編集を考える」

日時 2023年7月15日 13:00-16:30

場所 成城大学9号館グローバルラウンジ

プログラム

1. 発表

- | | |
|---------------|------------------------------------|
| 小野寺賢一（大東文化大学） | 著作集の配列とジャンル区分の問題
— ヘリングラートを中心に |
| 林英哉（三重大学） | 影に隠れた史的批判版全集
— ツィンカーナーゲル |
| 大田浩司（帝京大学） | 成長する有機体としての詩
— バイスナーとシュトゥットガルト版 |
| 益敏郎（熊本大学） | 編集のミュトスとロゴス
— ザトラーとフランクフルト版 |
| 矢羽々崇（獨協大学） | 学術版編集の可能性
— シュミット、クナウプ、レイタニ |

2. 質疑応答

モデレーター：明星聖子（成城大学国際編集文献学研究センター長）

なお、今回の特集にあたっては、編集文献学の用語について、ある程度の統一を図ることにした。ただし、対象や文脈によって完全な統一が難しい場合も多く、(1)できるだけ統一する用語、(2)統一が望ましい用語の2つに分けた。最終的な判断は、各論者に委ねた。

(1) できるだけ統一する用語（Alphabet順）

Apparat 「資料篇」
diplomatische Darstellung 「写実的転写」
historisch-kritische Ausgabe 「史的批判版」
Studienausgabe 「研究版」

(2) 統一が望ましい用語

Ausgabe 「版、著作集」（全集）
autorisiert 「（作者が）出版公表にかかわった」
Druckfassung 「出版稿」（印刷稿）
edierter Text 「（学術版）編集されたテキスト」
Edition 「学術版編集（行為として）」「学術編集版（成果物として）」「編集」（エディション）
Editionswissenschaft, Editionsphilologie, Textologie (DDR) 「編集文献学」
Editor 「編者」（編集者）

emendiert 「改訂された、改訂～」

unemendiert 「改訂されていない、非改訂～」

Erläuterung 「(StA)解説」

Faksimile 「写真(版)」(ファクシミリ、ファクシミリ)

Fassung 「稿」「草稿」

Handschrift ⇒ Manuskript

kritisch-historische Ausgabe (Zinkernagel) 「批判的歴史版」

Interims-Ausgabe 「暫定版」

Kommentar 「注釈、註釈」

Lesart = Variant 「ヴァリエーション」(テキスト異同、テキストの異同、異同、異文、校異)

Leseausgabe 「普及版」

Lesetext 「レーゼテキスト」(テキスト)

Manuskript 「手稿」(草稿、手書き原稿)

Orthographie 「正書法」、場合によって「綴りの表記法」

Textband 「本文篇」(本文編、テキスト編) ← Apparat 「資料篇」参照

Textgenese 「テキストの生成」

Textkritik 「テキスト批判」

Treppenmodell 「(StA)階段モデル」

Überlieferung 「伝承」

Variant ⇒ Lesart

陰に隠れた史的批判版ヘルダーリン全集

——ツィンカーナーゲルとその編集

林 英哉

1. はじめに

フリードリヒ・ヘルダーリン（1770～1843年）の作品や書簡を収めた全集には様々な版がある。特に「史的批判版（historisch-kritische Ausgabe）」と呼ばれる、最も大規模な学術編集版に限っても、20世紀中に4種類のヘルダーリン全集が編纂されている。それらの編集方針の差異は編集文献学の歴史を色濃く反映しているため、編集文献学研究でもよく取り上げられる重要な例と見なされている¹。ヘルダーリンの後期詩の手稿を発見したことに加え、ヘルダーリン独特の文体を彼の古代ギリシャ文学からの翻訳と関連づけて論じ、ヘルダーリン研究に大きな功績を残したノルベルト・フォン・ヘリングラートが開始したヘリングラート版（1913～1923年）²。20世紀におけるドイツ文献学の大家であるフリードリヒ・バイスナーによって編集され、20世紀後半のヘルダーリン研究の典拠となると同時に、テキストの時系列的な生成過程を階段モデルによって提示するという試みを行ったシュトットガルト版（1943～1985年）³。手稿の写真を掲載することで、それまで利用が制限されていた手稿を広く読者に利用可能にすると同時に、複数のフォントを駆使して写實的転写（diplomatiscbe Transkription）することで、ヘルダーリンが書いたものを執筆時間ごとに区別しながら読みやすく提示したD・E・ザッター編集のフランクフルト版（1975～2008年）⁴。これら三つはヘルダーリン研究においてよく知られており、特に後者二つは研究の典拠としても頻繁に用いられる。

しかし、残りの一つ、すなわちフランツ・ツィンカーナーゲルが編集したツィンカーナーゲル版（1914～1926年）は、ヘルダーリン研究者ですらほとんど参照することのない最も影の薄い版である⁵。彼自身は「ヘルダーリンの手稿の良き読解者」や「根本的な文献学者」という評価を受けるものの⁶、彼の全集は他の全集に比べて全く目立たない。同時期に編集されたヘリングラート版は、編集者自身の印象的なプロフィール（ヘリン

¹ Vgl. Dierk O. Hoffmann, Harald Zils: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth (Hrsg.): Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte. Tübingen 2005, S. 199–245.

² Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. 6 Bde. Begonnen durch Norbert v. Hellingrath; fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot. München 1913–1923.

³ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. 8 Bde. Hrsg. von Friedrich Beißner. Stuttgart 1943–1985. 階段モデルとは、ある特定の箇所のすべてのヴァリエーションを上から下へ時系列順に階段のように並べて示すことで、どのように書き換えられてきたかを示す方法である。

⁴ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. 20 Bde. Hrsg. von D. E. Sattler. Frankfurt am Main 1975–2008.

⁵ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke und Briefe. Kritisch-historische Ausgabe. 5 Bde. Hrsg. von Franz Zinkernagel. Leipzig 1914–1926.

⁶ Hoffmann, Zils: Hölderlin-Editionen, S. 211.

グラートは詩人ゲオルゲに近しくゲオルゲ・クライスにも出入りしており、編集を完遂することなく第一次世界大戦で戦死した)に加え、ヘルダーリンをドイツの祖国詩人に仕立てあげた功績によって、強烈な存在感をヘルダーリン研究において持ち続けてきた。また、後に出版されたシュトゥットガルト版やフランクフルト版は文献学的に優れた質を誇り、編集文献学の領域においても学術版編集における重要な功績として見なされてきた。これらの陰に隠れたツィンカーナーゲル版は、ヘルダーリン研究においてほとんど無視されてきたとまで言えるだろう。

しかし近年、そうしたツィンカーナーゲル版軽視の風向きが変わるきっかけとなりうる出来事があった。詩のヴァリアント(校異)を記録したツィンカーナーゲルによる資料篇(Apparat)と、それに付随する200頁を超える解説が、2019年にハンス・ゲルハルト・シュタイマーによって出版されたのである⁷。また、ツィンカーナーゲル版に関連してやりとりされた書簡も2020年に出版された⁸。こうして、ツィンカーナーゲルによる編集作業の知られざる側面がようやく公になりつつある。

本論文は、こうした近年公開された知見に基づきつつ、日本のヘルダーリン研究においてもこれまで完全なる空白だったツィンカーナーゲルと彼の編集について、その穴を埋めることを目指す。まず、編集者ツィンカーナーゲルについての情報とツィンカーナーゲル版の全体像を提示する。そして彼の編纂した全集がなぜ長い間注目されず、他の全集の陰に隠れた存在だったのかについて論じる。次に、同時代にヘリングラートによって編集された史的批判版全集との関係性について扱う。その際には、ツィンカーナーゲルのヘリングラートに対する対抗心や批判を取り上げる。そして、ツィンカーナーゲルによる資料篇の特徴を具体的な詩のテキストを取り上げて考察する。それによって、ツィンカーナーゲルによる編集の特徴や意義を批判的に明らかにすることが本論文の目的である。

2. 編集者ツィンカーナーゲルとツィンカーナーゲル版全集

まず、編集者であるツィンカーナーゲル自身についての情報を簡単にまとめておこう⁹。彼は1878年にフランクフルト近郊の街ハーナウに生まれた。父は鉄道技師で、母はツィンカーナーゲルを出産する際に命を落とした。そのため彼は、フランクフルトの叔母のもとで育てられることになった。成長したツィンカーナーゲルは、1898年からマールブルクとベルリンで古典文献学とドイツ文学を学び、1904年にマールブルク大学でフリードリヒ・ヘッペルについての論文で博士号を取得した。その後、パリとフィレ

⁷ Friedrich Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte. Lesarten und Erläuterungen mit dem Text herausgegeben von Hans Gerhard Steimer. Teil 1: Herausgeberbericht mit Benutzung einer Briefedition von Frank Hieronymus. Teil 2: Edition beiliegend auf CD. Göttingen 2019.

⁸ Franz Zinkernagel: Briefe und Schriften aus dem Nachlass. Hrsg. und kommentiert von Frank Hieronymus. 5 Bde. Basel 2020.

⁹ 以下に記述するツィンカーナーゲルについての情報は Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 13–18 を参照し再構成した。

ンツェに遊学した後、チュービンゲンに移った。女子実業学校で教える傍ら教授資格論文を執筆し、1907年にヘルダーリンの小説『ヒュペリオン』の発展史についての論文で教授資格を得た¹⁰。その後1917年にスイスのバーゼル大学で教授職を得ることになる。ドイツでナチスが政権を握った後、1934年にツィンカーナーゲルはスイス国籍を取得した。彼はすでに1920年の段階で、当時の大学を侵食していた反ユダヤ主義的雰囲気にも否定的な感情をあらわにしていた。しかしその直後の1935年に、彼は57歳で心疾患のため命を落とす。

ツィンカーナーゲルがヘルダーリン全集に携わることになったのは、1907年に教授資格を得た直後に、ヘルダーリン全集出版を企画したインゼル社の代表アントン・キッペンベルクがその編集者として彼に声をかけたことがきっかけだった。二人の間に交わされた書簡によれば、1908年にヘルダーリン全集の出版について会話が交わされたものの、一度は頓挫したことがうかがえる¹¹。その理由としては、1908年から1909年にかけて出版されたマリー・ヨアヒミ＝デーゲ編集のヘルダーリン全集や、1905年にパウル・エルンスト編集によって出版開始され、1909年から1911年にかけてヴィルヘルム・ベーム編集によって増補改版されたヘルダーリン全集と競合することを、キッペンベルクが避けた可能性が推測される¹²。その後、1911年の7月に企画が再始動し、キッペンベルクから再度依頼を受けたツィンカーナーゲルはすぐさま同じ月に契約書にサインをした。彼は博士論文のテーマだったヘッベルの全集を1913年に出版した後、1914年から1926年にかけてヘルダーリン全集を出版することになる。

ツィンカーナーゲル版の構成は以下のようになっている。第1巻（1922年）は詩を掲載している。まず詩の形式ごとに分類され、その内部では年代順に並べられている¹³。第2巻（1914年）は小説『ヒュペリオン』と哲学的・詩学的な論文、第3巻（1916年）は悲劇『エンペドクレスの死』と古代ギリシャ文学からの翻訳、第4巻（1921年）は書簡、第5巻（出版1926年）はそれ以外の補遺（断片的な詩など）とヘルダーリン宛の書簡を収録している。

ツィンカーナーゲル版は「史的批判版」という種類の全集に含まれるが、「史的批判版」という版の形態について、その特徴を確認しておこう。史的批判版とは、手稿や出版された版を含めた複数のヴァリエーションの比較検討によって、誤りのない正統なテキストを再構成することを目指すと同時に、作品の最終的なテキストだけでなく（ほぼ）すべてのヴァリエーションを記録する¹⁴。その際には、ヴァリエーションの記録の他、編集の根拠など

¹⁰ Franz Zinkernagel: Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion. Berlin 2018 (Original: 1907).

¹¹ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 19.

¹² Vgl. ebd.

¹³ 詩は以下の順番で並べられている。「脚韻詩型 (Reimstrophen)」「ブランクヴァース (Blankverse)」「古代詩型 (Antike Strophen)」「長行詩 (Langzeilen)」「自由律 (Freie Rhythmen)」以下略。「悲歌 (Elegien)」は「長行詩」に含まれている。Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 3–16.

¹⁴ Vgl. Bodo Plachta: Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition. Stuttgart 2020, S. 229.

を詳細に説明する注釈を掲載した資料篇が必然的に付随し、それが史的批判版の本質を構成している。

しかしツィンカーナーゲル版は、厳密に言えば、真正な「史的批判版」ではない。その理由は二つある。一つ目は名称上の理由である。ツィンカーナーゲル版はその正式な名称を「批判的歴史版 (kritisch-historische Ausgabe)」という。通常用いられる名称は「史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe)」であり、「歴史」が先で「批判」が後に来るが、その順番が逆になっている。「kritisch-historische Ausgabe」というキーワードで文献データベース（例えばドイツの図書館が共同で運営する Gemeinsamer Verbundkatalog¹⁵）を検索しても、他に例がほとんど存在しないほどに珍しい表記である。ツィンカーナーゲルがこの名称を何らかの意図を持って選択している可能性があるが、管見の限り、彼自身がどこかで説明しているわけではない。ツィンカーナーゲルは、1914年のヘリングラート版に対する書評の中で、自身の版とヘリングラート版を合わせて「二つの批判的歴史版」と呼んでおり、ヘリングラート版も「批判的歴史版」と見なしている¹⁶。このことから、ツィンカーナーゲルは「史的批判版」ではなく「批判的歴史版」の方が正しい名称だと考えていた可能性と、順番を入れ替えても同じだと考えていた可能性の二つが考えられる。

確かに単に二つの形容詞の順番が前後しているだけで、意味に大きな違いはないという理解も可能ではあるだろう。しかし文法的に考えるならば、順番が変わることで意味の重点が変わる可能性を無視することはできない。二つの形容詞がハイフンでつながれて名詞を修飾している場合、前半部が後半部を副詞的に修飾しているという解釈が可能だ。つまり、「史的批判」は「歴史的な観点から批判的に捉えること」という意味であり、「批判的歴史」は「批判的な観点から歴史的に捉えること」を意味すると考えることができる。つまり、ツィンカーナーゲルの表現では批判性よりも歴史性の方が版の中心の特徴として捉えられているのだ。批判性が複数の手稿や版の批判を通じて一つの完成版としてのテキスト（編集文献学の用語では「編集されたテキスト (Edierter Text)」¹⁷) を作り上げることを意味するなら、歴史性はテキストの歴史的な発展の過程（同じく「テキストの生成 (Textgenese)」¹⁸) に焦点を当てていると考えることができるだろう。つまり、ツィンカーナーゲル版は史的批判版ではあるが、重点をよりテキストの歴史的生成過程の方に置いていると言える。このことには、彼の教授資格申請論文が『ヒュペリオン』の発展史というテキストの成立過程を扱う実証主義的な歴史研究だったことも強い関係があるように思われる。

そして、ツィンカーナーゲル版が厳密には「史的批判版」ではないと言える二つ目の

15 URL: <https://kxp.k10plus.de>. (Letzter Abruf: 17.11.2023)

16 Franz Zinkernagel [Rezension]: Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe unter Mitarbeit von Friedrich Seebaß besorgt durch Norbert v. Hellingrath. 5. Bd.: Übersetzungen und Briefe 1800–1806. München und Leipzig 1913, bei Georg Müller. In: Euphorion 21 (1914), S. 356–363, hier S. 357.

17 ボド・プラハタの語釈では、「編集者によって選択されたテキスト稿であり、ある一つの学術編集版において作者のそのつどの作品を校訂され読むことが可能な形式で提示するよう求められるもの」を指す。Plachta: Editionswissenschaft, S. 228.

18 プラハタの語釈では「テキストや作品の成立プロセス」を意味する。Ebd., S. 231.

理由は、名称に関することよりもさらに実質的であり、さらに重要である。それは、ツィンカーナーゲル自身による資料篇が、大量の原稿が執筆されたものの、出版されなかったことだ。つまり、彼の全集は史的批判版の核を欠いた不完全な状態だったのだ。これが、ツィンカーナーゲル版が陰に隠れた史的批判版になった大きな要因であると見なされている¹⁹。資料篇が出版されなかったのは、同時期のヘリングラート版に商業的に敗北してしまったため、資料篇を出版する機会を失ったからだと考えられている²⁰。ヘリングラート版が資料篇をそれぞれの巻の末尾に置くことでテキストと資料篇を同時に出版したのに対し、ツィンカーナーゲル版は資料篇を切り離してしまった結果、資料篇を出版することすらできなくなり、それによってヘリングラート版に商業的にだけでなく、史的批判版としての質においても後手を踏んだのである。また、インゼル社は当時普及版ばかりを扱い、それまで史的批判版を出版した経験がなかった²¹。この点も売り上げの重視と学術面の軽視につながったのかもしれない。

資料篇を出版することができなかった結果、ツィンカーナーゲル版は、きれいに整理され、「純化されたテキスト」²²しか提示しない、古典的な、言い換えれば古臭い全集であるというイメージが定着してしまった。こうして、ヘルダーリン研究において長く軽視されることになったのである。

3. ツィンカーナーゲルとヘリングラート

ここで、競合相手となったヘリングラートに対するツィンカーナーゲルの対抗心について、さらに詳しく踏み込んでおきたい。ツィンカーナーゲルがインゼル社と編集者契約を結んだ1911年の7月に、ちょうどヘリングラートも「初版への序文」という副題を付けた博士論文を出版し、自身編集のヘルダーリン全集を予告していた²³。そして彼と出版社のゲオルク・ミュラーとの間で出版交渉がなされたのは同年10月だった²⁴。つまりヘリングラート版とツィンカーナーゲル版はまさに同時期に企画と編集がスタートしたのだ。そのため両者は、一つしかないヘルダーリンの手稿を利用する際にも競合することになった。そしてヘリングラート版は出版社の態度にも影響した。ヘリングラート版を商敵として脅威に感じていたインゼル社のキッペンベルクは、はじめはできるだけ多くの大衆に届けるためにヘルダーリン独特の綴りを現代的な表記に改めて出版するつ

¹⁹ Vgl. Ruigi Reitani [Rezension]: Friedrich Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte. In: Hölderlin-Jahrbuch. Bd. 41 (2018–2019), S. 251–255, hier S. 251.

²⁰ Vgl. Stefan Metzger, Johann Kreuzer (akt.): Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): Hölderlin-Handbuch. Leben–Werk–Wirkung. 2., revidierte und erweiterte Aufl. Berlin 2020, S. 3–14, hier S. 5.

²¹ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 23.

²² Ebd., S. 222.

²³ Norbert von Hellingsrath: Pindarübertragungen von Hölderlin. Prolegomena zu einer Erstausgabe. Jena 1911.

²⁴ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 20.

もりだった。しかし、文献学的見地からヘルダーリン自身の古い表記を採用することを要望したツィンカーナーゲルとの折衝で時間が取られるのを避けるため、結局は表記を直さずに出版することにした²⁵。つまり、ヘリングラート版が存在しなければ現代的な表記になっていた可能性も十分に考えられるため、その存在がツィンカーナーゲル版のテキスト自体にまで間接的にはあるが関わっていたとすることができるだろう。

編集開始当時、ツィンカーナーゲルは教授資格論文を提出したばかりで、ヘルダーリン全集の編集は彼の文献学者としてのキャリアにとって重要なチャンスであった。そのため、彼が自身より若く未熟なヘリングラートが同じく全集を編集していることに対して怒りを覚えたことは想像に難くない²⁶。ツィンカーナーゲルは、ヘリングラート版の最初の巻が出版された1914年と全巻出版された後の1924年の2回、書評を雑誌『オイフォーリオン』に書いており、ヘリングラート版に対するかなり辛辣な批判を展開している。ツィンカーナーゲルによれば、ヘリングラートは「若輩の初学者」²⁷であり、ヘルダーリンの精神疾患の兆候を無視して無批判的に褒めたたえている、ただの「ヘルダーリンファン」²⁸だった。「実証主義的ヘルダーリン研究の典型的な代表者」²⁹であるツィンカーナーゲルは、ゲオルグ・クライスの詩人崇拜に傾いたヘルダーリン像に対して否定的だったのだ。

ツィンカーナーゲルは資料篇の序文で、「芸術的なものが病的なものの犠牲にすでにどの程度なっているかを完全に確信を持って述べることはできない」ため、「編集者の主観的な考えに門戸が開かれている」と書いている³⁰。しかし、このことはヘルダーリン研究において「危険の源」³¹となってきたという。つまり、ツィンカーナーゲルよりも前の世代は病の影響が見出されうるものを完全に視野から排除しようとし、逆に彼よりも若い世代は病的なものとしてしか見ることができないものまで純粋な芸術作品としてのみ見なそうとするという、二つの極端な傾向の争いが生じているのだ。この若い世代の代表例として、ツィンカーナーゲルの念頭にヘリングラートがあったのは間違いないだろう。しかしツィンカーナーゲルによれば、これらの対立する見方は実際には互いに排除し合うことはなく、ヘルダーリンの精神疾患が顕在化してからも彼は詩人として成長を続けたと考えることで接続可能であるという。「いずれにせよ、ヘルダーリンの生涯にわたる作品の批判的歴史版はそのような可能性による判断を差し控え、できる限り中立であるようにいそしむ方がよい。」³²このようにツィンカーナーゲルは、あくまで文献学者としての立場にとどまり、精神疾患という医学的専門知識を要するものを判断

²⁵ Vgl. ebd., S. 24

²⁶ Vgl. Henning Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“. Die Rezeption Hölderlins von ihren Anfängen bis zu Stefan George. Stuttgart 1992, S. 71.

²⁷ Zinkernagel [Rezension]: Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Hrsg. von Norbert von Hellingrath. 5. Bd., S. 357.

²⁸ Ebd., S. 358.

²⁹ Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“, S. 71.

³⁰ Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 25.

³¹ Ebd.

³² Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, 26.

の対象に加えることをしなかった。そうした領域は、1909年に出版されたヴィルヘルム・ランゲ＝アイヒバウムの病跡学的研究などに任せていた³³。この点は文献学者がとるべき慎重な態度として評価できるだろう。

このようにヘルダーリンの精神疾患に関するツィンカーナーゲルの態度は、それができるだけ中立に扱うことで、その兆候を完全に無視するわけではないが、顕在化した後の作品もきちんと評価しようとするものだった。この点で、ツィンカーナーゲルとヘリングラートの態度は大きく異なっていたと言える。ヘリングラート版とツィンカーナーゲル版は、ともにそれまでの他の全集とは異なり、ヘルダーリンの精神疾患の顕在化の前後で詩を区別して掲載することをしなかった³⁴。しかし、ヘリングラートが精神疾患自体を軽視し、一貫した芸術性をヘルダーリンの作品に見出そうとしたのに対し、ツィンカーナーゲルは精神疾患が進行する過程は漸進的で、区切りを特定することは非常に困難であると考えていたことが示すように³⁵、その理由はかけ離れていたのだ。

また、ヘリングラートによる具体的なテキスト編集に関して、ツィンカーナーゲルは表記法の問題を指摘している。ヘリングラートは、手稿が残っておらずヘルダーリン自身の表記法が確認できず、かつ他の箇所とは異なった表記法で印刷されている場合に、できる限り入念にヘルダーリンの表記法を再現したと述べる一方、ソフォクレス翻訳では、植字工や校閲者の影響を意識しつつもヘルダーリン自身の表記法に直して提示しようとし「素朴さ」³⁶もあり、こうした矛盾した態度が批判されている。加えて、句読点のつけ方もヘリングラートは恣意的に行っていると指摘している³⁷。

このようにツィンカーナーゲルは、ヘリングラートが提示するヘルダーリン像そのものに加え、文献学的な側面での未熟さにも噛みついている。確かにツィンカーナーゲルの方がヘルダーリンをより客観的に、実証的に捉えようとしていることがうかがえる。しかし、ツィンカーナーゲル版は資料篇を出版できないという致命的な結果に至ったため、文献学的にもヘリングラート版に大きく後手を踏む結果となったと言える。

33 Wilhelm Lange: Hölderlin. Eine Pathographie. Stuttgart 1909. ヘニング・ボテは、ツィンカーナーゲルとランゲ＝アイヒバウムの二人を 20 世紀初頭の抑制的な実証主義的研究の代表例として論じている。Vgl. Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“, S. 63–73.

34 例えばパウル・エルンスト編集の全集では、詩が年代順に並べられ、「円熟期の詩 (Gedichte aus der Zeit der Reife) 1796 ~ 1802 年」と「精神錯乱期の詩 (Gedichte aus der Zeit des Irrsinn) 1804 ~ 1843 年」という区別がなされている。Friedrich Hölderlin: Gesammelte Werke. Bd. 2. Hrsg. von Paul Ernst. Jena/Leipzig 1905, S. 316, 319. 同じ出版社から 1909 年に改訂増補版として出版されたヴィルヘルム・ベーム編集による全集は、エルンスト版の構成をほぼ踏襲しており、同様に「円熟期の詩」と「精神錯乱期の詩」という区切り方をしている。Friedrich Hölderlin: Gesammelte Werke. Bd. 2. vermehrte Aufl. Hrsg. von Wilhelm Böhm. Jena 1909, S. 400, 402. マリー・ヨアヒミ＝デーゲ編集の全集では「円熟期 (Zeit der Reife)」、「はじまりつつある錯乱期から (Aus der Zeit der beginnenden Umnachtung)」、「錯乱期から (Aus der Zeit der Umnachtung)」という区分がなされている。Friedrich Hölderlin: Hölderlins Werke. Teil 1. Hrsg. mit Einleitung und Anmerkungen versehen von Marie Joachimi-Dege. Berlin 1908, S. VI.

35 Vgl. Franz Zinkernagel [Rezension]: Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe, begonnen durch Norbert v. Hellingrath, fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot. 4., 3., 2., 6. Bd. In: Euphorion 25 (1924), S. 274–287, hier S. 279.

36 Ebd., S. 362.

37 Vgl. ebd.

4. ツィンカーナーゲルの資料篇

ツィンカーナーゲル版が出版された時点では収録されなかった資料篇だが、その原稿は彼の死後、家族から委託を受けたヴェルテンベルクの州立図書館に保管されており、出版社との間の書簡はバーゼル大学図書館に保管されていた。資料篇におけるヴァリエーションに関する部分はほぼ完全な状態で、注釈はその半分ほどが残っており、一部バイスナーによってシュトゥットガルト版の編集にも利用された³⁸。そして2019年にシュタイマーの手によって、ようやく公にされた。手書きの資料篇が100年近くもきちんと保管され、それが研究者の手によってきちんとまとめられて出版されたことは、学術版編集とその歴史的発展の研究がドイツにおいていかに重要視されているかを示す証左である。その資料篇に付された「序言」で、ツィンカーナーゲルは彼の資料篇の作成方針を次のように述べている。

それでも編集者が最終的にまだかなりの程度責任を負うことのできるテキストがむしろ提供されねばならなかった。しかしそのためには、ヴァリエーションを収めた資料篇に対し、そのつと前段階を記録するだけでなく、詩人の羽ペンもしくは鉛筆、それどころか指の爪の下で、もともとのテキストから事後的にさらに生じたものも記録するという課題が課されねばならなかった。しかし、この限度設定が新しく行われることが許されるのは、テキストのいかなる個々の箇所においてもというわけでは決してなく、稿全体もしくはそれが達する層に関してのみであることは、こうした問いすべてにそれほど驚くべき無批判性が刻まれていなかったとしたら、おそらくほとんど強調することも必要ではなかっただろう。³⁹

編集者は数多くのヴァリエーションから一つのテキストを構成して提示しなければならないが、すべてのヴァリエーションを記録して読者に提示することによってはじめて、読者に対して編集の責任を果たすことができる。そのため記録すべきものは、筆記用具によって書かれたものだけでなく、指の爪で後からつけられたような跡にまで及ぶ。しかし、それを手稿全体に対して行うことは労力や紙幅の関係で実質的に不可能である。それゆえツィンカーナーゲルは、個々の部分だけに関わるものを対象からはずし、稿全体に関わる部分だけに限定することを、強調するまでもない当然のことと見なしている。ただし、ここで見逃してはならないのは、何が全体に関わるものであり、何が関わらないのかは、やはり編集者の判断に依存することだ。なぜその判断を下したのかを逐一記録するのなら、結局はすべてを記録することになる。ツィンカーナーゲルはここで、資料篇を作成する上での袋小路に至っていると言えるだろう。

ツィンカーナーゲルが残した手稿は全体で4,350ページ程度あり、詩に関するものは

³⁸ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 9.

³⁹ Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 26f.

そのうちの2,000ページ程度、つまり45パーセント程度に及ぶ⁴⁰。ツィンカーナーゲルがつけている注釈は、解釈に踏み込んだ多様な注釈というよりも、ヘルダーリン自身の別のテキストや他の作家のテキストとの間の明確な関連についてのなどの具体的で簡潔な説明にとどまっている⁴¹。それでもこれほどの量に及んでいるのは、ツィンカーナーゲルが主要なヴァリエントを厳選して記録するのではなく、ヘルダーリン自身による省略や削除、修正などをできる限り多く記録しているからだ。また、そのドキュメンテーションの方法も、シュトットガルト版のような階段モデルやフランクフルト版のような写真や写実的転写を使うことなく、記述的に細かく説明されている。例えば詩『オーク (Die Eichbäume)』の8行目「そして汝らは、陽気に自由に、力強い根から自らを伸ばす (Und ihr drängt euch fröhlich und frei, aus der kräftigen Wurzel)」⁴²は以下のようになっている。

16 *ihr drängt*] darüber *noch* . *ihr* St₁ *fröhlich*] *trotzig* darüber *frö[hlich]* gestr. über diesem *muthig* St₁ *frei,*] *frei* St₁ H [mit Blei: »228,17 [= 16] f. *der kräftigen*] *kräftiger* u«, darunter Fragezeichen] 17 *Wurzel,*] *Wurzel* St₁ H⁴³

ツィンカーナーゲル版では各行が途中で改行され、一行が二行に分けられているため、8行目は16行目と17行目に相当する。St₁はシュトットガルト四つ折りノート (Stuttgarter Quartheft) に書かれた稿を指し、Hはホンブルク四つ折りノート (Homburger Quartheft) に書かれた稿を指す。この説明によれば、16行目に関して、St₁では「*ihr drängt*」の上に「*noch . ihr*」と書かれており、「*trotzig*」の上に書いてある「*frö[hlich]*」が線で消され、この上に「*muthig*」と書かれている。St₁とHの両方で「*frei,*」は「,」なしの「*frei*」のみである。「*mit Blei*」から「*Fragezeichen*」まではツィンカーナーゲルが鉛筆 (Blei[stift]) で付記したメモの内容を表しており、228頁の17行目 (正確には16行目) 以降の「*der kräftigen*」は「*kräftiger* u」から修正されたことを示しているが、その下に「? (Fragezeichen)」がつけられているため、ツィンカーナーゲルが読み取りに確信を持てなかったことを意味している。17行目に関しては、St₁とHの両方で「*Wurzel,*」は「,」なしの「*Wurzel*」と書かれている。このように、ツィンカーナーゲルの資料篇は、どの稿でどの文言がどのように修正されているかを詳細に記録しているのだ。

しかし、手稿の状態を詳細に記録している分、修正経過の提示の仕方が煩雑で、一目で簡単にわかるようにはなっていない。解読することを読者に求める資料篇になっているのだ。こうした分かりにくさを克服するために、後に出たシュトットガルト版は階段モデルを用いて次のように記述している。

⁴⁰ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 10.

⁴¹ Vgl. ebd., S. 219f.

⁴² Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 565.

⁴³ Ebd., S. 566.

(1) Um

(2) Und (a) ihr drängt euch

(b) noch drängt ihr euch (α) trotzig(β) frö<hlich>(γ) muthig und frei aus der kräftigenWurzel H^1 ⁴⁴

上下に並んでいるもののうち、一番下に書かれている文言が最終的なテキストであり、すべて合わせると「Und noch drängt ihr euch muthig und frei aus der kräftigen Wurzel」となる。このようにシュトットガルト版は、どのように書き換えられていき、最終テキストが何であるのかが一目で概観できるように記載している。しかしそれゆえに、ツィンカーナーゲル版にはあった情報（どの稿でどのように書かれているか、線で消されているか、どこに修正の文言が書かれているかなど）が不明になり、加えて訂正がいつ、どの段階でなされたのかも示されない（これはツィンカーナーゲル版も同様である）。

ツィンカーナーゲル版とシュトットガルト版との記述の差異としては、シュトットガルト版が「Und」から「Um」への修正を示していること、ツィンカーナーゲル版が書き加えられた「noch」をテキストとしては無視していること、 St_1 では「frö[hlich]」が消されて「muthig」と書き換えられているにもかかわらず、ツィンカーナーゲル版のテキストにはそれが反映されておらず、「fröhlich」が採用されていることが見受けられる。シュトットガルト版は一番下の文言が修正を経た最終的なテキストであると見なしていることを明白に示しているが、ツィンカーナーゲル版はなぜその文言を最終的なテキストとして採用したのかを明らかにしていない。

このように不十分な箇所もあるものの、全体としてツィンカーナーゲルの資料篇は、わかりやすさよりも情報の多さや詳しさを重視していると言える。ここでは手稿を再現できるような形でその歴史的な生成過程を示すことが試みられており、それゆえこの全集は歴史性を強調する「批判的歴史版」という特殊な名称がつけられたと言える。シュタイマーによれば、「手稿の再現可能性（Wiederherstellbarkeit der Manuskripte）」がツィンカーナーゲルの編集上のスローガンとなっていた⁴⁵。これは、20世紀後半の学術版編集の考え方も結びつく。例えば、C・F・マイヤー全集（1958～1998年）を編集するなど、20世紀後半の編集文献学をリードしたハンス・ツェラーは、ページ内部の正確な位置情報に加え、消去が行われたかどうか、どのように行われたか、消去されたもの代替がページのどこにあるかといった情報を資料篇に記録することを通じて、資料篇から手稿へ「再翻訳」⁴⁶できることを重視した（そして彼のヴァリエーションの記録方法も分かりにくいという批判を受けた⁴⁷）。したがって、ツィンカーナーゲルの編集方針は当時

⁴⁴ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Hrsg. von Friedrich Beißner. Bd. I/2. Stuttgart 1947, S. 501.

⁴⁵ Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 9.

⁴⁶ Hans Zeller: Zur gegenwärtigen Aufgabe der Editionstechnik. Ein Versuch, komplizierte Handschriften darzustellen. In: Euphorion 52 (1958), S. 356–377, hier S. 362.

⁴⁷ Vgl. Plachta: Editionswissenschaft, S. 46.

としては先進的なものだったと言えるだろう。ツィンカーナーゲルが、テキストの個別の箇所のみ関する部分は含まないという留保は付けつつも、ヘルダーリンの記述をできる限り再現しようとすることで示した手稿への忠実さは、ツィンカーナーゲルの文献学者としての姿勢をよく表わしていた。これは、当時出版された、きれいに整理されたテキスト版だけを見ているだけではわからないことであり、ツィンカーナーゲル版の意義は、資料篇を見ることで初めて明らかになるのである。

5. ツィンカーナーゲルの編集—『あたかも祝いの日に…』を例に

次にツィンカーナーゲル版の特徴について、さらに他の具体例を見ながら検討したい。ここでは詩『あたかも祝いの日に…』(1800年?)を取り上げる。この詩はヘリングラートによってシュトットガルトの州立図書館で発見された、シュトットガルト二つ折りノート(Stuttgarter Foliobuch)と一部シュトットガルト四つ折りノートに書かれた手稿のみが存在している。この詩には二つの稿が存在するが、後に書かれた第2稿の方が通常取り上げられる。これにはタイトルはつけられておらず、詩の冒頭部である「あたかも祝いの日に…(Wie wenn am Feiertage...)」という名前で呼ばれるのが現在の主流となっている。ただし、ツィンカーナーゲルは『聖なる火(Das heilige Feuer)』というタイトルをつけ、それを括弧に入れて仮題であることを明示したうえで掲載している。

この詩の大きな特徴は稿の末部にある欠落部だ。その箇所の周辺には多くの修正の跡も残されており、そのことからテキストが未完の状態になっていることがわかる。つまり、この詩は統一的なテキストとしてヘルダーリン自身の手によって完成されたわけではないため、編集者の判断を多分に含んだ「編集されたテキスト」が構成されなければならないのだ。したがって、欠落して断片化している部分も本文に組み入れるかがこの詩を編集する上での大きな問題となり、ここにツィンカーナーゲルとヘリングラートの差異が表れてくるのである。まずツィンカーナーゲル版のテキストを確認する。テキストの終盤から最後までを引用する。

というも我々が純粋な心でありさえすれば、
 子どもたちのように、我々の手が無垢ならば、
 父の光線、その純粋なものは、焦がすことはないからだ、
 そして深く打ち震えながら、より強き者の苦悩を、
 とどまることのない嵐の中で高みより落ちてくる苦悩を、
 とともに苦悩しつつ、永遠の心はそれでも確固としたままなのだ。

しかしつらい! もし […] によって

 そして私がたとえ、
 天上の者たちを見るために近づいたのだと言っても、

彼ら自身を⁴⁸、彼らは私を生ある者たちみなの下深くへ投げる、
この偽りの司祭を暗闇へ、私が
警告の歌を聞き分けの良い者たちに歌うようにと。
Denn sind nur reinen Herzens,
Wie Kinder, wir, sind schuldlos unsere Hände,
Des Vaters Stral, der reine, versenget nicht,
Und tieferschütterte die Leiden des Stärkeren,
Die hochherstür[zen]den in unaufhaltsamen Stürmen,
Mitleidend, bleibt das ewige Herz doch fest.

Doch weh mir! wenn von
.
.
Und sag ich gleich,
Ich sei genaht, die Himmlischen zu schauen,
Sie selbst, sie werfen mich tief unter die Lebenden alle,
Den falschen Priester ins Dunkel, daß ich
Das warnende Lied den Gelehrigen singe.⁴⁹

このようにツィンカーナーゲル版では欠落部を含めてテキスト化されている。欠落部の前では、詩人である「我々」が神の靈感を得て詩を作ったとしても、その神の靈感によって身を焼かれることはないという、使命を果たすため詩人が持つ強さが歌われる。対して欠落部以降では、神々によって暗闇へと投げられる詩人としての「私」の弱さが表現される。このように欠落部を挟んで、詩の雰囲気肯定的なものから否定的なものへ大きく転換するのである。

ヘルダーリンの手稿をそのまま活字化した、フランクフルト版の写実的転写では、次のようになっている。フォントの違いは、インクの濃さや文字の太さに細かな差異があることを表し、書かれた時期の差異を示唆している。括弧でくくられた部分はヘルダーリンによって横線が引かれ、削除されたと見なせる箇所である。

48 この部分の原語は「sie selbst」である。「sie」を4格として理解すれば、前の行の「天上の者たち」の言い換えとして「見る」の目的語として解釈できる。対して「sie」を1格として理解すれば、直後の「彼らは」と同じく次の文の主語として解釈できる。ここでは前者の解釈を採用した。なぜなら、神的なものを「ありのまま (sichtbar)」(Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914-1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 813)に見るという行為が直前のセメレーの比喩で言われており、「selbst」がその「ありのまま」さを指していると解釈するからである。また、もし1格と見なした場合、「彼ら自身は、彼らは」と主語が繰り返されることになるが、そのことに4格と解釈する以上の重要な意味はないように思われるからでもある。

49 Ebd., S. 813f.

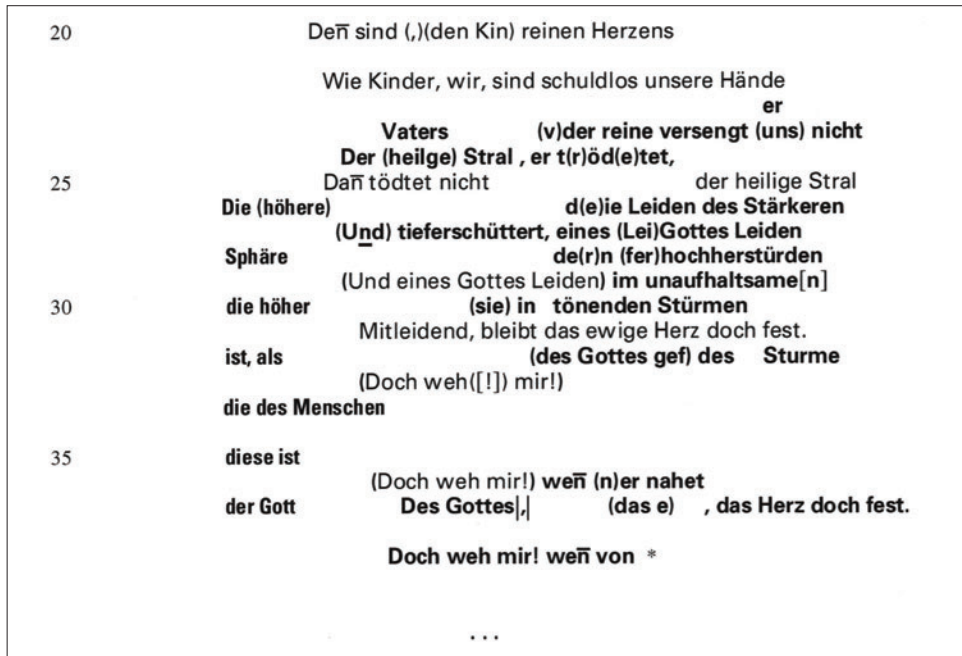


図1 欠落部の前半部分⁵⁰

31行目の「ともに苦悩しつつ、永遠の心はそれでも確固としたままだ (Mitleidend, bleibt das ewige Herz doch fest)」の後にある、同じフォントで書かれた「しかしつらい! (Doch weh mir!)」は、括弧に入っているため削除されたことを示している。そのため、ツィンカーナーゲルはテキスト化していない。ページの左側にも文字が書かれている(26行目の「Die (höhere)」以降)が、これはインクの違いから後から書き足された関係のない部分だと見なされ、別のフォントになっている⁵¹。ツィンカーナーゲルが次にテキスト化しているのは、38行目の「しかしつらい! もし [...]」によって (Doch weh mir! wenn von)」である。彼がそうした理由は、これと同じ時期に書き入れられた37行目の「das Herz doch fest」が31行目の「das ewige Herz doch fest」の繰り返しだという判断に基づき、その続きが「Doch weh mir! wenn von」であると考えたからだと思われる。その後の中略を示す「[...]」が書き入れられ、このページは終わっている。ツィンカーナーゲルは「wenn von」の後から「・」を数多く記載しているが、手稿では下の行に「[...]」と書かれているだけであり、恣意的に点の数が増やされている。次に欠落部の後の後半部分に目を向ける。

⁵⁰ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. Bd. 7. Hrsg. von D. E. Sattler. Frankfurt am Main/Basel 2000, S. 106.

⁵¹ この部分の訳は「(より高き) / 領域 / 人間の / よりも / より高き / これが / 神だ」となり、詩に含まれると見なせるかは難しいが、内容的には連関が見て取れる。

Die letzte Stunde. Im Walde.		
Die Ro]se	Die Schwäne.	Der Hirsch.
		Du (E)edles Wild.
	und trunken []von	5
	Küssen taucht ihr	Aber in Hütten wohnt der
	das Haupt ins hei-	u. hüllet sich ein ins
holde Schwester!		Mensch, (d) (deñ iñiger)
	lignüchterne kühle (l)verschämte Gewand, deñ	10
	Gewässer.	
Wo nehm ich, weñ es Winter, ist		iñiger ist achtsamer auch
		er den
		u. daß(zu) bewahre(n), (daß)
Weh mir!		15
[Die] Blumen, daß ich Kränze den Hiñmlischen		Geist, , wie die Prie-
winde?		sterin die hiñmlische
		F(a)lame, diß ist sein
Dañ wird es seyn, als wüßt ich niñmer von Göttlichen,		Verstand.
		(Da)Und darum ist
Deñ (weñ)von mir sei gewichen des Lebens Geist,;		die Willkür ihm
		25
Weñ ich den Hiñmlischen die Liebeszeichen		u. (alle)
Und [] (sa(h)g ich gleich,)		u. höhere
	Die Blumen im (nakten) kahlen Felde suche	
	u. dich nicht finde.	Macht
Ich sei genaht, die Hiñmlischen zu schauen,		30
		(Macht)
		zu fehlen(),u.
Sie selbst, sie werfen mich tief(),unter (L)die Lebenden		zu vollbringen
	ins Dunkel	alle
Den falschen Priester(),(hinab,)	(hinab) []	dem Götterähnli-
	[] daß ich	chen, (und da-)
(Das)(E)Das warnende Li(d)ed (G)eden Gelehrigen singe.		(rum ist) der
Dort		Güter Gefähr-
		40

図2 欠落部の後半部分⁵²

この前のページからの続きは、内容的な結びつきやインクの状態を勘案すると17行目の「つらい！（Weh mir!）」である。写实的転写では、3行目の「薔薇（Die Rose）」「白鳥（Die Schwäne）」「鹿（Der Hirsch）」「汝、高貴なる野生（Du E(e)dles Wild）」、10行目の「優美なる姉妹よ！（holde Schwester!）」も同じフォントに見えるが、実際に手稿の写真版を確認すると、明らかにインクの太さと濃さが異なっている⁵³。それゆえ、このページにははじめ、「Weh mir!」に至るまでかなりの空白があったと考えられることから、ヘルダーリンは他の詩句の挿入をあらかじめ想定していたことが推測される。実際に、以前の第1稿にはこの箇所に数行程度の記述がある。しかし第2稿では、結局そ

⁵² Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. Bd. 7, S. 107.

⁵³ Vgl. ebd., S. 108.

こに『あたかも祝いの日に…』に直接関係のある言葉が書き入れられず、後に『生の半ば (Hälfte des Lebens)』(5行目の「und trunken [] von」からの部分と14行目の「Wohn ich, wenn es Winter ist」からの部分)や『森の中で (Im Walde)』(6行目の「Aber in Hütten wohnt der」からの部分)という別の詩が書き入れられることになった。

ツィンカーナーゲル版のテキストと比較すると、彼はこの「Weh mir!」をテキストとは見なさず、加えて40行目の「そこでは (Dort)」もテキストと見なしていないことがわかる。一方、この「Weh mir!」と「Dort」は、シュトゥットガルト版においてはテキストと見なされているように⁵⁴、テキストと見なせる部分でもある。にもかかわらずツィンカーナーゲルが省略したのは、現在検討している第2稿ではなく第1稿において「weh mir!」が線を引かれて削除され、「dort」も書かれていないためだと思われる⁵⁵。また、26行目の「私がたとえ言っても (sag ich gleich)」が第2稿では削除されているにもかかわらず、ツィンカーナーゲルがこれを削除とは見なさずにテキストに組み入れているのも、第1稿では削除されていないことを受けている⁵⁶。

このようにツィンカーナーゲルは、いくつもの箇所第1稿の方を優先させているが、逆に第2稿の方を優先している箇所もある。例えばこの詩の最初の行は、第1稿では「あたかも農夫が祝いの日に畑を (Wie wenn der Landmann am Feiertage das Feld)」となっているが⁵⁷、第2稿の「あたかも祝いの日に、畑を見に (Wie wenn am Feiertage, das Feld zu sehn)」がテキストに採用されている。また、第1稿には「wenn von」の後の空白部に「別の [矢] / 自分でつけた傷 (anderem [Pfeile] / selbst geschlagener Wunde)」(「/」は改ページを意味する)で始まる詩行が数行書かれているものの、ツィンカーナーゲルは第2稿に則って空白のテキストを作成している⁵⁸。なぜあるときは第1稿を、あるときは第2稿を優先させたのかについて、ツィンカーナーゲルは資料篇では何も説明していない。そのため、二つの稿のうちどちらを優先するかの基準は場当たり的であいまいであるように見える。例えばミヒャエル・クナウプ編集によるミュンヘン版全集は第1稿と第2稿を区別し、別のテキストとして掲載するが⁵⁹、ツィンカーナーゲルは異なった二つの稿があるとは考えず、自由に組み合わせられると考えているように見受けられる。つまり、ここでは客観的な実証性よりも、ツィンカーナーゲル個人の恣意性が強く表れているのだ。

そしてツィンカーナーゲルの編集を相対化するために、ヘリングラート版のテキストがどのようになっているか見てみよう。

というのも純粹な心でありさえすれば、

⁵⁴ Vgl. Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. von Friedrich Beißner. Bd. II/1. Stuttgart 1951, S. 120.

⁵⁵ Vgl. Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. Bd. 7, S. 99.

⁵⁶ Vgl. ebd.

⁵⁷ Ebd., S. 95.

⁵⁸ Ebd., S. 96, 99.

⁵⁹ Vgl. Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke und Briefe. Münchner Ausgabe. Hrsg. von Michael Knaupp. Bd. 1. München/Wien 1992, S. 259–264.

子どもたちのように我々が、我々の手が無垢ならば、
 父の光線、その純粹なものは焦がすことはないからだ、
 そして深く打ち震えながら、神の苦悩を
 とともに苦悩しつつ、永遠の心はそれでも確固としたままだ。

Denn sind nur reinen Herzens,
 Wie Kinder, wir, sind schuldlos unsere Hände,
 Des Vaters Stral, der reine versenget nicht,
 Und tieferschüttert, eines Gottes Leiden
 Mitleidend, bleibt das ewige Herz doch fest.⁶⁰

ヘリングラートはこれ以降の部分を資料篇には収録しているものの⁶¹、テキストでは欠落部の前で止めてしまい、それ以降は完全に削除してしまっている。これはまるで、欠落部以降はもともと存在せず、この詩が完結しているかのような印象を与える。加えて、欠落部前の部分も多少ツィンカーナーゲル版とは異なっており、特にツィンカーナーゲル版の5行目「とどまることのない嵐の中で高みより落ちてくる苦悩を」が丸々抜けている（この部分も資料篇には記録されている）。

欠落部をテキストに勘案しないのは、ヘリングラート版の他、この詩の初出である、詩人ゲオルゲが編集した『ドイツの詩』（1910年⁶²）にも見られる編集手法だ。ツィンカーナーゲル版が欠落部もテキストと見なして以降、シュトゥットガルト版以降の全集は、どの言葉をテキストに採用するかには多少のブレがあるものの、大体においてはツィンカーナーゲル版を踏襲して欠落部をテキストとして収録している。それでは『ドイツの詩』やヘリングラート版はなぜテキストから除外したのか。まず考えられるのは、欠落部以降の内容がそれまでの詩の内容にそぐわないという点だ。欠落部の前と後とでは詩人の描かれ方が180度転換しており、そのために無視することになったと推定される。ゲオルゲにとって詩人とは予見者（Dichterseher）であり、神秘的で英雄的な性格を持っている。ゲオルゲはそうした詩人像を（意識的にせよ無意識的にせよ）『あたかも祝いの日に…』にも投影した結果、欠落部の前で詩が完結していると判断した可能性が高いと考えられる。そしてゲオルゲに近い人間だったヘリングラートもその見方を積極的に（あるいはゲオルゲに付度して消極的という可能性もあるが）踏襲しているのだ。

ヘリングラートの方が早く詩の巻を出版していたために、ツィンカーナーゲルはヘリングラート版を参照して自らの版に活かすことが可能な立場にあった。そのため、ヘリングラートとの差異を明確に示すために、意図的に欠落部も含んだ別の形のテキストを構成した可能性も考えられる。ツィンカーナーゲル自身は、欠落部をテキストに組み入れたことについて、資料篇で次のように説明している。

⁶⁰ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Bd. 4. Hrsg. von Norbert von Hellingrath. München/Leipzig 1916, S. 153.

⁶¹ Vgl. ebd., S. 341.

⁶² Stefan George, Karl Wolfskehl (Hrsg.): Deutsche Dichtung. Bd. 3: Das Jahrhundert Goethes. 2. Aufl. Berlin 1910, S. 50f.

ヘルダーリンがそのディテュランボスの讃歌に、そのようなくすんだ結部の和音を実際に書き加えようとしたことは、それ自体驚くべきものに見えるかもしれないが、手稿の状況に向き合ったなら、議論を戦わせる余地はおそらくほとんどないだろう。⁶³

ツィンカーナーゲルは手稿にできるだけ忠実であることを重視し、自信を持って欠落部の掲載に踏み切った。裏を返せば、欠落部をテキストから排除したヘリングラートは手稿に誠実に向き合っていないと暗に批判してもいるのだ。欠落部の掲載は、ツィンカーナーゲルの文献学者としての実証主義的態度を示すと同時に、ヘリングラートに対する強い示威行為でもあったと言えるだろう。

ただし手稿に忠実であることに関して、資料篇を見ても首をかしげざるを得ない点はいくつも残されている。例えばタイトルがつけられていない詩に対して、恣意的にタイトルをつける行為はどうであるのか。確かに初出時にゲオルゲも「讃歌 (Hymne)」というタイトルをつけている。ツィンカーナーゲルはそれと異なった「聖なる火」というタイトルを括弧に入れて留保した形でつけてはいるものの、ゲオルゲと同様の行為をしていることは否定できない。また、第2稿でヘルダーリンが線を引いて削除している箇所を、第1稿で削除されていないからといってテキストに組み入れる根拠は何であるのか。そして、逆に第2稿を優先している箇所もあるのはなぜなのか。こうしたことについては、資料篇でも明確な根拠が提示されていない。これは、ツィンカーナーゲルが編集方針として掲げていたように、全体に関わるものではなく個々の箇所のみに関わるものであって、記録する必要のないものだと本当に言えるのだろうか。もちろんこの点についても注釈がきちんと書かれていたものの、原稿の保管が上手くいかずに失われてしまった可能性も考えられなくはない。いずれにせよツィンカーナーゲルの資料篇には、すべてのヴァリエーションを記録した上で、それらの取舍選択を通じて一つのテキストを構成した際の根拠もすべて記録することの困難さが読み取れると言えるだろう。

6. おわりに

これまでの考察をまとめる。ツィンカーナーゲル版全集がこれまであまり注目されず、ヘリングラート版などの陰に隠れてきたのは、資料篇が出版されなかったことが大きな要因だった。資料篇が出版されなかったのは、同時代のヘリングラート版の成功が大きく影響していた可能性が高い。しかし近年資料篇が出版され、ツィンカーナーゲルの編集の意義を批判的に考えることが可能になった。

ツィンカーナーゲルの編集方針としては、ヘルダーリンの手稿に忠実であることが重視され、ヘルダーリンが手稿に書いていることをそのまま文字化して、彼の書いた言葉をできるだけすくいあげ、手稿を再現できるような資料篇を作ろうとしていることが見

⁶³ Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 821.

て取れる。このことに、ツィンカーナーゲル版の学術版編集上の特徴と意義があると言える。しかしその一方で、何を「編集されたテキスト」に組み入れ、何を削除するかについての根拠づけや説明が資料篇に欠けている場合も実際には数多く存在する。一つのテキストを編集する以上、恣意性は完全に排除することはできないため、それに誠実に対処することが求められる。したがって、実証性を標榜しつつ、恣意性とは真正面から向き合い切れなかったのがツィンカーナーゲル版であると言えるだろう。

もっとも、ツィンカーナーゲルの編集は全体としては評価すべきものだと思われる。彼は『あたかも祝いの日に…』の欠落部をテキストとして収録し、この詩を未完成で断片化している詩として提示した。対して欠落部を除外したヘリングラートは、この詩を首尾一貫し整った内容を持つすでに完成した詩として提示している。この両者のうち、どちらがヘルダーリンの手稿に近いテキストを提示することに成功しているかは言うまでもない。

ツィンカーナーゲル版はこれまでヘルダーリン研究においてほとんど無視されてきたが、現在ようやく研究対象となる基盤が整いつつある。ヘルダーリンが一躍ドイツ文学の古典にのぼりつめた20世紀前半という重要な時期の学術編集版として、ツィンカーナーゲル版が担った役割はこれまで軽視されすぎていたと言える。ツィンカーナーゲル版がヘルダーリン研究において、数ある全集のうちの単なる一つとして歴史的な意味しか持たないのか、それとも資料篇も含めて内容的に現在でも参照する価値があるのかは、今後の検討の中でさらに明らかになっていくだろう。

文献表

- Bothe, Henning: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“. Die Rezeption Hölderlins von ihren Anfängen bis zu Stefan George. Stuttgart 1992.
- George, Stefan; Wolfskehl, Karl (Hrsg.): Deutsche Dichtung. Bd. 3: Das Jahrhundert Goethes. 2. Aufl. Berlin 1910.
- Hellingrath, Norbert von: Pindarübertragungen von Hölderlin. Prolegomena zu einer Erstausgabe. Jena 1911.
- Hoffmann, Dierk O.; Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth (Hrsg.): Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte. Tübingen 2005, S. 199–245.
- Hölderlin, Friedrich: Gesammelte Werke. Bd. 2. Hrsg. von Paul Ernst. Jena/Leipzig 1905.
- Hölderlin, Friedrich: Hölderlins Werke. Teil 1. Hrsg. mit Einleitung und Anmerkungen versehen von Marie Joachimi-Dege. Berlin 1908.
- Hölderlin, Friedrich: Gesammelte Werke. Bd. 2. 2. vermehrte Aufl. Hrsg. von Wilhelm Böhm. Jena 1909.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. 6 Bde. Begonnen durch

- Norbert v. Hellingrath; fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot. München 1913–1923.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke und Briefe. Kritisch-historische Ausgabe. 5 Bde. Hrsg. von Franz Zinkernagel. Leipzig 1914–1926.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. 8 Bde. Hrsg. von Friedrich Beißner. Stuttgart 1943–1985.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. 20 Bde. Hrsg. von D. E. Sattler. Frankfurt am Main 1975–2008.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke und Briefe. Münchner Ausgabe. Hrsg. von Michael Knaupp. Bd. 1. München/Wien 1992.
- Hölderlin, Friedrich: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte. Lesarten und Erläuterungen mit dem Text herausgegeben von Hans Gerhard Steimer. Teil 1: Herausgeberbericht mit Benutzung einer Briefedition von Frank Hieronymus. Teil 2: Edition beiliegend auf CD. Göttingen 2019.
- Lange, Wilhelm: Hölderlin. Eine Pathographie. Stuttgart 1909.
- Metzger, Stefan; Kreuzer, Johann (akt.): Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): Hölderlin-Handbuch. Leben–Werk–Wirkung. 2., revidierte und erweiterte Aufl. Berlin 2020, S. 3–14.
- Plachta, Bodo: Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition. Stuttgart 2020.
- Reitani, Ruigi [Rezension]: Friedrich Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte. In: Hölderlin-Jahrbuch. Bd. 41 (2018–2019), S. 251–255.
- Zeller, Hans: Zur gegenwärtigen Aufgabe der Editionstechnik. Ein Versuch, komplizierte Handschriften darzustellen. In: Euphorion 52 (1958), S. 356–377.
- Zinkernagel, Franz [Rezension]: Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe unter Mitarbeit von Friedrich Seebaß besorgt durch Norbert v. Hellingrath. 5. Bd.: Übersetzungen und Briefe 1800–1806. München und Leipzig 1913, bei Georg Müller. In: Euphorion 21 (1914), S. 356–363.
- Zinkernagel, Franz [Rezension]: Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe, begonnen durch Norbert v. Hellingrath, fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot. 4., 3., 2., 6. Bd. In: Euphorion 25 (1924), S. 274–287.
- Zinkernagel, Franz: Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion. Berlin 2018 (Original: 1907).
- Zinkernagel, Franz: Briefe und Schriften aus dem Nachlass. Hrsg. und kommentiert von Frank Hieronymus. 5 Bde. Basel 2020.

The Historical-Critical Edition of Hölderlin out of the Limelight: Zinkernagel and His Edition

Hideya HAYASHI

This paper focuses on the historical-critical edition of Hölderlin edited by Zinkernagel, which has received little attention in Hölderlin studies. The Zinkernagel's edition has been disregarded because its editorial material (apparatus), the core of the historical-critical edition, had not been published at the same time. However, its publication in recent years has laid the foundation for research. According to the editorial material, Zinkernagel is oriented toward empirical philology, presenting the process of textual genesis by documenting as many variants as possible, and trying to create an editorial material with which the manuscripts can be reconstructed. This policy was progressive at the time. Zinkernagel also criticizes the Hellgrath's edition for its arbitrary editing, which ignores Hölderlin's mental illness and just glorifies his works. In contrast to Hellgrath, who presented the false completeness of "Wie wenn am Feiertage..." by excluding its fragmented part at the end from the edited text, Zinkernagel succeeded in presenting the unfinishedness of the poem by textualizing the fragmented part. However, in some places Zinkernagel also appears to have made arbitrary choices without providing a clear justification for which manuscript words to adopt, which indicates the difficulty of documenting everything involved in the editing process in the editorial material.

成長する有機体としての詩

——バイスナーとシュトゥットガルト版

大田浩司

0. はじめに

フリードリヒ・バイスナー (Friedrich Beißner, 1905-1977) の編集によるシュトゥットガルト版 (*die Große Stuttgarter Ausgabe* 略称 StA, 1943-1985) は、それまでに出版されてきたヘルダーリンの全集がどれも史的批判版 (historisch- kritische Ausgabe) として学術的に不十分な質しか備えていないとの考えのもと、ヘルダーリンの史的批判版の決定版となることを意図して編集された¹。シュトゥットガルト版はテキストの生成を明晰に再構成し、読者に分かりやすく提示することを編集の核心ととらえ、ヘルダーリンのみならずあらゆる文学の史的批判版の模範とされてきた²。

シュトゥットガルト版全集は全8巻、15分冊によって構成されている。文学テキスト、論文、翻訳はバイスナーによって編集され、1943年に第1巻 (1800年までの詩)、1951年に第2巻 (1800年以降の詩)、1952年に第5巻 (翻訳)、1957年に第3巻 (『ヒュペリオン』)、1961年に第4巻 (『エンペドクレスの死』、翻訳) が刊行された。書簡を収めた第6巻とドキュメントを収めた第7巻はアドルフ・ベック (Adolf Beck, 1906-1981) によって編集され、1977年にすべての分冊が刊行された。補遺と索引を収録した第8巻はベックが準備作業を行い、それを引き継いでウーテ・エールマン (Ute Oelmann, 1949-) が完成させ、1985年に出版された。

バイスナーは先行するヘルダーリンの全集の中でも特にヘリングラート版 (1913-1923) とツィンカーナーゲル版 (1914-1926) を対抗モデルとし、シュトゥットガルト版がそれらを補完する全集となることを目指して編集作業を行った³。本稿の第1節と第2節では、バイスナーのシュトゥットガルト版の特徴をヘリングラート版およびツィンカーナーゲル版と比較しつつ明らかにする。第3節ではバイスナーにおける詩の有機的な生成発展モデルについて、彼が影響を受けたゲーテの形態学と関連させながら分析する。シュトゥットガルト版はヘルダーリンの史的批判版の金字塔であり、現在においても文献学的に非常に高い評価を受けているが、その編集の方法論に対しては批判の声もある。第4節では、ペーダ・アレマンとペーター・ゾンディによるバイスナー批判について取り上げ、テキストの編集と解釈との間の関係について論究する。最終節では、第1節から第4節にかけて分析したシュトゥットガルト版の特徴を振り返りつつ、1975年にシュトゥットガルト版のアンチテーゼとして登場したフランクフルト版 (1975-2008) と

¹ Vgl. Metzger / Kreuzer: Editionen (2020), S. 6.

² Vgl. Plachta: Editonswissenschaft (2020), S. 41.

³ Vgl. Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 256ff; Ders: Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie (1964), S. 78ff.

も比較しながら、シュトットガルト版が持つ可能性と限界について考察する。

1. ヘリングラート版との比較

ヘリングラートは1910年に『ヘルダーリンのピンダロス翻訳』(*Pindar-Übertragungen von Hölderlin*)というタイトルの博士論文によってミュンヘン大学から博士号を授与された。博士論文は1911年に「第1版への序論」(*Prolegomena zu einer Erstausgabe*)という副題を持つ書籍として出版され⁴、それまでほとんど無視されてきたヘルダーリンのギリシア文学翻訳や後期詩作における詩的言語の現代性に大きな注目が与えられることになった⁵。バイスナーはゲッティンゲン大学で古典文献学者ヘルマン・フレンケル(Hermann Fränkel, 1888-1977)の指導の下、1932年に『ヘルダーリンのギリシア語翻訳』(*Hölderlins Übersetzungen aus dem Griechchen*)というタイトルの博士論文によって博士号を取得し、学者としてのキャリアをスタートさせた。ヘリングラートとバイスナーにおける博士論文のテーマの共通性からは、ヘリングラートがバイスナーに与えた大きな影響を読み取ることができるだろう。

ヘリングラートの博士論文の書籍版に「第1版への序論」という副題が付けられていることから分かるように、ヘリングラートはヘルダーリンの史的批判版を編纂する準備として博士論文を出版した。ヘルダーリンが1800年から1806年にかけて生み出した後期詩作は、従来狂気の産物として高い価値が与えられていなかったが⁶、ヘリングラートは自身の全集第4巻の序文でこの時代の詩作を「ヘルダーリンの著作の心臓、中核、頂上であり、本来の意味の遺産」(Hellingrath 4, XI)として高く評価している。しかしそれ以降の作品は「最後期の作品 (späteste Gedichte)」として区別され、この時代のヘルダーリンは真に狂気の状態にあるとみなされ高い評価が与えられていない。したがって、ヘルダーリンが自作の詩に1806年以降に施したと推定される修正は軽視されるか、あるいは歪曲とみなされることになる。ヘリングラートによる後期作品と最後期の作品の区別はバイスナーにも受け継がれ、この区別は現在のヘルダーリン研究において標準的なものになっている⁷。

ヘリングラート版全集はヴァリエーションを網羅的に掲載することを断念しており、全集第1巻の付録の序文では次のように述べられている。

⁴ Norvert von Hellingrath: Pindar-Übertragungen von Hölderlin. Prolegomena zu einer Erstausgabe. Jena (E. Diederichs) 1911.

⁵ ヘリングラートがヘルダーリンのギリシア語翻訳や後期詩作において認めた「固い結合」の美学については以下を参照。大田『『固い結合』の美学』(2021), 54-74頁。

⁶ 19世紀にヘルダーリンの作品が評価されなかった理由としては、教養市民社会の確立に伴う「非市民的」文学の排除、健康イデオロギーの社会への浸透、規範としてのヴァイマル古典主義の影響、自然科学と実証主義の隆盛に伴う「想像力」の価値に対する懐疑などが挙げられよう。この点に関しては以下の文献を参照。Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“ (1992), S. 45-73; Ota: Hölderlin-Renaissance und Paradigmenwechsel der Literaturwissenschaft im frühen 20. Jahrhundert (2021), S. 139-156.

⁷ Vgl. Reitani: Die Entdeckung der Poesie (2011), S. 163.

手稿がテキストから逸脱している箇所では、出来るだけ記録を残そうとする仕事は概観不可能で鑑賞に耐えないものになり、その場合、仕事は文献学者や植字工よりも、写真家にとって容易なものになるだろう。したがって、われわれは手稿を同様に再現しようとする完全性を断念したのだ。(Hellgrath 1, 353)

ヘリングラートは編者が手稿を網羅的に記述するよりも、写真化の方がよいと考えていたが、全ての手稿を写真化するのは現実的に不可能であることを悟って放棄したと推測される。バイスナーは写真化に対して明確に反対の態度を取っている。彼は「一朝一夕でヘルダーリンの筆記に慣れ親しむことは不可能」であり、「そのためにはつぶさに研究することが必要となる」とし、したがって、詩人の写真化された手稿を、「詩人の筆記の癖になじみがない素人に手渡すことはナンセンスであろう」とみなしている⁸。というのも「文献学者の使命はむしろ錯綜したものを解きほぐし、個々の詩の生成過程を最も完全な形で、しかも概観しやすいように提示することである」からだ⁹。バイスナーは、史的批判版の編集において何よりも重要なことは「完全性 (Vollständigkeit)」と「概観可能性 (Übersichtlichkeit)」を両立させることだという¹⁰。シュトットガルト版は、ヘリングラート版のように完全性を安易に放棄することを批判し、「史的批判版の方法論的原則」に忠実であることを旨とし、「ヴァリエントを可能な限り完全に網羅すること、あらゆる草稿を微細な箇所に至るまで厳密に解釈することに尽力する」ことを重視する¹¹。しかし、全体を概観しやすくするために手稿の研究結果を空間的に提示することをせず、テキストの生成過程の諸段階を視覚的に見やすい形で時間的に再構成する形を取っている。

ヘリングラートはゲオルゲ・クライスからの美学的影響を強く受けており、ヘリングラート版全集第4巻の序言からは、20世紀の現代に神話を取り戻さねばならないとするゲオルゲ・クライスの文化的・宗教的プログラムを読み取ることが出来る。

[ヘルダーリンの詩は (引用者注)] ほとんど信じられないようなことの証拠を提出する。すなわちまだわれわれの時代においても子供のように真実の信仰が神々を召喚できるということや、伝説、真の神話的な思考が、われわれ遅く生まれ落ちた者たちにおいてもまだ死に絶えていないことの証拠を。われわれが、どれほど離れてしまったかを知っているとしても、ヘラスにわれわれの前史と過去を見るなら、この青春時代の故郷とこの故郷の古い神々がわれわれにおいてもどういうわけかまだ生き生きとして、新しい存在と名に向かって押し寄せてくるということの証拠を。
(Hellgrath 4, XIV)

この序言には、学問は客観性を追求するというよりも、宗教や神話や詩に奉仕するた

⁸ Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 257f.

⁹ Beißner: Bedingungen und Möglichkeiten der Stuttgarter Ausgabe (1942), S. 24.

¹⁰ Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 259.

¹¹ A. a. O., S. 253.

めに存在すると考えるゲオルゲ・クライスの美学が強く反映されている。ヘリングラートは、研究対象としてのヘルダーリンの詩的言語と、研究対象を分析する言語との距離を意識的に排除し、ヘルダーリンを思わせる詩的文体でヘルダーリンのテキストをパラフレーズすることをしばしば行っている。そこには詩作と文献学との問題をはらんだ一体化を読み取ることができるだろう。例えばヘリングラートは、後にバイスナーが賛歌「ムネーモシュネー」(*Mnemosyne*) 第3稿の第1詩節と同定した断片「熟して、火にひたされ...」(*Reifsind, in Feuer getaucht...*) について次のような注釈を書いている¹²。

大地は熟している。あらゆる神々が立ち寄ろうと準備している。われわれはしかしこの運命の時を背負っているように、大地の道をよろめき歩くのだが、その大地をあらゆる死すべきものが全一を目指して離れ去ろうとする。天上の者たちの訪れを許容する代わりに。われわれはこの二重の運動、われわれが担わねばならぬ二重の重荷、神々のわれわれへの突進、歓呼の声を上げながらこの地上を離れようとする世界の志向をほとんど見渡すことは出来ず、その志向はわれわれを色とりどりの多様性の中で混雑させ、われわれは神々が到来する未来と人間の過去の何千もの像の前で目を閉じようとし、二重の流れによって盲目的に駆り立てられるままになっている。海の波々を数えずに小舟に浮かんでいるように。(Hellingrath 4, 307)

ヘリングラートがヘルダーリンの全集の編集作業を行う際に助言を求めたゲオルゲは、文献学者に要請される文学テキストの文献学的な分析作業を嫌悪し、詩作と学問の間を架橋する試みを厳しく拒絶していた。ゲオルゲは『芸術草紙』において、自身の反学問的な立場を以下のように表明している。

思想や歴史の方法を通じて芸術に接近しようとするものは、最悪のものも最良のものも同様に物質(素材)として把握してしまうという危険を冒すことになる[...]. そのようにして生き生きとしたものについての学問は、血の通っていない数量の学になってしまう。¹³

ヘリングラートはヘルダーリンの詩的言語を概念的に説明するという介入行為を嫌悪しつつも、しかし他方ではヘルダーリンの読者層を拡大するための教育的な行為を完全に断念することも出来ず、その2つの対立する志向の間で一種の妥協を図った。従ってヘリングラート版の資料編は、ヘルダーリンの詩の「翻案、パラフレーズそして概念的な解説の融合物」¹⁴とみなすことができよう。

バイスナーは「理論に対する文献学的な懐疑家」として知られ、20世紀の様々な文学や美学の思潮に出会いつつもそのどれも代表することはなく、テキストにおける「特殊

¹² ヘリングラートはこの断片に「賛歌的な世界と情趣の否定」(Hellingrath IV, 307)を読み取り、この断片を「狭義の叙情詩」(a. a. O., VI)のジャンルに分類している。

¹³ *Blätter für die Kunst* VII. Folge (1904), zitiert nach Landmann: *Der George-Kreis* (1980), S. 68.

¹⁴ Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“ (1992), S. 105.

なもの、逸脱したもの、不規則的なものに固執するという意味における」文献学者としてふるまった¹⁵。彼はあらゆる美学理論や文学理論から距離をとり、文献学者として文学テクストを徹底して研究対象ととらえ、その研究対象に対して常に学問的な距離を取って冷静に向かい合うことを心がけた。例えば「ムネーモシュネー」第3稿についてバイスナーは、ヘリングラートとは異なり、ヘルダーリン自身の詩的言語と研究対象を分析する言語とを明確に区別し、またヘルダーリンの他の作品や他の全集も参照しつつ、文献学者の冷静な筆致で全体解説を記述している。

第1詩節は確かに—第3稿においては他の2つの稿よりもより明瞭に—最終的に「年の完成」（「多島海」第274詩行参照）の賛歌的な雰囲気や「否定」（ヘリングラート版第4巻310頁以下参照）しようと試みている。第2詩節は、決断から逃れようとする人間を課された状況へと連れもどそうとし（小舟を揺り動かす「海」ではなく「大地に差す日の光…」と「乾いたほこり」へと）、そして人間を最終的にアルプスの「高い街道」に置く。第3詩節においては、黄金期や過渡期においても実を示してきた古代の英雄たちが補正・確認されつつ、想起（「ムネーモシュネー」）されている。（StA 2, 825）

バイスナーはテクスト解釈に思想や文学理論などを介入させることを忌避し¹⁶、形式的・文体的な側面の分析を重視する傾向にあるが、そこには実証主義的文学研究の遺産が潜んでいる。バイスナーは自身の編集方法について論じた論文の冒頭に、実証主義的文学研究で有名なヴィルヘルム・シェーラー（Wilhelm Scherer, 1841-1886）が「根本的な文献学の仕事」として挙げた「編集することと説明すること（Herausgeben und Erklären）」という言葉を用いている¹⁷。ヴィルヘルム・ディルタイ（Wilhelm Dilthey, 1833-1911）は、「精神科学（Geisteswissenschaft）」を提唱し、歴史や文化に向かう人間の基本的な態度である「了解（Verstehen）」と、自然科学的な客観的知識追及の態度を表す「説明（Erklären）」とを対置してドイツの人文科学に大きな影響を与えた¹⁸。バイスナーが論文でテクスト解釈の領域に精神科学的な「了解」ではなく「説明」の語を用いている所には、実証主義的文学研究の強い影響を読み取ることができよう¹⁹。またバイスナーのテクスト解釈において、テクスト外に存在する様々な要素がカッコに入れられ、個々の作品とその内在的構造に主眼が向けられる所には、1930年代末以来ドイツで隆盛を見せた作品内在分析との深い関係が存在していると考えられる²⁰。

15 Barner: Die Attraktivität der Theorie-Skepsis (2010), S. 273ff.

16 「哲学や神学の概念的言語に翻訳されうる内容や素材は詩自体とは全く関係がない。」Beißner: Der Erzähler Franz Kafka (1983), S. 21f.

17 Beißner: Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie (1964), S. 72.

18 Vgl. Dilthey: Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie (1924), S. 144.

19 Vgl. Nutt-Kofoth: Friedrich Beißner. Edition und Interpretation zwischen Positivismus, Geistesgeschichte und Textimmanenz (2011), S. 199ff.

20 Vgl. a. a. O., S. 209.

2. ツィンカーナーゲル版との比較

フランツ・ツィンカーナーゲル (Franz Zinkernagel, 1878-1935) は、1907年に『ヘルダーリンの「ヒュペリオン」の発展史について』(*Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion*) というタイトルの教授資格申請論文をテュービンゲン大学に提出し、大学教授の資格を取得した。この論文の補遺の中には、『ヒュペリオン』の様々な作業段階における未公開の7つの構想の断片が収録されている²¹。ツィンカーナーゲルは、ヘルダーリンの書簡や同時代の哲学や文学を考慮に入れることによって、『ヒュペリオン』の諸草稿をきわめて精確に年代順に整理することに成功しており、現在一般的に認知されているものに近い『ヒュペリオン』の成立史を打ち立てた。特に特筆すべきは『ヒュペリオン』の韻文稿の成立に関する研究である。ツィンカーナーゲルは『ヒュペリオン』韻文稿に対するフィヒテの強い影響を読み取り、韻文稿は従来想定されていたようにテュービンゲン時代ではなくイエーナ時代になって初めて成立したと分析した²²。

ツィンカーナーゲルは、シュトットガルト版で最終前稿および最終稿の準備段階とされている断片に、ルートヴィヒ・ティーク (Ludwig Tieck, 1773-1853) の小説『ウィリアム・ロヴェル』(*Die Geschichte des Herrn William Lovell*, 1796) からの影響を見、これらの断片を「ロヴェル稿」と名付け、フランクフルト時代に成立したと推定した²³。バイスナーはツィンカーナーゲルによる「ロヴェル稿」のグループ分けと成立年代の推定は誤っているとし、ツィンカーナーゲルが論拠とする原稿は後になってからヘルダーリンの義弟カール・ゴックの手によって清書されたものであり、ツィンカーナーゲルはゴックの筆跡の特徴を知らなかったと反論している (StA 3, 306ff.; 517ff.)²⁴。

ツィンカーナーゲルの教授資格申請論文は、シラー、フィヒテ、シェリング、ティークといった同時代の哲学者たちや文学者たちのヘルダーリンに対する影響を実証主義的に解明することを主眼としており、この論文からヘルダーリンの詩人としてのオリジナリティーを見いだすことは困難である。このことは例えば以下の引用から容易に読み取れよう。

並々ならぬ程度に、ヘルダーリンは彼の時代の子として現れている。あの18世紀の最後の数十年においてドイツ人の生を絶え間ない陶醉状態に置いたあらゆる偉大な傾向が、この若い詩人の世界において反映している。²⁵

このように私はテキストを推敲する間、ますますヘルダーリンの同時代の哲学への

21 Zinkernagel: *Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion* (1922), S. 207-242.

22 A. a. O., S. 1-22.

23 A. a. O., S. 113-143.

24 フランクフルト版 (FHA 10, 237, 289-291) もミュンヘン版 (MA 3, 308-315) もツィンカーナーゲルの論を支持していない。

25 Zinkernagel: *Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion* (1922), S. 5.

依存を強調せざるを得なくなった。[…] 無理解で不器用な合理主義者と思われるかもしれないという危険は覚悟の上で言うならば。²⁶

ツィンカーナーゲルの教授資格申請論文は、『ヒュペリオン』における「思考内容への問い」²⁷をめぐる論究を主眼とし、言語芸術としての形式的・文体的な側面についての分析を等閑視している（Zinkernagel 1, 150）。バイスナーは「同時代や過去の模範的存在からの題材上のモチーフの借用は、かつて想定されていたほど重要なものではない」（StA 3, 432）としてツィンカーナーゲルの分析を批判し、『『ヒュペリオン』の成立史の研究は語り手の優れた技巧の発展を明瞭に認識させる」（a. a. O., 433）と主張する。というのも、バイスナーによれば、「ヘルダーリンの生き生きとした哲学的な興味は、その段階が一段一段上昇していくにつれ、ますます明瞭な形態を纏うように変化していくからである」（ebd.）。

ツィンカーナーゲルは、出版社のインゼル社と契約を結び、1911年からヘルダーリンの史的批判版の編集に取りかかり、1914年から1926年にかけてテキストを収録した5つの巻が出版されたが、テキスト批判のための資料編を収録した巻は出版されずに終わった。チュービンゲン大学の病跡学者であるヴィルヘルム・ランゲ（Wilhelm Lange, 1875-1949）は、ツィンカーナーゲルの協力の下²⁸、著作『ヘルダーリン—病跡学的考察』（*Hölderlin. Eine Pathographie*, 1909）を出版し、1800年以降のヘルダーリンの作品と手紙の中に「早発性痴呆（Dementia praecox）」の症候を読み取り、ヘリングラートがヘルダーリンの作品の頂点とみなした1800年から1806年にかけての後期詩作を単なる認知機能の障害の産物として芸術的に低い評価を与えている²⁹。ツィンカーナーゲルもこの評価を踏襲し、ヘルダーリンの作品を精神的には健康だが他の文学者のエピゴネンである初期と中期、精神を侵された詩人の支離滅裂な発話によって特徴付けられる後期に区分している³⁰。ツィンカーナーゲルは、1799年までの『ヒュペリオン』を含めたヘルダーリンの作品を「ほとんど自立したものではない」³¹と評価し、世紀が変わった後ほどなくして精神病の症状がはっきりと現れるようになったとする³²。ただし彼の全集に

26 A. a. O., S. XIII.

27 Ebd.

28 このランゲの著作にはツィンカーナーゲルへの献辞が載っており、また序文にはこの研究がツィンカーナーゲルの示唆によるものであることが述べられている。Wilhelm Lange: *Hölderlin. Eine Pathographie*. (1909), S. XII.

29 Lange: *Hölderlin. Eine Pathographie* (1909), S. 71. ランゲの著作を翻訳した西丸四方によれば、「早期性痴呆」とは現在「精神分裂病」と診断されている病気のことであるが、ランゲの著作が成立した頃「精神分裂病」の名はまだ存在しなかったとされる。ランゲ-アイヒバウム（西丸四方訳）『ヘルダーリン—病跡学的考察』1989, 98頁。なお日本精神神経学会は、「精神分裂病」という病名が誤解や偏見を招きやすいという理由で、2002年8月以来「統合失調症」という病名を正式に使用している。

30 Vgl. Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“ (1992), S. 64.

31 Zinkernagel: *Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion* (1922), S. 137.

32 ランゲによれば、ヘルダーリンの精神病はハウプトヴィル滞在中の1801年1月から4月にかけて始まったとされ、最初の本当に病的な詩は「アルプスの麓に歌う」（*Unter den Alpen gesungen*, 1801）であるといわれる。Vgl. Lange: *Hölderlin* (1909), S. 92.

においては「健康」な詩と「狂気」の詩の区別はせず、伝統的な形式による分類がなされている。

ツィンカーナーゲルは自身のヘルダーリン全集の資料編を出版せずに1929年に死去した。ツィンカーナーゲルのテキスト編集が追求する目的は、ヘルダーリンのテキストを美学的に評価することではなく、テキストを資料として記録し、歴史的な文脈の中に配置することにあるといえよう。ツィンカーナーゲルは史的批判版としての要求を満たすべく、テキストの諸段階やヴァリエントを提示し、厳密な方法でテキストの異同を表示している（図1参照）。彼は資料編の序文で、読者に紙とペンを用意し、読者自身が編者の指示通りに詩人の手稿を再構成することを勧めている。

このようなより煩雑な方法が選ばれたことは、これらの異稿同士の時間的な前後関係が至るところで確実に確かめられるかどうかというとてもよく生じる懸念のみならず、ヴァリエントの資料編を利用するとの真面目な読者に対しても、一枚の紙の上に自分自身で手稿の原型を再構成する可能性をあらゆる箇所において与えたいという切なる願いから、説明されうる。（Zinkernagel 2, 32）

バイスナーは、ツィンカーナーゲルが「ヘリングラートとその協力者とは異なり、複雑に纏れ合う草稿を回避することはなかった」として、彼の文献学的厳密性と完全性を追求しようとする姿勢を評価しつつも、「しかし、彼はテキストを一語一語分解して、あらゆる語にいわば断固として顕微鏡を向け、驚嘆すべきだが模倣すべきだとは思われない極度の厳密さによって」読者に困難な課題を与えているとして批判する³³。バイスナーによれば、ツィンカーナーゲルが選択したヴァリエントの提示方法は、概観可能性という点で大きな欠点があるとされる。バイスナーは「完全性と概観可能性のジレンマを逃れる方策」は、「ヴァリエントのリストが手稿の研究結果を『空間的に』記述するのではなく、成立の『時間的な』層を区別し、互いに際立たせる」³⁴ことにあると考える。シュトットガルト版はテキスト生成の時間的な諸層を視覚的に分かりやすく提示するために、左上から右下へと下りていく階段を思わせる「階段モデル（Treppenmodell）」と呼ばれる方法を用いている（図2参照）。この階段モデルにより、ヴァリエントは二つの次元から、すなわち統語的には水平方向に、また同時に範列的（同じカテゴリーの要素間の置き換え可能な関係）には垂直方向に読むことが可能となる。このバイスナーによる階段モデルは、学術版編集の歴史において「決定的な画期をなすもの」³⁵であり、解読することがしばしば困難なヘルダーリンの混乱した手稿空間からテキスト生成の通時的な発展プロセスを明晰に読み取り、そのプロセスの諸段階を視覚的に分かりやすく再構成することに成功したといえよう。しかし、修正のプロセスがいつ行われたか、また草稿のどの位置に修正が書き込まれたかは分からないという欠点もまた存在する。

³³ Beißner: *Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie* (1964), S. 78f.

³⁴ Beißner: *Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe* (1961), S. 259.

³⁵ Plachta: *Editionswissenschaft* (2010), S. 41.

芽から最終形態（あるいは歪曲）にいたる詩のよどみのない移行から、個々の出来るだけ多様な諸状態がいくつかの稿として取り出された。(Hellingrath 4, 269f.)

バイスナーもヘリングラートと非常によく似た表現で植物の比喩を使って詩の目的論的な生成発展のプロセスについて解説しているが、ここからは明らかにヘリングラートからの大きな影響を読み取ることが出来るだろう。

この方法に従って成立のヴァリエントを提示することは、計画や構想の最初の萌芽から最終的な形態に至るまでの理想的な成長を具体的に説明する³⁷。

バイスナーは様々な講演や論文において、自然と芸術の類似性を指摘するゲーテからの引用（「自然作品と芸術作品はそれらが完成してしまったら知ることはできない。それらをいづらか理解するためには、それらが生成しているところをすばやくつかまなければならない。」[Goethe an Carl Friedrich Zelter, 4. August 1803, FA 32, 368]）をしばしば用い、テキストの生成を提示する「階段モデル」について説明している³⁸。ゲーテはあらゆる形態は常に変化してやまないと考え、ある形態が絶え間なく変化し続けることを「形成 (Bildung)」と呼んだ。

しかし、すべての形態、とくに有機的形態を観察すると、どこにも持続するもの、静止するもの、完結したものが現れないことに気が付く。むしろ、すべてのものは絶えざる運動のなかで揺れ動いているのである。それゆえ我々の言語は、形成 (Bildung) という言葉を生み出されたものについても、また現に生み出されつつあるものについても当てはまるものとして使うことを常にしているのである。(FA 24, 392)

バイスナーはテキストの生成プロセスをゲーテの「形態学 (Morphologie)」の用語である「メタモルフォーゼ (Metamorphose)」³⁹という言葉で表現している。ゲーテは形態学を「有機的自然の形成と変形 (Bildung und Umbildung organischer Naturen)」(FA 24, 399) の学であると定義し、現象として自然の中に現れる個々の形成と変形の運動を有機的自然全体との関係の中で把握することを重視した。メタモルフォーゼは「有機的自然の形成と変形」の法則にほかならず、ゲーテは「植物のメタモルフォーゼ試論」(*Versuch die Metamorphose der Pflanzen zu erklären*, 1790) において、植物の原型は葉であり、その原型である葉は、前進と後退、拡張と収縮を繰り返しながら、最終的に花や果実のような完成形態を生み出すと論じている。

37 Beißner: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 260.

38 Beißner: Hölderlins letzte Hymne (1961), S. 212; Ders: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Ausgabe (1961), S. 252.

39 A. a. O., S. 252.

[...] 自然は、一つの部分を他の部分から生み出し、唯一の器官 (= 葉) の変化により極めてさまざまな形態を提示するのである。(FA 24, 110)

同一の器官 (葉) が多種多様に変化するのを我々に見せる作用は、「植物のメタモルフォーゼ」と呼ばれた。(ebd.)

植物は芽を出しても、花を開いても、果実を結んでも、多様に規定され、しばしば形態を変化させながら自然の指示を果たしていくのは、常に「同一の器官」なのである。茎においては葉となって拡張し、極めて多種多様な形態をとったのと同じ器官が、今度は専らになって収縮し、花卉となって再び拡張し、雄しべと雌しべとなって収縮し、最後に果実として拡張するのである。(a. a. O., 149)

バイスナーは、詩の構想の萌芽としての原型がまず存在し、その原型がメタモルフォーゼして多様な形態に変形しながら、最終的な完成形態へ向かって成長していくと考えている。バイスナーは詩の原型としての言葉を「萌芽の言葉 (Keimworte)」と名付け、この「萌芽の言葉」から詩が有機的に成長していくとする。

まず最初に詩人は一組の動機や表現—萌芽の言葉—をページの広い空間に配分する。この萌芽の言葉から後に完成した詩節が生い育つ (aufwächst)。そしてこの成長は、それに同行したそれを詩人ともに詩作する手稿の解釈者を、繰り返しもっとも内奥にある核心へと喜ばしくも立ち戻らせるというやり方でなされる。⁴⁰

バイスナーは論文「ヘルダーリンの最後の賛歌」(Hölderlins letzte Hymne, 1961) の中で、萌芽の言葉から詩がどのように有機的に成長・発展していくのかについて、具体的な例を挙げながら詳しく説明している。例えばヘルダーリンのエレギー「パンと葡萄酒」(Brot und Wein, 1800/1801) は3つの草稿が存在するが、第1草稿において第1詩節の開始点となる最初の萌芽の言葉は、「街頭の馬車 (die Wagen der Gasse)」であるとされ、この萌芽の言葉から第2の作業過程においてさらに4つの詩行からなる萌芽の言葉が「発芽する (aufsprossen)」といわれる⁴¹。

die Wagen der Gasse 街頭の馬車

die Früchte des Marktes 市の果物

Und die (1) schwärmerische そして (1) 熱狂的な
(2) träumerische, die Nacht steigt (2) 夢のような夜がたちのぼる

⁴⁰ Beißner: Hölderlins letzte Hymne (1961), S. 214.

⁴¹ Ebd.

Prächtigt und traurig herauf. 壮麗にそして悲しみを帯びて

Wunderbar
(StA 3, 593)

驚嘆すべき

これらの萌芽の言葉は詩の構想の発展とともに生長し、また新たに出現する別の萌芽の言葉とともに詩の中で何度も繰り返されることとなる⁴²。「パンと葡萄酒」の主題は「夜」であるが、ヘルダーリンにとって「夜」とはギリシアの神々が没落した後の世界を覆う神なき「乏しき時代」(StA 3, 94) という神話的な意味をはらんでいる。「夜」は将来の「昼」を準備する「青銅の揺籃」(a. a. O., 93) の時代であり、夜の神である酒神ディオニュソスは、人々に「聖なる酔い」(a. a. O., 91) と「奔流する言葉」(ebd.) を恵み、かつて神々が存在していた「昼」についての詩的な「聖なる記憶」(ebd.) を授けるとされる。また夜の時代には神々のうちの最後のものとして「物静かな精霊」(a. a. O., 94) たるイエス・キリストが出現し、長い夜の後に新しい昼が再来することが告知される。「パンと葡萄酒」の第1草稿の第1詩節に現れた萌芽の言葉には、全9詩節に渡って展開される「夜」の主題の核心的な意味が凝縮されているといえよう。

また、バイスナーは論文「ヘルダーリンの最後の賛歌」の中で、賛歌「ムネーモシュネー」の萌芽の言葉からの有機的な生成発展について詳細に論じている。收拾不能に思えるほど複雑に錯綜したヘルダーリンの手稿の中から、バイスナーは「ムネーモシュネー」の第1草稿と第2草稿を区別することに成功し、またさらに完成稿と考えられる第3草稿を発見した。バイスナーによれば、以下の二行がこの賛歌全体の萌芽の言葉であるという。

Am Feigenbaum イチジクの木の上で
Ist mir Achilles gestorben. 私にとってアキレウスは死んだ
(StA 2, 817)

この二行の萌芽の言葉を詩人は第1草稿の頁の中央部に最初に書き付けたとされる。詩の構想の発展とともにギリシア神話の英雄アキレウスに対する詩人のひたむきな同情心がさらに強調され、萌芽の言葉に所有代名詞「私の (mein)」が付加された形 (Am Feigenbaum / ist mein Achilles mir gestorben. [イチジクの上で／私のアキレウスは私にとって死んだ]) が、頁の下の部分に繰り返される⁴³。この2行の言葉は、バイスナーが完成稿とみなす第3稿の第3詩節の冒頭におかれることになる (StA 2, 198)。この言葉には、英雄の死を回想することによって保持することという賛歌全体の主題が凝縮されていると解釈されよう。

⁴² Beißner: Hölderlins letzte Hymne (1961), S. 214ff.

⁴³ Beißner: Hölderlins letzte Hymne (1961), S. 222.

しかし、この2行の言葉に賛歌全体の主題が凝縮されているといっても、本当に賛歌がこの2行の言葉から有機的に発展していったかどうかについて確証があるわけではない。ゲーテの自然哲学の大きな影響を受けた詩の生成発展モデルからは、バイスナーの古典主義的な芸術観を読み取ることが出来よう。成長する有機体としての文学テキストの生成モデルは古典主義的な理念形であり、必ずしも現実のテキストの生成プロセスと一致しているとはいえない⁴⁴。また、詩には最終的な完成形態というものが存在し、原型としての萌芽の言葉から完成形態へと有機的に発展していくと考えるバイスナーのテキスト編集においては、詩の異稿は最終的な完成稿に従属する予備段階にすぎず、それ自体で独立した価値を持たないことになるだろう⁴⁵。

4. テキスト編集と解釈学

バイスナーのシュトットガルト版は、ヘルダーリンの史的批判版の金字塔とされ、そのテキスト批判の文献学的水準の高さを多くの研究者は称賛しているが、批判の声も寄せられていることは見逃すことはできない。ベダ・アレマン (Beda Allemann, 1926-1991) とペーター・ゾンディ (Peter Szondi, 1929-1971) は、テキスト編集と解釈学の関係という観点から、バイスナーの編集方法を批判している。

マルティン・ハイデガーは著作『ヘルダーリンの詩作の解明』(Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung, 1941)の中でヘルダーリンの詩「あたかも祝日のように…」(Wie wenn am Feiertage, 1801)を解釈している。しかし、ここでハイデガーは普段よく用いていたヘリングラート版には従わず、自分自身でヘルダーリンの手稿に取り組み、テキストを編集した。ヘリングラート版ではこの詩の39行目は「生え出る (entwächst)」となっているが (Hellingrath 4, 152)、ハイデガーは自身でヘルダーリンの手稿を検討した結果、この動詞を「entwacht (目覚める)」と読み取り、以下のように詩のテキストを編集した。

[...] im Liede wehet ihr Geist,	歌の中にその精神は吹きわたっている。
Wenn es von der Sonne des Tags und warmer Erd	それが真昼の太陽と温かな大地に
	よって
Entwacht,	目覚めるとき、
(Heidegger: »Wie wenn am Feiertage...«, S. 50) [太字による強調は引用者による。]	

ハイデガーの手稿の編集と解釈は密接な関係にある。ハイデガーはこの箇所では自然が眠っている状態から「目覚め」、目覚めにおいて自然が熱狂のうちに「精神化」することを強調している。

⁴⁴ Vgl. dazu Metzger / Kreuzer: Editionen (2020), S. 7.

⁴⁵ Vgl. ebd.

神聖さは自然の本質である。この自然は朝になるものとして、目覚めのなかで (im Erwachen) その本性を露にする。[...] 目覚めのなかで自然は自分自身になる。熱狂 = 精神化 (Begeisterung) は自分自身を再び新たに感じ、「万物の創造者 (die Allerschaffende)」となる⁴⁶。

バイスナーはシュトットガルト版の注釈で、この詩の手稿の39行目に書かれている *entwacht* という語は、ヘルダーリンにおいて常に繰り返し現れる書き間違いとして、彼の他の7つの詩において対応する書き間違いの例を挙げている。[vgl. *An die Äther* v. 38 H² (*aufwacht* → *aufwächst*); *Rousseau* v. 17 (*entwacht* → *entwächst*); *Die Liebe* v. 17 H² H³ (*erwacht* → *erwächst*); *Der Gang aufs Land* v. 40 (*wächt* → *wächst*); *Heimkunft* v. 9 H³ (*wächt* → *wächst*); *Patmos* v. 3 H⁷ (*wächt* → *wächst*); *An die Madonna* v. 19 H³ (*wächt* → *wächst*)] (StA 2, 674)

バイスナーは詩人のこのような過去の書き間違いのデータに基づき、ヘルダーリンの手稿に現われた *entwacht* という動詞を「生え出る (*entwächst*)」の書き間違いだと推論し、自身のテキスト編集ではこの動詞をヘリングラートと同様に *entwächst* に修正している。

[...] im Liede wehet ihr Geist,	歌の中にその精神は吹きわたっている。
Wenn es von der Sonne des Tags und warmer Erd	それが真昼の太陽と温かな大地から
Entwächst,	生え出るとき
(StA 2, 119, v. 37ff.) [太字による強調は引用者による。]	

アレマンはこのバイスナーのテキスト編集を批判し、バイスナーの例証のどの1つをとっても、それらはsの脱落を推定させても、ウムラウトの脱落は推定させず、1語の中での2つの誤りの重なりを説明できていないと批判する⁴⁷。ここでバイスナーが用いている方法は「平行箇所例証法 (Parallelstellen-Belege)」と呼ばれるものであり、この方法は帰納法に基づく実証主義の見かけ、すなわち自然科学的な精密さの見かけを取っている。アレマンは、自然科学的な証明方法をテキスト批判に用いることはできないのではないかと問う。アレマンによれば、ハイデガーのテキスト編集は解釈学的循環の運動から出てきたものであり、解釈学的循環はテキスト批判の作業と切り離すことができないのだ⁴⁸。

アレマン同様にゾンディもバイスナーの編集方法が持つ実証主義的な側面について批判している。ヘルダーリンの賛歌「平和の祭り」(*Friedensfeier*, 1802) の第1節は風景の隠喩であるか、それとも食卓が並ぶ広間そのものを表しているかを巡って論争があるが、バイスナーはシュトットガルト版の注釈において、風景の隠喩を見る解釈は誤っていると指摘する (StA 3, 549)。シュトットガルト版はこの詩の最終稿の第1節を以下の

⁴⁶ Heidegger: »Wie wenn am Feiertage...« (1981), S. 60.

⁴⁷ Allemann: Hölderlin und Heidegger (1954), S. 6.

⁴⁸ Vgl. a. a. O., S. 7f.

ように編集している。

<p>Der himmlischen, still wiederklingenden, Der ruhigwandelnden Töne voll, Und gelüftet ist der altgebaute, Seeliggewohnte Saal; um grüne Teppiche duftet Die Freudenwolk' und weithinglänzend stehn, Gereiftester Früchte voll und goldbekränzter Kelche, Wohlangeordnet, eine prächtige Reihe, Zur Seite da und dort aufsteigend über dem Geebneten Boden die Tische. Denn ferne kommend haben Hieher, zur Abendstunde, Sich liebende Gäste beschieden.</p>	<p>天上的な音調は、静かに反響し、 安らかに移りゆく旋律をただよわせ、 風が吹き抜けているのは、古代に建 てられ、 至福の者たちに住まわれた広間。 緑の絨毯の周りには 喜びの雲がかすみたち、遠くまで 輝きを放つのは、 完熟した果実に満ち、金色の花づな が飾る杯であふれ、 良く整えられ、華やかな列をなし、 脇のここかしこ、平らにならされた 床の上に 立ち並んだ食卓の数々。 というのも遠方から ここに、夕べの時に、 愛に満ちた客たちが来ることに なっているからだ。 (StA 3, 533)</p>
--	--

バイスナーによれば、ヘルダーリンの全作品において風景の隠喩が意図されている場合、必ず明瞭な形で比較がなされているという。例えば「パンと葡萄酒」の第57行「der Boden ist Meer! und Tische die Berge (床は海!そして食卓は山々)」では、はっきりとした比較が明確な等式の形で示されているとされる (StA 3, 549)。また「パトモス」(Patmos)においては、初稿の第30行で「mit tausend Gipfeln duftend (何千もの峰々と共に香りたちながら)」と書かれていた詩句が、後続する諸稿の同じ行では「Von tausend Tischen duftend (何千もの食卓によって香り立ちながら)」と書き換えられ、イメージが大胆に変容しつつも、次の第31行で「アジア (Asia)」という語が置かれているために、風景の隠喩を意図していることが明らかであるとされる (ebd.)。従って、バイスナーは「平和の祭り」の第1節が風景の隠喩として意図されているとすれば、それは「ヘルダーリンの全作品において類例のないものであるだろう」とみなす (ebd.)。

ソンディは、このバイスナーの反論が、一般的法則を認識し、それによって現象を説明しようとする自然科学的原理に基づいていることを指摘する⁴⁹。ソンディによれば、個別の文学テキストは、自然科学におけるような「類例的な個 (Exemplar)」としてではなく、常に「かけがえのない個 (Individuum)」として現れるのであって、自然科学

⁴⁹ Szondi: Über die philologische Erkenntnis (1978), S. 273.

的な方法を文学作品に適用することはできないとされる⁵⁰。バイスナーは自分の認識論的前提を十分に反省せず、事実を盲信し、事実を用いるだけで文学テキストに関する論証が可能であると考えている⁵¹。しかし、事実の持つ証拠としての性格も解釈によってはじめて露になるものである。「パトモス」において初稿が後続する諸稿の隠喩化の証拠を提示しているというのも、バイスナーの解釈の操作に基づいている。テキスト批判には解釈学的循環の運動が不可欠であるが、バイスナーはこのことを十分に理解していない、とソンディは批判する⁵²。

ハイデガーが編集したように、「あたかも祝日のように…」の39行目の動詞を手稿に書かれている通り「*entwacht* (目覚める)」ととった方が、この詩の文脈により適合すると思われる。また「平和の祭り」の第1行目を風景の隠喩とみなす解釈も適切であろう。これらの解釈はバイスナーの依拠する平行箇所例証法によっては否定されるものであるが、アレマンやソンディが主張する通り、詩は一回的で単独的な出来事として現れるものであり、またテキスト編集と解釈学的運動との間には不可分の関係があるということをおぼろげに忘れてはならない。しかしだからといって、詩の一回性や単独性を絶対化して平行箇所例証法という編集方法自体を否定することもまた誤りであろう。テキスト編集において語句を確定させる際、平行箇所例証法を使う必要がある場合もあり、場合に応じて適切な編集と解釈の方法を選択すべきである。

5. おわりに：シュトットガルト版の可能性と限界について

シュトットガルト版は、ヘリングラート版とツィンカーナーゲル版を対抗モデルとしながら、ヘルダーリンの史的批判版の決定版となることを意図して編集された。バイスナーはヘリングラートと同様、以前は狂気の産物とされていた1800年から1806年にかけての後期詩作に大きな文学的価値を見いだした。しかし、ヘリングラート版の文献学的不完全さを批判し、「完全性」と「概観可能性」を両立させた文献学的に厳密な資料編を編集した。

ヘリングラート版の編集には、ゲオルゲ・クライスの美学が強く反映されている。バイスナーは、編集に思想を介入させることを避け、形式的・文体的な側面の分析を重視する傾向にあるが、そこには実証主義的文学研究や作品内在分析の影響が見られる。

バイスナーは、実証主義的文学研究から影響を受けているという点でツィンカーナーゲルと共通し、文献学的厳密性と完全性を追求しようとするツィンカーナーゲル版の姿勢を評価している。しかし、ツィンカーナーゲル版におけるテキストのヴァリエーションの提示方法は概観可能性という点で大きな欠点があるとし、シュトットガルト版は「階段モデル」と呼ばれる画期的な方法を用いて、テキスト生成の通時的な発展プロセスを視覚的に明瞭な形で再構成することに成功した。

⁵⁰ A. a. O., S. 274f.

⁵¹ A. a. O., 277f.

⁵² A. a. O., 279.

バイスナーは、詩にはその構想の原型である「萌芽の言葉」が存在し、そこから完成形態に向かって有機的に詩が生成発展していくと考えた。シュトゥットガルト版は、完成に向かって目的論的に生成発展する詩のそれぞれの段階を、階段モデルという形式で提示している。このようなバイスナーのテキスト生成の考え方は、ゲーテの形態学と古典主義的芸術観から大きな影響を受けている。しかし、成長する有機体としての文学テキストの生成モデルは古典主義的な理念形であり、必ずしも現実のテキストの生成プロセスを反映してはいない。

文献学的水準の高さと資料編のシステムの画期性によって、シュトゥットガルト版は多くの研究者から文学の史的批判版の模範とみなされているが、批判の声も寄せられていることは無視できない。アレマンとソンドィはバイスナーの編集における実証主義的な態度を批判し、文学テキストは自然科学的な一般法則に還元できない一回的で単独的な出来事として現れるものであり、テキスト編集と解釈学的運動との間には不可分の関係があるとする。

1943年に第1巻が刊行されて以来、シュトゥットガルト版は30年近くもヘルダーリンの史的批判版の唯一の規範とされてきたが、1975年にD. E. ザットラー (Dietrich Eberhard Sattler, 1939-) が、シュトゥットガルト版を補完する新しい史的批判版としてフランクフルト版 (*Frankfurter Hölderlin-Ausgabe* 略称 FHA) の刊行をスタートさせ、センセーションを巻き起こした。ザットラーは、ヘルダーリンの「狂気 (Wahnsinn)」とは「真の意味 (Wahr-sinn)」にほかならず、「人間の最高の財産の根源」であるとして、ヘルダーリンのテキストが持つ謎や不可解さの中に創造的・批判的な契機を見ようとする⁵³。ザットラーは、完成稿という観念は「自己欺瞞の産物」にすぎないとし⁵⁴、文学テキストが完成稿へ向かって目的論的に発展すると考えるバイスナーの生成モデルを批判し、テキストを完成稿と異稿という2つのカテゴリーに区分する二分法的思考を放棄した編集方針を取った⁵⁵。またフランクフルト版は、テキスト生成を空間と時間という2つの位相で捉え、ヘルダーリンの手稿空間を写真とその写実的転写を通じて提示するとともに、手稿の時間的な変化のプロセスを独自の解釈で再構成することも行っている⁵⁶。ザットラーによれば、シュトゥットガルト版までの史的批判版においては、権威としての編者に読者が全面的に依存し、編者が自身の編集と解釈を読者に一方的に提示していたとされる。それに対し、フランクフルト版は、読者の編者に対する依存関係を断ち切り、読者自身がテキストを自立的に編集することを可能にするという⁵⁷。

フランクフルト版の刊行によって、シュトゥットガルト版がヘルダーリン研究において従来持っていた規範的な力は弱まったといえる。しかし、フランクフルト版は、手稿空間の再現のために導入された資料編のシステムが非常に複雑で、概観可能性という点で難があり、熟練したヘルダーリン研究者以外には使いこなすことが困難であると思われ

53 Sattler: Friedrich Hölderlin „Frankfurter Ausgabe“ (1975/77), S. 112.

54 A. a. O., S. 118.

55 A. a. O., S. 116.

56 A. a. O., S. 126ff.

57 A. a. O., S. 118f., 125, 128f.

る。バイスナーの文学テキストの生成モデルが古典主義的な理念形にすぎないとしても、シュトゥットガルト版はその文献学的水準の高さと資料編の明瞭性から、テキスト解釈のたたき台として今後も参照することが不可欠な全集であり続けるに違いない。これからのヘルダーリン研究者は、シュトゥットガルト版を解釈のたたき台としつつも、フランクフルト版をはじめとする複数の版を参照することによって、自身でテキストの生成プロセスを再構成することが求められるだろう。

参考文献

I.

- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. von Friedrich Beißner, Adolf Beck und Ute Oelmann. 8 Bde. Stuttgart (W. Kohlhammer / J. G. Cotta) 1943-1985 (zit. als StA).
- Ders.: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Unter Mitarbeit von Friedrich Seebass. Hrsg. von Norbert von Hellingrath. 6. Bde. München / Leipzig (G. Müller) 1913-1923 (zit. als Hellingrath).
- Ders.: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914-1926. Werkteil Gedichte. Lesarten und Erläuterungen mit dem Text (Teil 1: Herausgeberbericht, Teil 2: Edition [auf CD-ROM]). Hrsg. von Hans Gerhard Steimer. Göttingen (Wallstein) 2019 (zit. als Zinkernagel).
- Ders.: Sämtliche Werke. »Frankfurter Ausgabe«. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. von Dietrich E. Sattler u. a. Basel / Frankfurt a. M. (Stroemfeld / Roter Stern) 1975-2008 (zit. als FHA).

II.

- Allemann, Beda: Hölderlin und Heidegger. Zürich / Freiburg i. B. (Atlantis) 1954. [邦訳: ベーダ・アレマン (小磯仁訳) 『ヘルダーリンとハイデガー』 (国文社) 1980]
- Barner, Wilfried: Die Attraktivität der Theorie-Skepsis. Friedrich Beißners Vorlesungen zur Poetik. In: Strukturalismus in Deutschland. Literatur- und Sprachwissenschaft 1910-1975. Hrsg. von Hans-Harald Müller et al. Göttingen (Wallstein) 2010, S. 273-297.
- Beißner, Friedrich: Bedingungen und Möglichkeiten der Stuttgarter Ausgabe. In: Die Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Ein Arbeitsbericht. Hrsg. im Auftrag des Württ. Kultministeriums vom Vorsitzenden des Verwaltungsausschusses der Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe Ministerialrat Theophil Frey. Stuttgart (J. G. Cotta) 1942, S. 18-30.
- Ders.: Aus der Werkstatt der Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. In: Ders.: Reden und Aussätze. Weimar (Böhlau) 1961, S. 251-265.
- Ders.: Der Erzähler Franz Kafka. In: Ders.: Der Erzähler Franz Kafka und andere Vorträge.

- Mit einer Einführung von Werner Keller. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1983, S. 19-54.
- Ders.: Editionsmethoden der neueren deutschen Philologie. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 83, 1964, Sonderheft zur Tagung der deutschen Hochschulgermanisten vom 27. bis 31. Oktober 1963 in Bonn, S. 72-95.
- Bothe, Henning: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“. Die Rezeption Hölderlins von ihren Anfängen bis zu Stefan George. Stuttgart (J. B. Metzler) 1992.
- Dilthey, Wilhelm: Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie. In: Ders.: Gesammelte Schriften. Bd. 5, Leipzig (B. G. Teubner) 1924, S. 139-240.
- Goethe, Johann Wolfgang: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. 40 Bde. Hrsg. von Hendrik Brius u. a. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 1987-2013.
- Heidegger, Martin: »Wie wenn am Feiertage...«. In: Ders. Gesamtausgabe. 1. Abt.: Veröffentlichte Schriften 1910-1976, Bd. 4. Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung. Frankfurt a. M. (V. Klostermann) 1981, S. 49-77. [邦訳: マルティン・ハイデッガー 「あたたかも祝日のように……」 [ハイデッガー全集 第4巻 (濱田恂子/イーリス・ブフハイム訳) 『ヘルダーリンの詩作の解明』 (創文社) 1997, 67-107頁]
- Metzger, Stefan / Kreuzer, Johann: Editionen. In: J. Kreuzer (Hrsg.): Hölderlin-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung. 2. Aufl. Stuttgart/Weimar (J. B. Metzler) 2020, S. 3-14.
- Nutt-Kofoth, Rüdiger: Friedrich Beißner. Edition und Interpretation zwischen Positivismus, Geistesgeschichte und Textimmanenz. In: Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Hrsg. von Roland S. Kamzelak / Rüdiger Nutt-Kofoth / Bodo Plachta. Berlin / Boston (De Gruyter) 2011, S. 191-217.
- Landmann, Georg Peter (Hrsg.): Der George-Kreis. Eine Auswahl aus seinen Schriften. Stuttgart (Klett-Cotta) 1980.
- Lange, Wilhelm: Hölderlin. Eine Pathographie. Stuttgart (F. Enke) 1909. [邦訳: ランゲ-アイヒバウム (西丸四方訳) 『ヘルダーリン—病跡学的考察』 (みすず書房) 1989]
- Oellers, Norbert: Friedrich Beißner (1905-1977) In: Wissenschaftsgeschichte der Germanistik in Porträts. Hrsg. von Christoph König / Hans-Harald Müller / Werner Röcke. Berlin / New York (De Gruyter) 2000, S. 228-234.
- 大田浩司 『『固い結合』の美学—ヘリングラートによるヘルダーリンの再評価と文学的モデルネ』 [日本独文学会研究叢書146号 『「詩人たちの時代」の終わり?—ヘルダーリン、ツェラン、そしてバディウ』 2021, 54-74頁]
- Ota, Koji: Hölderlin-Renaissance und Paradigmenwechsel der Literaturwissenschaft im frühen 20. Jahrhundert. In: Wissen über Wissenschaft. Felder - Formation - Mutation. Festschrift für Ryozo Maeda zum 65. Geburtstag. Hrsg. von Manshu Ide et al. (Stauffenburg) 2021, S. 139-156.
- Plachta, Bodo: Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition. Stuttgart (A. Hiersemann) 2020.
- Reitani, Luigi: Die Entdeckung der Poesie. Norbert von Hellingraths bahnbrechende Edition der Werke Hölderlins. In: Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Hrsg. von

Roland S. Kamzelak / Rüdiger Nutt-Kofoth / Bodo Plachta. Berlin / Boston (De Gruyter) 2011, S. 153-165.

Sattler, D. E.: Friedrich Hölderlin „Frankfurter Ausgabe“. Editionsprinzipien und Editionsmodell. In: Hölderlin-Jahrbuch (=HJb) 19/20 (1975/77), S. 112-130.

Szondi, Peter: Über philologische Erkenntnis. In: Ders.: Schriften I. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1978, S. 263-286. [邦訳：ペーター・ソンディ「文献学的認識について」〔ペーター・ソンディ（ヘルダーリン研究会訳）『ヘルダーリン研究—文献学的認識についての論考を付す』（法政大学出版局）2009, 1-29頁〕]

Zinkernagel, Franz: Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion. Straßburg (K. J. Trübner) 1907.

The Poem as a Growing Organism: Beißner and the Stuttgart Edition

Koji OTA

The purpose of this paper is to examine the possibilities and limitations of the Stuttgart edition (Die Große Stuttgarter Ausgabe) of Friedrich Hölderlin's (1770-1843) works by Friedrich Beißner (1905-1977). Beißner edited the Stuttgart edition with the intention of replacing the editions of Norbert von Hellingrath (1888-1916) and Franz von Zinkernagel (1878-1935).

Hellingrath was influenced by the aesthetic of Stefan George (1868-1933) and highly admired Hölderlin's late poems, which were generally considered products of madness. Beißner also appreciated Hölderlin's late poetry, but he tried to eliminate the interference of all literary and aesthetic theories from his editorial works.

Beißner highly valued the philological perfection of the edition by Zinkernagel. However, Beißner argued that Zinkernagel's presentation of the generative processes of literary texts had a major disadvantage in terms of clarity. The Stuttgart edition succeeded in visually and clearly reconstructing the diachronic development process of literary texts using an innovative method called the "staircase model" (Treppenmodell).

Beißner believed that a poem has "seed words" (Keimwörter) that represent the prototype of its concept, and that the poem grows organically from the "seed words" and develops into its completed form. Here we can discern the significant influence of Johann Wolfgang von Goethe's (1740-1843) natural philosophy and classical aesthetics on Beißner.

It is clear that Beißner's edition is subject to much criticism. For example, Beda Allemann (1926-1991) and Peter Szondi (1929-1971) criticized Beißner's positivist attitude in his text editing and argued that literary texts appear as unique events that cannot be reduced to general laws of natural science. And D. E. Sattler (1939-) criticized Beißner's teleological concept, and in his Frankfurt edition adopted an editorial policy that abandoned the dichotomous thinking that divided the text into two categories: final version and its variants.

D・E・ザトラー編フランクフルト版ヘルダーリン全集について

——その歴史的総括の試み

益 敏郎

ヘルダーリン研究や編集文献学の界隈のみならず、一般的な読者層をも巻き込んでセンセーションを起こした史的批判版ヘルダーリン全集、通称フランクフルト版の登場から、半世紀が経とうとしている。この間にフランクフルト版が文学研究や学術編集のあり方に与えた影響には、計り知れないものがある。編者のD・E・ザトラーは、ゲルマニストとしてキャリアを築き全集の編纂にいたるとする「正道」ではなく、ギムナジウム卒業資格アビトゥアも持たない在野の研究者として、いわばゲリラ的にフランクフルト版を刊行した。まず記者会見を通じて世に問うたのが、いくつかの作品を例に独自の編集方法を提示する『手引き』(Einleitung)であり、これが1975年のことだった。この試験版の出版は、その公開方法を含め全集の出版としては異例の行為だったが、ここにザトラーの論争的対立を演出するセンセーションナリズム、先進的なメディア感覚、獐犇な戦略的知性がよく現れている。これを機にスタートしたフランクフルト版は、ヘルダーリン研究の新境地を切り拓くことになり、その革新的な編集理念と実践によって、学術編集の歴史においても一つの里程碑となった。ザトラーはフランクフルト版完成後の2009年、その功績が認められヘルダーリン賞を受賞し(現在に至るまで全集の編者としては唯一の受賞である)、2021年には彼の名を冠する図書・アーカイヴ施設(Sattler-Bibliothek)がバート・ホンブルクに開設されるに至っている。このようにザトラーならびに彼のフランクフルト版は、時の試練を経て、すでに揺るぎない歴史的評価を勝ち得たようにも見える。

しかしフランクフルト版全集をめぐる言説を改めて検証していくと、また違った様相が見えてくる。フランクフルト版登場時のセンセーションは、まさしく毀誉褒貶が入り乱れたと言うべきもので、全集版として使用される頻度は現在にいたるまで安定して高いにもかかわらず、その学術編集への評価は今なお割れたままである。忘れてはならないのは、フランクフルト版の刊行が、1975年の試験版から2008年の最終巻まで、実に30年を超える長期プロジェクトだったということだ。大きな関心を集め、新しい研究動向と共にあった70、80年代と、コンパクトで扱いやすく信頼性の高い二つの普及版全集——ヨッヘン・シュミット編集のドイチャー・クラシカー版、ミヒャエル・クナウプのミュンヘン版——が登場した90年代、そして完成にこぎつけた2000年代とでは、研究状況も議論の空気も大きく違う。そして何よりザトラーの編集方針それ自体が、プロジェクト開始時と完成段階とではその力点を大きく変化させているように思われる。フランクフルト版の本来の眼目は、ヘルダーリンの未完の後期詩をより適切に編集することだと言ってよく、その意味でプロジェクト終盤の2000年によく出版された待望の第7、8巻(gesänge I, II)こそが、全集の最重要にして総決算の巻となるはずだった。しかしこの巻における編集は、他の先行する全集に取って代わる決定版になるところか、

フランクフルト版のプロジェクトそのものの限界を露呈させるような問題点を多く抱えていた。それゆえフランクフルト版の意義を総括する議論は、華々しい登場時に比して遙かに低調で、今なお不十分にしか行われていない¹。

本稿は以上のような認識に立って、改めてフランクフルト版ヘルダーリン全集の歴史的な意義と限界を明らかにし、今後の学術編集の課題について考察することを試みる。ただし長大なプロジェクトであるフランクフルト版のすべてをここで扱うことは論者の身に余ることであるし、ザトラーがさまざまな媒体で書いてきたアジテーションのようなものを含む文章群を、網羅的に検証することも現段階ではできていない。そもそも、次々に交代し仲違っていくたようにも見える編集協力者たちとザトラーの関係など、具体的な編集過程の実態についてはほとんど明らかになっておらず、今後の研究を待つべき問題も少なくない。こうしたなかで本稿は、フランクフルト版全集の起点と終点にフォーカスする。すなわち出発時の時代背景や言説状況、とくに成功をもたらしたポイントなどを整理し、一方で第7、8巻において露呈した問題点を明らかにするだろう。前者が第1、2章、後者が第3章にあたる。その際にヘルダーリンの専門家ですら悲鳴を上げるフランクフルト版の複雑なシステムを、一部ながら解説することを試みている。そして最後の第4章で、フランクフルト版の問題点の原因を考察し、今後の学術編集、とりわけ邦訳の全集を考える際の課題について論及するだろう。

なお日本における研究に目を向けてみるならば、フランクフルト版ヘルダーリン全集をテーマとした論文は管見の限りいまだ書かれたことがない。このことは、扱いが困難な全集版を使わざるを得ない限られた数の研究者を除いて、その実態を知る機会が得られない状況が続いているということの意味する。それゆえ本稿は、単にドイツ文学研究への寄与となるだけでなく、この歴史上まれな存在価値を持つ史的批判版全集を、日本の編集文献学の議論において参照可能なものにする一助となるかもしれない。

1

まずザトラーが、フランクフルト版を出版するまでの経緯を確認しておこう。参照元となるのは、いくつかの新聞雑誌記事に加えて、「史的批判版全集の作業場のインターネット・アーカイヴ」と称し、おそらくザトラー自身によって管理されているホームページである²。なおこのホームページ内の文章は、かつての象徴主義詩人シュテファン・ゲオルゲやそのサークルを思わせるような、名詞の頭文字を小文字にするという現代ドイツ語表記に反する方法で、ピリオドもウムラウト等の特殊文字も一切用いない、という非常に読みづらいスタイルで書かれている。このような奇を衒った振る舞いのはっきりした理由は不明だが、これはホームページが運用され始めた2000年前後からザトラ

¹ 本稿は、2023年7月15日の編文研シンポジウム「ヘルダーリン学術版編集の歴史——翻訳のための編集を考える」で行った口頭発表に、大幅な加筆修正を行ったものである。

Burdorf (1993) はプロジェクト途中でありながら、フランクフルト版に対して包括的かつ的確な把握を行っている。本稿はこうした成果を参考にしながら、フランクフルト版の終盤に関する考察を加えていく。

² Vgl. <http://www.hoelderlin.de/> (Zugang: 28.11.2023)

ーがとくにこだわり始めた書き方のようで、たとえば同時期に出版されたフランクフルト版の第7、8巻の文章も、このスタイルが貫かれている。

通常D・E・ザトラーと表記されるディートリヒ・エーバーハルト・ザトラー (Dietrich Eberhard Sattler) は1939年10月8日に、チューリンゲン州のアポルダで生を受けた。1953年に家族と当時の西ベルリンへ亡命し、58年から国立の工芸学校でグラフィックやタイポグラフィを習い始めている。これは結局正規の修了には至らなかったようだが、その際にヘルダーリンの4つの未完の詩を、木版画の挿絵付きで出版するなど³、ヘルダーリンとの関わりはこの時期には始まっていた。そして70年代になって、ザトラーはヴェルテンベルクのアーカイヴを訪ね、ヘルダーリンの手稿を調査し、最も権威のあるヘルダーリン全集、通称シュトットガルト版への批判的立場を鮮明にするようになる。ここに出版社ローター・シュテルンのK・D・ヴォルフが現れて、フランクフルト版の計画が始動するのである。

社会主義ドイツ学生同盟 (SDS) のトップを務めたこともあるK・D・ヴォルフがザトラーを知ったきっかけは、彼が作成したヘルダーリンとヘーゲル、そしてヘルダーリンとマルクスの風刺画ポスターを偶然見かけ、興味を持ったことである⁴。ザトラーによれば、その後訪ねてきたヴォルフとの会話のなかで、「テキスト原理主義 (Texttreue) に身を固めたゲルマニスティクに赤っ恥をかかせる」用意があるとヴォルフに伝え、その数日後にはフランクフルト版の刊行計画が具体的に進み始めたのだという⁵。それから翌年の1975年8月6日には、早くもフランクフルター・ホーフで会見を開き、すでに述べた試験版の発表でセンセーションを巻き起こすのである。

ローター・シュテルン (社名を日本語に直すと「赤い星」) は、60年代の学生運動から生まれた出版社であり、メディアの反応は「ヘルダーリンの頭上に輝く赤い星」、「左からのヘルダーリン」、「マルクスがヘルダーリンを読む時が来たのか」というイデオロギー性に注目する論調だった⁶。ザトラー自身は、学生運動に積極的だったわけでも、政治信条としてマルクス主義を奉じていたわけでもなかったと言われる⁷。しかしこのメディアによるヘルダーリン左翼化の指摘は、単にローター・シュテルン社の政治的急進性を根拠とする揶揄とも言いきれない。ここにはヘルダーリン言説の歴史的文脈があり、それを踏まえた評言だと考えられるからである。

1960年代から70年代にかけての西ドイツにおいて、歴史問題への対決や権威主義への批判の機運が高まるなか、ヘルダーリン研究もまた大きな転機を迎えていた。そのメルクマールを二つだけ挙げておこう。一つ目が、フランスの研究者ピエール・ベルトー

3 Vgl. <http://www.hoelderlin.de/materialien/html/vier-00-01.html> (Zugang: 28.11.2023)

4 Vgl. <http://www.hoelderlin.de/materialien/html/siebdruck-1.html>; <http://www.hoelderlin.de/materialien/html/siebdruck-2.html> (Zugang: 28.11.2023)

5 Vgl. Müller (2001).

6 Vgl. Burdorf (1993), S. 168. なお「マルクスがヘルダーリンを読む時が来たのか」という言葉は、トーマス・マンのエッセイ『文化と社会主義』(Kultur und Sozialismus, 1928年)における言葉をもじったものである。

7 ザトラーの子どもたちによれば、彼は革命的なものを好む傾向はあったものの、とくに左翼的な政治信条は持っていなかったという。Vgl. Biener (2021).

による、ヘルダーリン革命詩人テーゼとも言すべき主張をくり広げた一連の研究⁸、二つ目が革命をめぐる政治的議論を盛り込み、マルクスとヘルダーリンの出会いを創作して大きな話題を呼んだペーター・ヴァイスの歴史劇『ヘルダーリン』（1971年初演）である。この二つは、ヘルダーリンとフランス革命、またその影響下で起きたドイツ国内の革命運動との関連を強調するだけでなく、1960、70年代の政治的世界にヘルダーリンを巻き込んでいくものだった。それは同時に、ナチス時代にヘルダーリンの政治利用に加担した過去を清算することなく、詩的世界を現実から切り離して自己保身を続けてきた文学研究の権威ないし伝統への挑戦であり、ヘルダーリンを専門家の閉じられた世界からアクチュアルな現実へ向けて解放しようという挑発でもあった。

ザトラーのフランクフルト版はまさにこうしたことを学術編集の領域で行おうとするものだったと言える。この領域における権威に相当するのは、ナチス時代に国家的な支援を受けてスタートしたフリードリヒ・バイスナー編集のシュトゥットガルト版全集である。ザトラーは、確固たる評価を受けていたこの全集版を名指して批判し、その対案としてフランクフルト版を提示したのである。

2

それではフランクフルト版はどのような理念に基づいて、いかなる編集システムを構築したのか。本章ではこの点を、とくにフランクフルト版のスタート時に焦点を当てて明らかにしていく。

彼が1976年にヘルダーリン協会で行った講演をもとにした論考「ヘルダーリン・フランクフルト版——その編集原理と編集モデル」は、アヴァンギャルドの綱領文めいた断章形式で書かれている。そこでザトラーは、「あらゆる形式のテキスト選定を認めない」と宣言する⁹。それは、仮想敵であるバイスナーの編集方針が、ザトラーの理解するところでは「テキスト選定の原理」に従っていることを意味する。つまり未完のまま残されたテキストが美的基準によって調整され、完成された作品の形に限界まで近づけられる。そこから漏れたテキストは、脇に追いやられる。その結果、読解用のレーゼテキストと異文 (Lesetext und Lesart)、テキストと資料篇 (Text und Apparat) のような形で正副、高低、上下の価値づけを含んだ提示方法に行き着く。ザトラーはこのことを「テキスト選定」だと批判するのである。とくに問題視されるのは、編集者が読者の目の届かない場所で選定を行って、処理済みの結果だけ提示している点だ。なぜなら、直接アーカイヴに赴いて資料を確認するなどしない限り、読者は編集者を正当に批判する方法を持たないのであり、編集者と読者の間に不公正な（とザトラーが見る）関係が構造的に生まれてしまうからである。

これに対してザトラーが持ち出す編集モデルが、ドキュメント部とエディション部の二部構成であり、何より大きな衝撃を与え、フランクフルト版の代名詞のようになったのが、ドキュメント部で取行されたファクシミリによる手稿の視覚的再現と、難読をきわ

⁸ 例えば Bertaux (1969) を参照。

⁹ Sattler (1975/77), S. 116.

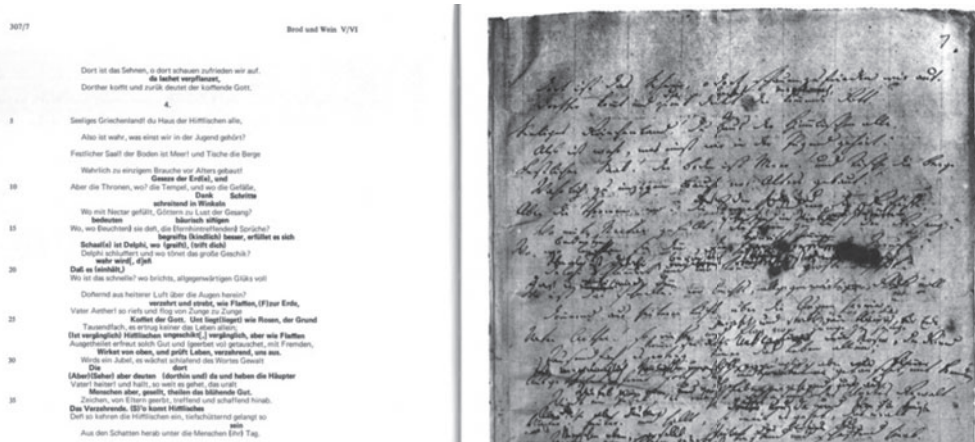


図1 FA6, S. 226f. より

エレギー「パンとぶどう酒」のドキュメント版。右がファクシミリで、左のページで書き起こしが行われている。左上の307/7は手稿の資料番号。太字で書かれているのが、後に書き加えられた言葉であることを示している。

める手稿の文字起こしである。とくに後者の文字起こしは、一枚の紙に時期も順序も着想もばらばらに書きつけるヘルダーリンの草稿を、インクの種類などから詳細に分析し字体や字の太さを細かく分けて表記し、当時最新の植字技術を取り入れて字の位置を正確に再現することで、手稿の写實的転写を可能にするという驚くべきものだった(図1)。これは今まで密室で処理されていたリソースが公開され、透明な存在になりおおせていた編集者の特権的な立場が切り崩されたことを意味する。編集者は今や自らの判断の主観性が可視化されうる場所に引き下ろされたのだ。一方で読者は、編集者への批判が可能となる素材を与えられたことで、自らで編集を行う可能性すら獲得したことになる。「編集者は読者以上でも以下でもない」¹⁰というザトラーの言葉は、ドキュメント部の編集方法の論理的帰結である。編集者の権威が批判され、読者に批判的自立の可能性が与えられるのだ。

またこのドキュメント部は、編集の素材提供としてだけでなく、テキストの構成部としてそれ自体独立した価値を持っている。というのも、エディション部が生成論的な観点からのテキストの時間的再構成を目指すとするれば、ドキュメント部はテキストの空間的表現を提示するのであり、テキストの豊かな可能性をより原初的な形で提示することになると考えられるからだ。それゆえザトラーは、ドキュメント部のテキストを、「いくつもの出口を持つ可能性の迷宮」と表現する。この時エディション部のテキストは、多くある可能性のうちの一つの例、すなわち「一本の導きの糸」にすぎない¹¹。アリアドネの糸を一本だと考えてはならない、というのがヘルダーリンのテキスト編集の鉄則なのである。

¹⁰ Ebd., S. 119.

¹¹ Ebd., S. 120.

ドキュメント部に続くエディション部では、書き起こされたテキストからさらにテキスト構成が行われる。その際も、伝統的なテキスト・資料篇モデルを廃して、新しいモデルによってテキストを提示していく。その発想の根幹を見るために、フランクフルト版の第1巻に掲げられたエピグラフに注目してみたい。主にヘルダーリンの最初期の詩を集めた第1巻は1995年と比較的後の方に編集されたが、第1巻の冒頭という場所が重要であることに変わりはない。ザトラーはここに、ヘルダーリンの「オークの木々」(*Eichbäume*)の詩の一節を載せている。

O daß mir nie nicht altere, daß der Freuden
daß der Gedanken unter den Menschen, der Lebens-
zeichen keins mir unwerth werde, daß ich seiner mich schämte,
denn alle brauchet das Herz, damit es Unaus-
sprechliches nenne.

Stuttgarter Foliobuch, p. 8

ああ何も古びないように。喜びも
人々が交わす思いも、生の
しるしも、価値のないものなどない。それを恥じたりしまい。
なぜなら心はそのすべてを必要とするから。いわく
言いがたいものを名づけるために。

シュトゥットガルト・フォリオノート、8ページ

これはヘルダーリンが詩作において、いかなる対象も「価値のないものなどない」、詩作は「そのすべてを必要とする」という認識を語る詩句だ。ザトラーはこれをフランクフルト版の理念と照応するものだと暗示する。すなわち、ヘルダーリンの残したテキストに「価値のないものなどない」、すべてを優劣つけずに提示するのが根本理念だというわけである。加えて重要なのが、この詩句がシュトゥットガルト版ではテキストの部分ではなく、異文の片隅に収録されていることだ¹²。つまり今までは暗に価値の劣るもの、正統なテキストに対して副次的なものだとされてきた、少なくともそのような場所に置かれてきたテキストを、フランクフルト版はフェアに提示するのだという意図が込められているのである。

それでは具体的にどのような方策が取られるのか。それはまず完成されたレーゼテキストを最初に置くのではなく、直線的テキスト提示 (Lineare Textdarstellung) というテキストの形成過程を可視化する部分が最初に来て、その後レーゼテキストが来るという段階的構成である。先ほど図1で提示した箇所直線的テキスト提示が図2である。

¹² StA 1.2, S. 502.

見ての通り視覚的に一直線というわけではない。この linear (線的、直線的) に込められた意図は、おそらく空間的に厳密に再現されていたドキュメント部のテキストが、行ごとの線的な並びのなかに置き換えられ、修正された語が詩行のどの部分に入るのか分析されていること、そして書き加えられた順番が視覚的に分かるような時系列的発想に貫かれていることだと思われる。いずれにせよ、この方法によってレーゼテキストにいたるテキスト形成の過程までもが可視化されることになる。

このような線的構成は、結局のところ一つの完成したテキストを到達点とする目的論的発想があるという点で、ザトラーが批判したはずのシュトットガルト版と同じ轍を踏んでいるのではないかという批判もある¹³。こうした問題点についてはザトラーも自覚的だったようで、レーゼテキストが完成したものとして評価されることのないよう注意を促している。レーゼテキストが提示されるのは、あくまでヘルダーリンが清書をした後に改訂を行っていない場合や、印刷されたものがある場合などに限られるのであって¹⁴、そこまで至る過程が可視化された形で表示されていることが重要なのである。またできる限り一つの作品へと収束させようとするシュトットガルト版に対して、フランクフルト版ではテキスト形成の過程で、状況や場合に応じて非改訂テキスト、改訂テキスト、別テキスト、構成テキスト (unemendierete, emendierete, differenzierte, konstituierte Texte) など、さまざまな段階へとテキストが差異化される。これらのテキストはヘルダーリンによって書き加えられた部分以外の箇所も補完して構成される結果、重複するテキストが何度も提示されることになり、収録されるテキストの絶対量が増大する。このような事態について、ザトラーは以下のように述べる。

この版の特色は、多層的で込み入ったオーデの成立史の編集においてとくに明らかになる。可能な限り、テキストの各段階は、独立するものとして表現し、異文に解消しなかった。量的増大と質的増大は一致する——このことは、他のところでは議論の余地があろうとも、ここでは否定しようがないことだ。なぜならテキストの外延が、テキストが自らへといたる運動をあとづけ、その追体験を可能にし、詩の周辺ではなく中心に来るからである。¹⁵

一般的な編集が、掲載にふさわしいものを選定する点で、テキストの量的減少を編集の質的向上と見なすのだとすれば、フランクフルト版は逆に、テキストを量的に増大させることを質的向上と見なす。そしてさらに、一個の完成したテキストとそこから弾かれた異文という形ではなく、各段階のテキストを独立したものとして表現することで、テキストがダイナミックに生成していく過程をたどれるようになるのである¹⁶。

こうしたザトラーの編集方針は、完成した作品の提示をモデルとする静的なテキスト

¹³ Burdorf (1993), S. 182.

¹⁴ Sattler (1975/77), S. 127.

¹⁵ FA4, S. 11.

¹⁶ ここにはいわゆるフランス現代思想が提示したテキストやエクリチュールに関する新しい発想と通じるものがあるという考察もある。Vgl. Wackwitz (1990).

	Fortsetzung recto.		307/7
	Dorther kommt und zurück deutet	der kommende Gott.	3
54		da lachtet verpflanzet, []	2
55-58	wie V		4-8
	Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo	die Gefäße,	10
	¹ Geseze der Erde		9
59		² , und Schritte [.]	9,11
	Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der	Gesang?	13
		¹ Dank	11
60		² schreitend in Winkeln	12
	Schritte vmtl. im Hinblick auf schreitend in Winkeln irrtümlich unter statt über Gefäße.		
	Wo, wo leuchten sie denn, die fernhinterfendenden Sprüche?		15
61	bedeuten ↑	bäurisch sinnigen	14
	Delphi schlummert und wo tönet	das große Geschik?	18
	¹ Schaale		17
	² ist Delphi, wo greift, trifft dich		17
		³ begreifts kindlich	16
62		[.] ⁴ besser, erfüllet es sich	16
	Wo ist das schnelle?	wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll	21
	¹ Daß es einhält,		20
63		² wahr wird, denn	19
64	Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?		22
	Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge		24
	¹ verzehrt und strebt, wie Flammen, F		23
65		² zur Erde,	23
	Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;		26
		¹ liegt wie Rosen, der Grund	25
	² Kommet der Gott. Unt liegt		25
66		[k]	
	Mglw. disponiert die Schreibung Kommet eine Umstellung:		
66a	Kommet der Gott, tausendfach. Unt liegt wie Rosen, der Grund		
	Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,		28
	¹ Ist vergänglich		27
67	² Himmlichen ungeschikt, vergänglich, aber wie Flammen		27
	Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt		30
68	Wirket von oben, und prüft Leben, verzehrend, uns aus.		29
	Vater! heiter! und halt, so weit es gehet, das uralt		33
	¹ Aber Seher		32
	² Die aber deuten dorthin und		31,32
		³	32
69		⁴ dort [und] da und heben die Häupter	31,32
	Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab.		35
70	Menschen aber, gesellt, theilen das blühende Gut.		34
	Denn so kehren die Himmlichen ein	, tiefschütternd gelangt so	37
71	Das Verzehrende. So kom[m]t Himmliches		36
	Vgl. Heimkunft VI v. 78, 79. Mglw. disponiert eine Streichung in So unausgeführte Änderungen.		
72	Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag.		39
		sein	38

図2 FA6, S. 252f. より

図3の部分に該当する直線的テキスト提示の部分。書き起こされた文字が、詩業のどの部分に入るのかが記されている。右の列の数字は、下線の引かれた307/7が手稿の資料番号、それ以下が手稿内の行数である。左の列の数字は、作品全体における行数を示している。

観に対して、生成過程を捉えようとする動的なテキスト観が台頭していた当時の編集文献学研究を参照するものでもあった¹⁷。この生成論的関心は、フランクフルト版の編集理念の柱の一つである。つまり、テキストがどのような順番で形成されたのか、徹底的に時系列のレベルで明らかにしようとする。ザトラーが全集各巻の導入でよく用いる表現を使えば、一字一句、時系列で、生成論的に (buchstäblich, chronologisch, genetisch) テキストの形成過程を追求するのである。ここで詳細な例を挙げることはできないが、テキストの書かれた年代に関して、フランクフルト版はきわめて多くの新説を提唱しており、有力な意見として受け取られている。ザトラーにとって史的批判版の理想は、テキストが書かれた順番を一字一句、時系列で、生成論的に再現することだったのだ。

3

以上のような編集が行われた前代未聞の全集は、伝統的権威の批判を目指す学術潮流、ドキュメント部を可能にした印刷技術、最新のテキスト概念などが集約された、まさに時代が求める全集だったと言える。それゆえ大きな衝撃を持って受け止められ、ローター・シュテルン社はこの成功を機に、ハインリヒ・フォン・クライスト、ゴットフリート・ケラー、フランツ・カフカ、ゲオルク・トラークルといった作家たちのファクシミリ版全集を出版する、学術編集の分野で独自の存在感を放つ出版社へと成長していくことになった。なお、1979年からローター・シュテルン社は、ヘルダーリンに由来する言葉であるシュトレームフェルト (Stroemfeld) を社名に用いるようになる。

またフランクフルト版全集は、ヘルダーリン研究の展開にも多大な貢献を果たすことになった。例えば、戦後を代表するヘルダーリン研究の著作を残したペーター・ソンディが「詩の展開過程の分析」、あるいは——アドルノの言葉を引きつつ——「作品の産出状態の論理」¹⁸の追求が、方法論として求められていると主張するなど、ヘルダーリンがテキストをどのように書き換えたかという改訂過程を重視する研究が求められていた。こうした研究に、ザトラーの全集がうってつけであることは言うまでもないだろう。フランクフルト版は、ヘルダーリンがアクチュアルな詩人として関心が高まる時代状況に呼応して、読者をヘルダーリンのテキストに近づけ¹⁹、さらに70、80年代に大きく転回するヘルダーリン研究の動向を、力強く後押しする役割を果たすことになったのである。

フランクフルト版全集は、古典韻律に範を取ったジャンルであるエレギーやオーデ、詩学論文、多くの草稿を含む小説『ヒューリオン』や悲劇『エンペドクレスの死』などの巻を順調に重ねていった。70年代は毎年、80年代もせいぜい一年間空けるだけというペースで計画は進んだ。しかしフランクフルト版の編集理念は、未完の作品を多く残し、一度完成した作品ですらいく度も修正を加えていくヘルダーリンの執筆スタイルのためにこそ考案されたものであって、その代表的なテキストの大半を擁する第7、8

¹⁷ 例えばザトラーは、Martens / Zeller (1971) に依拠している。

¹⁸ Szondi (2011), S. 286.

¹⁹ Vgl. Hoffmann / Zils (2005), S. 225.

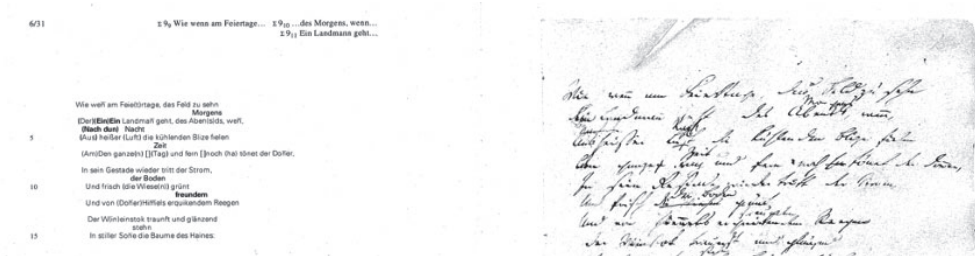


図3 FA7, S. 102より

右が手稿のファクシミリ、左が文字起こしである。左上にある6/31は手稿の資料番号。その横にある $\Sigma 9$ Wie wenn am Feiertage... / $\Sigma 10$...des Morgens, wenn... / $\Sigma 11$ Ein Landmann geht... がセグメントの識別ナンバーである。 ΣX という記号によって、まずはセグメントを識別し、 ΣX_x によってセグメントの生成過程に順序づけがなされている。この手稿には一つのセグメントにおいて3つの生成論的要素が含まれており、それがエディション部において、テキストとして形成されていくことになる。

巻の出版は、2000年まで待たなくてはならなかった。ところがすでに述べた通り、フランクフルト版の集大成であるべきこれらの巻——第7巻がドキュメント部、第8巻がエディション部となっている——は、その理念をつきつめたものでありながら、あるいはそうであるがゆえに、史的批判版全集として無視できない欠点を抱えるものになってしまった。

ザトラーは当初から概念の明確な定義づけや、論の緻密な構築を拒むタイプの文章の書き手ではあったものの、2000年前後にはそれが尋常ではない域に達するようになる。小文字で表記し、ドイツ語の特殊文字もピリオドも用いない奇天烈なスタイルもさることながら、「巫女の神託めいた不可解な文体と大仰なレトリック」²⁰と言われるほど理解を拒絶するような文章を書くようになるのである。

こうしたなかで第7、8巻に導入されたのがセグメント (Segment) というテキストの単位区分と、それを識別するシグマ (Σ) の記号である (図3)。ドキュメント部の文字起こしのページの上に、数字の振られたシグマ記号と冒頭の詩句が記され、その手稿にどのテキストセグメントが含まれているのかが表示されるのである。

このセグメントという単位について、ザトラーはほとんど明確な定義づけをしていない²¹。しかしその意図は明らかで、当初からの動機である「テキスト選定の拒否」を徹底することに他ならない。例えば、後期詩『パトモス』には、清書稿、出版稿、後の改稿などさまざまな種類のテキストが存在するが、ザトラーはそれを全ていっしょくたにセグメントという単位に統合した上で、例えば清書稿は $\Sigma 24_{15}$ 、 $\Sigma 24_{16}$ 、出版稿は Σ

²⁰ George (2000/01), S. 351.

²¹ 用語自体は、「テキストセグメント (Textsegment)」という形で70年代の論考にも見られるものの、ここでも明確な定義を示していない。Vgl. Sattler (1975/77), S. 118.

24₁₈、後の改稿はΣ150、Σ152などとする。ヘルダーリン自身がつけたタイトルよりもセグメントという単位が上位区分である。当初はエディション部の最終段階に置かれていたレーゼテキストすら取り払われて、全てがセグメントとして抽象的な平等性が貫徹されるのである。

このセグメント・システムは、ヘルダーリンのテキストの形成過程を他のどの全集版よりも詳細に伝え、テキストと資料篇の区分をラディカルな形で無効化しているのは間違いない。しかし抽象的平等化とそのなかでの生成論的再現をつきつめていった結果、このフランクフルト版は、学術版全集として恐ろしく扱いにくいものになってしまった。まず各セグメントの配列は、おおむねシグマ記号の番号順になっているものの、その数字が前後するという事態が頻繁に起こる。例えばΣ30～Σ32の後にΣ24₁₄～Σ24₁₈が来る。続いてΣ197、Σ198が来る。その次はΣ34、Σ35…という具合でまったく見通しがきかない。実際に読んでいくと、ΣX₁というセグメントの始まりがどこで、ΣX_xはどこまで続くのか判断するのが実質不可能なため、何度も索引を見て、ばらばらのピースをかき集めるようにして、セグメントを讀んでいかなければならない。これはかなり骨が折れる作業であり、少なくとも読解の集中力を削がれる工程である。

このセグメントは独特な単位である。それは基本的にヘルダーリンが筆を加えた箇所を起点に生成するのだが、その際しばしば部分的な提示で途切れて、ΣX_xからΣX_yへ移行する。またΣX_zは出版稿に相当し、作品全体のテキストが提示されたりする。もちろんセグメントの範囲や、番号が切り替わる理由は明らかにされない。またセグメントの配列順序も謎めいている。基本的にはヘルダーリンが執筆した順番という時系列的再現を目指している、とは言えるだろう。しかしセグメントはすでに述べた通り、ヘルダーリンが新たに書き加えた箇所だけではなく、以前のセグメントですでに書いていた箇所、またヘルダーリンの手を離れた出版稿なども再現している。それゆえこのセグメントの順序は、完全な時系列とは異なる秩序を持っていることになる。実際、ザトラーはフランクフルト版の最後である「時系列統合エディション」と題する第20巻で、詩も小説も手紙もあらゆるテキストを一括して時系列で示す年表を作成したが、これを第7、8巻のセグメントと関連づけることはしなかった。そしてさらに読者を困惑させるのが、この第20巻で導入されている作品セグメント (Werksegment) という区分である。ここでは総合目録のために、詩や小説、戯曲に作品記号 (w) が付され、ナンバリングが施されている。そしてその下位区分に作品セグメントが置かれるのだ。再び『パトモス』を例に取れば、作品番号はw244、作品セグメントはw244-1からw244-8:13までである。これが数的に第7、8巻のセグメントの数と合わないことも問題だが、それだけではない。この作品セグメントは、概念的にも第7、8巻のセグメント概念と対立するのである。ザトラーのなかで第7、8巻が出版された2000年から、第20巻の2008年までに心変わりが生じたのか、あるいは両概念を共存可能にする発想があったのかどうかは不明だが、いずれにせよセグメントと作品セグメントの間の対応関係は明示されていない。ゆうに500を越す第7、8巻のセグメントが一体どういう規則で並んでいるのか。このテキスト・モンタージュを苦勞して読み解いたとしても、ヘルダーリンの理解にたどりつ

くのではなく、単にザトラーの隠された編集意図を垣間見るにすぎないのではないか²²。あまりに複雑なセグメント・システムは、フランクフルト版の柱の一つであったはずの透明性の原理を打ち消してしまうのである。

このセグメントの概念において、同時に考慮されねばならないのは、第7、8巻のタイトルにもなっている „gesänge“ である。これは「歌」を意味するドイツ語 Gesänge から来ているが、フランクフルト版のタイトルのなかで唯一頭文字が小文字になっており、特別な巻であることが窺われる。ただしヘルダーリンの後期詩を、この「歌」において区分するという発想自体は、シュトゥットガルト版に由来する。シュトゥットガルト版では、エレギーでもオーデでもない自由韻律の詩のために、ヘルダーリン自身が詩のなかで言及する「歌」という言葉、そしてとりわけ1803年12月のフリードリヒ・ヴィルマンス宛の書簡のなかで用いた表現に基づいて²³、「祖国の歌」(Die vaterländischen Gesänge) という区分が設けられている。ザトラーの „gesänge“ は、ここから「祖国の」という形容詞を取り去ることで、ナチス時代に喧伝された愛国詩人のイメージから距離を取るものだと、まずは理解できよう。しかしザトラーは、この „gesänge“ にも特別な意味を持たせているように思われる。

第7、8巻に収められたテキストは、ザトラーによれば「統合的な歌のコーパス」を指し示しているという²⁴。すなわちザトラーが編み出したセグメントは、「統合的な歌」という全体性を前提とする概念なのである。しかしヘルダーリンがただ一つの「歌」を詩作していたという発想は、ハイデガーの「あらゆる偉大な詩人は、ただ一つの詩から詩作を行う」²⁵という有名な言葉にも似て、ある種の箴言的な洞察力はあるものの、それ自体に根拠はなく、編集の指針とするにはいささか神秘的にすぎる。

さらに不可解なのが、ザトラーが „gesänge“ をめぐって24に関わる数字に執拗なこだわりを見せている点である。例えばザトラーは、第7、8巻の「統合的な歌」たる全セグメントに、ひそかに24の内的区分を設けている。その理由ははっきり説明されていないと思われるが、一つ理由として考えられるのが、ザトラーが独自に主張している「西洋の歌」(hesperische Gesänge) という „gesänge“ とは別種の構成原理を持つ作品区分である。これもザトラーがほとんど説明なしに用いている用語の一つだが、その内実としては、12の「歌」からなり、それが「二重の歌」(Doppelgesang) として、表と裏のようなペアとしてヘルダーリンが構想していたのだという²⁶。実際、フランクフルト版の第20巻では、この「西洋の歌」が、 α バージョンの12の歌、 β バージョンの12の歌、という形で収録されている。第7、8巻の „gesänge“ は「西洋の歌」を含むより大きな区分であるものの、全セグメントを24に分けるといふ不可解な行為は、この辺りの事情

22 ヴォルフラム・グロデックはこのような事態をさして、「見るも無惨なテキストモンタージュ」、「編集権の乱用」という厳しいコメントを行なっている。Groddeck et al. (2003), S. 10.

23 Vgl. StA6, S. 436.

24 FA8, S. 535.

25 Martin Heidegger: Gesamtausgabe. Hrsg. von Friedrich-Wilhelm von Hermann u. a. Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 1975ff., Band 12, S. 33.

26 FA8, S. 537.

と絡んでいるのだと考えられる²⁷。

こうした発想に含まれるザトラーの考え、すなわちヘルダーリンの詩作にはある種二つの方向性があり、それがさまざまな作品で「二重の歌」という形に結実するという考えは、十分に検討に値する刺激的な「解釈」である。しかし史的批判版の「編集」の原理とするには、あまりに曖昧であり、唐突であり、何より十分な説明や論証が欠如していると言わざるを得ない。

4

以上のようにザトラーのセグメント・システムは、フランクフルト版の到達点でありながら、最後には理念としての一貫性が失われ、編集方法の不透明さと不可解さを招来することになった。確かにこうした問題はフランクフルト版の最終段階に至って顕在化した。しかしその根本はすでに出発点に存在していたと言える。

一つはザトラーの非学術的とも言えるスタンスである。ザトラーは1970年代の論考でテキストセグメントについて言及した際に、シュトゥットガルト版のバイスナーが異文や断片へと「切断」したものを、むしろ「結合」することを宣言していた。客観的な根拠がないために断片として編集すべき場合でも、ザトラーは「結合」によって新しいテキストセグメントを生み出す方針を示していたのである²⁸。

その点で、フランクフルト版の特徴として挙げられる「透明性」は²⁹、必ずしも編集の客観性、明証性、合理性を意味するものではない。むしろ編集の主観性が読者に対して可視化されているということが、ザトラーにとっての透明性だった。編集者は存在論的にすでに主観的解釈者なのであって、その解釈が妥当かどうかの検証は、フランクフルト版の読者に課された義務なのである。

こうした観点からフランクフルト版全集を振り返ってみると、最も過大だったのは、読者への要求だったように思われる。ザトラーは仲介者としての編集者が、読者から余計な負担を取り除くような編集、あらかじめ読むべきテキストを厳選して読者に供するような編集を、時代遅れのものとみなしていた。あらゆる権威や伝統に対して批判的に思考する市民のように、粘り強くテキストを読む訓練を積み、編集者と同じ地平で解釈を繰り広げる自律的読者を、ザトラーは期待していた。このような読者への高すぎる要求が、読者から不可視の場所で行っているのと変わらないほど複雑な解釈的編集へと至らせてしまったのだろう。

このような結果は、ザトラーがかつてシュトゥットガルト版全集に差し向けていた批判に、自らが刺されたような感がある。ザトラーはシュトゥットガルト版によるヘルダーリン・イメージの歪曲やごまかしを正すと主張したが、最後には神秘主義すら匂わせる独自の解釈を埋め込んだテキスト群という新しい謎を生み出す結果になってしまった

²⁷ この点についてグロデックは、セグメントがΣ 288 までであることも関連付け、最終的にヨハネの黙示録の 144 千人の義人という宗教的な数字と関わりがあるのではないかと推察している。Vgl. Groddeck et al. (2003), S. 16.

²⁸ Sattler (1975/77), S. 118.

²⁹ Vgl. Plachta (2020), S. 172.

からだ。しかしたとえそうだとした場合、フランクフルト版の歴史的功績は、なおも高く評価されねばならない。まずファクシミリによる再現と書き起こしを貫徹したドキュメント部の資料価値は恒久的である。また手稿からテキストが形成される過程を生成論的に提示するという理念は、ヘルダーリンのデジタル・アーカイヴにおいて、より現代的な技術的前提のもとで実装されつつある³⁰。こうした文献資料の提示方法を開拓したこと、また他のファクシミリ版全集の出版に先鞭を付けたことについても、歴史的に大きな功績が認められるべきだろう。またフランクフルト版全集の存在が、ヘルダーリンが20世紀の学術潮流の最前線にいることを印象付ける大きな要素であり続けたことも付け加えておこう。

またエディション部の「解釈」についても、ザトラー関係の資料が今後まとめられることで、より良い形で理解される可能性もあるだろう。例えば「二重の歌」のテーゼは、今のところほとんど議論されていないと思われるが、ヘルダーリンの詩に対して新しい視座を開く可能性のあるユニークな主張であることは間違いない。

しかしフランクフルト版全集の成功と失敗を引き継いでいく道は、他にもあるように思われる。それはザトラーが結果的に隠すような格好になってしまった編集過程における「解釈」を、透明化ないし可視化する方向である。つまりザトラーが読者に開いた「編集」の場だけでなく、注釈等を充実させることを通じて「解釈」の場をも開くことを目指すのである。このような全集版は、むしろ邦訳のヘルダーリン全集に求められているかもしれない。1960年代に手塚富雄らによって訳された河出書房社版『ヘルダーリン全集』は、時代的に当然ながらシュトゥットガルト版に依拠している。そしてそれは、必要最低限の注釈を下段に付し、翻訳の文体は、モダニズム文学にも通じるヘルダーリンの詩的言語についてほぼ考慮せず、ヘルダーリンがどのような意図でその詩句を書いたのかを忠実に読み再現するものになっている。この功績の大きさについては改めて述べるまでもないが、その後のヘルダーリン研究によって進んだ理解の水準からすれば、ある種の偏りや不足が目立つのも事実である。それに対して新しい邦訳の全集版は、今までの研究成果を編集や翻訳のなかに説明のないまま結晶化させることを目指すのではなく、むしろ読者を研究の現場、解釈の現場に引き込むような方法が試されるべきではないか。それは例えば、ヘルダーリンの受容史や研究史を踏まえた詳細で的確な注釈の実現によって可能になるのではないか。もちろんこれは一案にすぎない。しかしフランクフルト版の成果を、その失敗した部分を含め引き継いでいくことが、学術編集においてきわめて重要な課題であることは間違いない。

³⁰ Vgl. <https://homburgfolio.wlb-stuttgart.de/> (Zugang: 28.11.2023)

参考文献リスト

- Bertaux, Pierre: *Hölderlin und die Französische Revolution*. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1969.
- Biener, Berhard: Wenn Hölderlin zum Teil der Familie wird. In: *FAZ.NET*, am 20.03.2021: <https://www.faz.net/aktuell/rhein-main/region-und-hessen/editionsarchiv-von-d-e-sattler-ist-nun-zugaenglich-17250434.html> (Zugang 28.11.2023)
- Burdorf, Dieter: Edition zwischen Gesellschaftskritik und ›Neuer Mythologie‹. Zur ›Frankfurter Hölderlin Ausgabe‹. In: *Hölderlin Entdecken. Lesarten 1826-1993*. Hrsg. von Volke, Werner / Pieger, Bruno / Kahlefeldt, Nils / Burdorf, Dieter. Tübingen (Hölderlin Gesellschaft) 1993, S. 164-195.
- George, Emery E.: Das Tao der Unübersichtlichkeit. Über die Bände 7/8 (gesänge I, II) der Frankfurter Hölderlin-Ausgabe. In: *Hölderlin-Jahrbuch 32* (2000/01), S. 345-365.
- Groddeck, Wolfram / Martens, Gunter / Reuß, Roland / Staengle, Peter: Gespräch über die Bände 7 & 8 der Frankfurter Hölderlin-Ausgabe. In: *TEXT 8* (2003), S. 1-55.
- Hoffmann, Dierk O. / Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Nutt-Kofoth, Rüdiger und Plachta, Bodo (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 2005, S. 199-245.
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe*. Hrsg. von Friedrich Beißner. Stuttgart (W. Kohlhammer) 1943-1985. [StA]
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von D. E. Sattler u. a. Frankfurt am Main (Stroemfeld/Roter Stern) 1975ff. [FA]
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Jochen Schmidt. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1992-94.
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Michael Knaupp. München (C. Hanser) 1992f.
- Martens, Gunter / Zeller, Hans (Hrsg.): *Texte und Varianten. Probleme ihrer Edition und Interpretation*. München (C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung) 1971.
- Müller, Ralf: Gesänge I+II. In: *Deutschlandfunk*, am 12. 08. 2001: <https://www.deutschlandfunk.de/gesaenge-i-ii-100.html> (Zugang: 28.11.2023)
- Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*. Stuttgart (Anton Hierseemann) 2020.
- Sattler, D. E.: Friedrich Hölderlin 'Frankfurter Ausgabe'. Editionsprinzipien und Editionsmodell. In: *HjB 19/20* (1975/77), S. 112-130.
- Szondi, Peter: Hölderlin-Studien. Mit einem Traktat über philologische Erkenntnis [1967]. In: Ders.: *Schriften I*. Berlin (Suhrkamp) 2011, S. 261-412.
- Wackwitz, Stephan: Text als Mythos. Zur Frankfurter Hölderlin-Ausgabe und ihrer Rezeption. In: *Merkur 492* (1990), S. 134-143.

Critical Analysis of the Frankfurt Historical-Critical Edition of Hölderlin's Complete Works: Unveiling Methodological Challenges and Historical Significance

Toshiro EKI

This scholarly review critically examines the Historical-Critical Edition of the Complete Works of Friedrich Hölderlin, edited by D. E. Sattler (commonly known as Frankfurter Ausgabe). Reflecting the socio-cultural zeitgeist of 1960s West German society, the edition combines a critique of traditional authority, innovative printing technology enabling facsimile documentation, and the latest concept of generative text. While liberating the act of editing and influencing textual scholarship history, the edition's impact on Hölderlin studies is substantial. Nevertheless, the advent of Volumes 7 and 8 (gesänge I and II) in the 2000s unveils methodological problems within Sattler's edition. These include an excessively complex segment system, arbitrary interpretive editing, an editorial principle devoid of scholarly rigor, and too high a demand on the reader. Despite these challenges, the Frankfurt edition remains a historical achievement, prompting a future need for editorial strategies, such as detailed annotations, to uncover concealed interpretive layers and enhance accessibility for readers.

ヘルダーリン 学術版編集の可能性

—— シュミット版、クナウプ版、レイタニ版

矢羽々崇

1. 4つの史的批判版の後に

20世紀の4つの史的批判版をもって、フリードリヒ・ヘルダーリン（1770-1843）の残した手稿や作品の諸段階やその読みが相当程度まで確定した。その大きな流れをまとめると、ヘルダーリンそのものを世に広めるため、あるいは作品を作家自身の意図に基づいて再現しようとする初期の段階（ヘリングラートとツィンカーナーゲル）から、「史的批判版」の一つの規範ともなったバイスナー版（いわゆるシュトットガルト版）の完全性を求める段階、そして編者の手が入る前の生成段階そのものを記録し、各作品がもつ多様な稿を多様なままに提示しようとするザトラー版（いわゆるフランクフルト版）の段階へと変化してきた。

そのなかでも特に、おおよそ1800～1806年頃に成立した後期詩と呼ばれる作品群においては、「完成」した「作品」という考えにとらわれないザトラーらの編集思想が、現在のヘルダーリン研究において非常に重要な意味を持つ。これら作品群においては、発表されることなく手稿としてのみ残されている詩、雑誌などに発表された後でもさらに改稿された詩などが、まだまだ新たな読みの可能性をはらんでいると言える。

これら4つの史的批判版があること、特に手稿の写真版がザトラー版で完備し、かつその読みについて編者それぞれが異説を提起していることで、ヘルダーリンにおいては史的批判版を出す必要性は、しばらくの間不必要になったと考えてよいだろう。むしろ、ヘルダーリンを最新の学術的な成果とともに一般の読者層に届けることが重要となった。

これから論じる3つの版はおおよそ1990年代から2000年代のはじめにかけて出版されており、いずれもザトラー版の完結前に出版されている。しかし、後期詩を扱ったバイスナー版第2巻の出版（1951年）からはほぼ半世紀の時間が経過し、その間の研究成果も反映する一般読者向けの「普及版（Leseausgabe）」や「研究版（Studienausgabe）」が望まれていた。

ドイツの編集文献学をリードしてきたボード・プラハタの定義によれば、「研究版」とは、史的批判版がある作家の場合、その成果を前提として、「より広い読者層に批判的に検討されたテキストを（たいていの場合ヴァリエーションの提示なしに）提示し、成立に関する情報やテキスト理解のための情報が補われた」版である¹。とはいえ、以下の諸版を検討すると、この一般的には妥当するはずの定義とは若干異なる興味深い諸事実も明らかになる。最近のヘルダーリンの研究版は、史的批判版に基づいた単なるダイジェスト版に終わるものではない。むしろ新たな可能性を開拓している。これら新たな研究版は、特に日本語への翻訳を考慮に入れるとき、重要な示唆を与える。

¹ Bodo Plachta (2020), *Editionswissenschaft. Handbuch zur Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*, Stuttgart (Hiersemann), S. 231.

2. それぞれの研究版の比較 — 「あたかも祭りの日のごとくに… (Wie wenn am Feiertage …)」を例に

今回は研究版のうちで(a)ヨッヘン・シュミットの版(1992-94)、(b)ミヒャエル・クナウプの版(1992-93)、そして(c)ルイジ・レイタニのイタリア語全詩集の版(2001)を検討する²。この3つの版は、それぞれの特徴が際立つ。ヨッヘン・シュミットの版は、「成立に関する情報やテキスト理解のための情報」の充実度が抜群であり、ミヒャエル・クナウプとルイジ・レイタニの版は、「研究版」についてのプラハタの定義に反して、「ヴァリエーションの提示なし」ではなく、積極的にヴァリエーションを提示している点が大きな特徴となっている。それぞれヘルダーリンの「著作集、作品集」を謳い、さらには手紙や場合によっては関連資料も収録されるなど、非常に充実している。また、長編小説『ヒューペリオン』や未完の悲劇『エンペドクレス』、さらには詩論的・哲学的な論文の編集、手紙の配列法など、詳しく検討すべきテーマは多い。また、後期詩の一般向けといえる読みテキストを含む第20巻をもってザトラー版の全集が完結したのは、ようやく2008年になってからであり、ここで紹介する研究版には反映されていないことを付記しておく。

本論ではスペースの関係もあり、抒情詩、本論考では特に「あたかも祭りの日のごとくに…」の名で知られる詩に重点を置いて検討したい。この作品はおおよそ1799～1800年頃に成立したとされ、ヘルダーリンの生前には発表されることなく、「シュトゥットガルト・二つ折りノート(Stuttgarter Folioheft)」に草稿の状態で残されている。ギリシア詩型に範を取った頌歌(Ode)を中心とした中期から、自由形式の後期の讃歌(Hymne)への移行を考えるうえで、非常に重要な作品とされている。ヘルダーリン自らが出版公表にかかわっていない(nicht autorisiert)作品であるが、成立段階が草稿から読み取りやすいことが選択の理由である。

(a) ヨッヘン・シュミットによるヘルダーリン作品集

ヨッヘン・シュミットは、早くからヘルダーリン研究者として名をなし、その広汎な古代ギリシア語や哲学・文学に関する知識を背景に、難解なテキストを哲学史や文化史的な視点から注解することで大きな成果を上げてきていた。この基本的な方向性は、「ドイツ古典作家叢書」シリーズの『ヘルダーリン：作品と手紙』(1992-94)でも見られる。シュミットの関心は、テキストの理解に向けられており、テキストの編集そのものは、彼の師であるフリードリヒ・バイスナーによる史的批判版のテキストを基本的に踏襲している。テキストという点において、特に詩に限って言えば、新味がないと言えるだろう。「シュミットは、自らの師バイスナーの『全体性を目指す完成美学』を分かち合っ

² なお、レイタニの編集翻訳によって、散文・演劇作品や論文、手紙も2019年に出版されている。一人での詩集全訳とは異なり、この本では多くの訳者がかかわっている。

Hölderlin. Prose, teatro e lettere, A cura di Luigi Reitani, traduzione di Mauro Bozzetti, Elisabeth Gut-Bozzetti, Andreina Lavagetto, Cesare Lievi, Adele Netti, Luigi Reitani, Milano (Mondadori) 2019.

ている」³とされている。

その意味で、シュミットのテキスト編集の思想は、ザトラー版のそれとは相容れないものだった。バイスナー版に対する批判で1975年に始まったザトラー版においては、後期詩を対象とする『歌 (Gesänge)』(第7, 8巻)は、2000年までずれ込んだ。そのため、当然のことながらシュミットは参照できなかった。しかし、たとえシュミット版より先にザトラー版が出版されていたとしても、バイスナーを尊重するシュミットの立場からすれば、テキストの「完成」よりも「生成」に重点を置いて、完成したテキストを明確に提示しないザトラーの方向性は受け入れられないものだったろう。詩作品については、バイスナー版テキストは、シュミットにとって不可侵に近いものだったように思われる。作品の配列においても、バイスナー版が踏襲されている。

綴りの表記法の観点から見ると、シュミット版は出版当時の正書法(2000年からさらに新たな正書法が用いられるようになった)に変えられている。これは、ドイツ古典作家出版社(Deutscher Klassiker Verlag)の一貫した方針であるために、シュミット個人の一存では変更できるものではなかったであろう。しかし、ウルリヒ・ガイアーが初期の詩の編集を書評しているなかで書いているように、現代の正書法に直すことで、ヘルダーリンが大切にしていた語源へと遡及しての言葉遣いやシュヴァーベン方言特有の意味が消されてしまっている⁴。

さて、「あたかも祭りの日のごとくに…」は、バイスナー版の配列と同様に「個々の詩型」の最後に置かれている。テキストそのものは、綴りの表記法と42行目の行末にあったピリオドの削除を除けば、バイスナー版の「あたかも祭りの日のごとくに…」と同じである⁵。この手稿だけがテキストとして提示され、残された詩の前段階は、註釈部において註釈で必要とされた範囲のみが紹介されている。

シュミット版の特色は、非常に充実した註釈部にある。これは「ドイツ古典作家叢書」全体の方針でもあったが、他の作家の註釈部と比較しても、明らかに質、量ともに他に抜きん出ている。

「あたかも祭りの日のごとくに…」の註釈部は、12ページに及ぶ。最初に成立およびピンドロスの頌歌(Ode) 伝統の解説が2ページあり、続いて4ページからなる「概括的註釈(Überblickskommentar)」が置かれ、続いて語句注へと続く。特にシュミットが古

³ Stefan Metzger und Johann Kreuzer, Editionen, in: *Hölderlin-Handbuch*, 2. Auflage, Stuttgart (Metzler) 2020, S. 3-16, S. 12.

⁴ Ulrich Gaier, Rezension zu: Hölderlin-Editionen in Hanser- und im Klassiker-Verlag. I. Die Gedichte bis 1800, der Hyperion-Komplex, in: *Hölderlin-Jahrbuch* 29 (1994/95), S. 299-306, hier vgl. S. 299-300.

⁵ なお、3部構成の書評のうち、「I. 1800年までの詩と『ヒュペーリオン』」(S. 299-306)はUlrich Gaierが、「II. 『エンペドクレスの死』と論文」(S. 306-311)はGerhard Kurzが、そして「III. 1800年以降の詩、翻訳」(S. 310-319)はBernhard Böschsteinが、それぞれ書評を担当している。

Friedrich Hölderlin, *Wie wenn am Feiertage ...*, in: *Hölderlin. Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe*, Bd. 2, hrsg. von Friedrich Beißner, Stuttgart (Kohlhammer), 1951, S. 118-120.

当該の箇所は、バイスナー版では „... unter den Völkern. / Des gemeinsamen Geistes Gedanken sind, / “(StA II, 119) であるのが、シュミット版では „... unter den Völkern / Des gemeinsamen Geistes Gedanken sind, / “(S I, 240; S III 661) となる。

代ギリシアの作家・哲学者、さらには近代までの作家などについての広汎な知識を踏まえた文化史・思想史の側面からの詳細な注解が特色と言える。その質の高さに対しては、『ヘルダーリン年鑑』に書評を書いたベルンハルト・ベッセンシュタインから、「目標を見定めて一環して意味を明らかにする、非常に有能な註釈の記念碑」⁶だとする「最高級の賛辞」⁷が贈られている。

その解説の核となるのは、ドイツ観念論哲学的な図式である。この詩であれば、「無意識」の「自然」が、詩人の言葉を通して「意識」そして「精神」へと至る過程として理解される⁸。

かくして自然は、段階から段階へとたどりつつ〔詩節が進むごとに（筆者注）〕精神へと－全なる自然はすべてを包括する精神へと可能態から現実態へと発展する、そのあるべき場は、「詩人の魂」（44行）であり、詩作、「歌（Lied）」（37行）である。（S I, 658）

根底にあるのは、ヘーゲルにも共通する弁証法プロセスであろう。「歌」として完成へと至る自然から精神へのプロセスは、第7節で頂点を迎える。しかし、この「観念論」的説明では、続く第8節で2回繰り返される „weh mir“ という痛みと嘆きの表現が、単なる「自己警告（Selbstwarnung）」（S I, 659）に無害化されてしまう。しかし、詩的主体が自らを「暗闇へと」突き落とされる「偽りの僧侶（de[r] falsche [] Priester）」（S I, 241）と呼ぶとき、もちろんこの部分があまりに断片的であって、拙速な解釈は避けるべきであるにしても、それは警告以上の実在の根源的な危機を歌っているはずである。

67行目の „Doch weh mir“ から始まる箇所については、テキストで空白となっている部分を、「散文稿（Prosafassung）」で補いつつ解説している。「もうひとつの矢（von anderem Pfeile）によって（傷つく）」については、ギリシア神話の知識を踏まえて2つの種類の「アモール」の違いから説明している。「天上の愛」のひとつの矢に対して、「地上の愛」の「もうひとつの矢」と理解できるこの語句は、事情を知る者からはヘルダーリンとズゼッテ・ゴンタルトとの愛と読まれる危険がある。それゆえにこの箇所を抹消したであろうと、シュミットは非常に説得的に論じている（S I, 665-666）。

シュミットの充実した解説は、ヘルダーリンの「世界観」を理解するのに最適であろう。しかし、あまりにシュミット特有の哲学史や思想史からの理解に偏重しているように思われる。実際、ベッセンシュタインも指摘するように、自分の解釈・読みに沿わない事実や解釈、さらには草稿段階の詩句は註釈において顧慮されていない⁹。そのため、

⁶ Bernhard Böschstein, Rezension zu: Hölderlin-Editionen in Hanser- und im Klassiker-Verlag. III. Gedichte nach 1800, Übersetzungen, in: *Hölderlin-Jahrbuch* 29 (1994/95), S. 310-319, S. 319.

⁷ Böschstein, S. 313.

⁸ *Hölderlin. Sämtliche Werke und Briefe*, Drei Bände, hrsg. von Jochen Schmidt, Bd. 1: Gedichte, hrsg. von Jochen Schmidt. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1992, S. 657.

（以下、シュミット版からの引用は、「S I, 657」のようにSおよび巻数、頁数とともに本文中で表記する。）

⁹ Böschstein, S. 314.

読者はシュミットの博識を賛嘆しつつ、作品をシュミットの、すなわち哲学的・思想的に読むことを受け入ざるを得ないことになる。それは、読みの一元に繋がってしまうように思われる。

(b) ミヒャエル・クナウプによる作品集

クナウプの編集による作品集は、ミュンヘンのハンザー出版社から1992-1993年に全3巻で出版された。詩作品はこのうちの第1巻に収録されており、第3巻には主に註釈が収められている。一般には、出版社ハンザーの所在地の名から「ミュンヘン版 (MA)」と呼ばれることが多い。クナウプは、ザトラー版(フランクフルト版)の第4～5巻『頌歌 (Oden)』、第15巻『ピンドロス』および第16巻『ソフォクレス』を編集してきた。その経験からテキスト編集そのものに重点を置いた編集になっている点が、研究版としては大きな特徴である。ページの許す限りでのヴァリアントの提示がなされ、バイスナー版とザトラー版との差異が記録されている。また、ヘルダーリンによる綴りを採用しているのも、シュミット版やヘルダーリン以外の作家の多くの研究版との違いと言える。このようにテキスト編集にページを割いている分だけ、語句註は少なめとなっている。例えば「あたかも祭りの日のごとくに…」では、成立などの解説と語句注は1ページ余りにすぎず、12ページにわたるシュミットの詳細な註釈に比較すると、一般読者にとっては理解の手がかりが少ない版である¹⁰。クナウプが想定しているのは、成熟した読者なのであろう。「理解のための素材を提供することにあるが、しかしながら理解の方向を決めることにはない」とクナウプは書いている。彼の意図は、読者に読みを委ねることにあった (K III, 10)。ただしそれは、作品の生成を楽しむ能力のある読者に限られないか。

第1巻の詩の配列はほぼ年代順である。ただし例外となっているのは「シュトウットガルト二つ折りノート」や「ホンブルク二つ折りノート」など、ヘルダーリン自身が意識的に配列したノート類であり、ここでは「完成したもの」「断片や計画」といった区分はなされずに、そのままページごとの再現となっている。「普及版」や「研究版」としては、非常に珍しい編集方針であろう。また、第3巻に註釈をまとめたのは、註釈が作品テキストと同じ巻に収録されると両方を同時に開くことが不可能であり、別の巻にすることで、両方を同時に開いて読み、検討することを可能にするためであった。

テキストとヴァリアントを同時に読むこと (Parallelektüre) が可能になるように、註釈はそのため別の第3巻に収録された。資料部 (Apparat) は「ヴァリアントの墓場 (Variantenfriedhof)」と理解されるべきではなく、註釈の本質的な要素である。(K

¹⁰ Hölderlin. *Sämtliche Werke und Briefe*, 3 Bände, hrsg. von Michael Knaupp, München (Hanser) 1992-93, Bd. 3, S.141, 143. (S. 142 は手稿写真版)

(以下、クナウプ版からの引用は、「K III, 141, 143」のように、Kおよび巻数、頁数とともに本文中で表記する。)

III, 10)

クナウプの版で「あたかも祭りの日のごとくに…」(K I, 262-264)を読むときに眼を引くのは、続けて「ばら (Die Rose.)」(K I, 264)、「最後のとき (Die letzte Stunde.)」(K I, 264)、「森で (Im Walde.)」という、シュミット版には(そしてバイスナー版にも)出てこないタイトルが並んでいることであろう。これらは、「シュトウットガルト二つ折りノート」の同じページに書かれているタイトルと詩行である。読者は、このノートに書かれた草稿段階とそれぞれの連関をそのまま読むことができる。註釈とそのノートの当該ページの写真版を参照すれば、例えば「ばら」と「最後のとき」が後の「生の半ば (Die Hälfte des Lebens)」に発展したことがはっきりと分かる (K III, 142-143)。

さらに特徴的なのは、「あたかも祭りの日のごとくに…」の詩の前段階として、「農夫があたかも … (Wie wenn der Landmann…)」というタイトルの詩が全72行にわたって、テキスト本文に掲載されていることである (K I, 259-261)。これは、「シュトウットガルト二つ折りノート」の28~30ページに書かれている。ここでは、最後の部分、62~72行目を紹介し、訳出する。

nicht kennt. Aber wenn von
selbgeschlagener Wunde das Herz mir blutet, und tiefverloren
der Frieden ist, und freibescheidenes Genügen,
Und die Unruh, und der Mangel mich treibt zum
Überflusse des Göttertisches, wenn rings um mich

und sag ich gleich, ich wäre genaht, die Himmlischen
zu schauen, sie selbst sie werfen
mich, tief unter die Lebenden alle,
Den falschen Priester hinab, daß ich, aus Nächten herauf,
Das warnend ängstige Lied
Den Unerfahrenen singe.

知らない。しかし

自ら与えた (selbgeschlagener: ママ) 傷で私の心が血を流し、そして平和が
深く失われるとき、そして自由で謙虚な満足、
そして不安、そして欠如が私を
神々の卓の過剰へと駆り立てるとき、そして私のまわりで

そしてすぐに私は言う、私は近づいた、天上の
ものを見るために 彼ら自身が 彼らが投げ落とす
私を、生きるものすべてのあいだへ、
私といういつもの僧侶を、私が、下界の闇から上へ

警告の不安の歌を

未経験の者たちに歌うようにと。(K I, 261)

ここでは、手稿で読むことはできるが線を引いて消されている „weh mir“ という痛みと嘆きの言葉がテキスト表面には現れてこない。しかし、第3巻の資料部 (Apparat) に次のようなかたちで出ている。

l. 62f. aus:

nicht kennt. Aber weh mir! wenn von anderem

Pfeile das Herz mir blutet

l. 67 aus: weh mir! o daß ich dann nicht sage,

62行と次行のものは：

知らない。しかしああ痛む！別の

矢によって私の心が血を流し

67行目のものは：ああ痛む！ おお、私がそれから言わないように、(K III, 139-140)

この „weh mir“ という言葉は、日本語に訳すとすれば、悲嘆の「ああ！」であったり、「つらい！」「痛い！」など苦痛の間投詞が思い浮かぶ。いずれにしても、詩人の使命を歌ったあとでの痛みと悲嘆が歌われている。この部分の言葉はヘルダーリン自身によって抹消線を引かれている以上は、第1巻のテキストに現れなくても致し方ないのかもしれない。しかし、この痛みの表現は、詩的主体が輝かしい詩人の使命を歌いあげる姿勢からの転回を示す重要な言葉であり、やはりテキストのなかですぐに読めるように提示してほしい言葉なのである。

同じ時期にほぼ同じ分量で出版されたシュミット版とクナウプ版は、一方は註釈の充実、一方はテキストの多様性の提示というそれぞれの長所を活かして、相互補完的に読むことができる。問題点から見れば、読みを深めることに貢献しつつも、読みの方向性を決めない註釈が求められ、テキスト提示のしかたをより検討することが必要となった。これに応えようとしたのが、次に紹介するレイタニ版だと言える。

(c) ルイジ・レイタニのイタリア語訳全詩集

常識的に考えれば、イタリア語訳を他のドイツ語の「研究版」として論じるのは、あり得ないことに思える。しかし、ルイジ・レイタニの仕事は、第一にはレイタニがテキストを独自に再構成している点で、単なる対訳版とは一線を画している。そして第二には、さまざまな読みの可能性を開く註釈の充実が挙げられる。最後に、レイタニがドイツ語とイタリア語でヘルダーリンに向き合ったように、ドイツ語と日本語でヘルダーリ

ンに向き合う日本の研究者にとっても、翻訳と註釈のありかたを考えるうえで大きな刺激となる。

レイタニのテキスト編集においても、大前提としてバイスナーやザトラーの仕事がある。バイスナーによる詩の語句の読み、あるいはザトラー版における写真版やその写実的転写 (diplomatiscbe Darstellung) が重要な意味を持つことを、レイタニも明確に認めている¹¹。また、シュミットとクナウプの仕事を前提にしていることも論を俟たない。

レイタニの版でまず特徴的なのは、作品のジャンルによる区分ではなく、出版された詩と原稿だけが残された未公開の詩とに大きく二分したことである。このように区分する根拠としてレイタニは、従来のジャンル別の区分が不充分であること、かつヘルダーリンが自分の作品の公刊に非常に意識的であったことを指摘している (R, CXX)。

そして、特徴的なのは、未刊行詩におけるテキスト編集の方法である。それは例えば、「二つ折りノート」に残された手稿を再現するのに、二つ折りノート 1 ページを本の 1 ページで再現するという手法に表れている。自らの版を「批判版だとは言えない」(R, CXX) としながらも、いや、そうすることで、大胆なテキスト提示方法に至っている。綴りの表記法は、現代の正書法ではなく、ヘルダーリンの表記法を再現している。

使われている記号は限定されている。そのため、読者は簡単にその区別を理解でき、それによって、ヘルダーリンの詩を理解するためのテキスト生成に関する基本的な情報を得ることが可能である。特に重要なのは、次の 3 つである。①抹消線は「ヘルダーリンが線を引いて消した語句だが、テキスト理解に重要なもの」を、②網掛けは「抹消線はないが、ヘルダーリンが別の語句で置きかえた語句」を、そして③囲みは「テキストの本体には入らないが、テキスト本体に添えられた批判的な注記もしくは加筆が断片で終わったもの」を示している (R, CXXVII)。特に囲みに入った③の語句は、従来の版であれば、その書かれたページのメインテキストとは無関係に思えることが多いために、独自の断片として別の箇所提示されることが多かった。それをレイタニは、ページという画面のなかで見、理解する可能性を示したのである。

さらに、導入紹介や年譜、それぞれの詩に付属する資料部など、ヘルダーリンのテキスト以外の部分は、優に 600 ページを超える。註釈では、これまでの研究の状況を反映させて、特定の読み限定することなく、複数の読み方を可能にしている。つまり読者は、いくつかの選択肢から読みを選んだり、場合によっては組み合わせることができる。また、「あたかも祭りの日のごとくに…」だけで、10 点以上の研究文献を挙げ、読者がさらに自分で読みを深める可能性を提示している (R, 1676)。

さて、レイタニの版では、一般的な「あたかも祭りの日のごとくに…」の前段階とし

11 *Hölderlin. Tutte le Liriche*, Edizione tradotta e commentata e revisione del testo critico tedesco a cura di Luigi Reitani, Milano (Mondadori) 2001, S. CXIX.

(以下、レイタニ版からの引用は、「R, CXIX」や「R, 748」のように、R および頁数 (巻頭の序言などの頁数はローマ数字、続く本文は算用数字) とともに本文中で表記する。)

なお、同僚の David Orlando 氏がイタリア語からドイツ語への翻訳を引き受けてくださり、レイタニによる註釈の内容を正確に理解することができた。この場を借りて感謝申し上げる。

て、「あたかも祭りの日のごとくに農夫が畑を… (Wie wenn der Landmann am Feiertage das Land …)」と始まる詩が置かれている。レイタニは、「このタイトルのない散文での草稿（ここでは手稿での新しい詩行の配列により再現するが、それはリズムから見て後の詩行形式での配列を先取りしている）」と紹介している (R, 1673)。クナuppとの違いは、タイトル名称であり、そもそもレイタニではタイトルなしとして、便宜的に最初の行がタイトルの代わりに使われていることである。これは次に続く「あたかも祭りの日のごとくに…」においても同様である。この2段階での成立をテキストとして提示するのは、クナuppの編集を受け継いだものと考えて良いだろう。しかしレイタニは、クナuppが資料部第3巻に入れてテキスト本文から削除した字句などを、同じページ面で読めるようにレイアウトを工夫している。

nicht kennt. Aber weh mir wenn von anderem
 Pfeile selbgeschlagener Wunde das Herz mir blutet, und tiefverloren
 der Frieden ist, und freibescheidenes Genügen,
 Und die Unruh, und der Mangel mich treibt zum
 Überflusse des Göttertisches, wenn rings um mich

weh mir! mich \ominus daß ich dann nicht sage,

und sag ich gleich, ich wäre genaht, die Himmlischen zu schauen, sie selbst sie werfen
 mich, tief unter die Lebenden alle,
 den falschen Priester hinab, daß ich, aus Nächsten herauf,
 das warnend ängstige Lied
 den Unerfahrenen singe.

知らない。しかし ああ痛む 別の
 矢ぞ自ら与えた傷で私の心が血を流し、そして平和が
 深く失われるとき、そして自由で謙虚な満足、
 そして不安、そして欠如が私を
 神々の卓の過剰へと駆り立てるとき、そして私のまわりで

~~ああ痛む！—私を—おお—私がそれから言わないように、—~~

そしてすぐに私は言う、私は近づいた、天上の
 のを見るために 彼ら自身が彼らが投げ落とす
 私を、生きるものすべてのあいだへ、
 私といういつわりの僧侶を、私が、下界の闇から上へ
 警告の不安の歌を

未経験の者たちに歌うようにと。(R. 748)

このレイタニのテキストでは、「ああ痛む！」と訳した „weh mir“ が2回あらわれる。この痛みと悲嘆の音が、抹消線（ヘルダーリンが線を引いて消した部分）と網掛け（抹消線はないが、ヘルダーリンが別の語句で置きかえた部分）とともに、読者がまず読む詩のテキストに現れていることの意味は看過できない。この間投詞がいったん書かれつつも、消されたこと、つまりヘルダーリンがこの言葉に詩的主体の感情を込めた後に、その直接的な表現を不十分なものとして消したことを読者は理解できる。これが別巻などの註釈部にあると、研究者やよほど注意深い読者でなければ読み飛ばしてしまう可能性が高い。

また、「別の矢」という表現も、「矢」に抹消線が引かれているから、それが消された単語だと分かる。ところが、その抹消された単語が残されていることの意味は大きい。というのも、レイタニはシュミットにならって註釈を加えているのだが、「別の矢」が天上的な愛に対する地上的な愛を象徴するアモールの持つ「別の矢」であり、ヘルダーリンの伝記的な事実を想起させる。すなわちこの「矢」は、ズゼツェ・ゴンタルトとの愛の事実を示唆するのだ（S. I, 665-666; R, 1675）。その語句を消した事実から、読者はヘルダーリンの過去への思いと、同時にそこからの決別の意思をも読みとれるようになる。

レイタニは自分の編集方法をどのように見ているのか。彼は、「註釈、翻訳と編集は私の仕事において密接に結びついている」と述べる¹²。特に註釈と翻訳の関係については、「私の編集した版が提供するような広範な註釈は、翻訳で縮小される多義性に関心を向けることが可能になる」と述べている¹³。翻訳されることで意味が小さく狭くなってしまいう可能性のなかでも、註釈で言葉を尽くすことで、多義性を再獲得することができることを主張する。また、註釈が翻訳の飛躍を救う可能性についても、「翻訳者として挑発的になった箇所を、注釈者として丁寧に議論できる」と述べる¹⁴。この思想は、翻訳が意味を狭めてしまうのではなく、むしろテキストの豊かさを再現する可能性を指摘している。また、レイタニは、草稿やテキストの「風景」を再現しようとする¹⁵。これによって、書かれた文字の位置関係を見ることが、意味を生み出す可能性を明確に示したのである。レイタニの仕事は、史的批判版の後に何をすべきか、「橋渡し（解釈、翻訳、編集）」の仕事はどうあるべきかを考え、かつ実現した点で大きな意味を持つ。

3. 新たな学術編集版の可能性、新たな翻訳の可能性

¹² Luigi Reitani, *Der treueste Sinn*, in: Ders., *Hölderlin übersetzen. Gedanken über einen Dichter auf der Flucht*, Wien und Bozen (Folio) 2020, S. 20-24, S. 22.

¹³ Luigi Reitani, *Pianissimo*, in: Ders., *Hölderlin übersetzen. Gedanken über einen Dichter auf der Flucht*, Wien und Bozen (Folio) 2020, S. 25-29, S. 26.

¹⁴ Ebenda.

¹⁵ Reitani, *Pianissimo*, S. 28.

4つもの史的批判版が作られたヘルダーリンの学術編集の歴史を振りかえるとき分かるのは、絶対的と言える史的批判版は存在しないことであり、ヘルダーリンに限らず、どの作家の場合にも、どの版の場合にも、批判点・不十分な点が生じることであろう。とはいえ、手稿が残されているとき、その写真版は、今後の版においても、必要不可欠な前提になるにちがいない。しかしながら、写真版も絶対的な価値を持たないことは、マルテンスが指摘している¹⁶。その認識を踏まえたうえでもなお、複数の史的批判版があることで複数の読解を対比できることは、読みと解釈の精度を上げたり、多様化させたりするために、非常に重要な点である。

かつて学術版編集においては、客観的な基準に基づいての作業が求められるというのが、ある種の暗黙の前提だった。しかし、現在では、「編集とは解釈である」ことが共通認識となっている¹⁷。それはハンス・ツェラーの有名な言葉を使えば、客観的な「現況 (Befund)」と主観的な「読み解き (Deutung)」のバランスを取ることもである¹⁸。今回紹介したそれぞれの編者は、限られた枠の中で、それぞれの編集と註釈に独自性を発揮している。それは、シュミットであれば思想史や文化史を中心とした詳細な註釈に、クナウプであれば限られた枠ではあってもヴァリアントの提示などのテキスト編集の面に見られた。そしてレイタニであれば、未刊行詩のテキストを「風景」と捉えての提示や、研究史・解釈史を踏まえた広汎な註釈が特色となっていた。

同じことを今度は読者という視点から考えたい。読者から見て、「編者の影 (Schatten des Herausgebers)」は、編集の客観性への要請のなかで、できれば避けるべき要素として否定的に理解されてきた¹⁹。しかし、現在の編集文献学の立場としては、マルテンスが言うように、編者の主観は「編集の本質的な構成要素」として肯定的に理解されている。

それ〔編者の主観：筆者注〕は、編集されたテキストを固定化するのではなく、自律的な (mündig) 読者が編集によって用意されたテキストや情報と創造的にかかわることで、編集されたテキストを開く。²⁰

マルテンスのこの言葉は、開かれたテキストを読み取る読者が「意味の関連を活性化」²¹するなどの作業を通じて、自分自身で読みを考え、答えを出すように求めている。読者側の自立性・自律性が要請されているのだ。読者や研究者は、バイスナーとザトラーの

¹⁶ Gunter Martens, *Wie subjektiv darf, wie subjektiv muss eine Edition sein? Probleme der editorischen Deutung von Hölderlins „letzter Hymne“ Die Nympe. / Mnemosyne*, in: Dieter Burdorf (Hrsg.), *Edition und Interpretation moderner Lyrik seit Hölderlin*, Berlin/New York (de Gruyter) 2010, S. 83-102, vgl. S. 96.

¹⁷ Martens, S. 94.

¹⁸ Hans Zeller, *Befund und Deutung. Interpretation und Dokumentation als Ziel und Methode der Edition*, in: *Texte und Varianten*, hrsg. von Gunter Martens und Hans Zeller. München (Hanser) 1971, S. 45-90, S. 45.

¹⁹ Ebenda.

²⁰ Martens, S. 102.

²¹ Luigi Reitani, *Pianissimo*, S. 28.

史的批判版と並んで、ここで紹介した3つの版を比較検討することで、多くの気づきを得ることができる。他方で、読者にそこまで求めてもいいのか、一般的な読者には求めすぎではないのかという疑問も残る。そうした読者はいずれかの版ひとつを手に取り、それを「ヘルダーリンのテキスト」として読むはずだ。その意味では、主観性が必要とはいえ、恣意性に陥らないようにする編者の良心やバランス感覚も不可欠であろう。

最後に、ヘルダーリンを日本語に翻訳しようとするうえでの現時点での注記をまとめて終えたい。レイタニによるイタリア語との対訳と註釈の仕事は、日本語でドイツ文学を研究する人間にとって、大きな刺激となっている。ドイツ語を母語話者としないう研究者が、テキスト編集と註釈の点でドイツ語を母語とする研究者も瞠目する成果を上げた。そのことは、日本語への翻訳に際しても、新たなテキスト提示の可能性や、最新の研究成果を反映させての註釈の必要性を改めて研究者に認識させたと言ってよい。翻訳と註釈をセットとして考え、それを実現したレイタニの方法も、これからの翻訳の仕事を考えるうえで重要な示唆となる。

日本のヘルダーリン研究においては、従来の翻訳がバイスナー版に依拠しており、かつ註釈などが非常に限定的であった。そのため、一般の読者にとって、特に難解とされる後期詩は近づきがたいままに残されているように思われる。また、個々の作品研究はあっても、なかなか一般読者がその成果を知ることがなかったのも事実である。テキスト編集という点では、バイスナー以降のザトラー版、クナウプ版、レイタニ版の成果をまとめて、日本語で提示する、あるいは対訳で提示する可能性が検討される時期に来ている。ここでは、手稿のすべての段階を提示する必要はなく、編者／訳者が積極的に介入しつつ、選択的に提示する必要がある。また、註釈部においては、編者のみならず、研究者などによるさまざまな読みを提示し、それらに対立させたり共鳴させることで、読者の読みに開いていくことが求められている。そのために、これまでの日本の研究者の成果を提示すると同時に、日本やドイツ語圏をはじめとする国際的な研究成果を日本語でまとめて示すことも必要であろう。特に今、若手の研究者が国際的に評価される研究成果を挙げるようになっていくなかで、これらの成果を日本の読者にも知ってもらうことは重要だと考える。ヘルダーリンを日本の読者に関き届けるためになすべきことは、非常に多い。だがそれは、やりがいのある仕事でもある。

参考文献

Friedrich Hölderlin. Sämtliche Werke (Stuttgarter Ausgabe), hrsg. von Friedrich Beißner, Stuttgart (Cotta) 1946-1985.

Friedrich Hölderlin. Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe (Frankfurter Ausgabe), hrsg. von D. E. Sattler, Frankfurt/M (Stroemfeld/ Roter Stern) 1975-2008.

Friedrich Hölderlin. Sämtliche Werke und Briefe. 3 Bände, hrsg. von Jochen Schmidt, Frankfurt

- (Deutscher Klassiker Verlag) 1992-1994.
- Friedrich Hölderlin. *Sämtliche Werke und Briefe. 3 Bände*, hrsg. von Michael Knaupp, München (Hanser) 1992-93.
- Hölderlin. *Tutte le Liriche*, Editione tradotta e commentata e revisione del testo critico tedesco a cura di Luigi Reitani, Milano (Mondadori) 2001.
- Böschstein, Bernhard, Rezension zu: Hölderlin-Editionen in Hanser- und im Klassiker-Verlag. III. Gedichte nach 1800, Übersetzungen, in: *Hölderlin-Jahrbuch* 29 (1994/95), S. 310-319.
- Hiller, Marion, Historisch-kritische Hölderlinausgaben, in: *Edition und Interpretation moderner Lyrik seit Hölderlin*, hrsg. von Dieter Burdorf, Berlin/New York (Gruyter) 2010.
- Hoffmann, Dierk O.; Zils, Harald, Hölderlin-Editionen, in: *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*, hrsg. von Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta, Tübingen (Max-Niemeyer) 2005.
- Kreuzer, Johann (Hrsg.), *Hölderlin Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*, 2. Auflage, Stuttgart (Metzler) 2020.
- Martens, Gunter, Wie subjektiv darf, wie subjektiv muss eine Edition sein? in: *Edition und Interpretation moderner Lyrik seit Hölderlin*, hrsg. von Dieter Burdorf, Berlin/New York (Gruyter) 2010.
- Plachta, Bodo, *Editionswissenschaft. Handbuch zur Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*, Stuttgart (Hiersemann) 2020.
- Reitani, Luigi, Druck vs. Handschrift. Methoden und Prinzipien einer zweisprachigen Ausgabe von Hölderlins Lyrik, in: *Edition und Interpretation moderner Lyrik seit Hölderlin*, hrsg. von Dieter Burdorf, Berlin/New York (Gruyter) 2010.
- Reitani, Luigi, *Hölderlin übersetzen. Gedanken über einen Dichter auf der Flucht*, Wien und Bozen (Folio) 2020.
- Zeller, Hans, Befund und Deutung. Interpretation und Dokumentation als Ziel und Methode der Edition, in: *Texte und Varianten*, hrsg. von Gunter Martens und Hans Zeller, München (Hanser) 1971, S. 45-90.

Possibilities of Editing:

The Case of Hölderlin's "Studienausgaben" by Schmidt, Knaupp and Reitani

Takashi YAHABA

This essay deals with three "Leseausgaben" or "Studienausgaben" edited by Jochen Schmidt (1992/94), Michael Knaupp (1992/93) and Luigi Reitani (2001). Based on the major "historisch-kritischen Ausgaben" by Friedrich Beißner and D. E. Sattler, they each show their own characteristics: While Schmidt excels in detailed, well-founded commentary, Knaupp's attempt to reproduce variants as far as possible is unique within critical editions. And Reitani's contribution is that he understands unfinished texts as a landscape and strives to render the "textual landscape" as the texts look, and that the translation and the commentary are very closely linked. The groundbreaking achievements by these three editors can serve as a model for a future Hölderlin translation into Japanese.

理念としての史的批判版

——ジークフリート・シャイベを中心に

森林駿介

はじめに

「史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe)」¹とは何か。ドイツ編集文献学において、その編集は、学術的編集が目指すべきひとつの理想像として長らく議論されてきた²。そして、いまなおこの名を冠した全集・著作集は出版され続けている³。だが、その実態はいささか複雑である。

一般には、フリードリヒ・バイスナー編集のヘルダーリン全集が、史的批判版のひな形のひとつとしてしばしば言及される。たとえば、それぞれ1970年代に刊行が開始された、ハインリヒ・ハイネ、アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ、クレメンス・ブレンターノの史的批判版全集ないし著作集は、いずれもバイスナーの編集を模範としているとされている⁴。たしかにその意味ではバイスナーによるヘルダーリン全集の影響力は大きい。だが、ヘルダーリンの場合には、史的批判版と呼ばれる学術版全集は、他にも数種類存在し、史的批判版と一口にいても、その編集方針は全集によって様々である⁵。では、その違いはどのように考えればいいのか。

同様に、史的批判版として出版された他の作家の全集・著作集を比べてみても、その

本稿は、以下の口頭発表をもとにしている。森林駿介「史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe) とは何か——ジークフリート・シャイベの理論を中心に」(日本独文学会2021年春季研究発表会)、オンライン、2021年6月6日;「理念としての史的批判版」(成城大学国際編集文献学研究センター主催 第一回ワークショップ「ドイツ編集文献学を学ぶその1」)、成城大学、2022年6月18日。

1 „Historisch-kritische Ausgabe“ の訳語については、これまで「歴史校訂版」「歴史批評版」など様々なものが用いられてきたが、議論の便宜上、本稿では一貫して „historisch“ を「史的」、„kritisch“ を「批判的」と訳し、版の名前も「史的批判版」と統一して表記することとする。

2 Vgl. z.B. Götsche, Dirk: *Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer*. In: Rüdiger Nutt-Kofoth, Bodo Plachta u. a. (Hrsg.): *Text und Edition. Positionen und Perspektiven*. Berlin 2000, S. 37-63, bes. S. 43-53; Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Eine Einführung in Methode und Praxis der Edition neuerer Texte*. Stuttgart 1997, S.11-26; Ders.: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*. Stuttgart 2020, S. 11ff.

3 たとえば2000年代以降に刊行が始まったものとして以下が挙げられる。Wieland, Christoph Martin: *Wielands Werke. Oßmannstedter Ausgabe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Klaus Manger und Jan Philipp Reemtsma. Berlin/ New York 2008 ff.

4 Vgl. Götsche, *Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer*, a.a.O., S. 46; Heine, Heinrich: *Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke*. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Hamburg 1973-1997; Droste-Hülshoff, Anette von: *Historisch-kritische Ausgabe. Werke, Briefwechsel*. Hrsg. von Winfried Woesler. Tübingen 1978-2000; Brentano, Clemens: *Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Jürgen Behrens u.a. Stuttgart 1975ff.

5 それぞれの全集の特徴については、本号所収の各論考を参照されたい。

形態はそれぞれまったく異なっているように思われる。たとえば、「マールブルク版ビューヒナー全集」(Marburger Büchner-Ausgabe)のように、手書き原稿や出版稿だけでなく、作品執筆に用いられた文献の抜粋などの大量の資料を別冊として収録するという、計四分冊から成る大掛かりな構成をとっているものもあれば(第3巻『ダントンの死』)⁶、フランツ・カフカのように、手稿の写真とそれを活字に転写したものを収録した単なる写真版が、史的批判版の名のもとに刊行されている場合もある⁷。あるいは、なかには、「ブランデンブルク版クライスト著作集」(Brandenburger Kleist-Ausgabe)のように、史的批判版と銘打っていないにもかかわらず、研究者の間で史的批判版として認知されているものさえある⁸。

いったい史的批判版とは何なのか。そこに統一的な理念はあるのだろうか。そもそも、その名にある「史的批判的 (historisch-kritisch)」とは、何を意味しているのだろうか。本稿では、史的批判版をめぐる理論的な議論を、ジークフリート・シャイベ (1932-2017⁹) の論考を中心に整理する。シャイベは、1970年代から90年代にいたるまで、一貫して史的批判版に言及しその理論化を試みた、東ドイツの編集文献学 (Textologie) の第一人者である¹⁰。なかでも彼が1971年に発表した論文「史的批判版の基本原則」¹¹は、史的批判版をめぐる議論において必ずといっていいほど取り上げられる基本文献のひとつとなっている。本論では、これを出発点としながら、その他の論考も取り上げ、シャイベにおいて史的批判版の理念がどのように構想され、そしてその位置づけが時代の変化とともにどのように移り変わっていったのかを明らかにしていく。

6 Büchner, Georg: Dantons Tod. In: Ders.: *Sämtliche Werke und Schriften. Historisch-kritische Ausgabe mit Quellendokumentation und Kommentar (Marburger Ausgabe)*. Bd. 3.1.-3.4. Hrsg. von Burghard Dedner und Thomas Michael Mayer. Darmstadt 2000.

7 Kafka, Franz: *Historisch-kritische Ausgabe sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/ Frankfurt am Main 1995ff. 同様の例として、「史的批判版」と銘打っていないものの、E・T・A・ホフマン『砂男』の手稿をもとにした写真版が「史的批判的編集」と題して刊行されている。Hoffmann, E.T.A.: *Der Sandmann. Historisch-kritische Edition*. Hrsg. von Kaltërina Latifi. Frankfurt am Main/ Basel 2011.

8 Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke. Brandenburger Kleist-Ausgabe. Kritische Edition sämtlicher Texte nach Wortlaut, Orthographie, Zeichensetzung aller erhaltenen Handschriften und Drucke*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/ Frankfurt am Main 1988ff. 同全集を史的批判版として言及しているものとして以下。Göttsche, *Ausgabetypen und Ausgabenbenutzer*, a.a.O., S. 46.

9 生没年は、ドイツ国立図書館の情報をもとにした。URL = <https://d-nb.info/gnd/134156420> (2023年9月22日閲覧)

10 東ドイツの編集文献学におけるシャイベの功績を紹介しているものとして以下。Korn, Uwe Maximilian: *Von der Textkritik zur Textologie. Geschichte der neugermanistischen Editionsphilologie bis 1970*. Heidelberg 2021, bes. S. 258ff. ただし、同書ではシャイベの論考の具体的な内容についてはほとんど触れられていない。

11 Scheibe, Siegfried: Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe. In: Gunter Martens/ Hans Zeller (Hrsg.): *Texte und Variationen. Probleme ihrer Edition und Interpretation*. München 1971, S. 1-44.

1. ゲーテ編集から史的批判版の理論化へ

編集文献学者としてのシャイベの出発点は、いわゆる「アカデミー版ゲーテ著作集」(Goethe-Akademie-Ausgabe)¹²にある。作家生誕200周年にあたる1949年にベルリン科学アカデミー(のちのDDR科学アカデミー)のなかで企画が立ち上げられたこの新たな著作集は、当初、古典文献学者エルンスト・グルーマッハ主導のもとで編集が進められていた。彼は、作品テキストのほとんどを既存の著作集に依拠していた「ヴァイマル版ゲーテ著作集」(Weimarer Goethe-Ausgabe)の編集を批判し、ゲーテの原稿および刊本の詳細な調査に基づく新たな編集を目指した¹³。1952年にアカデミー版『西東詩集』が刊行され、その後も『若きウェルテルの悩み』(1954年刊行)などその他の作品の出版も——ただし作品テキストを取録した「本文篇」(Textband)のみの、注釈部を欠いた状態で——続けられたが、1959年にグルーマッハは編集の任を退くことになる。そして、彼からの強い推薦を受けてその後任についたのが、シャイベだった。

翌1960年、シャイベは、アカデミー版の編集作業に関する報告文を発表する¹⁴。そのなかで彼は、この著作集を史的批判版として位置づけ、その方針を次のように記している。「当該の作家が産んだ素材をすべて印刷して提供する」¹⁵。ゲーテの場合には、ひとつの作品をとってみても、作家が関与したテキストは複数存在する。手書き原稿、出版稿、あるいはのちに手を加えて出版した改訂版等々。さらに手稿や校正刷には、無数の修正や削除の跡が残されている。こうした作品に関わるあらゆる原稿および刊本、そしてそれらに確認される様々な異文、これらすべてをまとめて出版する。これをシャイベはゲーテ著作集の基本方針に据え、続く1961年には、その実現化に向け、自らが中心となってアカデミー版の編集綱領を新たにまとめている¹⁶。

もっとも、上で述べたようなテキストの状況は、ゲーテに限った話ではない。プラトンのように伝承された写本だけが残る古典テキストとは異なり、活版印刷術が普及して以降の作家の場合には、手稿から出版稿、改訂稿に至る複数の作品テキストが存在する

12 以下「アカデミー版ゲーテ著作集」の編集の経緯については、次の文献を参照した。Plachta, Bodo: Ernst Grumach und der ‚ganze Goethe‘. In: Roland S. Kamzelak/ Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta (Hrsg.): *Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Biografische, institutionelle, intellektuelle Rahmen in der Geschichte wissenschaftlicher Ausgaben neuerer deutschsprachiger Autoren*. Berlin/ Boston 2011, S. 219-242. また、ゲーテ編集一般については以下。Nutt-Kofoth, Rüdiger: Goethe-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*. Tübingen 2005, S. 95-116; 矢羽々崇「著作集編集と「古典」の成立—ゲーテ『若きウェルテルの悩み』」、明星聖子・納富信留編『テキストとは何か—編集文献学入門』、慶應義塾大学出版会、2015年、25-46頁。

13 ヴァイマル版の編集とその問題については、矢羽々、前掲論文、34-35頁参照。

14 Scheibe, Siegfried: Zu Problemen der historisch-kritischen Edition von Goethes Werken. Aus der praktischen Arbeit der Akademie-Ausgabe. In: *Weimarer Beiträge. Zeitschrift für deutsche Literaturgeschichte* 6, 1960, S. 1147-1160.

15 Ebd., S. 1147.

16 Vgl. Grundlagen der Goethe-Ausgabe. Ausgearbeitet von den Mitarbeitern der Goethe-Ausgabe [1961]. In: Siegfried Scheibe: *Kleine Schriften zur Editions-wissenschaft*. Berlin 1997, S. 245-272.

ことはもはや珍しくない¹⁷。したがって、後者に対しては、前者と異なる方法で編集することが新たな課題として求められる。

このような認識は、以下でみるシャイベの議論の重要な前提をなしている。1970年代以降の史的批判版の理論化の試みは、近代作家のテキスト一般に関わる編集の問題に対応するための、学術的編集の新たな基礎づけを意図したものだ。たとえば、先に触れた論文「史的批判版の基本原則」では、史的批判版の編集方法について、「古典文献学 (klassische Philologie)」との違いを次のように説明している。

それまでの文献学では、複数の写本を検討しながら、作家の意志に可能な限り近づくような正しい本文を「制作」することが目指された。すなわち、そこでの編集作業の核は、いわゆる「テキスト批判 (Textkritik)」にある。それに対して、近代作家の場合には、作家の意志が反映されたテキストはひとつに限定されず、しばしば複数の、それも同等に価値をもった「稿 (Fassungen)」として、われわれのもとに届けられる。ゆえに、古典文献学的な意味におけるテキスト批判は、もはや行う必要がない。その代わりに新たな編集が目指すべきは、様々な稿における作品テキストをすべて収録し、作品成立過程におけるそれらの関係を明らかにすることである¹⁸。

こうした近代作家のテキストを対象にした新たな学術的編集の理想モデルを、シャイベは「史的批判的編集 (historisch-kritische Editionen)」¹⁹の名のもとに論じている。では、そこでは実際に何が行われるのか。「史的批判的」という付加語は、具体的な編集の実践として何を指しているのだろうか。

2. 「史的」「批判的」とは何か

まず「史的」とは何か。シャイベの議論においてこの言葉は、文学テキストの歴史性に関わるものとして定義されているが、それは以下の二つの次元に分けて説明される²⁰。

第一に、文学テキストそれ自体の生成プロセスとしての歴史性である。テキストは、ある時間の流れの中において形作られ、修正や書き直しなどを経てその都度発展していく。その過程は、作品がある時点で完成を迎え、出版されたとしても止まらない。先ほどのゲーテのように、完成されたはずのテキストに再び手を加えることも珍しくない。ゆえに、テキストは「静的なもの」ではなく、「ひとつの歴史のプロセス」そのものである²¹。そして、そのプロセスを示すのが、手稿や出版稿といった様々な段階の稿であり、それらに刻まれた修正などの跡である。

第二に、文学テキストの生成・発展の背景となる時代的コンテクストとしての歴史性である。テキストは、否が応でもそれが生まれた時代状況に依存し、規定されている。

¹⁷ Vgl. 明星聖子「編集文献学とは何か」、明星聖子・納富信留編、前掲書、iii-xii頁；Plachta, *Editionswissenschaft*, a.a.O., S. 29f.

¹⁸ Vgl. Scheibe, *Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe*, a.a.O., S. 6f.

¹⁹ Ebd., S. 2.

²⁰ Vgl. S. 3f.

²¹ Ebd. S. 4.

逆に言えば、テキストはつねに、「特定の時代の表現ないし鏡」²²として存在する。そのなかには、執筆時点での作家個人の伝記的な状況だけでなく、作家がおかれたより広い社会的・文化的状況も含まれる。このことは、上述の第一の点を考慮するとより複雑なものになる。というのも、同一作品であっても、時期が異なる稿のテキストは、それぞれ異なる作家の個人史ないし時代との対応関係をもちうるからだ。ゆえに、稿ごとにそれぞれの時代性を考慮しなければならない。

こうした二つの歴史性を踏まえたいうで、シャイベは、史的批判的編集が満たすべき「主要要件」²³を次のようにまとめている。すなわち、その編集は、テキストの生成・発展の諸段階をすべて見通せるようなものでなければならない、かつ、そうした諸段階の位置づけを、作家の生涯そして時代そのものの中で照らして明らかにするものでなければならない²⁴。

であれば、その編集作業は、必然的に次のような原則に従うことになる。すなわち、あらゆる稿は、その形態や時期にかかわらず、つまり手稿か出版稿か、初稿か最終稿かなどにかかわらず、すべて等価なものとして記録されなければならない。なぜなら、「それぞれ〔の稿〕は、同等の歴史的な正当性を備えており、それぞれが、ある歴史的な時点における作品と作家の姿を代表するものである」²⁵からだ。ゆえに編集は、作家が書いたものであれば、その間に優劣をつけることなく、すべて同等の歴史的価値をもつものとして扱わなければならない。

では、もう一方の「批判的」は、この編集においてどのような意味を持つのだろうか。上述のように、シャイベは、史的批判的編集において古典文献学的なテキスト批判をそれほど重視していない。それでも彼は、ある面において、編集は「批判的」でなければならないと主張している。どういうことか。

シャイベの議論においては、この「批判的」であることもまた、テキストの歴史性に関わるものとして新たに定義されている。繰り返しになるが、近代作家の場合には、作家自身の手からなる複数の稿が存在し、さらにその内部においても複数の異文が存在する。シャイベによれば、それぞれのテキストは、本文か異文かにかかわらず、作品の生成において、特定の発展段階を代表する。ゆえに編集においては、それらの成立過程、個々の時期的な関係性などが「批判的」に精査される必要がある。そして、その作業を通じて、最終的に、作品の生成・発展全体の過程が描かれなければならない。シャイベの言葉を引用すれば、「編集の全体において、作品の歴史が、はっきりと見渡せるようにならないといけない」ということだ²⁶。こうした「歴史のプロセスの可視化」を、シャイベは「高次のテキスト批判 (höhere Textkritik)」と名付けている²⁷。つまり、「史的」と「批判的」は、それぞれ別個の概念として規定されているわけではない。シャイベに

22 Ebd.

23 Ebd., S. 6.

24 Ebd., S. 5f.

25 Ebd., S. 6.

26 Ebd., S. 7.

27 Ebd.

において「批判的」とは、あくまでもテキストの歴史性を明らかにする作業を指すものとして定義されているのだ。

以上の概念規定を踏まえたくて、シャイベは、「史的批判版の基本原則」を細かな項目に分けて記述しているが²⁸、大まかにまとめれば、それはとりわけ以下の二点に集約される。第一に、作家由来のテキスト（作品、手紙、日記、論文、共著作品、メモ書き、翻訳など）をすべて刊行する。第二に、作品に関わるすべてのテキストを精査し、その歴史的な位置づけを明らかにする。つまり、作家のすべてを網羅し、すべての歴史をまとめる。シャイベの言葉を借りれば、史的批判版が最終的に目指すのは、すなわち、「作家の全作品の完全なドキュメンテーション」である²⁹。

3. 肥大化する理想

ここでひとつの疑問が生じる。史的批判版によるドキュメンテーションは、いったいどこまでがその範囲に含まれるのか。上述のように、テキストの歴史性について述べる時、シャイベはテキスト生成の背景となる時代的なコンテクストにも言及していた。であれば、様々な事象がドキュメンテーションの対象になりうるのではないだろうか。ここで、1988年に彼が発表した論文を参照してみよう³⁰。そのなかでシャイベは、1971年の論考よりも詳細に、そしてさらに拡張させて、史的批判版が扱うべきテキストの歴史について考察している。

同論文でのシャイベの議論は、学術的編集が果たすべき使命について記述することから始まる。彼によれば、学術的編集は、一種の「博物館 (Museum)」³¹でなければならない。博物館は、歴史資料を集積し、それらを整理し展示する。編集も同じように、作家に関するあらゆる歴史的素材を収集しながら、同時に、それらを体系的にまとめる「目録 (Katalog)」³²を作成しなければならないという。シャイベはとりわけ後者の点を強調する。バラバラの資料を無秩序に提示するだけでは、読者に大きな負担を強いることになる。読者のためには、編集を通じて、全体を俯瞰するような視座を提供する必要がある。つまり、個々の素材を関係づけ、分析・評価し、それらを整理する作業が、学術的編集には求められるのだ。

その際、シャイベが重視するのは、以下の3つの観点である。すなわち、作品の成立、変遷、そして受容、である。これらを軸としながら、編集は、作品の様々な歴史を概観できるようにしなければならないという。

第一に、編集は作品の「成立の歴史 (Entstehungsgeschichte)」を明らかにしなければならない

²⁸ Vgl. ebd., S. 8-11.

²⁹ Ebd., S. 10f.

³⁰ Scheibe, Siegfried: Von der Entstehungsgeschichte, der Textgeschichte und der zeitgenössischen Wirkungsgeschichte. In: Siegfried Scheibe/ Waltraud Hagen/ Christel Laufer/ Uta Motschmann (Hrsg.): *Vom Umgang mit Editionen. Eine Einführung in Verfahrensweisen und Methoden der Textologie*. Berlin 1988, S. 160-204.

³¹ Ebd., S. 162.

³² Ebd.

ならない。そこでは、作品の執筆の動機や意図に関わる伝記的・社会的状況、執筆において参照された著作物、そして執筆前段階のメモ・スケッチなど、作品成立の様々な背景が整理されることになる³³。

第二に、作品の「テキストの歴史 (Textgeschichte)」が正確に記述されなければならない。すなわち、作品テキストが執筆の過程において、加筆・修正・削除などを通してどのように変化していったのか、そしてそれが新聞・雑誌・書籍など様々な媒体においてどのように出版され流通したのか、その後どのように改訂されていったのか、が編集によって明らかにされなければならない³⁴。ただし、このテキストの変遷史は、作品の成立史とも深く関わるため、必ずしも独立した項目として扱われるものではない、とシャイベは付け加えている³⁵。

第三に、作品の「作用の歴史 (Wirkungsgeschichte)」が明らかにされなければならない。ここで扱われるのは、一言でいえば、作品が当時どのように受容され、そこでの読者の反応が作家の活動にどうフィードバックされたのか、である³⁶。シャイベによれば、そこで対象となるのは、あくまでも作家が生きた時代に限定される。書評や劇評のような公的な媒体に掲載されたものだけでなく、手紙のような私的なやり取りも視野に入れながら、当時の受容の状況を整理し、さらには、それに対して作家自身がどのように反応したのかを明らかにすることが目指されるべきだという。

以上のように、成立・変遷・流通・受容といったひとつの作品をめぐる包括的な歴史を見通すようにすること、それらを「目録」のように概観できるようにすることが、シャイベの主張する学術的編集の使命である。さらに、彼はその最終的な理想を次のようにまとめている。学術的編集とは、「歴史的、政治的、イデオロギー的、社会的、芸術的、そして純粋に伝記的な関連事項を広範囲に組み込むことによって、芸術作品に対するしっかりとした見方を読者に可能にさせる」³⁷ものである、と。このようにシャイベは、編集が対象とすべきテキストの歴史を限定するどころか、むしろその範囲を限りなく拡張している。

しかし、ひとつの全集ないし著作集において、作品の歴史を余すところなく記録するという彼の理想は、はたして現実的に可能なのだろうか。それは、シャイベ自身が述べていたようにひとつの「博物館」をつくることに等しく、膨大な時間と費用を要する大掛かりなプロジェクトにならざるをえない。実際に、こうした史的批判版の高すぎる理想については、当時からすでにそれを疑問視する声が上がっていた。たとえば、ウルリヒ・オットーは、1989年の『シラー年鑑』において、史的批判版の意義を問い直すべきだと訴え、論文の寄稿を呼びかけた³⁸。「史的批判版が果たすべきドキュメンテーション

33 Vgl. ebd., S. 166-184.

34 Vgl. ebd., S. 184-193.

35 Ebd., S. 184.

36 Vgl. ebd., S. 193-204.

37 Ebd., S. 204.

38 Otto, Ulrich: Dichterwerkstatt oder Ehrengrab? Zum Problem der historisch-kritischen Ausgaben. Eine Diskussion. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 33, 1989, S. 3-6.

ンは完全性へと向かっている」とオットーは指摘する³⁹。史的批判版はすべてを記録する、どれだけ時間と費用がかかろうとも。それに対してオットーは次のように問いかける。そんなものを読者は本当に必要としているのか、と⁴⁰。

こうしたオットーの呼びかけを受け、翌1990年、シャイベを含む複数の論者——いずれも実際に学術的編集に携わっていた研究者——が、『シラー年鑑』に寄稿し応答を行った⁴¹。だが、集まったのは、呼びかけ人の期待に反して、史的批判版の意義を肯定的に論ずる論考ばかりだった。なかでもとりわけ目立つのは、やはりシャイベの論考である⁴²。彼はそこで、史的批判版の過度の理想化を戒めるのではなく、むしろそのコンセプトをさらに肥大化させるかたちで応答したのである。

そこでとりわけシャイベが強調しているのは、学術的編集の目的は、研究の基盤となるものを提供することにある、という点だ。大前提として、その利用者はあくまでも研究者に限定される。たとえば自然科学の論文が一般の読者にとって高度に専門的で理解不可能であるように、学術的編集は、作品を楽しむ読者ではなく、相応の知識をもって作品を研究する専門家に向けてなされるべきものである⁴³。その際、学術的編集は、研究の対象となるテキストを編集し提示することだけを目指すわけではない。それと同時に、その編集は、様々な素材の分析を通じて、テキストの歴史を解明し、専門家が必要とする様々な情報を提供しなければならない。シャイベの言葉を借りて言えば、「様々な目的をもって行われる学術的研究の基盤として、すべての素材を集めて分析・評価し、それらを科学的に解明する」⁴⁴ことにこそ、学術的編集の意義がある。シャイベによれば、これを果たすことができるのは、史的批判版だけである。なぜなら、史的批判版だけが、すべての素材を集め、その分析を十全に行う可能性を有しているからだ⁴⁵。

もっとも、このシャイベの説明は、ほとんど意味をなしていない。なぜならその主張は、一言でまとめてしまえば、学術的編集として史的批判版が完璧なのはそれが完璧な編集を行うからだ、という同語反復になっているからだ。シャイベは次のようにも言っている。「史的批判的編集は […] 様々な研究者によって提起されるあらゆる疑問に対して確かな答えができるように、可能な限り信頼性が高く、正確で、完全なものとして行わなければならない」⁴⁶。あらゆる疑問に答える、研究の基盤としての史的批判版。それが、シャイベにとって学術的編集が目指すべき究極の姿である。だが、はたしてそんなものが可能なのだろうか。いったい誰がその編集を担うことができるのか。ここでのシャイベの理想はほとんど夢想に等しく、実現不可能な空虚な理念だと言わざるをえない。

³⁹ Ebd., S. 4.

⁴⁰ Ebd., S. 5.

⁴¹ Vgl. *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 34, 1990, S. 398-428.

⁴² Scheibe, Siegfried: Plädoyer für historisch-kritische Editionen. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 34, 1990, S. 406-415.

⁴³ Ebd., S. 407f.

⁴⁴ Ebd., S. 408.

⁴⁵ Ebd., S. 409.

⁴⁶ Ebd., S. 411.

4. 史的批判版から多様な編集へ

『シラー年鑑』での議論から数年後の1994年、文献学者グンター・マルテンスは、当時の傾向として、ゲルマニスティクにおける編集の実践が「ドキュメンテーション」に大きく向かっていると評した⁴⁷。だが同時に、マルテンスは、近年の編集文献学の議論が利用者の問題に焦点を当てつつあること、すなわち、編集は誰に向けてなされるべきなのか、が問い直されつつあることを指摘している。学術的編集は「編集者のための編集」⁴⁸になってはならず、それはつねに利用者を前提としなければならない。そして、利用者を志向することは、編集のあり方を問い直すことでもある。マルテンスによれば、「かつては史的批判版のみが編集理論の様々な取り組みの対象となっていた」が、今日では、「研究版・普及版 (Studien- und Leseausgaben) という領域」の重要性が学者のなかでも徐々に認識されるようになったという⁴⁹。

マルテンスの言うように、1990年代には史的批判版を絶対視するような議論は後退し、その代わりに、様々な利用者や目的に応じた編集の多様性が論じられるようになっていた⁵⁰。たとえばクラウス・カンツォークは、1991年に刊行された編集文献学の入門書において、史的批判版から研究版、普及版までを含む「編集のスペクトラム (Spektrum der Editionen)」について論じている⁵¹。そこでは、史的批判版の学術的な重要性に言及がなされつつも、同時に、研究版と普及版の位置づけについて多くの議論が割かれている。カンツォークによれば、史的批判版はたしかに学術的編集の基礎となるものだが、その実現は困難である。ゆえに学術的編集は、「必ずしも史的批判版全集でなければならないというわけではない」⁵²。

より決定的なのは、1992年に刊行されたハインリヒ・マイヤーの『学術的編集と版の類型論』である⁵³。同書においてマイヤーは、あらゆる学術的編集の基礎としての史的批判版の理想を、編集文献学における「神話」と断罪している⁵⁴。彼によれば、史的批判版は、学術的編集の唯一の形態として構想されたものだったが、実践的にはほとんど機能しなかった。現実にはむしろ、作家ないし作品に応じて様々なタイプの編集が

47 Martens, Gunter: Neuere Tendenzen in der germanistischen Edition. In: Hans Gerhard Senger (Hrsg.): *Philosophische Editionen. Erwartungen an sie – Wirkungen durch sie. Beiträge zur VI. Internationalen Fachtagung der Arbeitsgemeinschaft philosophischer Editionen, 11.-13. Juni 1992 Berlin* (= Beihefte zu editio 6). Tübingen 1994, S. 71-82, hier S. 80. 強調は原文による。

48 Vgl. ebd., S. 76.

49 Ebd., S. 76.

50 もっとも、ディルク・グッチェによれば、そうした議論はすでに1970年代から部分的に行われつつあったようだ。ただし、ここでは紙幅の関係上、マルテンスの議論をさらに広い歴史的な文脈で捉え直す可能性としてその存在を指摘するにとどめておく。Vgl. Götsche, *Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer*, a.a.O., S. 37-38, Anm. 2.

51 Kanzog, Klaus: *Einführung in die Editionsphilologie der neueren deutschen Literatur*. Berlin 1991, S. 179-192.

52 Ebd., S. 187.

53 Meyer, Heinrich: *Edition und Ausgabentypologie. Eine Untersuchung der editionswissenschaftlichen Literatur des 20. Jahrhunderts*. Bern 1992.

54 Ebd., S. 170.

それぞれ実践されてきたという。同書の結論ではマイヤーもまた、「連続的なスペクトラム (ein kontinuierliches Spektrum)」⁵⁵という言葉によって、そうした編集の多様性を強調している。

このように、1990年代に入ると、史的批判版への風当たりは一層強くなる。一見すると、この時点でシャイベの議論はほとんど無効になってしまった感がある。だが、興味深いことに、編集の「スペクトラム」に関するマイヤーの議論は、じつはシャイベが重要な参照項になっている。というよりも、むしろシャイベは、この「スペクトラム」を理論的に根拠づけた人物のうちの一者として位置づけられているのだ⁵⁶。どういうことか。

すでに確認したように、1971年の論考「史的批判版の基本原則」において、シャイベは、史的批判版を学術的編集の理想として位置づけ、その理論化を試みた。だが、彼は、必ずしも史的批判版だけがあればいいと語っていたわけではない。シャイベによれば、そもそもこの巨大な編集プロジェクトの対象になりうる作家は限られている。そして、仮にある作家が対象に選ばれたとしても、作家に応じて「目的に適った編集形式」⁵⁷が吟味されなければならないという。たとえば、全著作に対して史的批判版が編集される場合もあれば、主要著作のみ、あるいは一部のジャンルのみだけがその対象となる場合もある。要は、史的批判的編集が限定的に施されても構わないとシャイベは言っているのだ。その場合、ひとつの全集ないし著作集であっても、史的批判版とそうではない版とが混在することになる。シャイベによれば、「これまでたいていの史的批判版は、ひとつの基本モデルに固執してきた。だが将来的には、ひとつの版の内部であっても、様々な編集方法を認めるようにならなければならない」⁵⁸。

だが、史的批判版ではない版とは何なのだろうか。そこでの編集はどうあるべきなのだろうか。マイヤーによれば、1980年代になるとシャイベは、史的批判版の様々なバリエーションを論じるなかで、繰り返し研究版に言及するようになる⁵⁹。決定的なのは、1987年に編集文献学のジャーナル『エディツィオ』第一号に掲載された論考「ドイツ文学の将来的な編集作業の重点」である⁶⁰。このなかでシャイベは、一方では、これまでみてきた論考と同じ調子で、史的批判版の学術的な意義について高らかに論じている。だがその一方で、史的批判版の編集が難しい作家に対しては、研究版を編集することを提案している⁶¹。つまり、ここで研究版は、史的批判版の穴を埋める学術的編集の一形態として位置づけられているのだ。

もちろん、シャイベは史的批判版と研究版の差異を再三強調する。前者が一部の専門

55 Ebd., S. 179.

56 Vgl. ebd., S. 172.

57 Scheibe, Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe, a.a.O., S. 12.

58 Ebd., S. 15.

59 Vgl. Meyer, *Edition und Ausgabentypologie*, a.a.O., S. 153ff.

60 Scheibe, Siegfried: Schwerpunkte künftiger germanistischer Editionsarbeit. Gesehen aus der Perspektive eines Textologen der DDR. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft* 1, 1987, S. 1-14.

61 Ebd., S. 11f.

家に向けたものであるのに対し、後者は「より広い利用者層」⁶²に向けたものである、と。だが、すでに触れたように、シャイベは、史的批判版が現実には限定的にしか実現されえないことを認めている。であれば、彼の主張にしたがえば、学術的編集のほとんどは、実質的には研究版でしかありえないということになるだろう。マイヤーが指摘するように、シャイベの議論では、じつは「研究版が版の類型論のひそかな中心地になっている」のである⁶³。

では、研究版はどのようなものであるべきなのか。マイヤーの議論では言及されていないが、研究版については、1971年の「史的批判版の基本原則」でもすでに触れられている。そこでの研究版の位置づけは次のようなものである。第一に、研究版は、史的批判版の作業を前提とする。すなわち、研究版は、「史的批判版からその素材をできる限り引き継ぐべきである」⁶⁴。だが、第二に、研究版はすべての素材を収録するのではなく、自らの観点からその取捨選択を行う。研究版はあくまでも「ある特定の一般的な目的」⁶⁵に役立つものでなければならないからだ。このように研究版は、一方では史的批判版と同じようにある程度の学術性を担保しなければならない、しかし他方では普及版と同じように一般に向けたものでなければならない、とされている。

では、その「ある特定の一般的な目的」とは何か。それについてシャイベは明示的に語ってはいない。というのも、その目的は、対象となる作家や作品に応じて様々な可能性がありうるからだ。だが、それは、シャイベ自身も認めるように、結果として「原理的には複数のタイプの版が相対峙することになる」⁶⁶事態を意味している。

この議論は、そのまま1987年の論考にも引き継がれている。その結論部においてシャイベは、学術的編集のあるべき姿を次のように描いている。

目指すべきは、将来の科学者が、自分の蔵書の中でたまたま目に入ったひとつの版を無作為に手に取るのではなく、自分の要求とニーズを最も満たし、最も正確な情報を提供してくれる版を目的に合わせて選ぶようになることである。そうなれば、さまざまな種類の版が、本来の役割を果たすことになる。それらはもはや競争することはなく、それぞれ異なる学問的、社会的、文化政治的関心を満たすものとなるだろう。⁶⁷

ここで語られる未来像に史的批判版の姿はない。その代わりに学術的編集のあるべき姿として強調されているのは、多種多様な学術版が存在し、そしてそれを学者が目的に応じて自由に使うという編集の多様性である。この身振りは、これまでみてきたような、史的批判版という理想像を中心に据えるシャイベの編集理論の方向性からは大きく逸脱

62 Ebd., S. 13.

63 Meyer, *Edition und Ausgabentypologie*, a.a.O., S. 156.

64 Scheibe, Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe, a.a.O., S. 11.

65 Ebd., S. 11.

66 Ebd.

67 Scheibe, Schwerpunkte künftiger germanistischer Editionsarbeit, a.a.O., S. 14.

している。むろんこれもまた、ひとつの理想に過ぎないだろう。だが、少なくともこの論考では、シャイベは多様な編集という理想を編集文献学の今後の重要な課題として位置づけている。「この課題は将来に残されたものであり、おそらく以前にも増して重要なものとなるだろう」⁶⁸。

おわりに

本稿は、史的批判版とは何かという問いから出発した。シャイベの理論にしたがえば、それは、作家の作品テキストの歴史をすべて記録する学術的編集の極北として位置づけられる。だが、その高すぎる理想は、実践的にはほとんど実現不可能な代物と言わざるをえない。ゆえに、シャイベ自身も、一種の妥協とはいえ、それに代わる学術的編集として研究版に言及せざるをえなかった。もっとも、それは、実践的には目的に応じた様々なかたちがありえ、理論的にはゆるやかにしか定義されえない。学術的編集をめぐるシャイベの思索は、このように理論と実践のあいだで揺れ動いている。

では、シャイベの議論は今日からみてどのような意味をもつだろうか。ここで考えるべきは、シャイベの時代と現代とでは、編集をめぐる技術的状況が大きく異なるという点だろう。近年のデジタルメディアの発展は、学術的編集の営みにも多大な影響を与え、いまでは特定の作家・作品を対象にしたデジタル・アーカイブの試みは珍しくないものになりつつある⁶⁹。資料をデータ化し、ひとつのサイトないしCD・DVD-ROMに集約する。理論的には、デジタル技術を駆使すれば、あらゆるものがドキュメンテーション可能となるだろう。これは、シャイベの史的批判版の理想が、技術的に実装されつつあることを意味しているようにもみえる⁷⁰。

この認識は、おそらく半分は正しい。シャイベがいう史的批判版とは、すべてをドキュメンテーションするものなのだから。だが、その一方で注意しなければならない。シャイベが学術的編集を論じるとき、そこにはつねに次のような前提がある。すなわち、

⁶⁸ Ebd.

⁶⁹ たとえば2009年には「クラゲンフルト版ムージル全集」がDVD-ROMのかたちで刊行されている。同全集には、計一万頁以上の手稿の画像とそれを活字化したもの、校訂文、解説などがデジタルデータとして収録されており、史的批判版という名はつけられていないものの、編者の一人はその試みを「DVD上の史的批判的編集 (eine historisch-kritische Edition auf DVD)」として紹介している。Vgl. Musil, Robert: *Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften, mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften*. Hrsg. von Walter Fanta, Klaus Amann und Karl Corino. (DVD-Edition) Klagenfurt 2009; Fanta, Walter: Robert Musil – Klagenfurter Ausgabe. Eine historisch-kritische Edition auf DVD. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft* 24, 2010, S. 118-148.

⁷⁰ たとえばリュディガー・ヌト＝コフォトは、デジタルメディアを活用した新たな学術版として「デジタル史的批判版 (die Digitale Historisch-kritische Ausgabe)」について論じている。シャイベの名こそないが、同論文で示されている「デジタル史的批判版」の内容(「全手稿の完全な活字化」、「テキスト生成の完全な提示」、「成立と受容に関する全資料の提示」等)は、ほとんどシャイベの理論を反復したものになっている。Vgl. Nutt-Kofoth, Rüdiger: *Historisch-kritische Ausgabe digital. Eine Reformulierung der neugermanistischen Edition*. In: Fotis Jannidis (Hrsg.): *Digitale Literaturwissenschaft. DFG-Symposium 2017*. Berlin 2022, S. 419-450, bes. S. 440.

編集が目指すのは単なるアーカイブではない、ということである。たしかに彼は史的批判版を博物館に喩えていた。しかし、そこでの彼の力点は、素材をただ集めることではなく、それを分析し整理することにある。じつはシャイベは、自身の論考のなかで、学術的編集はつねに利用者のことを考えなければならないと再三強調している。つまり、資料をあるがままの状態で収録するのではなく、利用者が活用できるよう、それに手を加えて提示しなければならないというのだ。シャイベ自身の言葉を借りれば、学術的編集の成果は「可能な限り単純で機能的な方法によって」⁷¹ 利用者には示されなければならない。ゆえに、1971年の論考では、手稿の単なるファクシミリ化についてやや距離をもって言及している（「写真によるコピー、つまりファクシミリは、学術的編集の必要性にとっては限定的な価値しか持たない」⁷²）。

もっとも、その「方法」についてシャイベが十分な議論を行っていないのも事実である。それでも、彼の問題意識そのものは、現代のわれわれにとってきわめてアクチュアルだと言える。ディルク・ゲッチェが指摘するように、すべてを記録するデジタル・アーカイブの可能性に大きな期待が寄せられているいま、むしろ、記録される資料をどのように編集し利用者のもとへ提供するかという問題の重要性が今後高まっていくだろう⁷³。アーカイブと編集、両者のバランスをどう考えるか——シャイベの議論は、今なお考えるべき問題をわれわれに残している。

参考文献

- Brentano, Clemens: *Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Jürgen Behrens u.a. Stuttgart 1975ff.
- Büchner, Georg: Dantons Tod. In: Ders.: *Sämtliche Werke und Schriften. Historisch-kritische Ausgabe mit Quellendokumentation und Kommentar (Marburger Ausgabe)*. Bd. 3.1.-3.4. Hrsg. von Burghard Dedner und Thomas Michael Mayer. Darmstadt 2000.
- Droste-Hülshoff, Anette von: *Historisch-kritische Ausgabe. Werke, Briefwechsel*. Hrsg. von Winfried Woesler. Tübingen 1978-2000.
- Fanta, Walter: Robert Musil – Klagenfurter Ausgabe. Eine historisch-kritische Edition auf DVD. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft* 24, 2010, S. 118-148.
- Götttsche, Dirk: Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer. In: Rüdiger Nutt-Kofoth, Bodo Plachta u. a. (Hrsg.): *Text und Edition. Positionen und Perspektiven*. Berlin 2000, S. 37-63.
- Grundlagen der Goethe-Ausgabe. Ausgearbeitet von den Mitarbeitern der Goethe-Ausgabe [1961]. In: Siegfried Scheibe: *Kleine Schriften zur Editionswissenschaft*. Berlin 1997, S. 245-

⁷¹ Scheibe, Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe, a.a.O., S. 13.

⁷² Ebd., S. 14.

⁷³ Vgl. Götttsche, Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer, a.a.O., S. 61ff.

- 272.
- Heine, Heinrich: *Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke*. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Hamburg 1973-1997.
- Hoffmann, E.T.A.: *Der Sandmann. Historisch-kritische Edition*. Hrsg. von Kaltërina Latifi. Frankfurt am Main/ Basel 2011.
- Kafka, Franz: *Historisch-kritische Ausgabe sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/ Frankfurt am Main 1995ff.
- Kanzog, Klaus: *Einführung in die Editionsphilologie der neueren deutschen Literatur*. Berlin 1991.
- Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke. Brandenburger Kleist-Ausgabe. Kritische Edition sämtlicher Texte nach Wortlaut, Orthographie, Zeichensetzung aller erhaltenen Handschriften und Drucke*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/ Frankfurt am Main 1988ff.
- Korn, Uwe Maximilian: *Von der Textkritik zur Textologie. Geschichte der neugermanistischen Editionsphilologie bis 1970*. Heidelberg 2021.
- Martens, Gunter: Neuere Tendenzen in der germanistischen Edition. In: Hans Gerhard Senger (Hrsg.): *Philosophische Editionen. Erwartungen an sie – Wirkungen durch sie. Beiträge zur VI. Internationalen Fachtagung der Arbeitsgemeinschaft philosophischer Editionen, 11.-13. Juni 1992 Berlin* (= Beihefte zu editio 6). Tübingen 1994, S. 71-82.
- Meyer, Heinrich: *Edition und Ausgabentypologie. Eine Untersuchung der editionswissenschaftlichen Literatur des 20. Jahrhunderts*. Bern 1992.
- Musil, Robert: *Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften, mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften*. Hrsg. von Walter Fanta, Klaus Amann und Karl Corino. (DVD-Edition) Klagenfurt 2009.
- 明星聖子・納富信留編『テキストとは何か—編集文献学入門』、慶應義塾大学出版会、2015年。
- Nutt-Kofoth, Rüdiger: Goethe-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*. Tübingen 2005, S. 95-116.
- Nutt-Kofoth, Rüdiger: Historisch-kritische Ausgabe digital. Eine Reformulierung der neugermanistischen Edition. In: Fotis Jannidis (Hrsg.): *Digitale Literaturwissenschaft. DFG-Symposium 2017*. Berlin 2022, S. 419-450.
- Otto, Ulrich: Dichterwerkstatt oder Ehrengrab? Zum Problem der historisch-kritischen Ausgaben. Eine Diskussion. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 33, 1989, S. 3-6.
- Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Eine Einführung in Methode und Praxis der Edition neuerer Texte*. Stuttgart 1997.
- Plachta, Bodo: Ernst Grumach und der ‚ganze Goethe‘. In: Roland S. Kamzelak/ Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta (Hrsg.): *Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Biografische, institutionelle, intellektuelle Rahmen in der Geschichte wissenschaftlicher Ausgaben neuerer deutschsprachiger Autoren*. Berlin/ Boston 2011, S. 219-242.
- Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der*

- neugermanistischen Edition*. Stuttgart 2020.
- Scheibe, Siegfried: Zu Problemen der historisch-kritischen Edition von Goethes Werken. Aus der praktischen Arbeit der Akademie-Ausgabe. In: *Weimarer Beiträge. Zeitschrift für deutsche Literaturgeschichte* 6. 1960, S. 1147-1160.
- Scheibe, Siegfried: Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe. In: Gunter Martens/ Hans Zeller (Hrsg.): *Texte und Variationen. Probleme ihrer Edition und Interpretation*. München 1971, S. 1-44.
- Scheibe, Siegfried: Schwerpunkte künftiger germanistischer Editionsarbeit. Gesehen aus der Perspektive eines Textologen der DDR. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft* 1, 1987, S. 1-14.
- Scheibe, Siegfried: Von der Entstehungsgeschichte, der Textgeschichte und der zeitgenössischen Wirkungsgeschichte. In: Siegfried Scheibe/ Waltraud Hagen/ Christel Laufer/ Uta Motschmann (Hrsg.): *Vom Umgang mit Editionen. Eine Einführung in Verfahrensweisen und Methoden der Textologie*. Berlin 1988, S. 160-204.
- Scheibe, Siegfried: Plädoyer für historisch-kritische Editionen. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 34, 1990, S. 406-415.
- Wieland, Christoph Martin: *Wielands Werke. Oßmannstedter Ausgabe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Klaus Manger und Jan Philipp Reemtsma. Berlin/ New York 2008 ff.

The Concept of the Historical-Critical Edition: Siegfried Scheibe's Editorial Theory

Shunsuke MORIBAYASHI

The German concept of the “historical-critical edition” (“historisch-kritische Ausgabe“) has long been the subject of theoretical debate in German Textual Scholarship (Editionsphilologie / Editions-wissenschaft). This label is also being used for the currently published editions of various authors. However, the definition of the label remains unclear. What is the historical-critical edition? What does it aim to achieve and how? With these questions in mind, this study examines the theoretical discussions regarding this edition, primarily through the writings of East German philologist Siegfried Scheibe, who, since the 1970s, has consistently attempted to theorize the historical-critical edition as the ideal model of scholarly editing. Further, this study analyzes how the historical-critical edition has been defined as a complete documentation of the author's works, how it has been idealized as a basis for literary studies, and how its position in German Textual Scholarship in relation to other types of editions has changed.

研究版とは何か

——ボード・プラハタの理論と実践から

富塚 祐

はじめに

ドイツの編集文献学においては、様々な版の種類 (Ausgabentypen) の類型と、それに応じた具体的な編集方針をめぐる議論が続けられてきた。その前提には、人文学のテキストの読者が持つ知識や学術編集版 (Edition) に対する要求には多様な水準があるという認識がある。そのような中で、たとえば、研究者に向けては「史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe)」という名の版が、研究者や学生を含む、学術的、文学的な関心を有する読者に向けては「研究版 (Studienausgabe)」が、一般読者向けには「普及版 (Leseausgabe)」と呼ばれる版がそれぞれ想定されてきた¹。他にも様々な版が類型化される中でも、当該分野でこれまで主たる問題となってきたのは、研究の基盤となる史的批判版のあり方であった。特に現在では、紙ではなくデジタルで、すなわちデータベースとしての史的批判版のあり方をめぐる議論が展開されている²。

しかし、史的批判版以外の版が必ずしもなおざりにされてきたわけではない。1989年の『シラー年鑑』に掲載されたウルリヒ・オットーの議論がその一例である。オットーは、時間的、経済的に莫大な費用を要求する史的批判版を今後も製作する必要があるのかどうか、その意義を問い直そうと呼びかけた。そしてそこでは、学術的な責任のもとで編集された研究版が、史的批判版に代わる現実的に製作可能な学術編集版として示唆されている³。この議論に対して翌年の『シラー年鑑』には、史的批判版を擁護する論者が応答として寄せられたが⁴、実際に史的批判版の製作は主に経済的な理由からとん挫する危機に瀕しているという報告もある⁵。また、史的批判版の実現は部分的なものに留

[付記]

本稿は、成城大学国際編集文献学研究センター主催第1回ワークショップ「ドイツ編集文献学を学ぶその1」(2022年6月18日)での口頭発表「学習版とは何か」に基づき、大幅に加筆修正したものである。ご助言、ご指摘賜った方々に深謝申し上げる。

¹ Vgl. Bohnenkamp, Anne: Textkritik und Textedition. In: Heinz Ludwig Arnold und Heinrich Detering (Hrsg.): *Grundzüge der Literaturwissenschaft*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1996. S. 179-204, hier S. 193f.; Göttische, Dirk: Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer. In: Rüdiger Nutt-Kofoth u. a. (Hrsg.): *Text und Edition. Positionen und Perspektiven*. Berlin: Erich Schmidt Verlag 2000. S. 37-63, hier S. 53.

² Vgl. 明星聖子: 「編集文献学の可能性」『書物学』第17巻、2019年、2-7頁。

³ Otto, Ulrich: Dichterwerkstatt oder Ehrenggrab? Zum Problem der historisch-kritischen Ausgaben. Eine Diskussion. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. 33, 1989. S. 3-6.

⁴ Vgl. *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. 34, 1990, S. 398-428.

⁵ Vgl. Roloff, Hans-Gerd: Beobachtungen zum Typ ‚Lese-‘ bzw. ‚Studien-Ausgaben‘. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft*. 16, 2002. S. 133-142, hier S. 137.

まっており、研究底本に研究版が用いられている作家、作品の例も存在する⁶。このような事情を考えると、史的批判版のみならず、研究版にももっと目が向けられてよいだろう。

以上の関心から本稿は、研究版の編集をめぐる問題について考察する。特に、ボード・プラハタの議論と編集実践から考えたい。彼が1997年と2020年の2度著した、『編集文献学 (Editionswissenschaft)』というタイトルの書籍において、研究版はどのようなものとして論じられているのか⁷。また、彼が近年編集した、研究版の名を冠した刊行物ほどのような編集を経たものなのか。この2点を検証することで、史的批判版に対する製作コストの低さにとどまらない、より積極的な研究版の意義を考察する。

1. プラハタの議論 (1) ——1997年の著書にみる基本的論点

プラハタは、1997年の著書『編集文献学——近現代のテキストを学術的に編集する方法と実践への入門』で、研究版についてはまず、先行する史的批判版に基づいたものと、そうでないものに分けて論じている⁸。

彼は史的批判版に基づいた研究版が、研究版のあるべき姿である旨を述べる。その中でも、理想的なケースはヘルダーリンの小シュトゥットガルト版 (Kleine Stuttgarter Ausgabe) という名の著作集——詳しくは後述する——であるという。小シュトゥットガルト版は大シュトゥットガルト版 (Große Stuttgarter Ausgabe) に基づいて刊行された。これらの書名には研究版あるいは史的批判版という名称は見られないが、プラハタは大シュトゥットガルト版を「史的批判的な」ものとして捉え、小シュトゥットガルト版を研究版の一例とみている⁹。いわく、大シュトゥットガルト版は、テキスト批判、すなわ

6 たとえばゲーテの場合、1980年代から90年代にかけて出版されたフランクフルト版 (Goethe, Johann Wolfgang: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von Dieter Borchmayer u. a. 45 Bänden. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1985-1998.) およびミュンヘン版 (Ders.: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe*. Hrsg. von Karl Richter u. a. 33 Bänden. München: Carl Hanser Verlag 1985-1998.) は研究版とみなされており、これらが近年、研究底本として用いられている。Vgl. Nutt-Kofoth, Rüdiger: Goethe-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 2005. S. 95-116, hier S. 108ff.; 矢羽々崇: 「著作集編集と『古典』の成立——ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』」明星聖子・納富信留編『テキストとは何か——編集文献学入門』慶應義塾大学出版会、2015年、37頁。

7 これら2冊は出版社、判型の異なる別の書籍である。書誌情報については注8及び23を参照。

8 以下特に言及がない限り、本稿で述べられる1997年時点でのプラハタの見解は、以下の資料による。Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Eine Einführung in der Methode und Praxis der Edition neuerer Texte*. Stuttgart: Reclam 1997. S. 16-19. なお本書は2006年と2013年に増補改訂版が出版されている。

9 大シュトゥットガルト版は少なくともヘルダーリンのテキスト編集史においても史的批判版のひとつとして紹介されている。また、別の作家の史的批判版のモデルとして扱われてもいた。Vgl. Hoffmann, Dierk O. und Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*. a. a. O. S. 199-245, hier S. 206-221. 小シュトゥットガルト版を研究版として明示している文献は筆者が確認した限りみられなかった。プラハタによる独自の判断である可能性があり、本稿はそれに依拠しているが、ここで書名と版の種類の問題について触れたい。個別の学術編集版が、版としていかなる種類のものに属するののかは、判断が難しい。たとえばカフカの場合、史的批判版の名を冠した現在刊行中の全集 (Kafka, Franz: *Historisch-kritische Ausgabe*

ち「テキストの伝承を、その信頼性に関して学術編集的に検証すること」¹⁰を経たテキストを提供している。ゆえに、それを受け継いでいる小シュトゥットガルト版が研究版として理想だと述べているのである。すなわち、史的批判版に基づいた研究版を理想視する理由には、史的批判版がテキスト批判の原則に基づいたテキストを提供している、という前提がある。

他方で彼は史的批判版に頼れない研究版の存在についても言及している。いわく、それは編集上の先駆的な仕事を担う場合があり、史的批判版が編集上の問題を最終的に解決するまで、「暫定版 (Interims-Ausgaben)」として機能する。

続いて彼は、研究版が達成すべき編集上の基準について論じる。そこで論じられるのは、第一に、このような版は先にみたように、テキスト批判の原則に則ったテキストを提示する、という目的が達成されるものでなければならない、ということである。その際、「テキストの稿 (Textfassungen)」のすべてが完全に再現されるわけではないという留保が付けられる。なぜなら、完全な再現は史的批判版に委ねられるべきものであるとしているからである。対して研究版においてはこのような作業は常に選択的に行われるという。

次に問題になるのは、テキストに付随する「注釈 (Kommentar)」である。注釈は研究版にとっては不可欠の構成要素であり、ここでは、テキストに書かれている歴史的状況を説明するために必要な事実に関する言及や、現在のテキストの理解、競合する解釈上のアプローチについての情報が提供される、という。この、注釈を付して、テキストの分析的・解釈的側面を前面に押し出すことは、史的批判版とは対照的な研究版の目的として掲げられる。というのは、史的批判版の最重要目的は「歴史的、伝記的、私的な要素からなる複雑性の中にある生成の過程を、可能な限り包括的にドキュメンテーションし、説明する」¹¹ことにあるとプラハタは理解しているからである。すなわち、一言で「注釈」といっても、史的批判版は創作過程の歴史にまつわる情報を提供することに重きを置くのに対し、研究版はテキストの内容に関わる情報の提供に重点を置いている。

研究版の編集に関して最後にプラハタは、テキストの表記に関する手入れの問題を取り上げる。そこでまず論じられるのは、古い正書法や句読法に基づいて書かれたテキストを、現代の規則に合わせるために手を入れるか否か、という点についてである。いわく、この問題は「未だに議論が分かれている」。一方では、1985年にドイツ古典作家叢書シリーズが、1700年から1900年までのテキストの場合は現代の綴りに合わせるよう手を入れるという方針を示したように、表記の「現代化」を是とする立場がある。こう

sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Steangle. Frankfurt am Main: Stroemfeld/ Roter Stern, Göttingen: Wallstein Verlag [bis 2020] 1997-)は、その内実に鑑みて「写真版」と呼ぶべきものであるとされる。Vgl. 明星聖子:「編集の善悪の彼岸——カフカと草稿と編集文献学」『文学』第11巻第5号、2010年、188-202頁。つまり、書名に掲げられている版の種類は必ずしも鵜呑みにできるものではない。また、大/小シュトゥットガルト版がそうであるように、書名に版の種類が入っていない場合、理論や編集史を踏まえ、第三者によって判断が下されることがあり、そうした状況を踏まえて各版の位置づけを理解する必要がある。

¹⁰ Plachta: a. a. O. S. 140.

¹¹ Ebd. S. 14.

した立場は、現在用いられている表記にあらためることで読者の関心を高める、すなわち商品としての適性を高めることができると主張する、という。他方、このような手入れに反対する立場は、「古く」異質な綴りや句読点の打ち方は、古典的なテキストを歴史的なものと理解するためのしるしとして機能すると主張する、と整理している。また、このような議論に関連して、過去に用いられていた音韻構造に手を入れるか否か、という議論の存在も紹介するのだが、この点については歴史的な音韻形式が意味する機能を曖昧にすることが多く、その結果、テキストが第三者の影響を受けるということを理由に、「受け入れがたい」ものであると、その立場を明らかにしながら論じている。

みてきたように、1997年時点のプラハタは研究版の編集方針について、5点にわたって論じている。史的批判版に基づくものが望ましいこと、テキスト批判を経たテキストを提供すること、テキストの解釈にかかわる注釈を付すこと、そして正書法や句読法に基づいた手入れについては議論が分かれていること、音韻構造については手を入れるべきではないこと、である。

2. 研究版の「理想」としての小シュトゥットガルト版

先に確認した通り、プラハタは史的批判版に基づいた研究版、特にその中でもヘルダーリンの小シュトゥットガルト版を理想とみていた。この小シュトゥットガルト版について、ここで少し詳しくみてみたい。

小シュトゥットガルト版は、1944年から1962年にかけて、全6巻で出版された。フリードリヒ・バイスナーが編集したこの版は、同じくバイスナー編集の大シュトゥットガルト版(1943-1985年、全8巻)に基づくものである。

この小シュトゥットガルト版は、大シュトゥットガルト版の第6巻までを再編したものである。これら6巻のうち、大シュトゥットガルト版は第3巻『ヒュペーリオン』と第5巻『翻訳』以外はテキスト(Text)篇と異同(Lesarten)篇の2冊1組であるのだが、小シュトゥットガルト版として再編するにあたり、これら2冊はひと回り小さな1冊にまとめられている。そしてその際、異同篇の情報はかなりの程度省略されている。

大シュトゥットガルト版の異同篇では、作品ごとに、まず作品の成立時期に関する情報が記述されている。続いて、「伝承(Überlieferung)」という項目が立てられ、手稿および初出の媒体に関する情報が与えられる。続く項目「異同(Lesarten)」では、バイスナーが最終的に構築したテキストと初出および手稿上のテキストとの相違や、手稿上の修正の形跡が示され、「解説(Erläuterungen)」という項目において、語が示している意味などの、内容に関する説明が与えられている。

これらの情報が小シュトゥットガルト版ではどうなっているのか。例として、後期詩のひとつで、1802年から1805年頃に成立したと見られている「追想(Andenken)」の場合を確認しよう¹²。この詩が収められているのは、第2巻『1800年以降の詩』である。

¹² 「追想」の成立時期については以下を参照。矢羽々崇：「4つのヘルダーリン著作集——史的批判版の実際」『書物学』第17巻、2019年、27-32頁。

「追想」の場合、大シュトゥットガルト版の異同篇に記載されていた情報のうち、小シュトゥットガルト版に収められているのは、「解説」部分のみである。すなわち、この詩の成立時期に関する記述や、「伝承」「異同」部分は小シュトゥットガルト版には収められていない。そして、その「解説」においても、多くの部分が省略されている。大シュトゥットガルト版で約5ページ半にわたっていた、この詩の「解説」部分は、小シュトゥットガルト版では一回り小さな判型で2ページ半弱にまとめられている¹³。

小シュトゥットガルト版におけるこの省略については、巻末で「簡略化した」と述べられているのみであり、具体的な方針については明言されていない¹⁴。とはいえ、省略されている部分を見てみるとその方針はある程度推測できる。まず、作品の成立時期に関する記述、「伝承」「異同」が全く収められていないことから、小シュトゥットガルト版は内容理解に関わる解説のみを提供する、という方針を打ち出していると考えられる。また、「解説」部分のうち省略されている箇所については、ヘルダーリンの著作以外の文献が引用されている記述、また、ドイツ語以外の言語、この場合は特にギリシャ語を用いて説明している箇所が目立つ。対してヘルダーリンの他の作品を引用しながらなされている解説については残されていることから、小シュトゥットガルト版に収録されている範囲で相互に参照できる部分、そしてドイツ語で書かれている部分に限って「解説」部分を残したのではないかと思われる。

この点については、確かにプラハタが論じていた注釈のあり方に近い。彼によれば、テキストの内容に関わる注釈は研究版の核心をなすのであった。小シュトゥットガルト版の場合、部分的に省略されているとはいえ、内容にかかわる解説を残している点はおそらく彼にとって十分に評価できる点であったはずだ。また、大シュトゥットガルト版にあった「伝承」や「異同」という項目が小シュトゥットガルト版でカットされている点についてはプラハタにとってさしたる問題ではなかったと思われる。なぜなら、この部分は史的批判版が注力すべき「高度に専門的な」¹⁵ものだからである。よって、小シュトゥットガルト版にこうした情報を収めずに、大シュトゥットガルト版でのみ提示するという切り分けがプラハタにはむしろ好例と映ったのだろう。

続いて確認したいのは、議論が分かれているとされた、テキストの表記である。小シュトゥットガルト版のテキストは、基本的には大シュトゥットガルト版に収められているものを引き継いでいるが、異なる部分もある。それは、正書法や句読法に基づく手入れが行われているか否かに起因する。

小シュトゥットガルト版の巻末には、刊行時の正書法に基づいてテキストに手を入れていること、アポストロフは特定の場合を除いて削除していること、句読点の打ち方についても当時の語調を維持しつつも今日、つまり刊行当時の用法にも近づけているという点が、大シュトゥットガルト版に対する違いとして挙げられている。ただし、音

¹³ Vgl. Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800. Lesarten*. Bd. 2.2. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1951. S. 800-807.; Ders.: *Sämtliche Werke (Kleiner Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800*. Bd. 2. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1953. S. 465ff.

¹⁴ Hölderlin: *Sämtliche Werke (Kleiner Stuttgarter Ausgabe)*. a. a. O. S. 539.

¹⁵ Plachta: a. a. O. S. 16.

韻や方言については元の状態を反映しているとのことである¹⁶。

再び「追想」を例に確認しよう。表1は、「追想」の第5節——この詩においては唯一手稿が遺っている部分である——の、大シュトゥットガルト版と小シュトゥットガルト版の表記を写して並べたものである。異なっているのは、Spiz'/ Spitz、prächt'gen/ prächtgen、giebt/ gibt、Gedächtniß/ Gedächtnis、Lieb'/ Liebの、綴りとアポストロフの有無である。大シュトゥットガルト版掲載のテキストをそのまま小シュトゥットガルト版が引き継いだという形にはならないが、こうした手入れが行われることで、読者に馴染みのある綴りでテキストを提供することになる。

Nun aber sind zu Indiern Die Männer gegangen, Dort an der luftigen <i>Spiz'</i> An Traubenbergen, wo herab Die Dordogne kommt, Und zusammen mit der <i>prächt'gen</i> Garonne meerbreit Ausgehet der Strom. Es nehmet aber Und <i>giebt Gedächtniß</i> die See, Und die <i>Lieb'</i> auch heftet fleißig die Augen, Was bleibet aber, stiften die Dichter.	Nun aber sind zu Indiern Die Männer gegangen, Dort an der luftigen <i>Spitz</i> An Traubenbergen, wo herab Die Dordogne kommt, Und zusammen mit der <i>prächtgen</i> Garonne meerbreit Ausgehet der Strom. Es nehmet aber Und <i>gibt Gedächtnis</i> die See, Und die <i>Lieb</i> auch heftet fleißig die Augen, Was bleibet aber, stiften die Dichter.
--	---

表1 大シュトゥットガルト版(左)と小シュトゥットガルト版(右)における「追想」第5節の比較。それぞれで異なる語を斜体で表記した(筆者による)。出典：Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800. Text. Bd. 2.1.* Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1951. S. 189.; Ders.: *Sämtliche Werke (Kleine Stuttgarter Ausgabe).* a. a. O. S. 197f.

小シュトゥットガルト版は一言でまとめれば、正書法や句読法に基づく手入れの行われたテキストと、その解釈にかかわる注釈を提供するものであった。これが、プラハタのみる理想の一例である。

3. プラハタ編集の研究版——レッシング『賢者ナータン』を例に

先に取り上げた1997年の著書発表後、プラハタは実際に研究版の編集に取り掛かっている。そのうち特に近年のものに焦点を当て、上記でみた理論的記述や、そこで好例とみられていた小シュトゥットガルト版と照らし合わせながら、編集方針を確認したい。

シュトゥットガルト研究版 (Stuttgarter Studienausgaben) というシリーズがある。アントン・ヒアーゼマンという出版社が手掛けているこのシリーズは、2017年から2023年11月現在までに、6冊の研究版を出版している。そのうちプラハタは、ゲーテ『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(2017年)、ゲーテほか『エグモント』(2019年)、レッ

¹⁶ Hölderlin: *Sämtliche Werke (Kleiner Stuttgarter Ausgabe).* a. a. O. S. 539.

シング『賢者ナータン』(2023年)の3冊の編集に携わっている¹⁷。本稿ではそのうち『賢者ナータン』の編集の大枠をつかむ形で、プラハタの編集実践を検討する。

まず確認しなくてはならないのは、プラハタが編集した『賢者ナータン』は、史的批判版を含む何らかの先行する版に基づいているものではないということである。つまり、これは彼があるべき姿とみていた形とは異なっている。これは、おそらく以下のことに起因する。すなわち、理論上は史的批判版が提示したテキストを受け継ぐ研究版が「理想」であるとしても、実際のレベルにおいては、先行する史的批判版を無批判に受け継ぐのではなく、むしろそれが有する問題点を解決することに主眼を置いた版が研究版として位置づくということも考えられる¹⁸。というのは、作家や作品にかかわらず、史的批判版は必ずしも無批判に読者、編集者に受容されるものではなく、むしろ都度批判の対象となり得るからである。こうした前提に立つと、史的批判版を編集した者が同様に研究版にも着手しない限りは、研究版の「理想」を実現することは困難であろう。実際、筆者が確認した限り、史的批判版に基づいて対を成すような構造の研究版は、ヘルダーリンの大／小シュトゥットガルト版以外、ほとんど例がない¹⁹。よって、当該作品の史的批判版を編集していないプラハタが、既存の史的批判版と対を成す研究版の編集を行わなかったのは不自然ではないように思われる。プラハタが既存の『賢者ナータン』の版のどのような点を問題視し、乗り越えようとしているのか、彼の言葉を借りればどのような点で編集上の先駆的な仕事を行っているのかについてここでは論じる準備はないが、少なくとも、自らが新たな編集作業を行うという選択を行ったということはわかる。

内容の検討に移ろう。この研究版のテキストは、1779年の初版に基づいて構築されたものからはじまる。そこでは、同年に出版された別の出版稿との異同が、脚注形式で示されている。続いて、「場面 (Szene)」「抜粋、メモ (Exzerne, Notizen)」「場面草案

17 Goethe, Johann Wolfgang: *Götz von Berlichingen*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2017.; Goethe, Johann Wolfgang u. a.: *Egmont*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2019.; Lessing, Gotthold Ephraim: *Nathan der Weise*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2023. なお本シリーズは大シュトゥットガルト版／小シュトゥットガルト版と直接的な関係はない。

18 たとえば、1990年代以降のヘルダーリン・テキストの近年の編集実践例は、それまでの史的批判版の成果を踏まえつつ、新たに企図された研究版ないし普及版として解されている。Vgl. Metzger, Stefan und Kreuzer, Johann: Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): *Hölderlin Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. 2., Aufl. Berlin: J. B. Metzler Verlag 2020. S. 3-14.

19 ニーチェ全集、書簡集には、史的批判版ではなく批判版に基づいた「批判的学習版」がある。Nietzsche, Friedrich: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Hrsg. von Giorgio Colli und Mozino Montinari. Neuausgabe. München /New York: Deutscher Taschenbuch Verlag 1999.; Ders.: *Sämtliche Briefe in 8 Bänden. Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von Giorgio Colli und Mozino Montinari. München / New York: Deutscher Taschenbuch Verlag 2003. これらがどのようなものであるのかについては、今後の検討課題としたい。なお、プラハタは大／小シュトゥットガルト版と類似した組み合わせとして、テキスト篇 (Textband) と資料篇 (Apparatband) の2冊が対になった批判版カフカ全集 (Kafka, Franz: *Schriften Tagebücher Briefe. Kritische Ausgabe*. Hrsg. von Malcolm Pasley u. a. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag 1982-) と、そのうちテキスト篇のみが切り取られたペーパーバック版を挙げているが、こちらは小シュトゥットガルト版の例とは異なり、資料篇に収められている情報が一切ない。Plachta: a. a. O. S. 16.; z. B. Kafka, Franz: *Der Proceß. Roman. in der Fassung der Handschrift*. Hrsg. von Malcolm Pasley. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag 1994.

(Szeneentwürfe)」「序文の草案 (Entwürfen zu einer Vorlede)」が提示されている²⁰。

プラハタの理論に鑑みてこれらのテキストに関して取り上げたいのは、その表記についてである。ここでは、現代の正書法や句読法に則った手入れは行われておらず、そのままの形が提示されている。つまり、プラハタが理想的な例とした小シュトットガルト版とは異なっているのである。1997年の著作では彼の立場は明らかではなく、少なくともこのような手入れには強く反対していないものと思われたが、それから20年以上を経て行われた編集作業においては正書法や句読法に基づくテキストの手入れは行わず、当時の表記に従う、という方針を選択していることがわかる。

当該研究版の後半部、「補遺 (Anhang)」についても確認しよう。この部分では、目次に沿っていえば、「この版について (Zu dieser Ausgabe)」「生成と伝承 (Entstehung und Überlieferung)」「テキストの土台とテキスト形態 (Textgrundlage und Textgestaltung)」「文受 (Wirkung)」「文献 (Literatur)」について記述されている。ここでは、当該作品が執筆、出版されるまでの経緯や当時の影響、そしてこの研究版の編集方針などがまとめられている²¹。その代わりに、プラハタが述べていた「現在のテキストの理解や競合する解釈上のアプローチ」についての情報は提供されていない。彼のかつての理論的記述、そして小シュトットガルト版とは異なる部分である。

このようなプラハタの方針は別の出版社から刊行されたテキストの編集においても一貫している。たとえば2020年にレクラムから出版されたレッシング『ミンナ・フォン・バルンヘルム』は、おそらく紙幅の関係と思われるが、『賢者ナータン』に比べると「補遺」は確かに簡素なものになってはいる。しかしながら、やはりそこで示されているのは「この版について」「伝承」「テキストの土台とテキスト形態」「生成」「文献」、それに加えて「初演 (Uraufführung)」についてである²²。

プラハタ編集の研究版は、彼が1997年に著した研究版に関する記述、そしてそこで好例とみられていた小シュトットガルト版とは異なる部分があった。これは、著書の発表から20年以上の時を経て、彼が実際に編集作業に携わる中で、考え方が変化していったためと思われる。

4. プラハタの議論 (2) ——2020年の著書における選択肢の拡張

プラハタが研究版を編集するにあたっては、1997年の著作で紹介されていたものとは異なる編集アプローチが採用されていた。このことは、2020年の著作『編集文献学——近現代ドイツ語ドイツ文学の学術版編集の歴史、方法、実践へのハンドブック』にも反映されているようにみえる²³。

²⁰ Vgl. Lessing: *Nathan der Weise*. a. a. O. S. 3-191.

²¹ Vgl. ebd. S. 193-256.

²² Vgl. Lessing, Gotthold Ephraim: *Minna von Barnhelm. Studienausgabe*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Reclam 2020. S. 133-159.

²³ 以下で述べられる2020年のプラハタの見解は、下記の資料による。Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag

その記述は、やはり史的批判版に基づいている研究版が理想的なケースであるという旨からはじまる。そしてそうではない場合は、研究版は先駆的な編集作業を担うことになり、暫定版として機能する、とする。このことについて変わりはない。ただし、史的批判版に基づいた研究版の例として挙げられていたはずの小シュトゥットガルト版への言及が消えている。

続いて、研究版は19世紀以来、出版社が主導となって製作されるものであり、それゆえ手ごろな価格でなければならず、紙幅に制限が加わる、という、1997年の著作にはなかった記述が追加される形で、研究版が選択的な編集を経たものである旨が述べられる。この点についても若干の追記はあるが、研究版においては編集は選択的になる、という論旨に変わりはない。

続いて、研究版に求められる編集上の要件が説明される。それはすなわち、批判的に検証されたテキストが提供されること、そして不可欠のものとして、詳細な注釈が加えられることである。基本的な部分については1997年のものと変わらないが、注釈については、そのあり方について、ふたつの方向性を分ける形で新たな記述がなされている。一方では、1997年の記述にあったように、テキストに書かれている歴史的状況を説明するために必要な事実に関する言及、また、テキストの現在の理解や競合する解釈上のアプローチへの言及、という要素を挙げる。同時に「注釈は伝承、生成、受容に関するドキュメンテーションに集中するということもあり得る」。すなわち、テキストの内容理解に直接かかわるものではなく、テキストが作者によって書かれてからわれわれの手元に届くまでの歴史や、テキストがどう読まれてきたかという問題に関する情報を提供する、という選択肢について新たに論じているのである。彼が近年編集した研究版に収録されているのは、この書き加えられた部分であることに気が付く。

最後に彼が問題とするのは、やはり表記に関する手入れである。先ほどと同じく正書法や句読法に基づく手入れについてみていこう。ここでは、研究版は今日、歴史的なオリジナルのテキストを「原器」に合わせることを自覚している、すなわち過去の正書法や句読法に基づいて書かれたテキストはそのままにすべし、という見解が理論上は合意に達していることが示される。また、1988年の『エディツィオ』に掲載された、研究版における「学術的地位を著しく低下させる」「あらゆる種類の現代化」を非難する「出版社への勧告」を援用する²⁴。しかしやはり、「現代化」されたテキストを提供する研究版も存在しており、こうした立場は手入れを通じた、読者の関心、ひいては売れ行きの向上を期待している旨を述べる。ここで、プラハタがどちらかの立場を明確に打ち出しているようには読むことができない。実際に研究版を編集するに際してこうした手入れは行わなかったにもかかわらず、である。また、この著作を出版する前にプラハタが著した論考においては、1997年の著作が「できるだけ慎重に、どちらかの側にはっきりと立つことなく問題を提示しようとした」ものであるがゆえに、自らの立場を明らかに

2020. S. 17ff.

²⁴ Vgl. [Zeller, Hans u. a.]: Empfehlung an Verlage von Studienmausgaben. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editions-wissenschaft*. 2, 1988. S. 228.

しなかったことを省みつつ、「歴史的テキストを現代化する介入から離れよ」と明言している²⁵。よって、彼自身が「現代化」に反対しているのは明らかである。しかし2020年の著作でこの立場は明示されていない。その背景については以下のように推測してみたい。つまり、正書法や句読法に基づく手入れを行うことについては、彼自身は行わない、という立場を取るものの、その選択肢の存在自体は認めているのではないか。

他方で音韻に関する手入れについては議論の存在こそあるが、これについては変わらず、明確に「容認できない」ものである、とする。

『編集文献学』と題した2度目の著作を発表するにあたり、研究版に関する記述には若干の変更がみられた。それは主に、注釈について、伝承、生成、受容の歴史に関する説明に集中するタイプの研究版のあり方を新たに取り上げることで、研究版の編集における選択肢を拡張している点にみられる。そしてこの記述を追加するにあたっては、彼自身による研究版の編集経験、構想が影響を与えているように思われる。

この著作において小シュトゥットガルト版への言及が消えた理由もおそらくここにある。すなわち、小シュトゥットガルト版は、史的批判版とみなしうる大シュトゥットガルト版に基づいているとはいえ、そこで採用された編集方針はあくまで複数ある選択肢から選び取られたものである。2020年の著書は、小シュトゥットガルト版を含め、何らかの選択肢を選び取っている実際例への言及を減らすことで、研究版の編集における選択肢の広さを強調しようとしているのではないだろうか。

おわりに

プラハタの2020年の著書に即せば、研究版の編集方針にはいくつかの選択肢がある。

まず、先行する史的批判的に基づいて研究版を製作するか、まったく新たな研究版の編集に着手するか、という選択肢が存在する。

そして、注釈のあり方について。彼は、テキストの内容、解釈に関わる点に集中するか、伝承、生成、受容といった、テキストの歴史についての説明に集中するか、という、ふたつの方向性を提示している。

続いて、テキストの表記、すなわち、正書法や句読法に基づく手入れが問題となる。こうした手入れを行って、読者の関心、ひいては商品としての売れ行きの向上を期待するか、過去に書かれたテキストの歴史性をそのままの形で伝えるか、という選択肢がある。

この点に、研究版の意義をみたいと考える。すなわち、研究版は、過去の編集史を受けて、さまざまなあり方を考えることができるのであり、その多様性に利点を有しているのだ、と。

いま仮に、ある作家や作品の研究版を新たに編集することにしよう。その編集史を辿った時に、先行する史的批判版があることが判明した場合は、それを受け継ぐか

²⁵ Plachta, Bodo: Nochmals. Für eine historische Edition! In: Peter Eisenberg (Hrsg.): *Der Jugend zuliebe. Literarische Texte, für die Schule verändert.* Göttingen: Wallstein Verlag 2010. S. 95-103, hier S. 95f und 101.

どうか、あるいは受け継ぐとして、どのように受け継ぐのか、判断を下すことになる。また、すでに内容理解にかかわる注釈が充実した版が存在している場合は、伝承や生成といった問題の記述に注力した注釈を新たに提供することになるだろう。もちろん、逆の場合もあり得る。

正書法や句読法に基づく手入れに関しても同様である。ここでは、想定読者という問題から考えてみたい。研究版の想定読者が研究者や学生を含む、学術的、文学的な関心を有する者であることは冒頭で述べた。プラハタは論じていないが、そのうち、研究者の利用を中心に据えるか、学生や初学者が手に取ることを第一に考えるか、という選択肢があるはずだ。研究者の利用を第一に考えた、研究底本としての性格が強い研究版を作ろうとした場合、過去に用いられていた表記はそのまま残しても、研究者の読みの妨げになるということは考えにくい。よって、編集者という第三者の手入れを最大限排した、作家が書いたままの綴りでテキストを提供する方針を打ち出すことができるだろう。また、中心となる想定読者を学生や初学者と設定した場合、読みやすさを重視して、むしろ手入れを行った方がよい、と考えることもできるかもしれない。こうしたアプローチの複数性が、研究版と一言にいても、何巻にもわたる、いわゆる全集と言えるような規模のものから、薄く小さなレクラム文庫版にまで広がりがあり、その内容もさまざまである背景であろう。

研究版の意義は、史的批判版と比べた時の実現可能性の高さにとどまらない。編集アプローチの多様性にこそ、その意義を有している。

参考文献

- Bohnenkamp, Anne: Textkritik und Textedition. In: Heinz Ludwig Arnold und Heinrich Detering (Hrsg.): *Grundzüge der Literaturwissenschaft*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1996. S. 179-204.
- Goethe, Johann Wolfgang: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von Dieter Borchmayer u. a. 45 Bänden. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1985-1998.
- : *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe*. Hrsg. von Karl Richter u. a. 33 Bänden. München: Carl Hanser Verlag 1985-1998.
- : *Goetz von Berlichingen*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2017.
- Goethe, Johann Wolfgang u. a.: *Egmont*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2019.
- Göttsche, Dirk: Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer. In: Rüdiger Nutt-Kofoth u. a. (Hrsg.): *Text und Edition. Positionen und Perspektiven*. Berlin: Erich Schmidt Verlag 2000. S. 37-63.

- Hoffmann, Dierk O. und Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 2005. S. 199-245,
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe)*. *Gedichte nach 1800*. Text. Bd. 2.1. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1951.
- : *Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe)*. *Gedichte nach 1800*. *Lesarten*. Bd. 2.2. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1951.
- : *Sämtliche Werke (Kleiner Stuttgarter Ausgabe)*. *Gedichte nach 1800*. Bd. 2. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1953.
- Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. 34, 1990, S. 398-428.
- Kafka, Franz: *Schriften Tagebücher Briefe. Kritische Ausgabe*. Hrsg. von Malcolm Pasley u. a. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag 1982-
- : *Der Proceß. Roman. in der Fassung der Handschrift*. Hrsg. von Malcolm Pasley. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag 1994.
- : *Historisch-kritische Ausgabe sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Steangle. Frankfurt am Main: Stroemfeld/Roter Stern und Göttingen: Wallstein Verlag [bis 2020] 1997-
- Lessing, Gotthold Ephraim: *Minna von Barnhelm. Studienausgabe*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Reclam 2020.
- : *Nathan der Weise*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2023.
- Metzger, Stefan und Kreuzer, Johann: Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): *Hölderlin Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. 2., Aufl. Berlin: J. B. Metzler Verlag 2020. S. 3-14.
- 明星聖子：「編集の善悪の彼岸——カフカと草稿と編集文献学」『文学』第11巻第5号、2010年、188-202頁。
- ：「編集文献学の可能性」『書物学』第17巻、2019年、2-7頁。
- Nietzsche, Friedrich: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Hrsg. von Giorgio Colli und Mozzino Montinari. Neuauflage. München/ New York: Deutscher Taschenbuch Verlag 1999.
- : *Sämtliche Briefe in 8 Bänden. Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von Giorgio Colli und Mozzino Montinari. München/ New York: Deutscher Taschenbuch Verlag 2003.
- Nutt-Kofoth, Rüdiger: Goethe-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 2005. S. 95-116.
- Otto, Ulrich: Dichterwerkstatt oder Ehrengrab? Zum Problem der historisch-kritischen Ausgaben. Eine Diskussion. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. 33, 1989. S. 3-6.
- Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Eine Einführung in der Methode und Praxis der Edition neuerer Texte*. Stuttgart: Reclam 1997.
- : Nochmals. Für eine historische Edition! In: Peter Eisenberg (Hrsg.): *Der Jugend*

zuliebe. Literarische Texte, für die Schule verändert. Göttingen: Wallstein Verlag 2010. S. 95-103.

———: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition.* Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2020.

Roloff, Hans-Gerd: Beobachtungen zum Typ ‚Lese-‘ bzw. ‚Studien-Ausgaben‘. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft.* 16, 2002. S. 133-142.

矢羽々崇：「著作集編集と『古典』の成立——ゲーテ『若きウェルテルの悩み』」明星聖子・納富信留編『テキストとは何か——編集文献学入門』慶應義塾大学出版会、2015年、25-46頁。

———：「4つのヘルダーリン著作集——史的批判版の実際」『書物学』第17巻、2019年、27-32頁。

[Zeller, Hans u. a.]: Empfehlung an Verlage von Studienmausgaben. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft.* 2, 1988. S. 228.

The “Studienausgabe” in Bodo Plachta’s Theory and Practice

Yu TOMIZUKA

This paper focuses on one type of edition in German textual scholarship: the “Studienausgabe”. In particular, it considers the theory and practice of Bodo Plachta (1956-), who has written two survey books on the subject (1997 and 2020) and edited a number of such editions. In 1997, Plachta argued that Hölderlin’s “Kleine Stuttgarter Ausgabe” is an ideal model for the “Studienausgabe”. What he has edited, however, has different characteristics. This experience is reflected in the content of the 2020 book. The book shows that there can be several approaches to editing the “Studienausgabe”: the advantage of this type of edition lies not only in the fact that it is a scholarly edition that can be realistically produced, as an alternative to the “historisch-kritische Ausgabe”, but also in the plurality of editorial approaches.

翻訳 セバスティアノー・ティンパナーロ 『ラハマン・メソッドの創成』(1)

伊藤博明

前書き

1963年にフィレンツェの書肆フェリーチェ・レ・モニエから、イタリアの文献学者セバスティアノー・ティンパナーロ (Sebastiano Timpanaro, 1923-2000) の『ラハマン・メソッドの創成』(*La genesi del metodo del Lachmann*) と題する、小ぶりの判型で150ページほどの著作が刊行された¹。しかしその反響は大きく、主としてフランスとイタリアの雑誌に25ほどの書評が掲載された²。

たとえば、古典ギリシア文学の文献学者で、のちにソルボンヌ大学、コレージュ・ド・フランスの教授を歴任することになるジャン・イリゴワン (1920-2006) は『文献学雑誌』において、次のように評している。

セバスティアノー・ティンパナーロ氏の小著はわれわれに、そのタイトルが約束している以上のものを与えている。たしかに、本書の対象は、ラハマン以前と、この偉大な文献学者の諸著作を通して、ラハマンという名前に付随している方法の緩やかな形成を正しく跡づけることである。しかし著者は、現代にまでこの研究を延長するという、喜ばしい考えを抱いていた。……

ティンパナーロ氏の著書は、その主題の厳密さにもかかわらず、容易に読み通すことができ、文献学の歴史のもっとも重要な章の一つについての決定的な寄与である。さらにその中には、古代のテキストの校訂者たちが思い巡らすために拠り所とした個人的な理念が見いだされる。³

そののち、本書は1971年に、ドイツ語による増補改訂版が、著者の監修のもとディーター・イルマーの訳によって刊行された (*Die Entstehung der Lachmannschen Methode. 2., erweiterte und überarbeitete Auflage. Autorisierte Übertragung aus dem Italienischen von Dieter Irmer, Hamburg: Buske, 1971*)。

この増補改訂版のイタリア語版はようやく、1981年に刊行された (*La genesi del metodo*

1 すでに雑誌に掲載された二つの論考をまとめたものである。Sebastiano Timpanaro, “La genesi del ‘metodo del Lachmann’,” *Studi italiani di filologia classica*, n.s. 31 (1959), pp.182-228; “La genesi del ‘metodo del Lachmann’ (continuazione e fine),” *Studi italiani di filologia classica*, n.s. 32 (1960), pp.38-63.

2 Cf. Michele Feo, “L’opera di Sebastiano Timpanaro (1923-2000),” in *Il filologo materialista. Studi per Sebastiano Timpanaro*, edito da Riccardò Di Donato, Pisa: Scuola normale superiore, Pisa, 2003, p.208.

3 Jena Irigoin, *Revue de philologie*, 38 (1964), pp.327-329. Cf. Idem, *Tradition et critique des textes grecs*, Paris : Les Belles Lettres, 1997, p.11.

del Lachmann. Nuova edizione riveduta e ampliata, Padova: Liviana Editorice, 1981)。そして、1985年に「付加」を含めた決定版が刊行された (*La genesi del metodo del Lachmann*. Nuova edizione riveduta e ampliata. Prama ristampa corretta con alcune aggiunte, Padova: Liviana Editrice, 1985)。

ティンパナーロの死後、2003年に本書は、エリオ・モンタナーリの編纂によって、彼の小論を伴って再刊された (*La genesi del metodo del Lachmann*, Con una Presentazione e una Postilla di Elio Montanari, Torino: UTET, 2003)。

そして2005年には、古代哲学の研究者、グレン・モストによって、諸版の異動も検討した、きわめて周到な英語版が刊行された (*The Genesis of Lachmann's Method*, Edited and translated by Glenn W. Most, Chicago-London: The University of Chicago Press, 2005)。

さらに、2016年に到って、フランス語版が刊行されている (*La Genèse de la méthode de Lachmann*, Traduction française par Aude Cohen-Skalli et Alain Segonds, Paris: Les Belles Lettres, 2016.)。

このフランス語版の翻訳者は、あらためてティンパナーロの『ラハマン・メソッドの創成』の今日的な意義について述べている。

この著作は、1963年の最初の出現において、根本的に革新的な意図を携えていた。すなわち、テキストの編纂のための全体的理論の考案者であった、ドイツ人カール・ラハマンをめぐって創られた、文献学的研究の真の神話の脱構築を初めておこなおうとするものだった。21世紀の文献学者にとっても、『ラハマン・メソッドの創成』において為されている分析は古びたものではない。イタリアにおいても他の土地においても、この書物は今後、古代研究者と中世研究者にとって古典となるだろう (p.xi)。

本稿では、『ラハマン・メソッドの創成』の2003年 UTET 版に依りつつ、その序文、第1章、第2章の邦訳を試みる⁴。以前に、ティンパナーロの略歴と本書の内容を紹介したことがあったので⁵、ここではそれに修正を加えて再録し、「前書き」に替えることにしたい。

ドイツの文献学者カール・コンラート・フリードリヒ・ヴィルヘルム・ラハマン (Karl Konrad Friedrich Wilhelm Lachmann, 1793-1851) はブラウンシュヴァイクに生まれ、最初ライプツィヒにおいて古典文学にいそしみ、ついでゲッティンゲンにおいて、文献学者ゲオルク・フリードリヒ・ベネッケ (Georg Friedrich Benecke, 1762-1844) の下でドイツ文学を学んだ。1816年からベルリンのギムナジウムで教え始め、ベルリン大学の私講師、ケーニヒスベルク大学の私講師を経て、1827年からベルリン大学の正教授を

⁴ 邦訳にあたっては、モストの英訳版から大きな恩恵を受けている。

⁵ 伊藤博明「ラハマン・メソッドとは何か?——セバスティアノ・ティンパナーロ『ラハマン・メソッドの創成』をめぐって」、『書物學』、第17巻、2019年、勉誠出版、21-26ページ。

務めた。

彼の業績は広範囲に及び、古典学者としては、プロペルティウス、カトゥッルス、ティブッルス、バブリウス、アウィアヌス、ルクレティウス、そして『新約聖書』の校訂版を刊行した。また、ドイツ中世の作品の編纂もおこない、『ニーベルンゲン』や『イーヴァイン』を刊行した。さらには、近代ドイツの作家レッシングの著作集を編纂している（1838-40年）。

それでは、改めて「ラハマン・メソッド」（Lachmannschen Methode）とはいったい何だったのだろうか。ラハマン自身は、テキストの校訂について組織だった方法論を残しているわけではない。したがって、ラハマン・メソッドとは、後代の研究者たちが、テキスト批判において、彼によって新しく提示され、しかも、きわめて有効であると見なした校訂上の方法なのであり、常に「いわゆる」という形容詞が暗黙裏に添えられている。

ギリシア・ラテンの古典作家について、また中世の作家についても自筆原稿は残されていないので、オリジナルのテキストを復元しようとする試みは、現存する写本群からおこなわなければならない。このテキスト批判の作業は大きく二つの過程から成る。その第一は「校合」（recensio）と呼ばれ、複数ある写本の検討から、オリジナルにもっとも近いテキストを再構成することである。第二は「校訂」（emendatio）と呼ばれ、このテキストから、さまざまな原因（写本自体の毀損、写字生の誤記、意図的な改竄など）で生じた損傷を取り除いて補填することである。

ラハマン・メソッドは、これらの過程の内でもっばら前者の「校合」に関係している。校合において重要なのは、多くの写本の中の相互関係に明らかにすることであるが、ラハマンによれば、任意の複数の写本が共通の誤記を含んでいる場合、それらは一つの親写本に拠っているとされる。この作業を現存する写本群に厳密に適用することにより、諸写本の「系図」（stemma）を作成することができ、理念的な「祖型」（archetypus）を想定することが可能となる。ラハマン・メソッドにおける系図の作成は、校合における恣意性を排除した「機械的」なものとして特徴づけられる。

この「いわゆる」ラハマン・メソッドを歴史的に、かつ批判的に丹念に解明したのが、ティンパナーロの『ラハマン・メソッドの創成』である。全体の構成と内容は以下のとおりである。

序文（Introduzione）。本書の目的が簡潔に述べられる。すなわち、ここで考究されるのは、ラハマン・メソッドのどれほどの部分が実際にラハマンに帰せられるか、そして、どれほどの部分が先行者や同時代に求められるか、またいかなる段階を経てラハマンは自らの方法を確立していったのか、という問題である。

第1章「写本に基づく校訂——人文主義者たちからベントリーまで」（L'emendatio operum dagli umanisti al Bentley）。本章では、人文主義の時代からリチャード・ベントリー（1662-1742）まで、テキストの編集者たちによる方策が概観されている。人文主義者たちはテキストの刊行にあたって、しばしば直近の写本を用い、他の写本を参照すること、あるいは自分の推測を交えることは稀だった。しかし、アンジェロ・ポリツィ

アーノ(1454-94)だけは異なり、もっとも古い写本を探求し、それから派生した写本を考慮から除外した。またルネサンスにはすでに「祖型」という概念が芽生えていた。テキスト批判の進展の中で文献学者による校訂が行き過ぎることもあり、それはベントリーの例に見られる。

第2章「18世紀における体系的校合の要請」(L'esigenza di una recensio sistematica nel secolo XVIII)。本章では、18世紀の文献学、とりわけ、新約聖書のギリシア語版の確立について論じられる。新約聖書は神学と関係する特有の問題を抱えているとともに、伝統的に受容されてきたテキスト(textus receptus)——しばしば「公認テキスト」と訳されているが正確ではない——が存在していた。それに対して、文献学者たちは世俗的なテキストと同様に、諸写本間の親子関係(ファミリー)を探求する校合の方法を発展させてきた。ティンパナーロはここで、新約聖書の校訂に携わる文献学者たちの解釈理論の成熟の過程について説明しようとしている。

第3章「ラハマンによるテキスト批判の活動の第一局面」(La prima fase dell'attività critica-testuale del Lachmann)。本章からラハマンが登場し、ここでは1816年から1829年までの彼の活動が辿られる。ラハマンが最初に取りかかったのは、プロベルティウス、カトッルス、ティブッルスというラテン語詩人であり、改竄を排除しながら、もっとも古い伝統を保持していると考えられる写本に基づいた校訂をおこなった。したがって、彼にとって重要だったのは校合であり、校訂や解釈は省みられない。しかし、この実践は理論の域に達することがなく、結局は、彼が選んだ少数の写本に基づくことになった。彼の実践が成功したのは、諸写本を実見することが容易だった中世のドイツ語詩の校訂においてであった。

第4章「新約聖書の編集者としてのラハマン」(Il Lachmann editore del Nuovo Testamento)。1831年から1850年にかけて、ラハマンは新約聖書の校訂に専心した。彼が採用した原則は、おおむね、ヨハン・アルブレヒト・ベンゲル(Johann Albrecht Bengel, 1687-1752)のものと合致している。すなわち、異なるファミリーに共通する異読(ヴァリアント)は採用されるべきという原則である(異読の選択における機械的基準)。さらに、「地理的基準」に則して、さまざまファミリーの写本間の合致は、より離れた地域に存在している場合により有効と見なされた。しかし、「解釈なしの校合」(recensere sine interpretatione)は、実際には一つの幻想であり、実践においてはそれ以外の証拠が考慮された。

第5章「ラハマンの同時代人たちの寄与」(Contributi di contemporanei del Lachmann)。この章では、1830年から1845年までの他の文献学者たちによる、写本の系譜的な構築の成果が紹介されている。1827年にヨハン・カスパー・フォン・オレリ(Johann Caspar von Orelli, 1787-1849)は、ルクレティウスのすべての写本について、同一の源泉に由来することを示した。一つの原型へと辿ることのできる系図を最初に描いたのはヨハン・ニコライ・マズヴィク(Johann Nicolai Madvig, 1806-86)であり、彼はそれを「祖型写本」(codex archetypus)と呼んでいる。こうして、ルクレティウスの写本の系図に関わる主要な探求は、ラハマン以前に為されていたのである。

第6章「ルクレティウスのテキストについての研究」(Gli studi sul testo di Lucrezio)。

ルクレティウスについてのテキスト批判において、ラハマンが先行者たちを凌駕していたのは、第一に、「特異な読みの排除」(eliminatio lectionum singularium)の原則を立てて、伝統の中に導入された孤立した読みを、テキストの校合から排除したことである。第二は、ルクレティウスの原型の再構成を発展させたことである(彼自身は完全な再構成をおこなうことができたと思っていた)。一方、諸写本の系図の作成において彼は混乱しており、最初は三枝の系図を想定したが、のちに二枝の系図に変更している。

第7章「ラハマンに真に帰される事柄」(Cìo che davvero appartiene al Lachmann)。ティンパナーロは、この問題に関して四つの点に絞って考察している。すなわち、1)ラテン語訳聖書のウルカタ版の拒絶と諸写本に基づいて校訂版を作成する意図、2)ルネサンスの諸写本に対する不信、3)現存している諸写本の系図的階層化、4)原型からの異読を、主観的判断に依存せず、機械的に決定させうる基準の形成。ティンパナーロによれば、これらの中で最後の点だけが、実際にラハマンに固有なものなのである。

第8章「18世紀末と19世紀におけるテキスト的・言語学的批判とそれらの危機」(Critica testuale e linguistica, e crisi di entrambe nell'ultimo Ottocento e nel Novecento)。

最後の章では文献学者としてのティンパナーロ自身の見解が披瀝されている。彼によれば、言語学とテキスト批判という二つの学問は密接に関連しており、それらの方法論も類似している。たとえば、前者はインド=ヨーロッパ語を再構成しようと、後者はある伝統に属した現存する諸写本の原型を再構成しようと努めている。19世紀以来、両学問は相互交流しているのであり、そのことに自覚的な研究者として、ティンパナーロは、アウグスト・シュライヒャー (August Schleicher, 1821-68)、ジュルジョ・パスクアリー (Giorgio Pasquali, 1889-1952)、そして自分自身を挙げている。

付論A「1817年にラハマンがおこなった機械的校合の最初の試み」(Un primo tentativo di recensio meccanica compiuto dal Lachmann nel 1817)。

付論B「失われた写本の本文を確定することについて」(Sulla determinazione del tipo di scrittura di codici perduti)。

付論C「写本の伝統の二分法的系図と混乱について」(Stemmi bipartite e perturbazioni della tradizione manoscritta)。

三つの付録の中で最も重要なのは、最後の付録Cである。ここでは、ロマンス語学者ジョゼフ・ベディエ (Joseph Bedier, 1864-1938) が20世紀の初頭に提示した「ベディエのパラドックス」への回答が試みられている。ベディエは、中世のテキストの校訂者たちが作成した系図では、二つの主要な枝に分かれているものが高い割合で生じていることを指摘し、それを彼らの真実と過誤という二分法的な観点から見ようとする傾向性に拠るものであると考えた。そして彼自身は、系図の確立と原型の想定という企てを諦めて、一冊の「最良の写本」(codex optimus)に基づいて校訂することを選んだ。ティンパナーロは二分法的系図のさまざまな事例と研究者によるさまざまな解決を検討した上で、系図のいくつかの枝は、偶然によって(混成や写字生の推測など)、あるいは写本的伝統の研究の怠慢によって、あるいは写本の階層化の誤謬によって統合された可能性を指摘している。

最後に簡単にティンパナーロの生涯と業績について触れておきたい。

ティンパナーロは、1923年にパルマで、科学史家の父セバスティアノと古典学者の母マリア・カルディーニの間に生まれた。1940年にフィレンツェ大学文学部に登録し、イタリアの20世紀最大の古典文献学者であるジョルジョ・パスクアーリに学び、彼の著作の影響はティンパナーロにとって決定的なものとなる。

エンニウスについての卒業論文を書き上げたのち、中学校で14年間にわたって教鞭を執り(1945-59)、その後、1960年から83年までは、フィレンツェの書肆「ラ・ヌオーヴァ・イタリア」(La Nuova Italia)で編集者(実際には校正者)として働いた。彼は両親の影響もあって、若い時から政治的实践家であり、「イタリア社会党」のメンバーとして活動し、『唯物論について』(*Sul materialismo*, Pisa: Nistri-Lischi, 1970, 19973)を著して、エンゲルスの思想に忠実ではないヨーロッパのマルクス主義を批判している。

しかし、ティンパナーロの最大の関心は常に文献学にあり、総計で400以上の論考をさまざまな媒体に発表している。著書としては、『ジャコモ・レオパルディの文献学』(*La filologia di Giacomo Leopardi*, Firenze: Le Monnier, 1955, 19873)、『19世紀イタリアの古典主義と啓蒙主義』(*Classicismo e illuminismo nell'Ottocento italiano*, Pisa: Nistri-Lischi, 1965, 19692)、『フロイト的言い違い——精神分析とテキスト批判』(*Il lapsus freudiano. Psicoanalisi e critica testuale*, Firenze: La Nuova Italia, 1974)があり、死後に『古代のウェルギリウス主義者と間接的伝統』(*Virgilianisti antichi e tradizione indiretta*, Firenze: Olschki, 2001)が刊行された。彼の仕事に対する学問的評価については、アカデミア・デイ・リンチェイ(イタリア)とブリティッシュ・アカデミー(イギリス)の会員だったことが雄弁に語っているだろう。

彼自身が、アカデミア・デイ・リンチェイの会員に就任する際、1989年8月22日に作成した「履歴書」(Curriculum vitae)は、フィレンツェ大学の盟友で歴史家のアントニオ・ロトンドの「ティンパナーロと20世紀後半部のフィレンツェの大学文化」に付録として収められている(Antonio Rotondò, “Sebastiano Timpanaro e la cultura universitaria fiorentina della seconda metà del Novecento,” in *Sebastiano Timpanaro e la cultura del secondo Novecento*, a cura di Enrico Ghidetti – Alessandro Pagnini, Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 2005, pp.85-88)。

2003年までのティンパナーロの書誌はミケーレ・フェオによって作成されている(Michele Feo, “L’opera di Sebastiano Timpanaro (1923-2000),” in *Il filologo materialista. Studi per Sebastiano Timpanaro*, edito da Riccardod Di Donato, Pisa: Scuola normale superiore, 2003, pp. 191-293)。

また、ティンパナーロの業績と思想をめぐる論集がいくつも刊行されているが、それらについては、『ラハマン・メソッドの創成』の「フランス語版への序文」を参照していただきたい(‘Intoruduction à la l’èdition française,’ p.xxxv)。

付記：本邦訳はあくまでも試作版 editio minor であり、完成版 editio major は、編文研メンバーとの「温泉合宿」を経て作成される。

セバスティアノ・ティンパナーロ

『ラハマン・メソッドの創成』

伊藤博明 訳

序文

ラハマンがテキスト批判を区分した二つの部分——「校合」(recensio)と「校訂」(emendatio)——のうち、後者については古典古代からすでに実践されていた。17世紀と18世紀において、「校訂」はいまだに有益な方法論的議論の対象であったが、それには「学問」(scienza)よりもむしろ「技法」(arte)という性格が付与されていた¹。19世紀に、校訂の方法はさらに洗練されたものになったが(とりわけ、多様な時代と多様な著作家の言語と様式についての研究が進展したことに拠っている)、しかし、けっして革命的な変化が起こったわけではない。予知的な才能についてならば、前世紀[18世紀]のきわめて優れた修正家のだれかが、トルネブス、ベントリー、ライスケを凌駕していた、とすることはできない。

反対に、19世紀のテキスト批判の偉大な革新は、校合の学問的な基礎づけであった。しかし、いかにしてそれに到達したのだろうか。「ラハマンの方法」(il metodo del Lachmann) [以下、ラハマン・メソッド]のどれほどの部分が実際に、ラハマンに帰されるのだろうか。そして、どれほどの部分が彼の先行者や同時代人に求めるべきなのだろうか。いかなる段階を経て、ラハマンは自らの方法を仕上げていったのだろうか。以上のことはすべて、いまだに解明すべき事柄である。この点について、文献学史はほとんど何も語っていない。だが、きわめて有益な歴史的示唆が、いくつかのテキスト批判の論考に見いだされる。すなわち、クエンティン、デイン、ジャッラターノの諸論考、そしてとりわけ、パスクアーリの『テキストの伝承と批判の歴史』(*Storia della tradizione e critica del testo*)であり、この著作においては、パスクアーリの全著作におけるように、文献学と文献学史が緊密に結びつけられている²。しかしながら、ジョセフ・ベディエが

¹ 19世紀以前の推測的技法について論考の中で、最良の2つのものは、ル・クレルク (Le Clerc 1730 [1697]) の『批判技法』(*Ars critica*)とモレル (Morel 1766 = Quantin 1846: 969-1116) である。ル・クレルクの著作は、われわれが現在「校合」に割り当てている諸問題についても言及している。モレルについてはケニー『古典的テキスト』(Kenny 1974: 44-46)を見よ。ロベルテッロ『古代の書物を訂正する技法もしくは根拠についての論議』(Robortello 1557)は小著であるが、あまりにアナクロニスティックな厳格さを抑えながら、想起こす価値がある。というのは、それはこの種の論考の最初の(明らかに不完全であるが、しかし幾つかの点では先駆的な)試みだからである。この論考については Carlini 1967: 65-70; Kenney 1974: 29-36を見よ。しかし、すでに中世には(12世紀)、ローマのニコラ・マニアクティアという、テキスト批判のある理論的原理についての孤立した、しかし、いくつかの点では興味深い表明者が存在していた。彼については、以下の一連の有益な研究がある(ときおり、ある誇張に陥りがちであるが)。Peri 1967; 1977.

² Quantin 1926: 27-38 e passim; Dain 1975 (1949): 160-86; Giarratano 1951: 106-231; Pasquali 1952a (1934). パスクアーリの著作のとりわけ、「ラハマンの方法」と題された第1章を見よ。この章はすでに

1928年から望んでいたような³、より十全な探究の必要性が感じられている。私はそれを試みようとしたのであり、私に続く他の者たちが、より巧みにおこなうだろう。本書の最初の二つの章が、純粹に導入的な性格を有していることは、努めて述べておかねばならない。これらの章は、人文主義者たちから18世紀の終わりまでのテキスト批判の歴史を跡づけようとしたわけではなく、ただ、「ラハマン・メソッド」のある歴史的前提とある部分的な先駆的業績を明確にしようとするものである。

第1章 「写本に基づく校訂」——人文主義者たちからベントリーまで

人文主義者たちによる「最初の印刷本」(editio princeps)は、ほとんどの場合、入手が容易で、版組職人にとって読みやすい、直近の写本に拠っていた⁴。それゆえ、これらの刊本は概して、写字生=改竄者によって調整され、「矯正された」(abbellito)テキストを再生産したものだ。このテキストは、ある版本から別の版本へと広まっていき、「流布版」(vulgata)を構成した。

流布版を、それが満足できるものと見えないところで、改良し訂正するためには、推測することが、あるいは、より権威があると考えられた諸写本の校合を利用することができた。人文主義の時代から18世紀の終わりまで、文献学者たちはこれら二つの道に従い、ある者は一方の道を、別のある者は他方の道を選択することを表明していた。二つの傾向性については、ルーンケンが有名な『ティベリウス・ヘルムステルホイスを讃えて』(*Elogium Tiberii Hemsterhuyi*)⁵の冒頭部で描いている。「それゆえ、才知に溢れる人々の不一致のゆえに、批判家たちが実践すべき二重の方法が開始されている。一方は確固な、決して混乱していないものを訳もなく引き抜き、不確実な推測によって確実なものを砕いていた。他方は手によって写された書物からの資料だけをただひたすら集めていた」。ここでは明らかに、二つの方向性の積極的側面よりも、それらの有害な過剰さが際立たされている。ルーンケンにおいては、彼にとっての英雄であったヘルムステルホイスが、二つの要求を合致させて、真の、均整のとれた「批判技法」(ars critica)を確立した最初の者であることを(たしかに誇張された評価によってではあったが)知らしめることが重要だった。しかし、彼によってとりわけ強調されていたのは、写本の支持者たちも自らの版の恒常的な基盤として、彼らが最良と見なしていた写本を置くことが常だったわけではなく、彼らは基盤として流布版を用いていたのであり、そして、流布

論文 (Pasquali 1931) として発表されている。本書では続いて、バスクアーリの別の論考が引用されることになる。この問題については、最近、Kenny 1974 が十全に論じている。マルティン・ヘルツが書いたラハマンの伝記 (Hertz 1851) は、われわれの関心のある問題についてはほとんど触れていない。

³ Bédier 1928. 周知のように、この論考において提示されている諸理念は議論の余地が多々あるが(原著 50 ページ註 23)、しかし、ベディエが、「ラハマンの方法」の生成の研究が欠如していることを嘆いているのは正しい (1928 : 163, n.2)。

⁴ Cf. Dain 1975 (1949): 160-61. 彼は的確にも、外的な側面であれ、判型上の技術であれ、人文主義者たちの写本と初期印刷本の間強い類似性を指摘している。Pasquali, 1952a (1934): 49-50, 78 及び第4章のほぼすべて。Kenney, 1974: 4-5; Rizzo 1973, 69-75.

⁵ Ruhnken 1875 (1789): 1.

版に満足しなかった時だけ写本に当たったということである。それゆえ、彼らの実践は「校合」(recensio)と「校訂」(emendatio)ではなく、(彼らの構想と、彼らが用いた用語法によるならば)流布版の二つの異なるタイプの校訂、すなわち、「写本に基づく校訂」(emendatio ope codicum)と、「才知に基づく校訂」(emendatio ope ingenii)あるいは「推測に基づく校訂」(emendatio ope coniecturae)だったのである⁶。

人文主義の時代において、「写本に基づく校訂」のもっとも厳密な擁護者はポリツィアーノであった⁷。第一および第二の『雑録』(*Miscellanea*)において、彼は推測に頼ることはきわめて稀である(また彼は、リウィウスについてのヴァッラの推測やクレティウスについてのマルッロの推測に比類するような、才知に溢れる推測はできなかった)。彼はほとんどの場合、「入手しえた写本」(exemplaria quae sunt in manibus)——最近の写本であれ印刷本であれ——の改竄された読みを、彼がラウレンツィアーノ図書館で発見した、あるいは別の人文主義者から教えられた「非常に古い写本」の真性な読みを対比させるだけだった。

その時まで、古代の文法家たちと比べて、実質的には何も新しいものはなかった。たとえば、構成上の構造においても、『雑録』の基本的模範を為していた、ゲリウスの『アッティカの夜』(*Noctes Atticae*)において、テキスト批判をめぐる論争はしばしば、崇敬すべき(ときおり、信じがたいほどまでに崇敬された)古代の写本に頼ることによって

6 周知のように、すでに古代の文法家たちは、“emendare”[校訂する]という言葉で、「訂正する」(correggere)という意味に用いており、したがってそこには、諸写本の——多くの場合は偶然的な——照合によって行われるような訂正が含まれている。『ラテン語宝典』(*Thesaurus Linguae Latinae*)の“emendatio”と“emendare”の項目とPascal 1918を参照。他の書誌的指示はRizzo 1973: 250, no.1にある。また、それに対応するギリシア語 διορθῶν や他の類似したもの(μεταγράφειν, μετατιθέναι など)は、同じ曖昧な意味で用いられていた。Cf. Ludwich, 1885: 93, 104-105。イタリア語学者たちの間で、テキスト批判で高名なイタリア語学者たちの間でさえ、“emendatio”の広い意味は最近まで維持されてきた。Cf. Pasquali, 1942: 226。そこでは、ミケーレ・バルビの一節が、いわば、現代的言語学的用語に翻訳されている。二つのタイプの“emendatio”の間の区別に関して、ピエル・ヴェットーリは彼の『様々な読み』(*Variae lectiones*)においてしばしば表明している(たとえばXXX 22)。「訂正箇所は……ある部分は古代の書物に基づいて、ある部分は推測に基づいて」(また、XXXVI 6など)。そこにおいて、いかなる付加語もなく、単純に“emendare”あるいは“corrigere”と言われているときには、文脈から理解されるかぎり、一般的には写本に基づく訂正を意図しており、それは彼の保守的な傾向性とも合致している。そのことについてはのちに少し触れよう。さらには、引用することが可能な15世紀から18世紀の多くの他の章句の中で、ニコラース・ヘインシウスが1661年にアムステルダムで刊行したオウィディウス著作集(ページ付けなし)への序文を参看されたい。「……ある部分は古い詩節への信頼によって、ある部分はただ才知の教えと兆しを当てにして、すでに多くの箇所において修正した」。人文主義の時代における、推測の擁護者と写本の擁護者について、方向性の最初の要約によって、いまだにSabbadini 1920: 65-60が有益である。より深いいくつかの観察は、現在はKenney 1974: 26-27および第5章に見られる。

7 この十年の間に、ポリツィアーノについての研究と、彼の未刊行作品の刊行が活気を呈している。そしてこの作業は、まだ発展段階にある。ここは十全な書誌に相応しい場所ではないので、アントニー・グラフトン(Grafton 1977a)の精彩のある総合(書誌は最新化されており、先行する人文主義者と同時代の人文主義者への豊富な言及がなされている)を勧めるに留めたい。さらに、ピサにおけるアレクサンドロ・ペローザの、第一『雑録』(*Miscellanea*)についてのセミナーを無限の感謝とともに想起することを許していただきたい。このセミナーに私は、1960年代の最初に出席するという幸運を得たのである。引き続いて、他の研究者たちの寄与について引用したい。

解決された⁸。しかし、ポリツィアーノはしばしば、より古い写本への彼の趣向を確固とするために、系譜的な特徴についての考察を加えている。すなわち、より新しい写本はより古い写本の写しなのであり、それゆえ、独立した伝統の価値を有しないのである⁹。

よりのちまで——これから見るように18世紀において、そして残念ながら現在においても——「派生的写本の除外」(eliminatio codicum descriptorum) という術語を受け入れている作用は、しばしば、文献学者の時間と労力を節約するための都合のよい方策となっている。すなわち、不十分な証拠、あるいは、一群の新しい写本をきわめて古い一冊の写本のそばに置いて単純に確認することは、より古い写本からより新しい写本群が派生したことを要請する、とあまりに容易に説得したのである。ポリツィアーノも、ときおりこのように振る舞ったのであろうか。私は本書の初版においてそのように想定したし、今も私はそれを完全に除外しようとは思わない。しかしながら、そのときにも私は、ポリツィアーノが確固とした証拠に基づいて「除外」をおこなった周知の例を引用していた。そして今は、このような場合が、全体ではないとはいえ、少なくとも大部分を占めていると見なしているリッツォ (Rizzo: 315, no.2) が正しいのであろうと、ある留保はしながらも信じるようになっていく。第一『雑録』の第25章において、ポリツィアーノは、キケロの『縁者・友人宛書簡集』(*Epistulae ad familiares*) の、製本の誤りによって一葉の乱丁が見られるラウレンツィアーナ写本 (49, 7) が、より新しいラウレンツィアーナ写本群の元本であることを示した。というのは、後者の写本群においては、書簡の順序の同じ混乱が、一葉の変動が原因とされることなく見いだされるからである¹⁰。彼の第二『雑録』によって証明されるように、彼は類似した推論によって、ヴァレリウス・フラックスの古い写本の転写を除外した¹¹。それゆえ、ポリツィアーノにおいてすでに、より古い写本への一般的な崇敬を超えて、写本の伝承についての歴史的考察の端緒が存在したのである。また彼の中には、推測は、それが必要な時には、より最近の写本において改竄が被ってきた欺瞞的な修復からではなく、われわれが辿ることができるもっとも古い伝承の段階から始めるべきであるという自覚があった。この基準

8 たとえばゲッリウス『アッティカの夜』1. 7; 1. 21. 2; 2. 3. 5; 9. 14; 12. 10. 6; 13. 21. 16; 18. 5, 11. より一般的に、諸写本のギリシアとローマの文法家たちの使用については Lehrs 1882, pp.322-349 を参照。古典古代の基準と大多数の写本の基準との間の動揺が欠くことはなかった。この問題についてのガレノスの考えについては、たとえば Brücker 1885: p.417 を参照。

9 たとえば、『雑録』第5章(「ヴァレリウス・フラックスの『アルゴナウティカ』のきわめて古い写本……それから、現存している他の写本は派生したように私には思われる」。以下の註 11 で引用する第二『雑録』の章句を参照)。第25章(すぐのちに言及する)。第41、89、93、95章。とりわけ、スタティウスの『シルヴァエ』を含んでいる初期印刷本への有名な注記を参照。「私はスタティウスの『シルヴァエ』の写本を見いだした……、それは不完全で改竄されており、(思うに) 中途半端なであるが、この一つの写本から、現存している他のすべての写本が流れ出たように思われる」(Perosa 1955: 15 と以下の註 12 を参照。ポリツィアーノが参看した写本についての議論が沸騰している問題について、ここは立ち止まるべき場所ではない)。また、アピキウスへの類似した注記を参照 (Rizzo 1973: 315 n.2)。

10 ラウレンツィアーナ写本 (49, 7) はまた、9世紀のラウレンツィアーナ写本 (49, 9) に由来している。このことにポリツィアーノは気づいていたが(同じく第25章の冒頭部を見よ)、その証明を与えるために立ち止まっていた。「そのことは多くの証拠によって説明できるが、今は省略することにしよう」。問題のすべては Kirmer 1901: 400-406 において十全に明らかにされている。

11 Poliziano 1972: 4, 6-7 (cap.2); cfr. 1: 23 e n.45; Branca 1973: 347-352.

は、ラハマンの時代になって、ようやく十全に認識されるようになった。

さらに加えて、ポリツィアーノはすでに、諸写本（少なくとももっとも古く、もっとも価値ある写本）を、偶然的ではなく、体系的に——流布版テキストに由来するすべての読みを、また、テキストの復元にとって有益であることが明らかなのは、誤っていることが確実な読みも記録して——校合する必要性を理解していた。これは彼が『農事論』（*de re rustica*）の著者たち、プリニウス、スタティウス、ペラゴニウス、テレンティウスへの追記において表明した基準である（彼の新奇な方法論は、たとえその適用の端緒は彼に先立つ人文主義者たちや、おそらくは、すでに中世の写字生たちにも欠けていなかったとしても、彼はそれを十全に、正しく自覚していたのである¹²）。この点で彼は、エルネスティとヴォルフ（原著40ページ以下を見よ）に先駆していた。そしてすでに、校合の恒常性ではなく、偶然性を含意していた「写本に基づく校訂」という誤った概念を乗り越え始めていた。

ポリツィアーノのような保守的なテキスト批判への傾向、写字生=改竄者たちへの批判、最近の諸写本をこれまで保存されてきた「最古の写本」(*vetuistissimus*)の写しとして過小評価することは、ピエル・ヴェットーリの中に、論議と例示のより強力な支持とともに見いだされる¹³。常に、推測しようとする傾向をあまりもたないヴェットーリは、ある読みが古い諸写本によって一致して支持されているときは、とりわけ躊躇する。「私は、古い写本がすべて同じ誤りを犯していると考えることはほとんどできない」¹⁴。それは、すべての伝承に共通する改竄を説明できる、祖本の概念に明確に到達していなかったのであれば、まったく当然の躊躇であった。さらに、ヴェットーリは、徹底した保守的な信頼の告白（「私は自らの事柄への過剰な愛よりも、古い書物とともに誤ることを欲する」¹⁵）にも関わらず、彼の文献学的作業の具体的な実践においては、無批判者などではなかった。すなわち、彼の写本的伝統の擁護は、ほとんど常に、より深い解釈の、著者の文体についての優れた認識の結果である。それはヴェットーリが深く知っていた著者、キケロについてとりわけ当てはまる。また彼が刊行したギリシアのテキストにとっても、少し当てはまる——彼はときおり、たしかに過度の保守主義に陥っていたのだが¹⁶。

12 Perosa 1955: 15, 22, 26, 38, 66 によって引用された章句を見よ。

13 ここで引用することができる多くの章句の中でも、キケロの『縁者・友人宛書簡集』(*Epistulae familiares*)への彼の序文を見よ(Vettori 1586 [1558]: 69-70)。とくにヴェットーリはこう記している。「邪悪な訂正者たちは彼ら〔著作家たち〕に、時自体と初期の世紀の無知が負わせるのに劣らない傷を負わせた」。

14 Vettori 1540: 524.

15 Vettori 1571: 166. Cfr. *ibid.*, 71. 「私は本性上、他の著作家たちについて無分別に直すことにためらいがありました」。

16 『アガメムノン』の彼の校訂版については Frankel 1950: 1, 34-35 を見よ。ヴェットーリの人格一般については、これまで十全には知られてこなかったが（いくつかの示唆は Grafton 1975: 162-179 に見られる）、われわれはルチア・チェザリーニ・マルティネッリの新しい研究を待つことにしよう。ポリツィアーノの後を追って、とりわけ、「派生写本の除外」において際立っている、ヴェットーリの弟子たちと後継者たちのグループについては Grafton 1977b: 162-179 を見よ。とりわけ、ヴェットーリの前後の、『ユスティアヌス法典』については Caprioli 1969（しかし、カプリオーリの基本的な研究は16世紀にまで及んでいる）と Troje 1971 を見よ。

しかし、たとえ東の間であったとしても、校訂のための祖本の概念の使用に到着したのはエラスムスである。『格言集』(Adagia¹⁷)の中で彼は、アリストテレスの『形而上学』において引用されている格言的表現に対してある訂正を提案し¹⁸、次のように所見を述べている。「諸写本の間の一致については、たとえ控え目であっても、諸諸本を考量し、比較したことがある者にとっては、けっして驚くべきことではないように見えるだろう。というのは、一つの祖本の誤りが、ある真実の見かけとして提示されている限りは、書物という、いわば普遍的な後継者たちの中に、『子どもたちの子どもたちに、そして、次に生まれる者たちに』(καὶ παῖδας ταῖδων καὶ τοῖ μετόπισθε γένωνται¹⁹) 広まっていくだろうからである」。

この一節(本書の初版における取り扱い、リッツォ [Rizzo 1973: 316] によって訂正された解釈の凡庸な誤りのゆえに、不適切なものだった)について、少しばかり立ち止まる必要があるだろう。人文主義者たちは(古代の人々のように——たとえばキケロ『アッティクス宛書簡集』Epistulae ad Atticum, 14, 3, 1)、「祖本」(archetypum)や「祖本的写本」(codex archetypes)と用語によって、著者によって校閲され、そののちに写しによって流布することになる「公的作例」(esemplare ufficiale)を指示していた、と通例は考えられている。リッツォ (Rizzo 1973: 308-317)がおこなった、より広範囲にわたる、より深い探究が明らかにしたのは、おそらくは一般的であったこの意味に加えて、その用語は人文主義の時代に他の多くの意味を有しており、それらの中には、のちに支配的なものとなる、写本という意味が——著者から多くの世紀の後のものであれ、たまたま救出され、「公式性」や規範性を欠いているものであれ、誤謬や脱落で台無しになっているものであれ——、それに他のすべてが由来する写本という意味が見いだされる、ということである。この意味で、メルラは1472年に書いたプラウトゥスへの序文において、「祖本」のことを(「いわば」[velut]という言葉が先に置かれているので、まだいくらか隠喩的な価値が付与されているのではあるが)、プラウトゥスの喜劇の現在まで存在している写しが由来する、失われた「唯一の書」(unus liber)と呼んでいる(Rizzo 1974: 314)。そして、ポリツィアーノは、スタティウスの『シルヴァエ』(Silvae)の注釈において、この同じ用語を、彼が実際に見て、「不完全で」(medosus)「中途半端な」(deimidatus)と判断した、ボッジョ写本について用いている²⁰。「祖型」(あるいは形容詞「祖本的な」)の「ラハマン的」(lachmanniano)用法に到達するためにまだ欠け

17 Erasmus 1538: 209 (Chilias 1 cent. 6, adag. 36). 初版(パリ、1500年刊)には、この格言はまだ見いだされない。それは、N・G・ウィルソンから教示されたように、1508年のヴェネツィア版において初めて現れる。

18 『形而上学』第2巻(999b5)。“Τίς ἂν θύρας ἀμάρτοι;” すなわち「誰が扉(のような大きな標的)を打とうとして迷うだろうか」。この表現を、アフロディシアスのアレクサンドロスは次のように説明している。「それは標的を打つ射手から借用されている」。エラスムスは誤って、θύρας(扉を)を θήρας(獲物を)に訂正しようとした。Cf. Leutsch 1851: 678.

19 このような(あるいは、確実に誤って“καίτοι”という)、『格言集』の諸版を私は手にしている。ホメロスのテキスト(『イリアス』20.308)は“καὶ παῖδων ταῖδες, τοὶ κεν...”である。“παῖδας”という対格はエラスムスの文脈が要求する変化である。他の相違は、記憶による引用の誤りだろう。

20 Poliziano 1978: 16. Cf. pp.10, 13-17. 先の註6を参照。

ているのは——私が思うところでは——その用語を失われた、また一方で、原本や公式作例とは異なる原本に限定することである。ポリツィアーノ自身は何度も、ピサの、のちにフィレンツェの『ユスティニアヌス法典』の写本を祖型と、すなわち、現在まで存続し、ユスティニアヌスによって様々な都市に流布した公的作例の一つと彼が考えた写本と呼んでいる²¹。

ともかくも、われわれが引用した、エラスムスの章句の重要性は、失われた共通の作例として祖型の使用ではなく（上述したように、少なくともメルラは、言葉遣いは慎重であったが、この用語の意味においてエラスムスに先んじていたし、おそらく、エラスムスは人文主義時代に流通していた他の意味も受けいれただろう）、むしろ、「諸写本の一致」(consensu codicum)に脅えることなく（エラスムス以降であっても、先ほど見たように、ピエル・ヴェットーリは脅えたままだろう）、誤りと思われる読みを訂正する権利の積極的な主張に存している。ある伝承全体に広がる多元発生という信じがたい現象によって、同じ誤りが、相互に独立している写字生たちによって犯されることはなかった。その誤りの責任者はただ一人の写字生であり、彼に続く写字生たちはそれを繰り返したにすぎない。というのは、それは、真理 (focus) の姿をしている、巧妙に欺く誤りだったのであり、それゆえ写字生たちは訂正しようとは考えなかったからである。

エラスムスは、『格言集』からの章句において留意している特殊な例において、たしかに「古代の」祖型について考えていた。というのは、彼は、アフロディシアスのアレクサンドロスが、自分のアリストテレスの写本において、“θύρας”を誤りと推定して読んでいる事実（エラスムスは明瞭に指摘している）に当惑しなかったからである。しかし、一般的に彼は、写本の伝承全体を通して、「粗野な」改竄や、無意味な表現や、脱落が蔓延することは不可能であると考えていたように思われる。すなわち、これらについては、後続する写字生たちは気づいていただろうし、それを訂正しようとしたはずだからである。エラスムスのテキストの伝搬についての概念はあまりに反機械的であった。それは、ある伝承にだけ適用される概念であった。

16世紀の偉大なフランスの文献学者たちは、トゥルネブスから、ランバン、ダニエル、ピトターまですべてが、古代の写本を探求し、それらを自らの刊本のために利用するという必要性を感じていたが、しかしもっとも感じていたのはヨセフ・スカリゲルだった。テキストの推測家として彼は、トゥルネブスよりはるかに才能が乏しく、自由気ままで、気まぐれの覚え書きの集成には敵意をもち、すでに彼の活動の最初の期間に組織的な作業を企てており²²、個別的過去への趣向よりもはるかに歴史的精神によって鼓舞されて、

21 Rizzo 1973: p.313 e n.2 を見よ。ポリツィアーノと交流があり、彼の影響を受けた他の人文主義者たちについては Caprioli 1969: 393-404 e passim を見よ。

22 1594年のヤヌス・ドゥサへの書簡を見よ (Scaliger 1627: 52)。「われわれは両方の言語による著作家たちを詳しく観察したが、彼らは異説、旧来の読み、混成、そしてこの種類の他の事柄という怪物的な子孫を生みだすことができるもので、現今の文献学者たちの野心がそれらをめぐって騒ぎ回ろうとしている。……しかし、われわれの徹夜が果実を産みだすために、われわれは著作家たち全体を解釈し、純化しようと企てた。この統一性への要求はのちに、より成熟した年令の偉大な歴史的、年代記的作業において十全に発展した」。Cf. Bernays 1855: pp.46-47.

中世の祖本（それを指示するために、「祖型」という用語を使用していないとしても）の再構成という問題に初めて取り組んだのである。彼は『カトゥルス弾劾』（*Castigationes in Catullum*）の中で、いくつかの写しの改竄に基づいて、祖型が前カロリング朝の小文字で書かれたことを確証したと信じた²³。その証明は成功したものは考えることができないが²⁴、しかしながら、その試みはきわめて興味深いものである。スカリゲルもまた、ポリツィアーノやヴェットーリの跡を追って、15世紀の改竄者たちと論争した。彼らは、文体的上の甘言者たちの敵であり、古拙なラテン語の簡潔さを愛する者としての彼を、とりわけ嫌悪した²⁵。しかしスカリゲルは、古い写本もまた、改竄で汚染されており、推測によって救済されねばならないことを理解していた。「それゆえ、黄金が試されるごとく、最近の諸版本は古い写本によって検討されねばならないように、写本もまた、判断の秤において吟味され、正されなければならない」²⁶。まったく不格好な祖本についての、それ自体では完全に正当である仮定から、彼は詩作品の数行を、とくにティブルスの場合に、それらに論理的な秩序を与えるために置き換える権限を有しているとさえ感じていた²⁷。校合することにおいて慎重であり、推測することにおいて過激であること。われわれはこの対照を、ラハマンにおいては再び見いだすだろう。

スカリゲルは、彼の先行者たちと同時代人たちから、とりわけヴェットーリから、諸写本の完全な校合の必要性を引き出して、カトゥルスの校訂版において、そして、概略を示したばかりのヴァレリウス・フラックスの校訂版において発展させた。よりのちに、マニリウスの校訂版においては、彼は気まぐれな校合の実践に戻っている²⁸。

23 Scaliger 1582 (1577): *Castigationes*, 4. 「さらに、私は、ガリアの写しがランゴバルド族の文字で書かれているのではないかと疑った。というのは、経験の浅い写字生たちによつてのちの諸写本に撒かれた誤りが、あれらの曲がりくねった表記からまさに生じたように思われるからである。そのことについてわれわれは、適切な場所において注意深く指摘するであろう」。「ランゴバルド族の文字」(*Langobarudicae literae*)とは、ここではベネヴェント派の小文字ではなく、前カロリング朝の小文字として理解しなければならない。そのことは23ページと73ページにおいて、スカリゲルが誤りをaとuとの交換に起因すると想定している事実から帰結する。「ランゴバルド族の表記においては、これらの文字の間になかなる相違も存在しない」(p.23)。「uとaはランゴバルド族の表記においては同一である」(p.73)。人文主義の時代における「ランゴバルド族の文字」という用語の広範な使用についてはCasamassima 1964: 566-67; Rizzo 1973: 122-23を参照。スカリゲルが重要だと見なした他の文字の交換については、原著120ページ註3を参照。

24 再度、原著120ページ註3を参照。

25 たとえば、『弾劾』(Scaliger 1582 [1577]: 105)を見よ。スカリゲルの古代風への偏愛については、オルフェウス讃歌の彼によるラテン語版とエンニウスについての有名な判断(Bernays 1855: 283で報告されている)が想起こされる。

26 Scaliger 1600 (1579)への「序文」(8)。

27 この置き換えに対してはHaupt 1875-76: 3.30-41の前に、すでにHeyne 1817 (1755): xviii-xixが抗議していた。

28 カトゥルスについてはGrafton, 1975: 158-161を、ヴァレリウス・フラックスについてはWaszink 1979: 81 e n.21を、マニリウスについてはGrafton 1975: 174-76を参照。この方法論的後退の契機が、グラフトンが指摘しているように、スカリゲルとイタリアの文献学者たちの関係の悪化に帰されるということは、私にとっては信じがたい。一方で、スカリゲルにおいて、マニリウスの校訂版の頃に、テキスト批判への趣向が弱まったことは事実である(Grafton 1975: 175. Grafton, *ibid.*, n.71が引用している書簡でフスマンが指摘している)。むしろ私は、完全な校合のために必要である不断に留意する忍耐

写本という資材についての認識は、17世紀のオランダの文献学者たち、とりわけニコラース・ヘインシウスの著作によってきわめて深化した。ヘインシウスは、周知のように、ヨーロッパ全土を旅して、膨大な数の写本を検討し、そして、現在においてもその正確さのゆえに感嘆されている、それらの校合をおこなった²⁹。そして彼は、多くのテキストについて最良の写本を指示することができた。彼は、すでにスカリゲルがおこなったように、中世の祖本について明確な概念をもっていただけでなく、また、きわめて厳密な方法を適用したわけではなかったが、クルティウス・ルフスとブルデンティウスの写本の伝承において、二つの写本のファミリーを区別することができた。とはいえ、ケニーが指摘したように、彼が自らのオウィディウスの版の基盤として、彼の父、ダニエル・ヘインシウスが1629年版のために整えたテキストを採用したという事実は、彼がいまだに、いくらか時代遅れの観点に立っていたことを示唆している³⁰。容易で優雅なオウィディウスよりも、オウィディウスのラテン語の作詩法に対する愛によって、彼はしばしば、テキストを潤色することだけを目的にして推測するようになったように、また、より新しい写本の華麗ではあるが、あまり根拠のない読みを幾度も好んで採用するようになった。のちに彼は、ペトロニウスのテキストに関しては、はるかに注意深い方法によって対処している。すなわち、彼は、多くの「異例さ」(anomalie)が改竄ではなく、著者のきわめて個人的な文体に拠っていることを理解した³¹。

しかし、ここでわれわれは、ある限定的な状況に直面している。すなわち、誰も『サテュリコン』(Satyricon)のラテン語を「キケロ化する」(ciceonianizare)意図を抱くことはできないだろう、ということである。そのラテン語(たんに「トルマルキオの饗宴」においてだけでなく)といわゆる古典的ラテン語との相違は甚だしいのである。ニコラース・ヘインシウスについて(彼の偉大さは一般的に認識されているとはいえ)これまで存在した、また、いまだに存在している論議と多様な評価は、おそらく、彼が他の者たちよりもおそらく際だって、「過渡期の人物」(personalità trapasso)であったこと、半分は言葉の厳密な意味で人文主義者、半分は新しい必要性を自覚している文献学者であったことに由来している³²。「人文主義者」としてのヘインシウスの欠陥は他のオランダ

と能力の減少のことを考えたい。それらは、テキスト批判の問題にずっと関心を持ち続けてきた研究者においてさえ弱体化するのである。

29 たとえばMunari 1950; 1957を参照。他の書誌はKenney 1974: 59n51。ケニーによって予告されたM・D・リーヴの論考はReeve 1974として刊行された。Cf. Reeve 1976。

30 Kenney 1974: pp.62-63。Grafton 1977b: 173の異論と、その返答であるKenney 1980を参照。さらに、われわれが先に註6において、オウィディウスへのヘインシウスの序文から引用した、実質的に未来ではなく、過去に向けられた形成化を見よ。

31 Cf. Blok 1949: 246, spec. 247-252.

32 このような対照はKenney: 1974: 57-63(上記の註27における返答においても繰り返されている)によって明確にされた。L. Müller 1869が与えたニコラース・ヘインシウスの特徴化は不完全なものだが、情動的に生気に満ち、鋭く、いまだに読むに値する。Block 1949は、情報量の豊かさとヘインシウスの人物像の新しい側面を明らかにした点で基本書である。しかし、『スウェーデンのクリスティーナに仕えるN・ヘインシウス』(N. Heisius in Dienst van Christian van Zweden)というタイトルは少々残念である。というのは、それは第一に、外交官としてのヘインシウスの伝記を想起させるからである(この書物はオランダ語で書かれており、それゆえ私は参看するのに苦労したが、それも完全なものではない)。

人たち、たとえばヤン・ファン・ブルークホイゼン（プロウクフシウス）において際だっている。一般的に、17世紀において、また部分的には18世紀においても、諸写本の検討は、深みよりも広さにおいて進展した。この傾向の極端な例はイエズス会士ジロラモ・ラゴマルジーニであり、彼はケケロの無数の写本と刊本から抜き出した異読の純粹で単純な蒐集者であった³³（他方、別のイタリア人のケケロ研究者、ガスパレ・ガラトーニはのちに、才知に溢れる文献学者であることを示すことになるだろう）。われわれがポリツィアーノ、エラスムス、そしてとりわけスカリゲルにおいて指摘した写本の伝承史の手掛かりは、研究の進展とともに数多くのものが明らかになりうるような例外を除いては、たいして発展しなかったのである³⁴。

諸写本を評価し（系統を再構成するわけではないが）、真性の読みを改竄された読みから区別するという偉大な能力をもっていたのは、17世紀の終わりと18世紀の最初の数十年の間を生き、きわめて才知に溢れた文献学者で、あらゆる時代を通じてもっとも才知に溢れた文献学者の一人であるリチャード・ベントリーであった。「ベントリーのことを深く知っている者は、ホラティウスの新しい校訂者が、ひとたび彼の推測の大部分を除くならば（この作業は困難なものではない）、テキストの構成に関する事柄のために、もはや彼は、自分にとってほとんど何も為すべきことをもっていないことを疑わないだろう」。このラハマンの判断は、他の一流の研究者たちによっても繰り返えされてお³⁵、ベントリーの作業方法にあまりに単純化されたイメージを与えるという危険はあるとはいえ、本質的には正しいものである。彼において、諸写本の（ホラティウスの場合は「より新しい写本」の）利用と、推測的な作業が順序だてて続くのではなく、絡み合っており、多くの場合、後者が前者に優先している³⁶。しかし、ベントリーの批

ブロックの著作の主要な結論は Waszink: 72-73, 82-83 によって要約されており、それは Grafton 1977b によって共有されている。私は、ヘインシウスの重要性については——繰り返すが——疑問の余地はないが、この書物の過度に弁護的な印象を拭い去ることはできない。

33 いわゆるラゴマルジーニ写本の大部分が実際は、多くは劣悪な写本に由来する、古い印刷本であることは Nardo 1970: 147-148, 154-158 によって明らかにされた。

34 私がダンテ・ナルドから指摘された、これらの例外のひとつは、ヴィチエンツァの著名な園芸家であるジュリオ・ポンテデーラによって制定されたものである。彼は古典古代の研究に身を捧げ、ラテン語の農業に関する作家たち（カトー、ウァッロ、コルメッラ、パッラディウス）のテキストについて卓越した貢献をなした。多くの場合、流布版に対して写本の読みを擁護し、それによって、探究の糸をさらに伸ばしたので——これらの作家に関して——ポリツィアーノとピエル・ヴェットーリから称讃された。ポンテデーラの研究（とりわけ Pontedera 1740）の重要性については、ヨハン・ゴットロープ・シュナイダーが気づき、彼は『農業論集』（*Scriptores rei rusticate*）の中に、死後刊行の『書簡と見解』（*Epistulae ac dissertationes*）再版している（Schneider 1794-96; 4.2. cf. I.vii-viii）。シュナイダーを通して、彼の多くの寄与がより新しい校訂者たちによって受け入れられたが、今まで、文献学史家は彼を無視してきた。

35 Lachmann 1876: 2, 253n1 (= Lachman 1830: 820n1). Cf. Wilamowitz 1982: 78; Kenney 1974.

36 この点については、現在はより正確な Brink 1978: 1141-48, spec.1147-48 を参照。しかし、私見では（以下の註 37 を参照）、ブリックはベントリーのホラティウスについての推測を再評価しようとする点で、また——パウル・マースに倣って——ホラティウスの伝承されたテキストが広く改竄されていると主張する点で行き過ぎている。さらに、ヴィラモヴィッツが（Brink 1978: 1444 が言及しているように）ホラティウスのテキストは推測する「必要がない」と述べたというのは本当ではなく、むしろ、「ほとんど必要がない」（*vershwindend wenig*）のである（Cf. Wilamowitz 1927: 36）。この相違（おそらくはブリックの英語のテキストのイタリア語への翻訳者のせいだろう）は見過ごされるものではない。

判テクスト的行為（流布版に対する健全な不信）という側面は、彼の死後100年たって、まさにラハマンによって明らかにされたのである。ラハマンはこのことを、それがもっとも可視的になる領域、すなわち「新約聖書」の批判から出発して発見した（本稿135ページ以下を見よ）。ベントリーの同時代の、また彼にすぐ続く世代の古典文献学者たちにとって、このような側面は概して、別のより目立つ側面、すなわち非凡な、しかしときおり性急な推測的批判者（カリマコスとマニリウスの修正のことを考えれば十分だろう³⁷）によって隠されたままだった。このことについては、ベントリー自身が、きわめて有名な「われわれにとって理性と事象自体は、百の写本よりも価値がある」³⁸という言葉のように、たしかに積極的な発言によって後押ししている。あるいは、ホラティウスの序文における、おそらくさらに特徴的な一節において彼は、推測はまさに文献学者の責任を全面的に引き受けるがゆえに、伝統的な読みの受容や諸異読間の選択よりも確実な結果を与えることになるだろうと主張している³⁹。流布版や任意の写本が提供する最初の読みへの無精で無批判的な固執に対抗する、彼の議論には真実があった（Kenney, pp.72-73 を参照）。しかし、それは批判版の目的として、歴史的により蓋然性の高いテクストではなく、校訂者の趣向と精神性に従って最良と想像されたテクストを置こうとした。

私は、ミルトンの『失樂園』(*Paradise Lost*) の、恣意的な推測に満ちているベントリー一版が、よく言われているように、彼の老年期の衰退の証拠であるとか、あるいは（こちらの方は幾分の真実を含んでいるかもしれないが）彼がラテン詩とギリシア詩ほどに英詩に親しんでいなかったことの証拠であるとは信じない。私は、ブリンク（Brink: 1161-64）が提示した、幾分パラドキシカルな説が真剣な考慮に値すると信じている。ブリンクによれば、ベントリーによる、テクスト批判の領野では道を踏み外しているミ

37 カリマコスについては Pfeiffer 1976: 153; Pfeiffer 1949-53: 2. xlv-xlvi を参照（また Hemmerdinger 1977: 490-92 を見よ）。マニリウスについては Housman 1937 (1903): xvi-xix を参照。ここは、ベントリーによる、これらの著作家、また他の著作家たちへの輝かしい寄与について立ち止まる場所ではない。

38 彼（Bentley 1711）が刊行した、ホラティウスの『カルミナ』（3. 27. 15）への註において（他の文献学者たちによる類似した言明については Kenney: 42, n.2, 99 を参照）。実際には、ベントリーはこれらの言葉にこう付け加えている。「とりわけ、古いヴァティカンの写本の評決が加わって」。しかし、最良の伝統における“vetat”に対して、彼が支持した“vetat”は、いずれにせよ誤りである。

39 同書の序文（Bentley 1711: 2）。「これらのホラティウスの作業において、われわれは諸写本の助けよりも推測という手段によって読みを与える。そして、もし私がまったく誤っていなかったならば、ほとんどの場合、より確かな読みである。というのは、異なる読みが存在するところでは、権威がしばしば人々を欺き、そして、哀れな切望を癒やそうと強いる。しかし、推測がすべての写本の証言に対して提示されるときには、恐れはなく、恥辱の感覚が人々の耳をつまむこともなく、理性のみと、意味との必然性の明晰さ自体が君臨する。さらに、もしあなたがある写本や別な写本から異読を産みだしたとし、100の証言に対して、1つか2つの証言によって権威に訴えても、あなたがそれを、ほとんど写本の証言なしに、それらの証言に基づいて結論するために十分な論議を支えなければ、あなたは何も達成できないだろう。それゆえ、写字生だけを崇めてはならず、そうではなく、あなた自身の知恵をもちださない。そうすれば、あなたが言論や言語の性格という一般的な浮沈に抗して個別的な諸点をそれらに基づいて検証したときに初めて、あなたはあなたの見解を述べ、あなたの判断を下すのである」。啓蒙期において、ホラティウスの「勇気をもって分別を持つ」（sapere aude）が帯びた価値については Venturi 1959 を見よ。しかし、敬虔なベントリーは、無神論者や有神論者の激烈な反対者であり（本稿 135 ページ以下を見よ）、彼の「啓蒙主義」はテクスト批判に限られていた。

ルトンへの推測は、ミルトンの趣向と異なる趣向と、それに対応する詩的言語を対置させる、文学的批評の間接的な形式なのである。しかし私見では、このような種類のことがなにかしかなら、彼のホラティウスの校訂版においても、小さな程度とはいえ起こっている。すなわち、ホラティウスに対するベントリーの数百に及ぶ推測は、そのきわめて多くの場合において、伝承されてきた読みに対するのではなく、詩人に対する「校訂」なのである。それらの校訂の多くは、厳密な意味において、単純な合理性に還元することのできない、いかなる詩的言語にも（きわめて多様な形式と範囲において）本来的に備わっているものについての彼の無理解を示している⁴⁰。

ベントリーよりも才知と射程の広さにおいては劣っているが、テキスト批判において彼の強力な範例に従った、18世紀前半と19世紀後半のイギリスの文献学者たち（マズグレイヴ、ポーソン、ドーブレ、エルムズリー）は、とりわけ推測家であり、言語学的、韻律的用法について、とくにギリシアの喜劇と悲劇の朗唱的部分について、洗練された知識を備えていた。しかし、彼らはまた、諸写本を参照する必要性も感じていた。そして、もしポーソンが、エウリピデスと他の悲劇作家たちの『『より新しい』写本だけしか存在していないイギリスから動いたことがないという事実によって条件づけられていた』⁴¹としても、彼の前にサミュエル・マズグレイヴはパリに赴き、エウリピデスの二つの重要な写本を校合したし、彼ののちにはピーター・エルムズリーがイタリアを訪ね、ソポクレスのラウレンツィアーナ写本を研究し、初めてその優越性を明らかに認識し⁴²、そして、ヴァチカン図書館のエウリピデスの諸写本を校合して、概ね正確にそれらを評価した⁴³。われわれはまた、彼に、アイスキュロスの全写本が、「古代文学の全般的な難破の中で残存したように思われる、同一の写しから」⁴⁴派生したという示唆を負って

40 私はこの点で少し留まることにする。というのは、ベントリーについての幾つかの書物（Goold 1963; Shackleton Bailey 1963: 105-115; Brink 1978: 1087-1164）は、新しい観点と才知に溢れる考察を加えているが、それにかかわらず、ベントリーのすべてについて無差別の称讃へと向かっている——彼の偉大さは、あらゆる学者、最大の学者においてさえ所有されている限界の認識によって減じることはないのであるが。このことはとりわけ、別の点ではベントリーの個性をもっとも深く掘り下げた当事者であるプリンクの論考において際だっている。ベントリーの推測の大胆さに対する多くの批判者は、近視眼的な保守主義者として責めることができるが、以下のようなハウスマンの観察を無効するのは難しいだろう。すなわち、彼は、すでに引用したマニリウスへの序文（Housman 1937 [1903]: xvi infra-xvii）において、ベントリーによるマニリウスの「誤り」について、それが「ベントリーの他の批判的著作の誤りである」と述べていることを見られたい。類似した留保は、ルカヌスの序文（Housman 1927: xxxii-xxxiii）においても繰り返されている。さらに、推測家として最悪の誤謬をベントリーは、ホラティウスのテキストではなく、セネカの悲劇作品のテキストでおこなった。U・モニカによるパラヴィア版（トリノ、1947年、第2版）のテキスト編集資料に目を通すならば、われわれは、ベントリーの留意にほとんど値しない推測とともに、他に無数の、まったく無益で、「暴力的で」、悪趣味でさえあるものを見いだすだろう。そこには、カリマコスの才知に溢れた修正者を認めることができないうだろう。

41 Di Benedetto 1965: 10.

42 Cf. Jebb 1900 (1886): liv.

43 Di Benedetto 1965: 11-12.

44 Elmsley 1810: 219. その章句はDindorf 1876: 405によって報告されている。その正確な解釈（諸写本は、ディンドルフが理解するように、中世の写本からではなく、いまは失われた祖本から派生したものである）は、ヴィラモヴィッツの『アイスキュロスの悲劇集』の序文（Wilamowitz 1914: xxiii）に負っている。

いる。われわれはすでに、祖型という概念がエルムズリーよりも3世紀前に遡ることを知っている。しかしながら、エルムズリーがアイスキュロスの祖本について、文明の「難破」を免れた唯一の写本と見なした、厳密に「中世的」概念は興味深い。というのは、それはマズヴィクとラハマンの定式化に先んじているからである。アイスキュロスのテキストについて、現在ではこのような種類の祖型を考えることができないということは、また別の問題である。

しかし、ベントリーから彼のイギリスの後継者たちを切り離したくないという私の願望によって、時をあまりに前へと進ませてしまった。そこでわれわれは、今や、歩みを戻して、いかにして「新約聖書」の文献学がテキスト批判の方法論において偉大な進展を遂げることになったのかを示すことにしよう。

第2章 18世紀における体系的校合の要請

校合の技法をスカリゲルとともに留まっていた地点から発展させたのは、上述したように、ギリシア語新約聖書についての研究だった。それについてジョルジョ・パスクアリー (Pasquali 1952a [1934]: 8) はこう述べている。「校合に関しては、世俗的な文献学 (philologia profana) は……今もってしても、それとは知られることなく、聖なる文献学 (philologia sacra) に帰属している」。そして、彼はその理由も示している。新約聖書はきわめて豊かな写本の伝統を有しており、そこに推測的批判をおこなう余地はほとんどないか、まったくない。したがって、前面に現われるのは、無数のヴァリエーションの間で選択し、諸写本のさまざまな権威を見定めるという問題である。そして、ここにおいて、批判的＝テキスト的なあらゆる問題は、とりわけ強い関心を引き起こす。というのは、それは純粋な文献学の域を超えて、神学的な問いを含む、あるいは少なくとも含むからである。

ギリシア語新約聖書の「最初の印刷本」(editio princeps) は、エラスムスによって編纂されたのだが、この偉大な人文主義者のもっとも不幸な刊本のひとつであった。というのは、それは性急に遂行され、また価値の乏しいビザンティン写本に基づいていたからである⁴⁵。しかしまた、ここに、われわれが第1章の冒頭で思い起こした現象が生じる。すなわち、後続する諸版の大部分は、いくつかの混成を含んではいるが、「最初の印刷本」のテキストを再生産したのである。ライデンのエリゼヴィエール (1624年と1633年) が刊行した版の一つはきわめて広範に流布し、プロテスタントの教会によって受け容れられた (いわゆる「受容テキスト」[textus receptus])⁴⁶。

⁴⁵ Waszink 1979:75-77によれば、エラスムスの批判的＝テキスト的貢献は、がいして、印刷者たちが利用するために急いで準備された古典のテキストの諸刊本に求めるべきではなく、ギリシア語テキストの彼のラテン語訳に探し出さなければならない。

⁴⁶ Gregory 1900-1909: 2.937-42. (いまだに基本書)。より簡潔できわめて明快な説明は Hundhausen in Wetzler-Welte 1882-1903: 2.608-9. Metzger 1968 (1964) の第3章と第4章 (第2版の最後の追記を見よ) は、情報量が豊かで最新である。しかし、18世紀の新訳聖書の批判家たちの独特の個性については、十分に際立たせて識別されていない。そして、第6・7章が明らかにしているように、著者は最近のテキスト批判の原理と方法について必ずしも明るいわけではなく、そのことが彼の歴史的な説明を少し

そのときから、ページの下部にヴァリエントを積み重ねることが許されるようになった——ジョン・ミルは、他のだれよりも多く、1707年のオックスフォード版にヴァリエントを収集した。しかし、テキストに変更をもたらそうとするあらゆる試みは、たとえより古い諸写本の権威に基づいていたとしても、神学者たちからの強烈な反対に遭遇した。「もしたれかが……批判的判断を適用し、単語あるいは文字あるいは符号を変更することを試みたとするならば、ただちに不敬な者として、非難の声で彼を切り裂き、そして異端として、猛烈に彼を狩り立てるだろう」とヴェトシュタイン (Wettstein 1730: 158) と書いているが、彼自身がこれらの神学的嫌悪によって辛い目に遭ったのである。

このような不寛容は、カトリックの国々よりもプロテスタントの国々において強かった。「宗教改革にとっては、カトリシズムとは異なり、聖なる書物は真理の唯一の根源であり、そして同時に、カトリシズムにおけるのはまったく違い、すべての民が読む唯一のものである。もし、他のすべての確実性が依拠している第一の確実性が不確実なものに変わるのならば、何が起こることになるだろうか」⁴⁷。しかし、付け加えておかなければならないのは、受容テキストが〈伝統〉として崇敬され、古い諸写本への帰帰が無謀な改変と見られたという同様な誤謬は、神学者たちだけを特徴づけていたわけではなく、また古典文献学者たちの間にも流布していたということである。それは、われわれがすでに想起こした、流布版を底本として用い、諸写本と推測を参照しながらそれを訂正するという方法論的誤謬に由来していた。

この不合理な保守主義の形式を打ち破るためには、新約聖書の領域においてはとりわけ熾烈な戦いが必然であったとしても、古典文献学においても、エルネスティ、ライスケ、ルーンケンが苦勞しなければならなかった⁴⁸。そして、ダンテ文献学においても、傑出したヴェローナの文献学者バルトロメオ・ペラッツィーニ⁴⁹が苦勞しなければならなかった。加えて、彼はほとんど孤立していたのであり、こうしてイタリアにおいては、かの先入観が19世紀にまだ続いていた。トーマーズ・ヴァッラウリが擁護したプラウトゥスの読みの多くは、史料上の権威がほとんどない、あるいはまったくない、もしくはごく最近の推測である流布版の読みだった。それにリッチェルはしばしば、自身の推測ではなく、アンブロジーアーナ図書館のパリンセットの読みを対置させたのである⁵⁰。

さらに、受容テキストのもっとも執拗な擁護者はプロテスタントではあったが、一方で、宗教改革の精神は新約聖書のテキスト批判を、その結果として、古典テキストの批判を推し進めることにもなった。ここでもヴェトシュタインは、彼の迫害者たちに対し

損なっている。

47 Pasquali 1952a (1934): 9. そして、次の言葉で終えている、ヴェトシュタインの素晴らしい讃辞を見よ。「テキスト批判という技法的な領域においてさえも、偉大な発見は多くの場合、高邁な者たちの所産である」。

48 ライスケとエルネスティについては原著 40 ページ以下を見よ。ルーンケンについては Ruhken 1875 (1789): 21 を参照。

49 以下の註 87 を見よ。

50 Vitelli 1962: 130-31 を参照。

て、宗教改革を惹き起こした諸原理に訴えかけた⁵¹。彼が理解していたのは、その諸原理が活力を保っているのは、プロテスタントの大きな教会（ルター派、カルヴァン派、英国国教会）が、勝利を獲得し、政治的権力の承認あるいは権力自体との同一化を獲得した国々で発揮していた教条主義の中ではなく、プロテスタント自体の「異端的」傾向の合理主義的な展開（あるいは、しばしば合理主義かつ神秘主義的な、しかし観想的で不活発ではなく破壊的な神秘主義的発展）の中であった、ということである。

このような流行に、プロテスタントの主要な批判家たちは属していた。ジャン・ル・クレルクはアルミヌス派だった。そして、彼よりも強烈な個性とより広い関心を抱いていた二人の人物、すなわちゲルハルト・ヨハネス・ヴォッシウスとグロティウスがすでにこの派に属していたのであり、彼ら（とくに法律、神学、現実の政治に充てられた活動にかかわらずグロティウス）は、文献学、さらに古典文献学に顕著な貢献をなす時間をつくりだしていた。ヴェトシュタインはソツォーニ派、あるいは少なくともその疑いがあった。ゼムラーは強力な理神論者だった。ルター派で慎重なベンゲルは敬虔主義者だった。そして、彼の『ヨハネの黙示録』の註解において千年王国的な傾向を同意しており、この点において、英国のメソジストに影響を及ぼした。それに対して17～18世紀のカトリック教徒は、ギリシア語新約聖書の批判にはほとんど寄与していない（著しい異端であったリシャル・シモンは別にして）。そして、ラテン語のウルガタ聖書についてのテキスト的探究は、シクストゥス＝クレメンズ版が折衷的な基準によってテキストを決定したのちには、ほとんどすべてが止んだ⁵²。

われわれはリシャル・シモンとジャン・ル・クレルクの名前を挙げた。両者ともにまだ、厳密な意味では、新約聖書を校訂する企ての歴史には属していない。シモンはとりわけ、旧約・新約聖書の真正さ、階層化、歴史的批判に関心があったが（それは、旧約聖書について、シモンの同時代で、われわれがこれまで名前を挙げた誰よりも偉大な、別の「異端者」で、ユダヤ教の神学者からもキリスト教の神学者からも嫌われていたバルーフ・スピノザがおこなったことである⁵³）、しかしテキスト批判には、厳密な意味

51 Wettstein 1730: 158. そしてとりわけ 1734: 220.

52 シクストゥス＝クレメンズ版については Quentin 1926: 18-20 を見よ。教父たちのテキストの校訂版を、諸写本の体系的な校合に基づかせようとした、カトリック圏内でおこなわれた試みについては、Petitmengin 1966 を参照。（正確で理知的な論考であるが、いくつかの弁護論的な誇張もある。）プファイファーのカトリック的な視点が、この傑出した、きわめて惜しまれる学者が、古典文献学の歴史にとっての重要性が指摘されたのちにも、新約聖書のテキスト批判の発展を理解するどころか、語ろうとすることを拒んでいた。プファイファーにおいては、ベンゲル、ゼムラー、グリースバハは名前すら挙げられておらず、ヴェトシュタインについては一箇所、取るに足らぬ言及がある。そして、ル・クレルクはある意味で、エラスムスの著作集の彼の版（137）のおかげで、カトリックの水路に引き戻された。

53 たとえば以下の、註 72 を見よ。新約聖書のテキスト批判者としてのシモンに対する長い無視ののちに、レイノルズ＝ウィルソン『写字生と学者』（Reynolds-Wilson 1991 [1968]: 188）によってなされた要求を読むことは喜ばしいことである。しかしながら、テキスト批判の真正な方法論に関わる点では、彼らは行き過ぎている。シモンの『新約聖書のテキストの批判史』（Simon 1689: 336-416）の第 29～32 章は、革新的な方法的基準というよりも、むしろ個別的な重要な観察（たとえば 250 ページにおける、ケンブリッジのいわゆるベザ写本の価値について）を含んでおり、それにもはや時代遅れとなった別の陳述が混ざっている。たとえば、シモンは——こののちに引用する章句に見られるように、テキストの伝達における陳腐化の経過を観察していたが——「より強い力をもっているように見える表現を含む」

では、いくつかの目を見張る暗示を与えただけだった。

ル・クレルクはこれらと同じ問題に、きわめて合理主義的な基準によって専念したが、多くの点でシモンとは意見を異にしている。文献学者として彼は、「世俗の」ラテン語とギリシア語のテキストを取り扱い、多くの版を校訂したが、優れたものは存在しない。しかし、われわれが本書の冒頭において言及した（註1）彼の方法論的論考、すなわち『批判技法』は、文献学への衝動が、彼の異端的の神学に由来することを明示している。彼は自らの諸原理を同様に、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語に適用した。そして、彼の著作の第2版から第4版まで、2巻の本文のあとに、第3巻目の『批判的・聖職的書簡——この中では批判技法が示され、第3巻と見なすことができる』（*Epistolae criticae et ecclesiasticae, in quibus ostenditur usus Artis criticae, cujus possunt haberi volume tertium*）が付け加えられた。そして、とりわけ『批判技法』が利用した例については、旧約聖書の章句から、さらに多くは新約聖書の章句から採られている。

彼が新約聖書のテキスト批判をさらに集中して浴びせているのは、『ミル版についての書簡』（*Epistola de editione Milliana*）であり、それはルドルフ・キュスターが刊行した『ギリシア語新訳聖書』（ロツテルダム、1710年）の序文のあとに見いだされる（ページ付けなし）。彼はここで、われわれが少し後に（註74）引用する「より短い読み」（*lectio brevior*）という基準についての制限を表明しており、そして、ミルからはほとんど顧みられなかった非間接的伝統に多大な重要性を与えているが、しかしそれを過大評価はしておらず、直接的な伝統の相違が記憶による誤謬に起因している章句と、それに対して、おそらくはより良い読みを保存している章句を区別している。

このことは、彼の文献学者としての、たしかに偉大ではないが、しかし際立った個性を正当な評価するために注意しておくべき点である。たしかに彼を、メナンドロスとフィレモンの断片について、ベントリーとおこなった有名な論争だけから判断するならば、容易に厳しい評価に到達するだろう。すなわち、ル・クレルクのギリシア語の韻律の知識は当時の標準以下であったが、ベントリーのそれは同時代人たちに先んじていた。ベントリーの勝利は明らかであった。しかし、このことは、あたかもこの不幸な結末がル・クレルクの〈すべて〉を示しているかのように、あたかも『批判技法』が存在しなかったかのように、「無益で虚栄に満ちた人間の精神的な逸脱」（Brink 1978: 1140）について語ることを正当化するわけではない。

ル・クレルクがこの著作の中で何度も表明している保守的な傾向、そして、「とうてい自らの思想を表わすことができない作家がより優雅に、より如才なく語るだけのように創出された」⁵⁴推測に対する彼の批判は、ル・クレルクがしばしば明らかに引用し

読みに対して、「より単純な」読みを好むことを宣言している（277ページ。したがって「より容易な読み」[*lectio facilor*]を選択する）。そして、彼はまだ、大多数の写本という基準を信じていた（同上）。ベントリーの『企画』（原著34ページ以下）が、シモンの著作よりも「ほとんど前進していない」と述べるのは馬鹿げている。

⁵⁴ Le Clerc 1730 (1697): 2.269. ル・クレルクはこう付け加えている。「というのも、いったいいかなる作家が、主題がけっしてよく表わされなほど完璧に文章を洗練したのだろうか。これに類似した考察はヴィラモヴィッツ『古典文献学の歴史』（Wilamowitz 1967 [1927]: 148）がおこなうだろう。彼はこれを、すなわち「古代に帰されていた正統的価値に由来する」、絶対的完全性という先入観を乗

ているスカリゲルと、たしかにオランダの文献学者たちの大部分を標的に定めている（おそらくはまだベントリーは射程に入っていない）。しかにそこに、テキストの偉大な校訂者たちに対抗する、推測する能力に乏しい、凡庸な者の吐露だけを見るのは誤っているだろう。ル・クレルクが活動した時代と環境においては、彼の批判は正当なものだった。さらにル・クレルクは、古代のテキストが多くの点で毀損していることをよく知っている。彼は、多くの推測は中世のものではなく古代のものであることを知っている。そしてこのことを彼は、豊富な証言によって記録している（Le Clerc 1730 [1697]: 2.12-27）。

おそらく彼は、のちに主張され過ぎることになる、いわゆる古文書学的毀損の重要性について、あまりにも少ない関心しか抱かなかった。そして、彼は心理学的毀損に知的な関心を払ったが、それは「同一のものから同一のものへの跳躍」（saut du même au même）と呼ばれることになる現象のような（Le Clerc 1730 [1697]: 2.48-56. 彼の例はあまり説得力がないが）、そして、俗語的発音に負っている誤謬のような（Le Clerc 1730 [1697]: 2.56-78）、より機械的な毀損から、同義語による置きかえや他の類似した現象（Le Clerc 1730 [1697]: 2.5）まで及んでいる。彼は、誤謬の大部分が、写字生たちが一語一語を書き写していたのではなく、「句全体」を書き写し、あるいは「時間を節約するために全文章を読んで、そののちに書き記した」（Le Clerc 1730 [1697]: 2.5）ことを理解していたし、その点でも時代に先駆けていた。

彼は、推測が毀損の創出を説明しうることを要求しているが（Le Clerc 1730 [1697]: 2. 277）、これを絶対的な要求として要請しているわけではない（「もしそれが為しうるならば」）。実際に彼は（Le Clerc 1730 [1697]: 2.278 e spec. 9）、「説明しえない」毀損の存在を認めている。というのは、写字生は、あるいは——同じことになるが——朗読者は、モデルのテキストを、その瞬間に自らの脳裏の浮かんだ思考に関係する、まったく異なった言葉に置き換えることができたかもしれないからである——われわれは「フロイトの言い違い」（lapsus freudianno）からあまり遠くないところに、実際には、ある点ではそれをはるかに超えたところにいる。というのは、このような置き換えは、音と意味の類似性によっては、つまり、フロイトが「好都合」（Begünstigungen）と呼ぶことになるものによっては容易に起こらないだろうからである。

ル・クレルクは諸写本の系図については関心がなく、一般的にもっとも古い諸写本を選ぶことに留まっている（Le Clerc 1730 [1697]: 2.290）。しかし、校合者たちの再評価が正当化され、成果を生み出すのは第二の局面になってからであり、最初に必要な段階は、人文主義の時代の、しばしばあまりに改竄された諸写本に関して疑念を抱くことでなければならなかった。ル・クレルクによる、他の校合上の基準に関する事柄（「写字生の習癖」[usus scribendi]、「より難しい読み」[lectio difficior]）についての貢献については、ほとんど言及することにしよう。このようにしてわれわれは、より明瞭に、『批判技法』（幾度も版を重ね、それゆえ広く流通したことを、われわれは思い起こそう）が、

りこえた、最近のテキスト批判の成果と見なすのである。さらに Le Clerc 1730 (1697): 2.10-11, 259 e altrove を参照。

そのすぐのちに起こる、新約聖書のテキスト批判の発展に向かって、きわめて広い道を敷いたのである。

しかし、歴史は——たとえ限定された問題の歴史であっても——、曲がりくねった道を進む。それゆえ、一般的な前提としての「受容テキスト」(textus receptus)を超える新約聖書の版という最初の計画は、われわれがすでに示唆した、そしてのちに語ることになる宗教改革者たちの一人ではなく、文献学において才智に溢れ、かつ大胆であるが、宗教の問題では正統的な人物、すなわち、リチャード・ベントリーに負っていた。彼は、文献学的な関心それ自体にもまして、まさに宗教的正統性という目的によって鼓舞された。すなわち、アンソニー・コリンズが率いる「自由思想家たち」(実際には無神論者ではなく理神論者)に対して、聖書のテキストの権威を目的によってである。

ミルが、すでに述べた1707年の版(本稿131ページ)において積み重ねた新約聖書の写本的伝統における数多くのヴァリエーションの存在は、自由思想家たちにとっては、福音書の真正性と真実に対抗する議論であった。それは、福音書を厳格に遵守するプロテスタントの神学者たちにとっては、テキストの「不確実性」についての同様な論争的利用を恐れることの動機であり、それゆえ、受容テキストから離れることを拒否した。ベントリーにとっては、それは、テキストのより堅固な基礎をつくための動因をもたらし、それによって懐疑主義を打ち破ることになるはずだった⁵⁵。

それゆえ彼は、もっとも古いギリシア語の諸写本と、ラテン語のウルガタ聖書と教父たちのテキストにおける引用との対照に基づいた版を計画し、それはニケア公会議の時代にあった伝統の状態を再構築するはずのものだった⁵⁶。彼は、きわめて豊かで古い伝統をもつ作品においては、校合は推測的批判に先立つべきであることを理解していた(Bentley 1836-38: 3.488)。しかし、彼の計画は、上述したように、宗教的な題材においては破壊的なところがまったくない意図によって書き記されたのであるが、それにもかかわらず、神学者たちの批判に出会った。そしてベントリーは、他の仕事を抱えていたために、またこのような膨大な仕事を遂行する困難さ自体のゆえに、この企図をついに諦めることになった⁵⁷。

たしかに、受容テキストを改良するための、より実現しやすい方法が存在していた。ミルのテキスト資料を参照しながら、テキストのなかに個別的により信頼しうる読みを導入することができた。さらにある場合には、推測に頼ることもできた。最初の手法はすでに1709年から1719年にかけて、すなわちベントリーの『企図』以前に、神学者に

55 ベントリー (Bentley 1713 = Bentley 1836-38: 3.287-368 [spec. 347-61]) におけるコリンズへの論駁を見よ。

56 Bentley 1721 = Bentley 1836-38: 3.477-86. Gregory 1900-1909: 2.949-50; Fox 1954: 105-8; Metzger 1968 (1964): 109-10; Kenney 1974: 100 (ベントリーが1716年に大主教ウィリアム・ウェイクに宛てて書いた書簡の肝要な部分が引用されており、そこにはこの計画の本質的な輪郭が含まれている); Brink 1978: 115-52 (彼が、ニケア公会議以前の時代へと遡ることのベントリーの拒否に含まれる方法論的な自覚が強調しているは理に適っている)を参照。先に引用した『所見』(註11)において、ベントリーによってすでに示唆されている「地理的基準」については、以下(原著55ページ)を見よ。

57 彼が未完のままに残し、現在ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ図書室に保管されている原稿の一部は、より遅く、Ellis 1862 によって刊行された。

して数学者のダニエル・メイスとエドワード・ウェルスによって採用されていた⁵⁸。最初の手法と次の手法はともに、長老派のダニエル・メイスによって採用された⁵⁹。両者とも受容テキストをきわめて注目すべき改良をもたらし、勇気があり、文献学的に価値のある仕事を成し遂げた。しかしながら、いまだに、写本に基づく (ope codicum) 訂正も、より稀に、推測に基づく (ope ingenii) 訂正も気紛れになされたものだった。

ベントリーの計画は方法論的により革新的なものだった。というのは、彼は受容テキストをすべて脇に置いて、常に諸写本を参照することを意図したからである。この道に沿って、18世紀における二人の偉大な新約聖書批判家、すなわち、すでに彼らの宗教的位置のために言及した、ヨハン・アルブレヒト・ベンゲルとヨハン・ヤコブ・ヴェトシュタインは進み、それをさらに発展させた。彼らはテキストへの介入の点で、ウェルスやメイスよりも慎重であったが（というのも、それは、大陸のカルヴァン派とルター派のヨーロッパでは、国教会のイギリスにおけるよりもはかに危険なことだったからである）、理論的な問題においてはより鋭かった。

二人のどちらとも、相手には知られないように気遣っていた。そこから、彼らの論争と彼らの相互の無理解が生じた。ベンゲルの功績は、初めて諸写本の中の類縁関係を決定しようと試みたことである。「諸写本は、同じ古い配置と署名とその他の付随物をもっているならば、互いに密接に関係している」⁶⁰。これらの手掛かりに加えて、彼はまた読みの共通性を基盤としたが⁶¹、まだ、真に証拠となる唯一のものである、毀損の共通性と、正しい読みの共通性を区別することには至っていない。彼が遠い将来に見ていたのは、新約聖書の伝統の全歴史は「系譜表」(tabula genealogica)、すなわち、のちに「諸写本の系図」(stemma codicum) と呼ばれることになるものの中に要約されるること

58 Metzger 1968 (1964): 109 e n.1. 私はウェルスの版を見ることができなかった。

59 [Mace] 1729. Gregory 1900-1909: 2.950-51 (e 3.1360); McLachlan 1938-39 (この論考はイタリアでは見いだすことができず、E.J. Kenney の尽力で参看することができた) ; Metzger 1968 (1964): 100-12 を参照。18世紀の後半部に属する、イギリスの新約聖書の他の批判については Metzger 1968 (1964): 115-17 を見よ。

60 Bengel 1763a (1734) :18 (ギリシア語新約聖書のテキストへの付録) . 1763年版は、『正しくかつ注意深く準備されたギリシア語新約聖書の先駆』(*Prodromus Novi Testamenti Graeci recte cauteque adornadi*) —すでに、ヨハネス・クリュストモス『司教職について』の版 (Bengel 1725) の冒頭に公開されていた—を含んでいる (625-952.) ベンゲルはまた、キケロの『親近書簡集』と、既述のテキストに加えて、いくつかの教父のテキストを校訂した。彼については Nestle 1893 (その煩わしい擁護的な調子にもかかわらず有益) ; Nolte 1913; 今は Mälzer 1970 (十全なモノグラフであるが、ベンゲルをテキスト批判家よりもはるかに神学者として論じている。ともかくも、さまざまな書簡上の証言にとって有益な第6章を見よ) を参照。「批判的テキスト資料」(Appatus criticus) という表現(おそらくベンゲルによって最初に用いられた)と、彼による記号の使用(しかし、ギリシア文字は諸写本ではなく、さまざまな読みの「価値の度合い」を指示している)については Kenney 1974: 156 e n.4 を参照。ヴェトシュタインはこれらの記号を、諸写本を明示するために用いることになる(大文字写本のためには大文字が、小文字写本のためにはアラビア数字が充てられる)。Metzger 1968 (1964): 114 を参照。この使用の先駆者 (Savile 1612) については Kenney 1974: 157 infra を参照。一般的に、批判版の発展については Kenney 1974: 152-57 を見よ。しかしまた、人文主義の時代については Rizzo 1973: 301-23 と、その索引において「諸写本を指示するための記号」という項目 (p.390) に挙げられた章句を見よ。

61 Bengel 1763a (1734): 18. 「しかし、いくつかの読み自体が検討されるならば、それらがともに進行するのが常である」。そして彼は続いて、諸写本のさまざまなグループ化を挙げている。

になるだろうということである⁶²。

それだけではない。ベンゲルが明白に見てとったのは、一つの類似した系譜的分類が、いくつものヴァリエーションの間での選択にとって確実な基準を与え、こうして、最多性という古い、誤った基準を凌ぐことができるだろうということである。「二つかそれ以上のグループが、しばしば合致するならば、一つのものに相当する。二つかそれ以上の写本が一致するならば、一つのものに相当する。一方、それらが互いに異なる場合には、多数のグループや写本と一致するものが、現存しているメンバーの逸脱を無効にする」⁶³。それゆえ、重要なのは、ある読みは諸写本の多数性によってではなく、ファミリーの多数性によって確証されるということである。各々のファミリーの内においてだけ、その祖先の読みを再構築するために、諸写本の多数性が価値をもつ。これはすでに、のちにラハマンが展開し、パウル・マースが『テキスト批判』(Mass 1958 [1927]: p.6, sec.8)で「特異な読みの排除」(*eliminatio lectionum singularium*)——これは適切な表現ではないが、より良い表現がないゆえにわれわれも用いることにする——と呼ぶことになる手順、すなわち、ある伝統があまり混成されていない場合に従うべき手順である。

さらにベンゲルは、いっそう明白に、ある読みの古さの保証は〈さまざまなファミリーに属している〉諸写本の一致によって与えられる、と主張している⁶⁴。もちろん、新約聖書のように、ひどく混成された伝統に、ベンゲルはこれらの基準を直接的に適用することはできなかった(より新しい研究者たちもできなかった)。これらの基準は、より単純で機械的な伝統に適応されるときにかぎって成果を生んだ。それに加えて、論争(実際にすぐに勃発した)と迫害の恐怖によって、ベンゲルはテキストの中に、「先行の

62 Bengel 1763a (1734): 20. 私は、すでに Gregory 1900-1909: 2.908 と Pasquali 1952a (1934): 9 によって引用されている章句全体を引用はしない。ベンゲルはこう付け加えていた。「われわれの推測は巨大な素材を有しているが、手放すことにしよう、真理が笑う者の危険にさらされないように」。それゆえ彼は、この企てがより適った時代に先送りにすべきだと考えていた。この“*manum de tabula*”は、ここでは「手放す」と理解できるが、周知のラテン語の格言的表現であり、「終わりにしよう」、「もう十分だ」という意味である。しかし同時に、彼がすぐ前に述べていた「系譜表」(*tabula genealogica*)に戯れに言及している。

63 Bengel 1763a (1734): 21. 「現存しているメンバーの逸脱」とは〈今、存在している〉グループに見いだされる読みの逸脱を意味しており、それらのモデルに見いだされなかった読みについてではない。

64 Bengel 1763a (1734): 65. 「しかし、源泉に、すなわち最初の手にもっと近く、互いにもっとも遠く離れている諸証拠の多様性は価値がある。こうして、それらは一致によって真正な読みを明示する。Ibid: 68. 「もしその一致が諸写本の多様性を包みこむならば、あらゆる疑念は消え去る」。これらの文脈全体からは、ベンゲルがこの「遠隔性」や「多様性」を地理的な遠さというよりも、さまざまなファミリーへの帰属という意味で理解しているように思われる。同様にのちにグリースバハ(Griesbach 1796 [1774]: x. lxxii)もこう述べている。「そして、もし実際に異なるものとして考えられうる諸証拠が、互いに友好的に一致するならば、結局、それは諸証拠に権威をもたらす一致と評価しなければならない」。それにもかかわらず、ベンゲルは新約聖書の写本の伝統の中で、「アジア産」と「アフリカ産」を区別していたので、「遠隔性」は地理的な意味もまた帯びるようになった。それはすでにベントリーが示唆していたことで、そののち、ラハマンにおいてより明確になる。以下の原著の55ページを見よ。さらに、地理的な意味は、ベンゲルの後期の著作(Bengel 1763b [1742])においてより明白になる。この著作の sec.viii, regula v. 「これらの写本はあらゆる時代とありゆる地方(*climates*)の教会を通して広まり、そして、あらゆるヴァリエーションの多さにもかかわらず、一緒に、真正の読みを示すほど最初のテキストに近づいた」。ここで、*clima* は後期古典期のラテン語におけるように、地域、地方だけを意味している。

刊行者によってすでに採用されていなければ、一つの音節さえも」⁶⁵ 取り入れることを控えた。こうして、彼の版本は、テキスト編集資料で開示された方法論的諸原理よりもはるかに劣る結果となった。

ヴェトシュタインは、ベンゲルよりもはるかに好戦的な精神の持ち主で、ベントリーによって、そして他のイギリス人たちによって開始された受容テキストに対する論争を推し進めた⁶⁶。そして、ベンゲルが自らの思慮深さを正当化するために持ちだした論証を容易に粉碎した⁶⁷。そして、他の者たちが従った、外見的に合理的な基準さえも（「受容テキストで拒否する理由が見いだされない箇所に執着すること」）、ヴェトシュタインは攻撃した。というのは、彼はこのような態度の中に、版本の基礎として諸写本ではなく受容テキストを取り上げ、その結果、真の毀損ではないにしても、きわめて多数の陳腐化を放置すること（1730: 167）が継続されているという事実を明瞭に見てとっていたからである。

彼もまた、死去する直前の最後の版本において、全般的に、自分の受容テキストとの相違を、註の中で表明するのにとどめているが、そのことは、彼がそれまで耐えなければならなかった迫害（福音書のテキストを改変することによって、キリストの神性を否定することを狙っているという非難、司牧の職務の罷免、バーゼルからの追放、アルムテルダムへの避難）について考えるならば説明しうる。しかし、ベンゲルが思慮深く定式化していた諸写本の系譜的分類化の基準に対して、ヴェトシュタインは何の関心も抱かなかった。彼は多数性の基準を攻撃するのに留まっており、ベンゲルが虚偽の推論であることを証明した論議を理解することがなかった⁶⁸。

しかしながら、ヴェトシュタインは、彼の思索のもっとも興味深い局面を表わしている、1730年の『プロレゴメナ』（*Prolegomena*）において、読みの選択において、「写字生の習癖」（*usus scribendi*）と「より難しい読み」（*lectio difficilior*）という内的基準に優位性を与えている。この点においてベンゲルと彼は一致を見いだしていた。ベンゲルが明言するところでは、二つの読みがそれら自体として等価であるときにのみ、「決定は諸写本のより正確な吟味にかかっている」⁶⁹。これらはラハマンが採用することになる立場に対立する。ラハマンは、二つの読みが外的に同等の権威をもっているときにのみ、「判断」（*iudicium*）に委ねられる。

これらの内的基準のうち、一方の「写字生の習癖」は古代の文法学者たちによく知ら

65 Bengel 1763a (1734): 607. 『ヨハネの黙示録』についてだけ、彼は大部分で新しい版を刊行した。

66 Wettstein 1730: 66-67. ベントリーとヴェトシュタインとの関係については Jebb 1889: 159; Bertheau 1908: 199 を参照

67 Wettstein 1734: 218-31 e 1751-52: 1.156-70.

68 Wettstein 1730: 195 さらには Wettstein 1734: 226-28; Wettstein 1751-52: 1.166-67. ヴェトシュタイン以前にも、諸写本の多数性の基準はゲルハルト・フォン・マースリヒトが（G. D. T. M. D すなわち Gerardus de Traiectu Mosae doctor のイニシアル名で）1771年にアムステルダムで刊行した新約聖書の刊本において正典化されていた。ヴェトシュタインは、最古の諸写本に特別の信仰はなく、この点でベンゲルと一致していた（後の註 33 を参照）。

69 Bengel 1763a (1734): 18. この立場は、現在は Waszink, p.87. によって、然るべき根拠に基づいて再確認されている。

れていた⁷⁰。そののち、15～16世紀の文献学者たちが広く利用していたが、それはおそらく、諸ヴァリエーションの間の選択のためというよりも、むしろ推測的校訂のためであった⁷¹。他方の「より難しい読み」の基準についても、古代から17世紀まで、散発的に先駆的試みを見いだすことができる⁷²。それを正確に定式化した最初の人物は、私が知っている限りでは、ジャン・ル・クレルクである⁷³。それゆえ、ヴェトシュタインとベンゲルは、すでに準備されていた土地を発見したのである。しかし、彼らには、とりわけヴェトシュタインには、これら二つの規範の理論的説明と適用にとってより十全な発展をもたらしたという功績は帰せられる⁷⁴。第二の時期においてようやく、ヴェトシュタ

70 とりわけアリストアルコスについては Lerhs 1882: 354-46; Pasquali 1952a (1934): 233, 240-41; Pfeiffer 1968: 228-28 (しかしながら、ここではそれ以上のことが期待されることが許されるだろう)。「写字生の習癖」について、アリストアルコスはたしかに、過剰な、類比に過ぎる適用をおこなっている。

71 それは、推測的校訂のために基準として、たとえば、Le Clerc 1730 (1967): 2.270-82.

72 たとえば、ガレノス『ギリシアの医学者たち』(Medici Graeci, ed. Kühn, 18.1.1005; 17.2.98, 101, 11)において(「これは古代の読みであるが、しかしそれをより明瞭にするために多くの解釈者たちによって改変されている」)。しかし、ガレノスはこの内的基準を、彼にとっては根本的な基礎として留まっている、より古い諸写本の権威を確認するためだけに用いている。ガレノスが従った章句についてのいくつかのさらなる明確化は、この小著のドイツ語版 (Timpanaro 1971: 19) においてD・イルマーがおこなっている。より古風な読みという基準(「より難しい読み」の特別な場合)は、プロブスによって受け入れられ (Servius auctus ad Aen. 12. 605)、ウェルギリウスの一節で flavo よりも floro が選ばれることになった。私は、これがプロブスによって任意に導入された古風主義であると確信することができない。だが、この一節については別のところで、より詳しく論じたいと思っている。中世においては、「より難しい読み」の暗示はイルネリウスに見いだされる。Kantrowicz 1921:31 を参照。17世紀においては、シモン (Simon 1689: 375-76) もまた、写字生が陳腐化する傾向があることに注目している。しかし、彼はそこから、読みの選択のための明確な基準を導きだすことはなかった。

73 Le Clerc 1730 (1697): 2.293. 「もしそれら [すなわちいくつかの読み] の一つがより曖昧で、別の一つがより明快であるならば、実際、より曖昧な読みが真であり、他の読みが難語彙であると信じられる」。この定式化の唯一の欠点は、「より容易な、あるいはより明快な読み」のあまりに限定的な性格である。それは、ル・クレルクにとっては、テキストに侵入し、オリジナルの読みに取って代わった欄外註に、あるいは少なくとも〈意識的な〉陳腐化に常に起源をもっているだろう。だが起源も同程度に、あるいは程度は低いとしても、無意識の陳腐化なのである。

74 Bengel 1763a (1734): 17. 「ある読みがより容易で、ある読みがあまり容易でないとき、古く、重々しく、短いものが選ばれる。あたかも思慮深く導かれたかのように、深い洞察と十全さによって魅了するものは、一般的に脇に置かれる」。より詳しい議論は Wettstein 1730; 179, 184 (「より難しい読み」について) と 188 (「写字生の習癖」について——それから彼は正しくも同一の言葉をもつ章句の繰り返しを区別している。これは一様化の疑いがあり、したがって「多様な」表現のために捨て去るべきなのである)。私はヴェトシュタインの文章をすべて引用しないが、それはすでに Pasquali 1952a (1934): 17 で引用されている。留意すべきは、すでにベンゲルにおいて、次にヴェトシュタインにおいて、そしてグリースバハにおいて、さらには最近のマニュアルにおいても、「より短い読み」が「より難しい読み」の亜種として比較されていることである。しかし「より短い読み」は、〈きわめて〉さらに不確実な基準である。というのは、もしより十全な読みがテキストをより明瞭なものにしようとする欲求に、あるいはさまざまな種類の改竄に由来するのであれば、もっとも短いものは省略によって起こりうる (Dain 1975 [1949])。とりわけ、文脈上は厳密に言えば必要がないが、真正のテキストには現存している言葉の無意識の排除に由来する場合はそうである。拙著『フロイト的言い違い』(Lapsus freudiano, Timpanaro 1976: 35-40)、および Rizzo 1977: 104-5 の他の例を参照。この点においてル・クレルクがきわめて注意深かったことについては、自らが証明している。というのは、彼はキュスターの校訂版(上述、本稿132ページ)に挿入した書簡において、『マタイによる福音書』(3: 11)の伝統の箇所を厳密に言えば必要がない二つの単語の欠如について、その真正性を支持していたからである。「これらの単語が付加さ

インはヴァリアントの選択における主観主義という非難を気にして、とりわけ写本の多数性という基準に執着する結果となったが、しかし、内的基準を拒絶することはなかった⁷⁵。

18世紀の後半部に、別の新約聖書の批判家、ヨハン・ザロモ・ゼムラーは、「外的な年齢」(äusserliches Alter)と「内的な年齢」(inneres Alter)を、すなわち、写本の古代性とそれによって保証される読みの古代性を区別した。すなわち、他の写本よりも新しい写本がより古い読みを保存しうるのである⁷⁶。このことはベンゲルと他の者たちによってそれ以前に指摘されていたが、このように自覚的ではなかった⁷⁷。結局、ヨハン・ヤコブ・グリースバハが彼の第二版の序論において、彼に先行する批判の諸結果を、教育的に完全な形態において要約したのであるが⁷⁸、しかし、彼もまた、受容テキストの不調和について十分に理解していたにもかかわらず、それから自由になるにはあまりに臆病だった⁷⁹。

* * *

れるべきであるという理由は存在しなかったし、それらは曖昧で、その章句の意味を明確するようなものは何も付け加えない。だが反対に、まさにこれらの理由によって、それらは曖昧で無益なものとして排除することもできたのである。すでに「より容易な読み」について、ル・クレルクは、しばしば起こる場合ではないが、意図的な改変について語っている。しかし、彼の論述は、それ自体としてまったく正確であり、「より長い読み」が「より難しい読み」でさえありうることを明示している。

75 Wettstein 1751-52 のはるかに充実した『プロレゴメナ』においては、ヴァリアントの選択のための「留意と注意」(Animadversiones et cautiones) はもはや見いだされない。しかし、それは校訂版の最後に、別物として再版されている。

76 Semler 1765: 88-89. ゼムラー (Semler 1765: 396) はまた、諸写本の多数性の基準に対して反論しているが、きわめて簡単なものである。この点に関しては、彼はベンゲルより進んでいないが、一方、少しのちにエルネスティが一步前進するだろう (「世俗的」テキストの批判において)。ベンゲルの諸写本の分類化を発展させている、ゼムラーが提示した分類化については、原著 54 ページ註 5 を見よ。

77 新しい諸写本が良い読みを持ちえるということは、たとえばニコラース・ヘインシウス (Nicolaas Heinsius 1661: 2.195) によって述べられていた。「アルンデル写本は、新しいものであるが、しかしきわめて正確な読みを提示している」。しかし彼は、それが幸運な推測に負っているかどうか自問していない。ベンゲルについては、彼は「多様な読み全体はほとんど、現在に残っているギリシア語写本のはるか以前に生まれものである」と指摘するに留まっていた。それゆえ、古い諸写本は新しい諸写本に劣らず、すでに毀損を蒙っていたのである。この主張 (ヴェトシュタインによって共有されている) は、疑いもなく誇張されている——たしかに、ル・クレルクが指摘していたように、きわめて重要なヴァリアントと推測が、しばしば十分に古い時代に遡るのは真実であるが。

78 Griesbach 1796 (1774). 方法論的基準に関しては、彼の先行者たちに見いだされないものは、グリースバハの中にもない。したがって、たとえばメツガー (Metzger 1968 [1964]: 119) のように、彼を新約聖書のテキスト批判の「近代の批判期」の最初に置くのは誤っている。彼はある重要な時代を然るべき終わらせたが、新たな時代を始めたのではない。また「中間の読み」(lectio media; Griesbach 1796 [1774]: lxiii) の基準も、パスクアリー (Pasquali 1952a[1934]: 11) はその新しさを強調しているが、すでにベンゲル (Bengel 1763a [1734]: 17) によって定式化されている。「二つだけでなく、また多くの読みが存在するときには、中間の読みが最善である。というのは、あたかも中心からのように、この読みから他の読みが分散するからである」。これは、現代ではコンティニ (Contini 1955:134 e poi altrove) が「拡散」と読んでいるものである。しかしながら、グリースバハの論述は先行者たちのそれよりも明瞭で、かつ優雅である。

79 それにもかかわらず、彼は自らのテキストの中に、受容テキストとは異なる読みを導入した。

その間に、古典文献学者たちは、テキスト批判において、神学者たちの後塵を拝していることに気づいた。1730年にヴェトシュタイン (Wettstein 1730:166) が新約聖書の研究者たちに、従うべき例として、世俗のテキストの批判家たちを示すことができたのであるが、ヴェトシュタイン自身、ベンゲル、そしてゼムラーの業績以降は、その立場が逆転していた。ヨハン・ヤコブ・ライスケは次のように書いていた。「われわれは、新約聖書と劣らない細心さをもって、世俗の著作家たちを取り扱わなければならない。われわれが新約聖書の諸写本を吟味するのと同じ理由によって、デモステネスや他の、いかなる古い著作家だろうと、彼らの写本を精査し、それらの読みを探し出し、そして刊行するのがふさわしい。というのは、これが、信頼が確認された多くの古い諸写本の一一致をもとに、聖なるものであろうと世俗のものであろうと、テキストの歴史的真相を証明する唯一の方法だからである」⁸⁰。

実際、ライスケはアテナイの雄弁家たちと、リバニオスのようなアテナイ人たちのテキストに貢献したが、それは写本の伝統への探究よりも、むしろ彼の素晴らしい推測によるものだった(彼の多くの推測は、彼には知られていなかった写本によって、ようやく後に確認された⁸¹)。しかし、諸写本の気ままな校合にとどまる代わりに、それらをテキストの〈恒久的な〉基礎に置こうとする要求は、すぐのちに、エルネスティのタキトゥスへの序文において、また再びフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフの『ホメロスへのプロレゴメナ』の最初の箇所において、きわめて明確に言明された⁸²。二人とも、受容テキストによって満足できない箇所でのみ諸写本を参照するという古い方法に従うことは、テキストの中に、数多くの小さな毀損と、善かれ悪しかれ、意味をもつがゆえに疑念を呼び起こさない「より容易な読み」を残すことに帰着することを正しく認識していた。

ヴォルフはこう述べている。「この浅薄で、いわば散漫な類のものから、正しい、恒常的な、確実な規律の技法に基づいた校合は明確に区別される。前者においては、われわれは、際立った、あるいはある写本において現れるもの以外は、その傷を治療しようとはしない。われわれは、意味の点では正しい、受容されうるものを見過ごすし、また権威の点で最悪のものについても同様である。一方、正しい校合は、あらゆる有益な道

⁸⁰ Reiske 1770: lxxvi.

⁸¹ しながら、ディーター・イルマーが私に指摘したように、ライスケにはデモステネスの写本の伝統において、写本A (アウグスト、現在はミュンヘン 485) の価値を最初に認識し、それを利用したという功績がある。この写本について、ヒエロニムス・ヴォルフはすでに、彼自身のデモステネスの刊本(H. Wolf 1572)において、シモン・ファブリキウスから伝えられた読みを引いているが、しかしそれらをテキストの中に導入してはなかった (Voemel 1857: 183, 193-94を参照。私はこの著作についてもイルマーの情報に負っている)。

⁸² Ernesti 1801 (1772): vi. F. A. Wolf 1985 (1795): 43-55. ヴォルフは明らかに、エルネスティからの影響に加えて、おそらくゼムラーの影響を受けている。ヴォルフとゼムラーの親密な友情については Koerte 1833: 1.252を参照(このことについて私はコンラート・ミュラーから示唆された。彼から私はまた、ヴォルフが、彼のホメロスの校訂版 [F.A. Wolf 1804; 1 = F.W. Wolf 1869: 1.252])において、伝達された読みの外的および内的蓋然性の様々な段階に関して、「聖なる批判主義の卓越された確立者」グリースバハに言及していることを指摘された。

具の援助が得られるならば、いたるところに、著者の真の手を探し出す。それは疑わしいものだけではなく、あらゆる読みの証拠を順序だてて吟味する。そして、きわめて重大な根拠のある場合に限って、すべてが同意している読みを変更する。証言の支持によって認められた限りにおいて、それ自体として、著者にとってきわめてふさわしく、形態の点で正確で優雅な、他の読みを最良のものとして受け入れる。それゆえ、証拠によって強いられ、優雅な読みを、あまり優雅ではない読みに変えるのは稀なことではない。包帯を取って傷をあらわにする。最後に、明白な疾病だけではなく、また隠された疾病をも治療する⁸³。類似した手順だけが、単純な「点検」(recognitio)ではなく「校合」(recensio)の名に値する(F. A. Wolf 1985 [1795]: 45)。体系的な「校合」ののちにはじめて、推測的な「校訂」へと移行することができるだろう。しかし「校訂」についてヴォルフはあまり共感を抱いていなかった⁸⁴。こうして、「写本に基づく校訂」の古い概念は完全に乗り越えられていた。

他方では、体系的な校合と流布版の拒否の必要性は、ヴォルフにおいて、もっとも古い写本へのあまりに排他的な信頼を伴ってはいない。この「より新しい写本が必ずしも劣っているわけではない」(recentiores, non deteriores)という主張は、われわれが知っているように、それ自体としては新しいものではなく、とりわけゼムラーから積極的な影響を受けたものだった⁸⁵。しかし、ヴォルフの形成について語る労を執るべきだろう(F. A. Wolf 1985 [1795]: 46)。「諸写本の新しさは、欠陥というよりも人間の若さである。

83 F. A. Wolf 1985 (1795): 43-44. また、ヴォルフによる、プラトン『饗宴』の校訂版への序文を参照(F. A. Wolf 1782: v-vi = F. A. Wolf 1869: 1.135-36)。「しかし、このことは、もし初版や古い版が、個々の曖昧な、あるいは明らかに誤っている章句のためにだけ時おり調べられ、比較されるのであれば、起こりえない」。しかしすでにエルネスティ(Ernesti 1801 [1772]: vi)は次のように述べていた。「先立つ時代においては、古代の作家を校訂しようとした人々は、気に掛かる箇所において写本と刊本を参照することで満足していた。……それゆえ彼らは、同じ写本と刊本から訂正することができた多くのものを、手つかずのままに放置するままで終わった。ウルガタ聖書の読みのあらゆる誤りを自分の力によって見いだするほど慧眼な持ち主はいなかったし、誤りのあるものを正しいものとして是認することも時おり生じた」。しかしながらエルネスティにおいては、これらの的確な理論的言明が実際に適用されているのを見いだすことはほとんどできない。タキトウスの校訂版にせよ、より良いキケロの校訂版にせよ、キケロに関してズンプト(C. G. Zumpt 1831: 1.xxiv-xxviii)が正しく指摘しているように、実質的には、諸写本ではなく、先行する諸刊本に基づいている。この観点からより良いのはカリマコスの校訂版(Ernesti 1761)であり、その序文において(fol. 5b)エルネスティは、『讃歌』のすべての介在するものがない写本は、失われた唯一の祖型に由来することを、それらの一致した「脱落と読み」に依拠して確証している(Pfeiffer 1949-53: 2.lvを参照)。

84 「楽しい気晴らし」とヴォルフは、『プロレゴメナ』の冒頭で「校訂」のことを呼んでいる(F. A. Wolf 1985 [1795]: 45. 44および参照)。しかしながらヴォルフは、無批判的な保守主義者ではなかった。彼はペントリー(上述、本稿127ページ)の有名な章句を反響させながら、「才知」(ingenium)を「羊皮紙の宝蔵」(membranacei thesauri)に先行させることを認めている。しかし彼は、校訂を校合に優先すべきでなく、ましてや、それに取って代わらせるべきではないと主張している。そして、エルネスティのように、「隠された誤謬」(上述)を治療するための校訂の重要性を強調している。とはいっても、ヴォルフが『プロレゴメナ』において一般的に語っているとき、彼がとくに念頭に置いているのは、推測的批判を必要としない古典古代のきわめて少ないテキストの一つである、ホメロスのテキスト(差し込まれたテキストという問題を除く)であったことに留意しなければならない。彼はのちに、校訂についてより好意的な判断を下している(F. A. Wolf 1807: 40 = F. A. Wolf: 1869: 2.832)。

85 ヴォルフとゼムラーとの関係については、上述、本稿141ページおよび註82を見よ。

年齢が必ずしも知恵をもたらすのではない。古く、良い権威に正しく従っている者は、その証言も良いものである。もし、ある写本の「最近の年代」と人間の青年期と類比が、優美な機知以上のものでないにしても、最後の一句は、原理的に、「より新しいもの」が「より劣っているもの」ではけっしてないことを巧みに説明している。最近の写字生は、古く良い写本を「良く」（そしてヴォルフは強調しているように見えるが、直接的に）写すことができたのである⁸⁶。エルネスティはベンゲルよりもはるかに巧妙に、同じ祖先に由来する多くの写本は、一つのものとしての価値を有するという原理を明らかにした⁸⁷。

クリスティアン・ゴットロープ・ハイネとアルザス人ジャン・シュヴァイクホイザーは、それぞれティブルスとエピクテトスの『提要』の諸写本の系譜を再構成することを試みた⁸⁸。たしかに、これらの試みはまったく不完全なものに終わったが、それは、写本資料への経験の浅さと不完全な知識のためばかりではなく、またとりわけ、現在においてもまだ、きわめて多くの場合に、諸写本の系図（*stemma codicum*）を辿ることが不可能にする客観的な理由、すなわち混成のゆえである。この混成という現象について、

⁸⁶ Kantrowicz 1921: 2122; Pasquali 1952a (1934): 46 を参照。彼らの議論はヴォルフよりも明瞭で十全に定式化されているが、実質的には、ヴォルフのそれと異なっているわけではない。

⁸⁷ Ernesti 1801 (1772): xxviii. 「諸写本が問題となると、われわれは数の上で多くのものを所有しているということではなく、いわば見解を述べるべき権利がある多くのものを所有している、ということに留意しなければならない。……というのは、もしあなたが同じ書物の百の写本を所有しているならば、それは一つの原型に由来することは明らかであり、それゆえ、それらのすべては一つの書物の権利と権能しか有していない」。グリースバハ（Griesbach 1796 [1774]: i.lxxi）は、きわめて類似した言葉でこの概念を表現している。しかし、イタリアは、文献学的にはまったく「停滞した」（*depresso*）環境にあったのだが（それでもヴェローナは例外的な存在だった）、ドメニコ・ヴァッラルシはすでに、聖ヒエロニムスの彼の校訂版の序文において、この原理を表明していた（Vallarsi 1766 [1734], rist. In Migne 1845: p.xxxix, para. 35）。すなわち、誤謬あるいは恣意的改変 [*criticorum ausis*] において一致する諸写本は、「一つ以上のもの」に値しない。ここで理解すべきは、批判家たちの恣意性ということに関して、ヴァッラルシは、誤って、混成の可能性を見過ごしていたということである。そして、とりわけ 18 世紀の、まさにヴェローナにおいて、ダンテのテキスト批判は、バルトロメオ・ペラッツィーニというヨーロッパ的才知の文献学者を得た（『ダンテの「神曲」の訂正と註釈」Perazzini 1775）。彼についてはフォレーナ（Folena 1965: 67-69）がわれわれの関心を引いたばかりである。ペラッツィーニは、（おそらくヴァッラルシの影響によって）上述した系譜的原理を繰り返すにとどまらず、彼の同時代の、あるいは少し以前の新約聖書文献学者の流布版と多くは共通していた、流布版の擁護者たちに対して激烈な論争をしかけた。この類似性は、『神曲』が新約聖書には及ばないとしても、宗教的および芸術的要因の複雑な関与によって、「聖なるテキスト」と考えられていた、という事実によって高められていた。ペラッツィーニは「聖なるテキストの予断」について明確に語り（Prazzini 1775: 56）、こう繰り返している。「もし最初に完全に校訂されていなかったならば、いかなるテキストも〈聖なる〉ものではない」。加えて、「それゆえ、私は革新者と言われるべきではなく、そうと言われるべきはかつて受容されていたテキストを改変した者である [すなわち、この場合には、新約聖書の受容テキストという意味ではなく、伝統のより古い基層、後述するような「古代の読み」*antiqua lectio*] という意味である」。

⁸⁸ Heyne 1871 (1755): xiii-lxxviii. しかしながら、ハイネの系譜は第一に、ティブルスの〈諸刊本〉の系譜であり、諸写本の系譜は副次的なものだった。Schweighauser 1798: pref. シュヴァイクホイザーは諸写本を分類するために、共通の毀損よりも、エピクテトスの『提要』のテキストとシンプリキオスによるそれへの註釈のテキストの相互的配置に信を置いていた（Timpanaro 1955: 70 を参照）。シュヴァイクホイザーのより大きな功績は、「派生的写本の除外」（*eliminatio codicum descriptorum*）に存する。以下、原著 69 ページを見よ。

ハイネ——テキスト批判においてはたしかに独創性に富んでいたわけではないが、テキストの批判家としては、一般に言われているよりも重要である文献学者⁸⁹——はしっかりと理解していた。新約聖書についてはグリースバハが理解していた⁹⁰。

またホメロスの写本の伝統は、あまりに混成されていたために、ヴォルフの「クラスとファミリーによって」順序づけるという企てが実現しえたほどである⁹¹。しかしヴォルフは、『プロレゴメナ』の中で、ヴィヨワゾンが発見したヴェネツィアの註釈を利用できたおかげで、ある別の事柄を、すなわち、古代のテキストの歴史を実現することができた⁹²。このようにして、ヴォルフはラハマンへの道ではなく、むしろヤーンとヴィラモヴィツの「テキスト史」(Textgeschichte) という概念と、19世紀と20世紀に——パスクアーリのある章のタイトルを繰り返すならば——「古代の諸ヴァリエントと古代の諸版」についてなされたすべての研究への道を準備した。ヴォルフにとっては、ホメロスのこの問題は、『イリアス』と『オデュッセウス』におけるテキストの歴史の最初の口承的で民衆的な局面でしかなかった。すなわち、『プロレゴメナ』においては、歴史的=文学的問題自体としてではなく、このような問題として扱われたのである⁹³。

89 Heyne 1817 (1755): xv, xxxvi. ここでハイネは「おそらく他のものとともに準備され、あるいはそれらから作成されて原型」について語っている。テキストの批判家としての、そして一般に文献学者としてのハイネの名声は、彼の弟子であるヴォルフとラハマン（そしてあまり技術的ではない領域においてフリードリヒ・シュレーゲル）が彼に向かってとった軽蔑的な調子によって損なわれている。ラハマンについてはとりわけ Lachmann 1876: 2.106 を見よ。

90 Griesbach 1796 (1774): lxxviii. 「ある校合の読みが別のファミリーの写本に導入される」。ゼムラーはすでに (Semler, 1765)、異なる章句に応じて、まさに同一の写本が異なる「校合」に服していることをしばしば指摘していた (Semler [1765])。

91 F. A. Wolf 1985 (1795): 44. ヴォルフは、ある場合には、系譜的方法の適用を許すことができるだろう他の著作家たち (プラトン、キケロなど) の校訂版においては、自らの原理とは対照的に、性急な「点検」(recognitions) に留まった。

92 すでにリシャル・シモンは『新約聖書のテキストの批判的歴史』(Simon 1689)において「テキストの歴史」という概念に到達していたが、古典文献学者たちの中で、彼に続く者はいなかった。現在では Pfeiffer 1976: 130 を参照。

93 この点について、拙稿『19世紀文化の諸局面と諸様相』(Timpanaro 1980: 125 e n.28) を参照。

[引用文献]

- Bengel 1725: *Johanni Chrysostomi De sacerdotio libri sex*, ed. J. A. Bengel. Stuttgart, 1725.
- Bengel 1763a (1734): J. A. Bengel, *Apparatus criticus ad Novum Testamentum*. Tübingen, 1763.
- Bengel 1763b (1742): J. A. Bengel, *Gnomon Novi Testamenti*. Ulm, 1763 (1st ed. Stuttgart, 1742).
- Bentley 1711: R. Bentley, ed., *Q. Horatius Flaccus*, 2 vols. Cambridge, 1711.
- Bentley 1713: R. Bentley, *Remarks upon a Late Discourse of Free-Thinking*. London 1713 (= Bentley 1836-38: 3.287-368)
- Bentley 1721: R. Bentley, *Proposals of Printing a New Edition of the Greek Testament*. London, 1721 (= Bentley 1836-38: 3.477-86)
- Bernays 1855: J. Bernays, *J. J. Scaliger*. Berlin, 1855.
- Bertheau 1908: C. Bertheau, "Wettstein, Johann Jakob, gest. 1754," *Realencyklopädie für protestantische Theologie und Kirche*, 3rd ed., (1908), 21.198-203.
- Blok 1949: F. F. Blok, *N. Hensius in Deinst van Christiana van Zweden*. Delft, 1949.
- Branca 1973: V. Branca, "Mercanti e librai fra Italia e Ungheria," in *Venezia e Ungheria nel Rinascimento*, ed. V. Branca, 335-52. Firenze, 1973.
- Brink 1978: C. O. Brink, "Studi classici e critica testuale in Inghilterra," *Annali della Scuola normale superiore di Pisa*, ser. 3, 8, no.3 (1978): 1071-1228.
- Bröcker 1885: L. O. Bröcker, "Die Methoden Galens in der literarischen Kritik," *Rheinisches Museum* 40 (1885): 415-38.
- Caprioli 1969: S. Caprioli, *Indagini sul Bolognini: Giurisprudenza e filologia nel Quattrocento Italiano*. Roma, 1969.
- Carlini 1967: A. Carlini, "L'attività filologica di F. Robertello," *Atti Accad. di Udine*, ser. 7, 7 (1967): 53-84.
- Casamassima 1964: E. Casamassima, "Per una storia delle dottrine paleografiche dall'Umanesimo a Jean Mabillon," *Studi Medievali*, ser. 3, 5 (1964): 525-78.
- Contini 1955: G. Contini, "Note sui rapporti fra localizzazione dei MSS e 'recensio,'" in *Studi e problemi di critica testuale*, 85-92. Bologna, 1961.
- Dain 1975 (1949): A. Dain, *Les manuscrits*, 3rd ed. Paris, 1919 (1st ed. Paris, 1949).
- Di Benedetto 1965: V. Di Benedetto, *La tradizione manoscritta euripidea*. Padova, 1965.
- Dindorf 1876: W. Dindorf, *Lexicon Aeschyleum*. Leipzig, 1867.
- Ellis 1862: A. A. Ellis, *Bentleii critica sacra*. Cambridge, 1862.
- Elmsley 1810: P. Elmsley, Review of C. J. Blomfield, ed. *Aeschyli Prometheus Vincetus* (Cambridge, 1810), *Edinburgh Review* 33 (1810): 211-42.
- Erasmus 1538 (1500): Erasmus, *Adagiorum Chiliades*. Basel, 1538 (1st ed. Paris, 1500).
- Ernesti 1761: *Callimachi hymnos, epigrammata et fragmenta cum notis variorum*, ed. J. A. Ernesti. Leiden, 1761.
- Ernesti 1801 (1772): *Taciti opera*, vol.1, ed. J. A. Ernesti, rev. J. J. Obelin. Leipzig, 1801 (1st

- ed. Leipzig, 1772).
- Folena 1965: G. Folena, "La tradizione delle opere di Dante Alighieri," in *Atti del Congresso internazionale di studi danteschi*, 1.1-78. Firenze, 1965.
- Frankel 1950: E. Frankel, *Aeschylus Agamemnon*. Oxford, 1950.
- Giarratano 1951: C. Giarratano, "La critica del testo," in *Introduzione alla filologia calssica*, 73-132. Milano, 1951.
- Goold 1963: G. P. Goold, "Richard Bentley: A Tercentary Commemoration," *Harvard Studies in Classical Philology* 67 (1963): 285-302.
- Grafton 1975: A. T. Grafton, "J. Scaliger's Edition of Catullus (1577) and the Traditions of Textual Criticism in the Renaissance," *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 38 (1975): 155-81.
- Grafton 1977a: A. T. Grafton, "On the Scholarship of Politian and Its Context," *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 40 (1977): 150-88.
- Grafton 1977b: A. T. Grafton, "From Politian to Pasquali," *Journal of the Roman Studies* 67 (1977): 171-76.
- Gregory 1900-1909: C. R. Gregory, *Textkritik des Neuen Testamentes*, 3 vols. Leipzig, 1900 (vol.1), 1902 (vol.2), and 1909 (vol.3)
- Griesbach 1796 (1774): *Novum Testamentum Graece*, 2 vols., 2nd ed., ed. J. J. Griesbach. Halle 1796 (1st ed., Halle, 1774).
- Haupt 1875-76: M. Haupt, *Opuscula*, 3 voll. Leipzig, 1875-76.
- Heinsius 1661: N. Heinsius, ed., *Publii Ovidii Nasonis opera omnia*. Amsterdam, 1661.
- Hemmerdinger 1977: B. Hemmerdinger, "Philologues de jadis (Bentley, Wolf, Boeckh, Cobet)," *Belfagor* 32 (1977): 485-522.
- Hertz 1851: M. Hertz, *Karl Lachmann: Ein Biographie*. Berlin, 1851.
- Heyne 1817 (1755): C. G. Heyne, ed., *Tibulli carmina*, 4 ed., rev. C. F. Wunderlich, vol. 1. Leipzig, 1817 (1st ed. Leipzig, 1755).
- Housman 1927 (1926): M. Annaei Lucani: *De bello civili*, ed. A. E. Housman. Oxford, 1927 (1st ed. Oxford, 1926).
- Housman 1937 (1903): *M. Manilii Astronomicon*, Book 1, 2 ed., ed. A. E. Housman. Cambridge, 1937 (1st ed. Cambridge, 1903).
- Jebb 1889: R. C. Jebb, *Bentley*. London, 1889.
- Jebb 1900 (1886): R. C. Jebb, Sophocles: *The Plays*: vol. 2, *The Oedipus Coloneus*, 3rd ed. Cambridge, 1900 (1st ed. Cambridge, 1886).
- Kantrowicz 1921: H. Kantorowicz, *Einführung in die Textkritik*. Leipzig, 1921.
- Kenny 1974: E. J. Kenny, *The Classical Text: Aspects of Editing in the Age of the Printed Book*. Berkeley, Los Angeles, and London, 1974.
- Kenney 1980: E. J. Kenney, "A Rejoinder," *Giornale italiana di filologia*, 32 (1980): 321-23.
- Kirner 1901: G. Kirner, "Contributo alla critica del testo delle Epistolae ad Familiares di Cicerone," *Studi italiani di filologia classica* 9 (1901): 369-433.

- Koerte 1833: W. Koerte, *Leben und Studien F. A. Wolfs*. Essen, 1833.
- Lachman 1830: K. Lachman, "Rechenschaft über Lachmans Ausgabe des Neuen Testaments," *Theologische Studien und Kritiken* 3, no. 2 (1830): 817-45 (= Lachmann 1876: 2. 250-72).
- Lachmann 1876: K. Lachmann, *Kleinere Schriften*, 2 voll. Berlin, 1876.
- Le Clerc 1730 (1697): J. Le Clerc, *Ars critica*, 5 ed. Amsterdam, 1730 (1st ed. Amsterdam, 1697).
- Lehrs 1882: K. Lehrs, *De Aristorachi studiis Homericis*. Leipzig, 1882.
- Leutsch 1851: *Corpus Paroemiographorum Graecorum*, vol. 2, ed. E. L. Leutsch. Göttingen, 1851 (rpt. Hildesheim, 1965).
- Ludwich, 1885: A. Ludwich, *Aristarchs Homerische Textkritik*, vol. 2. Leipzig, 1885.
- [Mace] 1729: [D. Mace], ed., *The New Testament in Greek and English*. London, 1729.
- Mälzer 1970: G. Mälzer, *J. A. Bengel: Leben und Werk*. Stuttgart, 1970.
- McLachlan 1938-39: H. McLachlan, "An Almost Forgotten Pioneer in New Testament Criticism," *Hibbert Journal* 37, no.4 (1938-39): 617-25.
- Metzger 1968 (1964) : B. M. Metzger, *The Text of the New Testament : Its Transmission, Corruption, and Restoration*, 2nd ed. Oxford, 1968 (1st ed. Oxford, 1964)
- Morel 1766: J. B. Morel, *Eléments de critique*. Paris, 1766.
- L. Müller 1869: L. Müller, *Geschichte der klassischen Philologie in den Niederlanden*. Leipzig, 1869.
- Munari 1950: F. Munari, "Codici heinsiani degli Amores," *Studi italiani di filologia classica*, n.s., 24 (1950): 161-65.
- Nestle 1893: E. Nestle, "Bengel als Gelehrter: Ein Bilf für unsere Tage," In *Marginalien und Materialien*, 2.1-143. Tübingen, 1893.
- Nolte 1913: F. Nolte, *J. A. Bengel*. Gütersloh, 1903.
- Pascal 1918: C. Pascal, "Emendare," *Athenaeum* 6 (1918): 209-16.
- Pasquali, 1942: G. Pasquali, *Terze pagine stravaganti*. Firenze, 1942.
- Pasquali 1952a (1934): G. Pasquali, *Storia della tradizione e critica del testo*. Firenze, 1952 (1a ed. Firenze, 1934).
- Perazzini 1775: B. Perazzini, "Correctiones et adnotationes in Dantis Comoediam," in *In editionem tractatum vel sermonum S. Zenonis*, 55-86. Verona, 1775.
- Peri 1967: V. Peri, "Nicola Maniacutia: Un testimone della filologia romana del XII secolo," *Aevum* 41 (1967): 67-90.
- Perosa 1955: A. Perosa, *Mostra del Poliziano nella Bibliotheca Medicea Laurenziana*. Firenze, 1955.
- Pettimengin 1966: P. Pettimengin, "À propos de éditions patristiques de la Contre-Réforme," *Recherches Augustiniennes* 4 (1966) : 199-251.
- Pfeiffer 1949-53: *Callimachus*, 2 vols., ed. R. Pfeiffer. Oxford, 1949-53.
- Pfeiffer 1968: R. Pfeiffer, *History of Classical Scholarship from the Beginning to the End of the Hellenistic Age*. Oxford, 1968.

- Pfeiffer 1976: R. Pfeiffer, *History of Classical Scholarship from 1300 to 1850*. Oxford, 1976.
- Poliziano 1972: A. Poliziano, *Miscellaneorum centuria secunda*, ed. V. Branca e M. Pastore Stocchi. Firenze, 1972.
- Poliziano 1978: A. Poliziano, *Commento alle Silve di Stazio*, ed. L. Cesarini Martinelli. Firenze, 1978.
- Pontedera 1740: J. Pontedera, *Antiquitatum Latinarum Graecarumque enarrationes atque emendationes*. Padova, 1740.
- Quantin 1846: M. Quantin, *Dictionnaire raisonné de diplomatique chrétienne*. Paris, 1846.
- Quentin 1926: H. Quentin, *Essais de critique textuelle*. Paris, 1926.
- Reeve 1974: M. D. Reeve, "Heinsius's Manuscripts of Ovid," *Rheinisches Museum* 117 (1974): 133-66.
- Reiske 1770: J. J. Reiske, ed., *Oratorum Graecorum ... quae supersunt*, vol.1. Leipzig, 1770.
- Reynolds-Wilson 1991 (1968): L. D. Reynolds and N. G. Wilson, *Scribes and Scholars*. Oxford, 1991 (1st ed. Oxford, 1968)
- Rizzo 1973: S. Rizzo, *Il lessico filologico degli umanisti*. Roma, 1973.
- Robortello 1557: F. Robertello, *De arte sive ratione corrigendi antiquos libros disputatio*. Padova, 1557.
- Ruhnken 1975 (1789): D. Ruhnken, *Elogium Tiberii Hemsterbusii*, ed. J. Frey. Leipzig, 1875 (1st ed., 1789)
- Sabbadini 1920: R. Sabbadini, *Il metodo degli umanisti*. Firenze, 1920.
- Savile 1612: *Johannes Chrysostomi Opera*, ed. H. Savile, vol.8. Eton, 1612.
- Scaliger 1582 (1577): *Iosephi Scaligeri Catulli Tibulli Propertii nova editio cum castigationibus in Catullum, Tibullum, Propertium*. Antwerpen, 1582 (1a ed. Paris, 1577).
- Scagliger 1600 (1579): J.J. Scagliger, ed., *M. Manilii Astronomicum Libri quinque*. Leiden, 1600 (1st ed. Strasburg, 1579)
- Scaliger 1627: *Ioseph Scaligeri Epistolae*. Leiden, 1627.
- Schweighauser 1798: J. Schweighauser, ed., *Athenaei Naucraticae Deipnosophistarum libri quindecim*. Strasuburg, 1801-7.
- Semler 1765: J. S. Semler, *Hermeneutische Vorberitung*, vol.3, pt.1. Halle, 1765.
- Shackleton Bailey 1963: D. R. Shackleton Bailey, "Bentley and Horace," *Proceedings of the Leeds Philosophical Society* 10, no.3 (1963): 105-15.
- Simon 1689: R. Simon, *Histoire critique du texte du Nouveau Testament*. Rotterdam, 1689.
- Timpanaro 1955: S. Timpanaro, Recensione di *Niccolo Perotti's Version of the Enchiridion of Epictetus*, ed. R. P. Oliver (Urbana 1954), *La Parola del Passato* 10 (1955): 67-70.
- Timapanaro 1971: S. Timpanaro, *Die Entstehung der Lachmannschen Methode*. Hamburg, 1971.
- Timpanaro 1976: *Il lapsus freudiano: Psicanalisi e critica del testo*. Torino, 1974. [*The Freudian Slip: Psychoanalysis and Textual Criticism*, trans. By K. Soper. London, 1976.]
- Troje 1971: H. E. Troje, *Graeca leguntur*. Köln und Wien, 1971.
- Vallarsi 1766 (1734): *Sancti Eusebii Hieronymi Opera*, 11 vols., ed. D. Vallarsi. Verona, 1776

- (1st ed., 1734)
- Venturi 1959: F. Venturi, “Controbuti ad un dizionario storico 1: Was ist Aufklärung? Sapere aude,” *Rivista storica italiana* 71 (1959): 119-28.
- Vettori 1540: *Petri Victorii Explicationes suarum in Ciceronem castigationum*. Leiden, 1540.
- Vettori 1571: *Ciceronis Epistulae ad Atticum*, ed. P. Victorius. Firenze, 1571.
- Vettori 1586 (1558): *Ciceronis Epistulae ad Framiliares*, ed. P. Victorius. Firenze, 1586 (1st ed., Firenze, 1558).
- Vitelli 1962: G. Vitelli, *Filologia classica … e romantica*, ed. T. Lodi, Con una prefazione di U. E. Paoli. Firenze, 1962.
- Voemel 1857: J. T. Voemel, ed., *Demosthenis Contines*. Halle, 1857.
- Waszink 1979: J. H. Waszink, *Opuscula selecta*. Leiden, 1979.
- Wettstein 1730: J. J. Wettstein, *Prolegomena ad Novi Testamenti Graeci editionem accuratissimam*. Amsterdam, 1730.
- Wettstein 1734: J. J. Wettstein, revue of J. A. Bengé., ed. *Novum Testamentum Graecum* (Tübingen, 1734), *Bibliothèque Raisonnée des Ouvrages des Savans de l'Europe* 13, no.1 (1734) : 203-28.
- Wettstein 1751-52: *Novum Testamentum Graecum*, ed. J. J. Wettstein, 2 vols., Amsterdam, 1751-52.
- Wetzer-Welte 1882-1903: *Kirchenlexicon*, 13 vols., 2nd ed., ed. H. J. Wetzer und B. Welte. Freiburg, 1882-1903.
- Wilamowitz 1914: U. von Wilamowitz – Moellendorff, ed., *Aeschyli Tragoeditae*. Berlin, 1914.
- Wilamowitz 1982 (1921): U. von Wilamowitz-Moellendorff, *History of Classical Scholarship*, Trans. from German by A. Harris, ed. With an Introduction and Notes by H. Lloyd-Jones. London, 1982 (= *Geschichte der Philologie*, Leipzig und Berlin, 1921; rev. ed., 1927).
- F.A. Wolf 1804: *Homeri et Homeridarum opera et reliquae*, vol.1, ed. F. A. Wolf. Leipzig, 1804.
- F. A. Wolf 1807: F. A. Wolf, “Vorrede zu Platons Gastmahl,” Praefatio ad *Platonis Symposium*, ed. F. A. Wolf. Ilfeld, 1782 (= Wolf 1869: 1.130-57).
- F. W. Wolf 1869: F. A. Wolf, *Kleine Schriften*, 2 vols. Halle, 1869.
- F. A. Wolf 1985 (1795): F. A. Wolf, *Prolegomena to Homer*, trans. with an Introduction and Notes by A. Garafon, G. W. Most, and J. E. G. Zetzel. Princeton, 1985 (= *Prolegomena ad Homerum*, Halle, 1795).
- H. Wolf 1572: H. Wolf, ed., *Demosthenes opera*. Basel, 1572.
- C. G. Zumpt 1831: *Verrinarum libri septem*, 2 vols., ed. C. G. Zumpt. Berlin, 1831.

書評

納富信留・明星聖子編

『フェイク・スペクトラム—文学における〈嘘〉の諸相』

(勉誠出版、2022年12月刊、299pp.)

田尻 芳樹

トランプ大統領の就任の頃から「フェイク」あるいは「フェイクニュース」という現象がしばしば取り沙汰されるようになってきている。フェイクそのものは新しいものではないが、最近の現象はインターネットの発達や精巧なフェイクを可能にするテクノロジーの進化によって新たな問題を引き起こしており、世界情勢を左右しかねない場合すらある。本書は文学におけるフェイクについて時代を遡って検証することで、この現代的な問題の根源についてより深く掘り下げようとしている。

第1部「現代と異なるフェイク」は、フェイクやフィクションに関する考え方が現代とは異なっていた時代の文学を扱う。14世紀の旅行記『ジョン・マンデヴィルの書』（松田隆美氏）、エリザベス朝時代のジャーナリズムにおける書簡（井出新氏）、『ドン・キホーテ』（瀧本佳容子氏）、デフォーの『ペスト』（高畑悠介氏）が組上に載せられている。第2部「編集にまつわるフェイク」は、聖書（伊藤博明氏）、『源氏物語』（佐々木孝浩氏）、ヘーゲル講義録（下田和宣氏）、ニーチェの『権力への意志』（トーマス・ペーカー氏）を実例に、つねにフェイクの可能性につきまといまわっていると書いていい編集に関わる問題を取り上げている。第3部「現代に生きるフェイク」は20世紀に焦点を合わせ、カフカの「フェイクな」恋文と作品の関係（明星聖子氏）、ピンチョンの『競売ナンバー49の叫び』における疑似現実（中谷崇氏）、ホロコースト体験を捏造してスキャンダルになったヴィルコミルスキーの『断片』（北島玲子氏）を論じている。いずれも寄稿者の専門知が生かされた滋味あふれる論考であり、欧米中心であるものの、中世から現代までをカバーしてきわめて多様な主題を扱っている。

私が最も衝撃を受けたのは、第2部第6章の佐々木孝浩氏の論文「虚像としての編集——「大島本源氏物語」をめぐる」である。戦後から今日に至るまで『源氏物語』研究の礎石となってきた「大島本」には実は大きな問題があるという。佐々木氏は非常に詳しく「大島本」の成立過程を追い、問題点を指摘していて、その論述は私にはスリリングだった。簡単に述べれば、東大の国文学者池田亀鑑が『源氏物語』の校本を作成した際、新登場の「大島本」を途中から底本として採用し、その問題を自覚していたはずなのに、後へは引けなくなってそのまま『校異源氏物語』を一九四二年に出版したということである。佐々木氏は書いている。

『校異源氏物語』と『源氏物語大成』は歓声をもって学界に受け入れられ、「大島本」も池田の記したままに信じられて半世紀以上も研究に利用され続けた。誤った認識の上に積み重ねられた論文の数は幾つあるともしれないほどなのである。考えれば考えるほど怖ろしい事実ではないだろうか。(164-65)

これは『源氏物語』研究は砂上の楼閣だったと言っているようにさえ聞こえる。だとすれば、まさに「考えれば考えるほど怖い事実」である。これを読んで私は、(東大に代表される)美術史学のアカデミズムがあっさり贋作に騙されてその化けの皮が剥がされる松本清張の短編「真贋の森」を思い出してしまった。それはともかく、問題は「大島本」が写本として信頼度が低いということに尽きる。言い換えれば、紫式部が書いたはずの「真の」『源氏物語』からより遠いということだ。それはちょうど、マックス・ブロートが編集したカフカの代表的な長編小説が、「真の」カフカを歪曲していると非難する態度と基本的には同じだ。つまり、編集文献学においては作者と作品の「真の」姿が強固な前提になっているのだ。

それは当たり前のことかもしれない。だが、私のように1980年代に学生時代を送り、ポストモダン思想の洗礼を受け、「作者の死」とテキスト/テクニクチュールの優位を叩き込まれた世代の者から見ると、結局、ポストモダンの懐疑論は大した影響力を持たなかったのだな、という感慨を持ってしまう。フーコーは「作者とは何か？」(1969)の末尾で、「機能としての作者がけって現われることなしにもろもろの言説が流通し、受けとられるようなある文化を想い描くことができます」と書いた¹。そこでは「だれが話そうとかまわらないではないか」²という「無関心を示すざわめきだけ」が聞こえるだろう。こうなると、「大島本」であれブロート版であれ、どこが悪い？ということになる。しかし、現実はそのようではなかった。バルトやフーコーによる「作者」の批判的検証は、「作者」という概念について私たちの認識を深めたけれど、私たちの思考の枠組や実践を変えはしなかった、ということなのだろうか。

編者の一人納富信留氏は、序章において、「フェイクニュース」に代表される「ポストトゥルース」の状況の背景として、「ポストモダン」の思潮が「換骨奪胎されて知的雰囲気としてブーム」となったことがあると述べている(9)。さらに第3部の序では、ポストモダン状況の懐疑主義が「真実」を相対的なものとしたことに触れ、次のように述べている。

では、私たちは「真実」という理念や目標を捨てることができたのか。二十一世紀に入ると、それまでの態度から転じて、「真理、普遍、実在」を改めて哲学の課題に据えようという動向が生まれ、行き過ぎたとも思われた哲学批判に修正を強いている。だが、それは一昔前の考え方をそのまま復活させるのではなく、ポストモダンの問題提起を受け取った上で、改めて「真実」を問題にする哲学や文学の挑戦のはずである。(219)

私はテキスト編集が、ポストモダンの問題提起を経てどのように変容したのかが知り

1 ミシェル・フーコー『作者とは何か?』、清水徹、豊崎光一訳、哲学書房、1990年、69。

2 フーコーが引用したベケットの言葉。フーコーはベケットの名を出さずに引用している。作者を名指してしまうとこの言葉の意味内容と矛盾してしまうからだろう。

たかったのだが、本書は残念ながらそれを主題化していない。相変わらず、作者の「真の」姿にこだわるテキスト編集は、「一昔前の考え方」そのものに基づいており、ポストモダンなど無関係だったようにさえ見える。しかし、本当にそうだろうか。

もう一人の编者明星聖子氏は本書ではカフカの編集について論じていないが、本書と同じ納富氏と共同編集した『テキストとは何か』では論じているので、そちらを参照してみる。すると、カフカの編集に関して次のような事情が分かる。カフカの遺稿を勝手に編集したという批判にさらされたブロー版に代わり、カフカの意図を尊重しようとして（ヴァリエーションも資料として付した）批判版が作られた。しかし、カフカの場合、そもそも遺稿を出版するなというのが意図だったし、彼の意図に忠実な編集などあり得ない。実際、批判版も恣意的な編集を免れてはいない。そこで、カフカの手書きの遺稿をそのまま写真で提示する写真版が編集されるようになった。この「写真版での根拠は、意図といった実体のない仮象ではなく、現実に存在しているモノです。目指されているのは、実在物であるそのモノをできる限り忠実に再現して提示することです」³。だが、この写真版でさえ本当に忠実とは言えない！ 大雑把にこのように要約できるカフカ編集の歴史を見ると、作者の意図を追求することの限界が明らかになり、もはやそれを絶対的目標としない編集をする段階になっていることが分かる。明星氏が別の論文で「第3世代」と呼んでいる編集は、第1世代（ブロー版）、第2世代＝学術版（批判版と写真版）の後を受けて、資料を丹念に読み解きつつも解釈を恐れず、読者のために読みやすい版を作ることを目指すものである。これは、作者の意図から離れて大胆に読者の便宜を優位に置くという発想において、ポストモダンのと言えなくもない。また、「作品ではなく、書字として、エクリチュールの痕跡として彼の書きものを提供したい」⁴という願望、すなわち創作プロセスが分かるようにしたいという願望においても。こういうところに、「ポストモダンの問題提起を受け取った上で」のテキスト編集があるのかもしれない。

3 明星聖子「テキストとは何か——カフカの遺稿」、明星聖子、納富信留編『テキストとは何か——編集文献学入門』、慶應義塾大学出版会、2015年、232。

4 明星聖子「「第3世代」としての編集——カフカ『審判/訴訟』の編集・翻訳プロジェクト」、『埼玉大学紀要（教養学部）』第56巻第2号、2021年、154。

『編集文献学研究』投稿規程

1. 名称および発行

1) 名称を『編集文献学研究』と称し、英語名を The Journal of International Textual Scholarship とする。

2) 本誌は、成城大学国際編集文献学研究センター員等の学術研究成果を発表することを目的とし、原則として毎年1回、電子ジャーナルとして発行する。なお、諸般の事情により、合併号となる場合がある。

2. 投稿資格

1) 成城大学国際編集文献学研究センターの規則に定められたセンター員。

2) その他、『編集文献学研究』編集委員会が適当と認めた者。

3. 原稿の種類

1) 投稿できる原稿は、論文、研究ノートとする。

2) 調査報告、資料紹介、書評等は編集委員会から投稿を依頼する。

4. 原稿の条件

1) 投稿できる原稿は、未発表のものに限る。但し、口頭発表のみが先行している場合は可とする。多重投稿を禁じる。

2) 投稿できる原稿の種類および文字数等については、執筆要領にて定める。

5. 査読

1) 投稿原稿は査読の対象となる。

2) 採否は編集委員会が決定する。審査の上、修正等を求める場合がある。

6. 著作権等

1) 機関誌に掲載される論文等の著作権のうち、複製権と公衆送信権は、その採択をもって成城大学国際編集文献学研究センターに帰属するものとする。

2) 著作者人格権は著者に帰属する。著者が自分の論文等を複製・転載・翻訳・翻案等の形で利用することは自由である。その場合、著者は転載先に出典を明記する。

7. 倫理・権利関係等

1) 執筆者が投稿原稿に引用する文章や翻訳、図表等の倫理・権利関係に関することは、執筆者の責任において処理する。

2) 執筆者は掲載が決定された原稿の著作権等について、掲載申込書の提出をもって、本誌の規定に同意したのものとする。

8. 公開の許諾

本誌に掲載される全ての原稿は、成城大学国際編集文献学研究センターホームページ内で電子ジャーナルとして公開される。執筆者は、原稿の採択をもって電子ジャーナルによる著作物の公開に同意したものとする。

9. 原稿提出締切

9月末日とする。

10. 問い合わせおよび原稿の投稿先

成城大学国際編集文献学研究センター

『編集文献学研究』編集委員会

ts-office@seijo.ac.jp

附則 この規程は、2023年4月1日から施行する。

執筆者（50音順）

伊藤博明 専修大学教授 成城大学国際編集文献学研究センター特別客員研究員
益 敏郎 熊本大学准教授
大田浩司 帝京大学教授
田尻芳樹 東京大学教授 成城大学国際編集文献学研究センター特別客員研究員
富塚 祐 成城大学大学院文学研究科博士課程後期
成城大学国際編集文献学研究センターリサーチアシスタント
林 英哉 三重大学特任准教授
明星聖子 成城大学教授 成城大学国際編集文献学研究センターセンター長
森林駿介 成城大学国際編集文献学研究センターポストドクター研究員
矢羽々崇 獨協大学教授 成城大学国際編集文献学研究センター特別客員研究員

編集委員会

伊藤博明 田尻芳樹 明星聖子

編集文献学研究 Vol.1

発行日 2024年3月15日

編集・発行 成城大学国際編集文献学研究センター

東京都世田谷区成城6-1-20

E-mail ts-office@seiyo.ac.jp

印刷所

株式会社櫻井印刷所